

妄想戦記

QOL

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生先は魔法がある世界。よしファンタジーだ！

……そう思っていた時期が、俺にもありました。

魔法はあるけど、フロントミッション風味なこの世界。

戦争はあるし、しかも俺が参加だとお!?

血筋のお陰かチートな肉体があるし、鍛えてなんとか生き抜いてこう。

俺の明日はどっちだ？

以前、にじファンにて連載していた妄想戦記です。

それを少しだけ加筆を加えたりした物を最初から投稿します。

尚、作者は厳しいコメを見ると作品を全て削除する危険がありますのでご注意ください。
めちやくちやな展開でOKな方、どうぞお目汚しく下さい。

目次

第一章・幼年〜軍士官学校まで

「あう? (うんと、アレだ……なんで赤ん坊になつてんだ?)」	1
「え——マジかよ。」	28
「専用機……うん良い響きだ」	45
「キナ臭いとは思つてた……」	77
「貴様の口から垂れる言葉の最初と最後にサーをつけろ」	94
「俺のばあちゃんと○○○○〇〇〇〇していいぞ!」	118
「フルボッコ? そんなのは天国だ! まずは地獄を見て来いっ!」	144

第二章・部隊指揮編

「また会いたいよね」	185
「諦めはしないさ」	214
「この香りこそ戦場よ!」	244
「まさか、こいつらがねえ……」	273
「ここつて最前線だよな? アルエ?」	300
「平和な日くらいあつてもいいと思う」	329
「戦場の一番のご馳走つて温かい飯だと思う」	350
「うえからくるぞ! きをつけろ!」	376
「はフラグ」	376

「地下で何かたくらむのは悪者だと相
場が決まっている」―― 399

「味方部隊と分断されたら、合流するま
で気がぬけんわい」―― 418

「自然現象に勝てる人間はいやしない。

母上は除く」―― 460

「おらおら、もう死にそうだ」―― 501

「大きな声を挙げ、ドアをノックしよ

う」―― 537

第一章・幼年く軍士官学校まで

「あう?(うんと、アレだ……なんで赤ん坊になってんだ?)」

その日、目が覚めた俺が見た物は——知らない天井であった。

・ (……何デイスカこれは?自分が寝かされているのは判る。だけどみた事がない天井が見えるのはなぜ?)

不思議な現象に頭を抱えていると、突然俺の頭は重さを通り越して痛みに昇華した頭痛にさいなまれた。気分は最悪で頭が痛い上、それまでの記憶もはつきりしない。

(えーと昨日の夜は何してたんだけかな?意識がはつきりしてくるにつれて痛みが収まってきたから少し昨日の事を思い出してみよう)

たしかバイトが終わってから、すぐに誰もいない我が家に帰って晩酌と共に遅い夕飯を作ろうとしたら材料が無かった。

肉体的には大丈夫だったけど精神的に疲れていて、飯作りの面倒臭くなつてコンビニに行つたんだっけ？ちっ、ハッキリと思いだせない。その後はどうなつたんだっけ？誰か頭にかかる靄か霞を払ってくれ——ん？だんだんと思いだしてきた。

▪ えーと、帰り道に突然車が突っ込んできた。

▪ その車にプレスされてペツチャンこにされて、中身が出る。

▪ 口から血とか嘔き出して、ああ死ぬねと覚悟した。

▪ それなのに痛みは感じなくて、自分でも吃驚していたなあ。

▪ 下半身取れて内蔵潰されてもうダメだつて判つた瞬間、目の前真っ暗になった。

▪ おえー、俺死んだのか。死に方がミンチより酷いぜ。

——まあいいか……。

「え!あういあおえ!(——つて!軽いな俺!)」

——あ、うん納得!そう思いこもう。

死んじまつたのは事実だし、その証拠に車に轢かれた時の記憶がデジタルリマスターよろしく高解像度で残ってやがんの:怖つ。とりあえず天国か地獄かは知らないが、生前の世界ではないという事だけは理解した。

情報は少ないが後ろ向きに考えてもしようがないし、慌てたところでどうにかなるモンじゃない。とりあえず意識があるんだし:とここまで理解してから気が付いた。俺の視界にさつきからチラチラ映っている回転する物体。

・ アレって……:所謂メリーさんじゃね?ほら赤ちゃんあやす時に使うベビーグッズ。

・ え、どういう事なの?そう言えば俺の周りは高い柵で囲んであるし、眼だけ動かしたら顔のすぐ横に瓶みたいなのが見えるんですが?口も動かないし……:もしやとは

思ったが、これはまさか所謂転生というモノではないか？身体も妙に重たいと思つていたけど、赤ん坊になつていたのであれば理解したくないが納得は出来る。

つまりはどういう事かは判らないけど赤ん坊となつたと……泣いても良かですか？こんな自由に動かない身体なんてタダの牢獄よりもキツイんですけど！確かに俺は聖人じゃ無かつたかもしれないけど、幾らなんでもこの仕打ちは死後の待遇にしては容赦なさすぎない気がしないでもないんですが神さま……神さま信じて無いけど思わず祈つちやうくらい冷静さを失つていますよ。ええ。

こいつは本当やつかいだが、だがそろそろ時間切れらしい。強烈な睡魔が俺のまぶたを鉛に変える。後にこの睡魔は恐らく柔らかな赤子の脳みそに何十年分の記憶とそれを元にした人格が生まれた弊害だろうと理解したが、こん時の俺がそんな事知る訳もない。

再び眠りにつこうしていると感じた時、これは夢で次はきつと天国何だろうなと妄想し、適当にニューワールドで生きていけるよう頑張るさねとか考えて眠つてしまった。もつとも現実是非情であり、目が覚めた時に天国であるとは限らなかつたんだが……。

—— コレが、俺が最初にこの世界を意識した瞬間であつた。超眠い。

——そして気が付けば2年、人生が進むのは早い。

この2年間の事は別に語るつもりもない。ガキの生活のこと書いても面白くないし、大体が基本食べて寝て排泄してソレの世話されての繰り返ししかされてねえんだ。羞恥プレイしかないんだぜ。おしめつてあんな感触だったんですね。制御できねえ膀胱にいら立ちを感じたわ。

色々あつて赤ちゃん生活は精神的に死にそうになるというテンプレを味わい、1歳になる頃には自分が転生した事を完全に認め、むしろ開き直つて人生をエンジョイする事に決めた。同時期にカタコトで喋り始める。

そうやって訓練しないと口が言葉とかを発声してくれなかつたからだ。でも結構早めに流暢とはいかないが理路整然とした言葉を喋ったら、この世界の両親には驚かれたけど、逆にうちの子は天才だとか言つて喜んでくれたんさー。

なんか懐が大きいっていうか大雑把で助かったさあ。でもちよつとだけ寂しそうな目をしていたのを俺は見逃さなかったさあ。だからちよつと自粛しているんさあ。やり過ぎて捨てられたら生きてけねえさあ。

さて、気が付いたら違う身体に転生という形となった訳だ。尚、以前の俺の名前は高辺正憲って名前の元一般人だった。そして交通事故で死んで、新たに生れ出でたこの世界での名はフェンというらしい。ちなみに姓はラーダーだそう。随分と外国人の名前っぽくて、純日本人だった俺はなんとなく違和感を覚える。

だが、この名前で2年ちかくも呼ばれ続ければいい加減慣れてくるもので、今では俺のソウルネームだぜ。まだ少し変な感じはするが、これもしばらくすれば消えるだろう。第一俺の外見も外国人だし、日本名は多分にあわないからな。兎に角、これから先は心機一転、憑依幼児フェン・ラーダーとして頑張る事にした。

——で、現在の俺は2歳、まあ今日の誕生日になってからだだが…判ったことがある。

とりあえず、ここは俺がいた日本じゃないし外国ではない。現在過去未来という訳でもない。それどころか地球ですらなかったのだ。なにせ、この世界は完全なる異世界だった。どうしてそう思ったのかと言うと答えは単純なもんだ。生前の世界では見れなかったシロモノを見せられたのだ。

そう、この世界には魔法がある。ちなみに怪しいクスリはやって無い。大体この年齢じゃ薬買えるだけの金なんて持たせて貰えない。それは置いておいて俺もまさかつて思った。一歳の頃は両親の顔立ちを見て、ただ単に外国のご家庭に転生したんだと思っていたのだ。

おかしいと思ったのはハイハイ覚えて動けるようになり、色々家の中を動き回れるようになった時だった。両親側から見れば俺は色んな物に興味を持った腕白で好奇心旺盛な赤ん坊に見えた事だろう。だから特に邪魔されることなく精々が赤ん坊にとつて危険なモノを手の届かない位置に片付けられる程度だった。

そりやそうだ。自分の子供が遊びまわるのを邪魔する親は普通じゃない。そして俺が動き回る先々で赤ん坊が飲み込んだら危険な物、重たくて落っこちたら危ない物、そういったのが目の前から「飛んでいった」：文字通り「飛んだ」のだ。いやまあ飛んだっていうか、彼らにしてみれば簡単な念力系の物体誘導魔法だったらしい。

だが、当時の魔法の魔の字も想像して無かった俺にしてみれば、掴もうとした物が勝手に宙を舞うその光景はポルターガイストに見えてしまい、自宅が幽霊に呪われてやがると戦慄を覚えていた程度だった。異世界だし幽霊位居ると思っただよ。幽霊屋敷にご家族で住んでいるとは奇異な人達だと感じたものさ。

結局、その怪奇現象が魔法だと理解したのは、俺が見ている前で母上が小さな魔法円を空中に描き、魔法の力で俺を引きよせて抱き上げたとすれば、信じないという訳にはいかなかったってのもある。なまじこれまでポルターガイストと思っていた現象が、実はタダの魔法だったのだ。

いや魔法って時点で超自然的というか超能力とかと同レベルの物である事に変わりはないのだが、とにかく愕然とその光景を眺めていたのはしよがなかつた。誰だつて自分の親が魔法使いだと知れば唾然とする。本来なら魔法という存在に対して、困惑するのが普通かと思うのだが俺の場合魔法はすぐに受け入れた。

死と転生を体験したというのもあるし、異世界ならばあり得ると思っていた事も理解は出来ない納得を加速させたのである。とはいえ転生者であり、生半可な事じゃ何があつても驚かない自信があつたが俺だが、魔法という非現実に触れられると思えば股が濡れた（おしっこ漏れた的な意味で）。

親が魔法使いならば、そのレベルはどれくらいなのかという純粹なる知的好奇心から、俺は母上に笑顔でもつと魔法見せてー!と、羞恥に頬を赤らめながら精いっぱい甘えてみた。思えば普段から世話をかけない良い子ちゃんだった俺は両親にしてみれば子育てのイメージからかけ離れており、物足りなかつた事だろう。

そんな我が子が目を輝かせて拙いながらも言葉を発して、精いっぱい笑顔で懇願して見せる姿は可愛く見えたに違いない。母上は張りきつて極太ビームの砲撃魔法を虚空に向けてブチかましてくれた。しかも我が家の敷地上空20mの位置にちゃんと転移門開いてビームを何処か違う場所に撃ち込むというアフターケアもバツチシな魔法を。

お陰で俺はまた股を濡らした(オムツ的な意味で)。ま、まあその話は置いて正直ちよつと嬉しかったりした。だって魔法だぜ?超能力に匹敵する超常の技、魔法。その魔法が使える両親は魔法使い、それもかなり高レベルの使い手だつてのは先の魔法で多重理解できた。おつきい方も漏らした事で涙を飲んでおしりを洗って貰つた位にね。

——それからさらに時が経ち誕生日の日。

大分今の身体に慣れた俺は3歳となった事を機に、思い切って両親に魔法を習いたいのので教えてくださいと土下座して頼み込んでいた。考えてみると3歳児の土下座ってシニールだよな。ギャグテイストのカートウーンでも出てこねえよ。土下座文化が存在しないから余計におかしく見えただろうにウチの両親はホント懐が深い。

結果はまあ、割とあつさりとおKされた。

というか両親の立場とか色々理由はあるが、立って歩けるようになった段階ですでに教える気満々だったそう。時折病院に定期健診に連れていかれたのは魔法を扱えるかどうか調べる為だったらしい。道理でワクチン注射をされる訳でも三種混合とかをされる訳でもないのに病院に連れていかれた訳だ。

もともと何故両親が幼い俺に魔法を教える気満々であったのかは後々になってから判ったが、判っていたらこの道を選んでいたかどうか。

———そういう訳で、俺は母親に魔法を教えてもらえる事になった。

初めは神秘に触れられると考え、少年のようにワクワクしていた。いや、事実身体は少年なのだから間違いではない。しかし習ってみて判ったが、この世界の魔法というの

は高度にプログラム化された非常にシステマチックな代物であり、科学では説明できないような現象を起すがおおむね科学」という感じが相応しいモノであった。

その代表格がデバイスの存在だった。

デバイスとは所謂「魔法使いの杖」に相当するもので術者の力の増幅や能力補正にリミッター、魔法プログラム登録によるサポート機能をもった魔法的ハードディスクといえる存在だった。また魔法の才を持つ者が歪に育たないように矯正する大リーグ養成ギプスのような機能もあり：まあ色々便利な魔導機械である。

しかしこの魔法の杖、その利便さから犯罪に使われる事もあり、俺が生まれたこの国では銃火器のように個人の所有は制限され、特定の役職につく人間及びその人間の監視下において所持ができるという法律がある程危険な物でもあるらしい。それもその筈で殺傷能力がある魔法をインプットしたデバイスは起動できる魔力さえあれば使用できてしまうからだ。

制御の失敗による魔力の暴発や暴走が起こり得る事を考えると、子供が拳銃を持って撃ちまくるよりもある意味危険であり規制の対象になるのもまた当然と言えた。その為、デバイスを持てるという事は犯罪者かもしくはそれを取り締まる役職に着けるエリートという事になる。デバイスを所持できるのは魔導師のステータスともいえるのだ。

さて、そんなデバイスであるがそれは我が家にもあった。ここで一つの疑問を上げてみよう。何で我が家にデバイスという「魔導兵器」が無造作に転がっていたのか？その実、非常に高価な機材であるデバイスは魔導師本人が身に着けるか非常時以外は仕舞っておくのが通例であるのに何故？……理由は単縦明快だった。

つまりそれまで気が付かなかつたが、我が家系は通常のご家庭に非ず。両親揃って軍属であり母上に至っては軍の高官だったのだ。国に仕える軍人だからデバイスの所持携帯を許可されている、そして当然そんな彼らの息子である俺も彼らの監督の元、デバイスに触れられる環境が整っていたのだ。

この事実を知ったのは規制されている筈のデバイスが我が家に無造作にあつた事に關して疑問に思つて素直に尋ねたからだ。そうして上記の事を知つたのであるが、その内容の端々を聞くに、この世界の魔法使いは俺が転生時に持つていた魔法使いのイメージとは随分とかけ離れた非常に生々しい存在だったつて事がより理解できてしまった。

そう俺が生まれたこの世界での魔法使いは魔導師といい、特殊な能力と戦闘能力により国により管理され、その殆どが軍属だった。それを聞いた時、神秘は？魔法はどうなつた？と、魔法という神秘の術を行使する存在が一端の兵士と同程度の扱いという事

実に魔導師に対するイメージがガラガラと音を立てて崩れさった。

この世界の魔導師の存在が俺の記憶する魔法使いなどという存在などとは、色々と異色である事は理解したが、実はそれよりも重要な部分がある。重要な部分はここだ。【両親が軍属である】これに尽きる。何が言いたいかと言えば、要するに教え方が泣く子は気絶し鬼も裸足で逃げる様な地獄……いやさ軍隊形式だった。

一番簡単にイメージできるのはハートマ○さんの海兵隊式だろう。殴る蹴る? 身体に触れてくれるだけまだ優しい。流石に身体が小さくて未成熟なのを考慮して殴る蹴るは最低限だったけど痛かった。さらには言葉攻めによる罵倒がもう何度枕を濡らせばいいのかわつてくらいきつかった。

魔法の練習のイメージはイギリスの9と四分の三番線から行く某魔法学校だった俺は、それが凄まじく幻想であり現実是非情であると身体で理解させられたのである。普通なら引きこもり一直線なのであるが、普段の生活では溺愛されておりそのギャップが飴玉とムチのような感じで作用した事も俺が自ら止めようとはしない原因だった。

例えばであるが、初日の訓練だと——以下ダイジェスト。

『FNG（ファツキンニューガイ、新兵の意）ツ！貴様は何だツ!!』↑これ母上ね？
『自分はクソ虫でありますツ』↑まだノリで答えてるだけの俺。

『どうした、そのメロンみたいなスツカラカンの頭に脳みそは詰まっているのか？それとも頭に詰まっているのは果肉で、ついでに生まれた時にそのクソつたれな口と耳をどこかに置き忘れたのか！言葉が全く聞こえんぞツ！』

『イエス！自分はクソ虫でありますツ!!この世で最も劣った存在でありますツ!!』

『いいや違どうぞ新兵ツ!!貴様は兵隊技能どころか魔法のマの字も知らない魔導師の風上にも置けないようなクソに集るクソ虫にも劣るクソ以下の存在だツ!!言ってみろっ』

『イ、イエツサー、自分は《バキン》——うぎっ!』↑平手打ちされた。イテエ。

『サーをつける馬鹿モンがツ！大体私はmamだツ！ついに脳みそまで虚数空間に忘れて来たか？もう一回だ。貴様は一体何だ？』

『サー・イエス・mamツ！自分はこの世でもつとも劣ったクソ以下のクズ野郎でありまっす！生きる資格も無いでありますツ！サーツ!!』↑必死&やけくそ。

『よろしい、だが出来るのなら最初から声を出せ。——では訓練という名の地獄へのご招待だ………出来るだけ死ぬなよ？後処理が面倒だからな？』

『サ、サー・イエス・mamツ!!』

とかね、初日にこれである。ホントに何処の海兵隊の人ですかアナタ? というか本当に魔導師なのか? 俺と同じく転生した前世ハー○マン軍曹の方じゃないのか? それそれで非常に怖すぎる。母親がハート○ンとか自殺レベルだ。勿論そんな事実はない、ない筈である。聞けないけど恐ろしすぎて聞けないけど俺はそう思っている。

ともあれ普段はにっこり美人である母上が一変して氷より冷たい視線で射抜くようにして俺の事を貶すのだ。正直、心にクル。俺が変な世界への扉を開かなかったのはまだ幼いこの身体のお陰かはしらんが、よくも持ったものである。魔法を扱えるように訓練してくれと頼んだが、軍人教育までしてくれとは言っていないとは言えない日本人、それが私です。

■
そもそも本来魔法に関して俺がもつと育って13歳くらいになって、魔法の才能があつた場合に開始する予定だったが、両親の予想を裏切つて精神が急成長(そりや中身は異世界の元大人ですしおすし)して早熟だった俺を見て、計画が前倒しになつたそう。こうなつた原因は全部俺の所為で、しかも自ら言い出した手前止めるとは言えないこの状況となつていた。

これを知つた時にかなり凹んだ。でもすでに泣きごとが言えなくなるくらいに徹底的に心根まで拷問:もとい鍛えてもらつていたので一応大丈夫だった。もつとも幼少

期に精神的な拷問まがいの訓練をしてしまった所為なのか、副作用と言うべきなのか、自分の表情筋が万年休業状態になってしまい、顔から表情が消えてしまった。

どんな状況でも感情が出ない鉄面皮、戦闘において相手に己の感情を一切察知させないそれは、戦闘においては非常に便利だろう。だが日常生活の中では不気味でしようがない。自分の顔がまるで西洋の人形の如くなのだから余計に怖いのだ。最近では天然のポーカーフフェイスだと割り切ったが、今でもたまに目から暖かい水が溢れて枕が濡れる。

顔で思い出したが、俺の容姿はこの世界においては珍しい部類の黒髪黒眼だった。もっとも顔の造りや肌は白人系なのだが、全体的に小顔に纏まっていて妙に人形のような感じを受ける。両親がかなりの美形なお陰なのは知らないけれど、鏡を見るとどうにも中性的を通り過ぎた女の子の様な顔が映る。まるで造り物みたいだと思ったものだ。

そして猛訓練の影響もあり、やや背が小さいオトコノコである。この時期は男の子も女の子も境界線が薄いからそう思うのかとも思ったが、ある日訪ねてきた親戚が酒の席で面白半分に俺を無理矢理女装させたところ、その……俺の艶姿に酒の席を忘れて絶句する程洒落にならなかつたくらいで……ええ黒歴史確定で記憶を一時封印しましたと

も。

大体前世も三枚目な男で今世も性別は男なのに、何故にこんな中性的な容姿なのは一体誰得なのよ? 残念なことに俺はオカマでも女装癖もない極普通の軍人一家の跡取りでしかない。でも俺にとってはコンプレックスな顔を両親は存外に気にいつていた。女装だけは何とか阻止させました。でも髪形だけはダメだった。

今現在、俺の髪型はとても長いサラサラストレートな黒髪を後頭部で結う形のポニテにされている。女の子ツポイのはイヤという俺と、そう言うのも良い♪つていう両親との妥協の末の結果である。本当は嫌だったがニコニコ笑う両親の手に握られたデバイスを見て、俺は捕らえられた小鳥であると理解した。

まあその話は置いておいてほしい。つーか流してくれ、お願い。えーと、何処まで話したか…:そう訓練の様子だったな。たしか…:他にもこんな訓練があった——

『——以上がこの魔法の效果的運用法だが、魔導師の身体強化の重要性は理解したな?』

『イエスマムツ!』

『では今から実地訓練を行う。私が撃つ低速の魔力弾を先程教えた身体強化の魔法だけ

で逃げ切つて見せろ。何か質問は？」

『ハッ……ですが、あの、自分はまだ魔法式を教えられただけで練習とかは——』

虚空に浮かぶ数百もの魔力スファイア。

『——え……!? チョッ!!』

『たわけ、貴様が講義の際に密かに実践して成功させていた事に気がつかないと思つていたのか? それに実戦に勝る修練はない。第一新兵、お前に訓練を拒否できる権限は一切ない。さあ舞踊れ、パーティークル・ダンサーズ(低速)!!』

『メ、メディー……ッック!!』

——新しく知つた魔法を黙って試した事がバレていて、危うく死にかけました。

この日の訓練から俺は必要なこと以外話さなくなつた。いや話せなくなつたが正しいか? 訓練中下手な事を言うと言つてもいい魔力弾一斉掃射の回避訓練と同じモノが1セット追加だつた。普通そこは筋トレじゃないのかよと思つたが、まるで心を読んだかのように母上は年齢的に筋力鍛えても無駄だからとお答えになりました。

まあ良く忘れるが肉体はいまだ脆弱な成長期のお子様である。第一無駄な筋力をつけたところで燃費が悪い身体にしかない。ならば魔法を使わせ続けて精妙な操作力を身につけた方がいいのだろう。この訓練お陰で制御力向上と超人的な反射神経と勘の眼を会得できたが、下手な事は言わない方が良くと心と体に刻まれたのは言うまでもない。

ちなみに母上は空戦が出来て、近接攻撃も遠距離も砲撃も回復も結界 e t c。もう兎に角何でもござれなオールラウンダーなのです。そしてその基本戦術は超が付くほど高速高機動で空を翔け周り、音速を超えているのにも拘らず、正確無比な射撃および砲撃魔法をぶつ放すというモノスゲエことが出来るお人です。

すこしは上手くなったとかできる様になったとか思っても、このお方と比較すれば、どうあがいても…絶望！自分から頼みこんだ事とはいえ絶望したツ！ああ、今でも目をつむれば——ヒアツ！く、来るなあ！空が、空が落ちてくるう！アレはサディズムの光だ！らめえ！そんなおつきなビーム受けたら（意識が）飛んじやうー!!

……落ち付け俺大丈夫だ、戦場では取り乱したら死ぬんだ。

だから落ち付け——ふう。

すまん、取り乱した。どうにも一部トラウマになった訓練も多々ある為、たまに精神を守るために逃避する事もあるけど許してほしい。厨二病とか言わないでくれッ！アレはマジで洒落にならなかつたんだッ!! いいか？ 気絶させて貰えないんだぞ？ 気絶させてもらえないんだ… 大事な事なので r y ∴ 顔面にビーム r y ∴ 死ぬる r y

とりあえず話題を変えよう。トラウマを見せてもお互いに無益でしかないからな。他にも全力疾走の100kmマラソンとかやらされた事があって——え？ 普通のマラソンでも40kmなのに全力で100kmなんて3歳時には不可能？ ところがどっこい、そこが魔導師の訓練が通常の訓練と違うところだ。

このマラソン、この間覚えただけの身体強化魔法を使っても良かったのだ。当然理性的な判断で俺は魔法を構築し使用した。体力はつけなきゃいけないから走り込みは基本だとは思いますが、僅か数百m全力しそうしただけで倒れそうになるこの身体で身体強化なしで100kmも走れる訳がない。

そう思つての身体強化魔法の使用だったのだが、俺が魔法を使用した直後に言い渡された母上の言葉にその日一番の絶望を感じたのだ。曰く、なるほどこの訓練の本質に気が付くとは流石は私の息子だ。そして最後までやり遂げるといふ勢いやよし！ 存分に

走るがいい！最後まで！——である。・

一部リピートしてみよう『最後まで』母上は確かにそう言った。これはどういふことなのか？なんとこの訓練、強化魔法を使ったら最後、泣こうが叫ぼうが俺がゴールにたどり着くまで終わらせてもらえない地獄の魔法制御訓練だったのだ！理由を話した時の母上は、それはもう満面の笑みだった。別な意味でマジ泣きしたぜ。

でもこの100kmマラソンは魔法の制御を覚えるという意味では本当に効果的な訓練だった。何せ道中は常に身体強化魔法を使用し続ける。それらの制御はマルチタスクという思考分割術によって行われている訳だが、まだ魔法初心者な俺はマルチタスクという魔法自体が不慣れなので常に全力運転な訳だ。

このマルチタスクも曲者で魔力を消費しながら本来一つの事しか考えられない人間の脳みそを複数用意するような魔法である。要するにリアル脳内会議とかも出来ちゃうような技術だった。というか基本以外の魔法はマルチタスクかデバイスがないと一人で発動するのに時間が異様にかかるのだし必須技能だ。

しかも強化した状態で走り続けている間は魔力がどんどん消費されて魔力最大値の増加にも役立つと言うおまけ付き。

この時の魔力配分と体力配分の仕方を間違えると途中で意識がマジで飛ぶ。だから自然と肉体が効率のいい歩方と適量の魔力の巡らし方を覚えていくのだ。何とまあ馬拉ソン一つとってみてもやり方一つで効率のいい訓練に様変わりだ。てつきり魔力制御は瞑想とかやるんだろうとか思ってた数カ月前の自分を呪いたい。

——ただ言いたいのは、馬拉ソンとか何処の体育会系？

さて、両親から受けた訓練は何も模擬戦染みた実戦訓練だけではない。当然座学もあつたし座学を受ける為の基礎知識勉強もあつた。あとなぜか軍隊における礼儀作法も少々、いつか連れてくかもと笑顔で言われた時は苦笑で済ませといた。

だがそれらより群を抜いて俺の興味を引いたのは、父上から受けたデバイス設計・構築・改造等の知識だった。なんと母上に比べて随分と影が薄かったように思えた父、ところがどっこいで父は軍属とはいっても兵器廠所属の技研の人間だったのである。

いわゆるデバイスの整備班とかで、部隊に同行した時にはメカニックやデバイスマイ

スターと呼ばれる職種の人だった。だからなのだろうか、正規の軍人でありながら技術畑の父は母上と比べればとつても優しい人だった。

なにせ母上みたいな心身ともに擦り切れる様な訓練はしなかったのだから、それだけでも段々と日々の訓練で身をすり減らしていた俺にとつて見ればオアシスだった。興味はあるが詳しく知らない技術を知るといふのは、理解とか以前にとつても面白かった。

だつてさ？ デバイスが分解整備とか出来るなんて俺知らなかったもんよ。てつきりそこら辺も魔法の力でメンテナンスフリーかと思つていたのに、とかほざいたら自分の手で整備しないデバイスが当てになるかと厳しい一言。これが魔法世界の現実か。

もつとも母上よりは優しいとは言つたが、繊細さとか精神的な意味ではこつちの方向が何倍もきつかったのを覚えてる。魔導師の使う杖とかデバイスはいわば精密機械の塊であり、簡易ならともかく本格的な整備を手作業ですると発狂できる。

つーか、ウチの家には何故か工房がある。それもデバイスとかを作れる工房が普通に自宅に隣接して建っている。その工房は父上が集中したい時に使うラボの様な小さなものだが、趣味に走つた物がたくさん置いてある工房なんだ。

でな？父上は俺みたいなチビガキに対して、一切妥協せずにデバイスの調整の仕方や改造。果ては一から造るやり方まで教えてくださりやがったのですよ。とにかくデバイスつてのは結構微妙なバランスで成り立っているもんで、ハンドメイドなデバイスだと手作業で部品一つ動かすのにも恐ろしく精神使うのよ。

まあ最初に初歩くらい出来るかって言われて、ついムキになって組み上げた俺が悪いだけどさ。だつてケーブルと基盤が合わさった様なブロックを筐体にはめ込むだけだったから、なんだがパズルミたいで楽しくて…難易度的にはちよつと難しめの、ブロックパズルみたいな感じだったからつい、ね？

そんな感じで色々仕込まれたのである。練習とはいえ、実際に軍で使われているデバイスのフレームを元にさまざまな魔導部品を組み合わせるといふ練習を何度もやらされた。この時ばかりは手先が小さくて器用だった事が幸いだった。

なにせ部分的に極細のピンセットとか専用の拡大鏡を使わないと見えなとかいうこともあったのである。とはいえ、パズル自体は嫌いでは無かった為、大変楽しい時間であった。つい後半はデバイスをレゴ代わりにして遊んでた様な気もする。

多分幼児特有のどうかテンプレな知識の吸収力を見た父上が、徐々にハードルを上げていったのだろう。気が付けば俺は何時の間にか一人デバイス工房を名乗れそうな

レベルになっていったってワケ。一つ出来るたびにものすごく褒められて嬉しかったけど……自重くらいして欲しい父上。俺ア一応3歳児ですぜ？転生者でも限度がありまさあ。

まあこの精神をすり減らす作業のお陰で、俺は冷静さと強靱な忍耐力も身につけられたから良しとする。生粋の魔導師である母上曰く、魔力と精神は密接に絡み合っているからこういう訓練も結構効果的らしい。

しっかし軍隊形式って言うのはすわ恐ろしい。子供に対してもまったく手加減が無い。軍隊というの知らんから多分という言葉が付くがな。とにかく死にかけては回復魔法の無限ループだったもんなあ……お陰でもう低速の弾幕くらいじゃ怖くもなんとも無いぜ。

何度地面の味を知った事か……何度鉄の味を感じた事か……正直魔法無かったら死んでんじゃね？

とはいえ今の生活は半端無くキツイけど、それ以上に楽しいんだよなあ……。

前の世界では未知の分野だった魔法が学べるのだ、これに心踊らない男子が居ようか？絶対におるまいっ!!断言できるッ!!

・つーかそう思わんとやっていけんからなッ！ナーハッハハ！

「フェンちゃん、御飯よ〜！」

「サーイエスマム！」

「もう、今はプライベートなのよ？だから普通にしなさい」

「……うん、わかった」

「それでいいわ。今日のごはんは最近頑張ってたから、フェンちゃんの大好きな特製ミートローフよ」

「……やた」↑思わず小さなガッツポーズ

「ああん！もう可愛いわねえっ！」

母上が呼んでるな、デバイスの設計図造りはこれ位にしておこう。

……ん？今の人誰かって？——母上ですけど何か？

あの方は訓練の時はもう鬼軍曹って感じだけど、プライベートだと普通の……というか俺を溺愛するような母親だからなああの変わり身はスゲエだろ？もうなんか仮面かぶってるとかのレベルじゃ無いんだぜ？

——最初の頃は本当に人格が複数あるんじゃないかって疑った位だよ。マジで

「フエンちゃん。はぐはぐはぐ」

「……ご飯、行く。だから放して?」

さて、あんまし父上待たせるのもマズイからな。そろそろ行きますか。そう言えば今度の週末はサバイバル訓練か……生き残れるように全力を尽くそう。そう思いつつ、色んな意味で素敵な我が家族の元へと行く俺であった。なんかもうドツプリと浸かってるなあと思いつつ。

「え——マジかよ。」

やあ皆久しぶり！みんなのアイドル、フエンくんだよ！キラツ☆

——ハアハア、OK、COOLに行こう……だから生暖かい目で見ないでくれ。

さて平地から高地、寒冷から亜熱帯に続き、海辺を満喫した後デザートにジャングルを味わうという“地獄の行軍サバイバル付き”君は未来を勝ち取れるか編”をなんとかクリアした。なんつーかね、もうね、平温の世界って素晴らしいね。熱中症で倒れたりしもやけになったりしないんだもん。

今の俺は3歳児なのだが、両親の血筋のおかげか、転生したおかげで効率よく学べるからなのか、魔法習得のしやすさを両親の遺伝子に感謝した。コレくらいで無ければ、あのサバイバルはクリアできなかつただろう。終わった今だから分かるが半ば拷問の一種みたいなのは普通のガキなら心身共に耐えられないだろう。

まさかねえ、栄養源は現地調達だったから、食べるもの食べられない物を叩き込まれて、現地にて実食したもんな。騙されたと思つて芋虫を食つてみたらプディングの味だったのは衝撃的だった。おまけにラストは3週間森の中に放置だ。一応サーチャーで見張られてはいたけど、それでも野生の獣がいる森の中でのサバイバルつてマジで辛い。

下手にご飯も集められないだけ？集めたら解体の時の血の匂いで、肉食系の奴ら集まってくるような場所だもん。おかげでタンパク質を確保するのがつらかった。今じゃトカゲとか蛇が食い物でネズミが御馳走にしか見えん。ミミズはソーメンですつてか？あはは…はあ。

蛇ついでに蛇足なんだが、人の居ないジャングルに居た所為かな……ますます人前で

表情を出す事がなくなり完全な鉄面皮になってしまいました。この間久しぶりに訓練が休みで公園に一人遊びに行ってみたら、そこですれ違う子が皆泣いちゃったんだよ？こんなにかわいい顔してるって……自分で言うのと痛いなコレ。

とにかく、俺は別に威嚇もしてなければ声すら出してない。それどころか一人で散歩してただけなのにすれ違った子供たちは泣いた。子供に同伴してた親たちなんかは俺がなんかしたんじゃないかと睨んでくるし……睨んだ癖に目線逸らすし……まあ人形のように整った顔してて無表情なら一般人なら怖いかもしれないけど釈然としねえ。

正直、コレで良いのか？魔導師に成りたかったけど訓練の方向性は大丈夫なんだろうか……俺大丈夫だよなあ？そうは言ってももう遅いだろうけど思わず悩んでしまうフェン君であつた。

——とりあえず暗い話はやめて話題を変える事にしよう。

実は最近ふと思ひ出したんだが、俺が居る国の名前はU・S・N・ニューコンチネン

ト合衆国というらしいのだ。んで思い出したのは何かって言うと、この国名前に聞いたことがあるんですよ。ずばりFRONT MISSIONの世界に登場する巨大合衆国でした。

まあアメリカだとかアフリカだとか日本だとかの様な、地球の国家のソレは一切含まないが、それでも巨大国家の代表格である我が祖国の名はUSNでした。対立相手となりえる連合国もO・C・U・オシアナ共同連合とか言う名前だったりするけどね。

これらのお陰で俺は現在魔法がある異世界に転生という状況だけで無く、魔法という要素が絡んだ上で、人型陸戦兵器のヴァンツァーの出来ないフロントミツシヨンの世界に居ると言う訳ワカメな状態な訳だ。ヴァンツァーの代わりに魔導師なのかもしれない。

しかしフロミねえく道理でデバイスが武器関連多い訳だよ。なんせこの世界フロミの世界観に漏れず、超大国同士U・S・NとO・C・Uがケンカしてるからなあ。今は冷戦中だけど戦争中なのはかわりない。となればお互い不安感も抜けないようだ。

そうなるとう結局最後は武器に頼りたくなるのが心情つてもんだよな。この世界においてデバイスが武器の形なもの、そういった理由なのかもしれないなあ。ちなみに俺の訓練用に渡された量産型も待機時の姿は、デリンジャーみたいなチビ銃である。展開し

てもハンドガンサイズだけどガキの手には大きすぎらあ。

後は俺の近況報告と参りますか。現状の俺の強さだがまず魔力量が非常に多い。瞬間的に発揮できる魔力量も中々だ。すでに3歳にして魔力量だけならば、普通の大人のソレを超えてるのだからその凄さが解るだろう。ピバ転生チート万歳。

いや、正直転生してからそれなりに苦労したけど、特に致命的の失点も無くて、こんなに順調でいいのかな、って思ってたなら、やっぱありました問題が。

それが判ったのは母上に相対しての魔法練習の時……。

母に教えてもらったクロスファイアシユートという魔力の誘導弾を使った日の事。

以下、ダイジエスト——

『説明は以上だ、概略は理解したな?』

『アイマム』

『よろしい座学はココまでだ。実践してみろ?』

『了解………クロスファイア——シユート』

《バシユツ!》 ↑まつすぐに飛ぶ魔力弾。

『よし、使えるな？次は誘導を試してみろ？』

『了解……………クロスファイア——シユート』

《バシユツ！》 ↑どこまでもまっすぐな魔力弾。

『……………おい、私は誘導してみろと言ったのだが？まあ新しくやる魔法だから仕方ないか』

——出来たには出来ただけど……………真っ直ぐにしか飛ばない。

《バシユツ！》 ↑まっすぐに飛ぶ魔力弾

『違うツ！誘導だ！魔力弾を誘導させろ!!』

《バシユツ！》 ↑まっすぐに飛ぶry

『おちよくつているのか貴様…』

《バシユツ！》 ↑まっすぐry

『おい！いい加減に……………おかしい、確かに遠隔操作術式は出来ている、なのに何故だ？』

『……………解りません』

この後、何度繰り返そうが魔力弾は誘導されてはくれなかった。ただその速度は目を

見張るものがあつたが、それ以上に俺は落胆してしまふ。誘導弾なのにこれじゃただの弾丸じゃん！ミサイルが撃てないロケットポッド装備戦闘機か俺は！

後に判明したのだが、思考誘導に必要な無意識下における計算が出来ない。要するに俺は生来魔力弾の誘導にリソースを割り振れない体質らしいのだ。今まで基礎の魔法の時には問題なかったのに、誘導系は一定のレベルを超えるとダメらしい。なにこの歪な体質？

だから、折角高魔力の誘導弾を覚えても宝の持ち腐れ。すぐく頑張つてもかすかに軌道がブレる程度の誘導じゃ、野球の変化球くらいの意味しかない。これなら普通に無誘導のフォトンバレット撃ったほうが手間がない分燃費がいいだろう。

というか基礎のフォトンバレットの方が単純な魔法なので魔力を上乗せしやすく威力が高い。

『お前は……誘導系は素質がゼロだな。というか体質では仕方が無い、諦めろ』
『……………了解』

流石の母上もこれには辟易したらしく、そうそうに訓練に見切りをつけてしまわれた。たぶん苦手分野を鍛えるよりも得意な方面で伸ばしたほうがいと即断されたの

だろう。だがそうなると母上に師事している俺はお手上げで仕方なく誘導系は諦めた。

悔しい、悔しいノウ、ギギギ……俺はファンネルも出来ないのか？

ああいう機動戦闘端末を複数操作するのって夢だったのに。

まあそんな訳で魔法に関する一つ目の問題が露呈した。実は問題はもう一つあった。それは大空を自由に舞う母上に憧れ、空飛ぶ魔法を教えてもらった時のこと——

『——そう、慎重に魔力を操作しろ。下手に魔力配分を間違うとひっくり返るぞ?』

『了解——（頑張れ頑張れ出来るできるもつと熱くなれよおory）——《フワッ!》』

『——良しッ上手いぞッ!!』

空を飛ぶ前に基本の宙に浮く魔法を教えてもらい実践したところ成功。しばらくしてから、ああ、次は大空だ……って感じで、サア飛んでやろうと訓練用バリヤジャケットを展開し、俺は大地を蹴ったのだ。

『おお、上手いな。よし、フェン戻って来い』

『……………つ!?!』

『なに?! まがる事が出来ない?! 取り合えず動くな! そこで止まれッ!!』

——結果は飛べましたよ。但し真っ直ぐに……な。

大地を蹴った俺は飛行魔法の術式を使って体を動かした。当然身体は前進したのだが、あろうことか曲がるのが一切出来なかつたのだ。これでは母上のような空飛ぶ魔導師、通称空戦魔導師にはなれないッ！

なにせ空戦魔導師の強さは、三次元空間における運動性にある。敵の攻撃を三次元の動きで回避しつつ翻弄し、魔砲を叩きつける。その為にハイマニューバは必須スキルなのだ。なのに俺の場合、ただ真っ直ぐに突っ込むだけである。

魔力誘導弾の時みたく直線スピードこそ速いが運動性0なら意味がない。闇雲に突っ込むのは早死にのモトだ。特攻じゃないんだから。

『一応浮かべるから誘導弾の時よりは見込みはあるか……ちゃんと制御が出来るようになるまで、空を飛ぶのは禁止だな……特訓メニュー増やさないと……』

『……………（ガタガタガタ）』

——というわけで、飛べない訳じゃ無いけど、陸戦に進むしか無くなった……鬱だ。

おまけに母上がポツリと漏らしたあの言葉。恐らく本気で血反吐だす特訓メニュー付きになる訓練も追加——アレ？死亡フラグ？べ、別にいいさ：基本的な魔法ならちゃんと使えるし。負け惜しみなんかじゃないんだからね！ほんとなんだからね！

勿論、人生山ありや谷ありで、こんな事ばかりじゃなくてうれしいこともあった。何と俺は生まれつきの才能と呼べるレアスキル持ちだったのだッ！レアスキルとはいわば突然変異みたいな物で生来の物だから修得できるものじゃない。

そんなすつごいモノを持っている俺は、きつと特別な存在なのです。ベル〇ース風にそう考えたが、まあ俺は転生者な訳だし間違いない。そういうわけでご都合主義万歳！！！！

——まあこれにも致命的な問題があったりするんだけど。

ちなみに、何故レアスキルがあるのか解ったのか？

もはや鉄板となりつつありますが、これも母上との訓練の成果といっておこう。

魔法の訓練法の一つに模擬戦というのがあります。実戦形式で経験を積めるので、あ

る意味とっても有意義な練習法です。ところが俺らが使う魔法は普通に人間が使い、人間が消し飛びます。ではどうするか？そこで登場するのが非殺傷設定というドSモードなのです。

大まかな説明は省くけど、非殺傷設定にすると魔法の衝撃だけ相手に伝えられるそう。だから非殺傷設定にした魔法を使えば、どんなに見た目が派手な大魔法や魔力砲を使っても、相手は死にません。そう、死ねないんです……アハ、アハハハ。

——はっ！いかんいかん、別の訓練の記憶でトリップしてた。

えーと、そうレアスキル修得の話だったな。とにかく、そういう訳で上記の設定を使った訓練を行った訳だ。模擬魔力弾が飛び交う光景は、遠目から見れば綺麗であり、俺も慣れるまでは命中直前に何度も「ふつくしい」とか思ったもんだ。んで、その日は何を考えたか母上がね？

『今日は殺傷設定だ。死にたくなかったら避ける』

と言ってくれやがりました…。

ええ、殺傷設定です。無意識下の魔法防御力が低い今の年齢だと、命中すると死にます。かすっても威力的な意味で死ぬます。前の世界基準で言うなら模擬戦なのに実弾で撃たれるようなもんです。実弾演習って聞いたことあったけど、味方同士撃ち合うもんじゃないかったですよ!?

でも文句垂れても新兵に文句を垂れる口はついていないなとすごまれて……う、うう。そらーもう、こちらら必死だったよ?だって普段の母上の攻撃ですら容赦無しで急所狙われるんだぜ?絶対にこのヒトならヤルツて確信があったね。

後で聞いた話じゃ殺傷設定でやることで実戦の臨場感を出そうとしたそうなの。

だが、あえて言おう。俺幼児ですよ?母上。

でまあ、戦々恐々とした感じで訓練は始まったんだけど……正直、気が狂うかと思っただ。始まった途端俺の顔を掠めるように魔力弾が通過した。低速で低威力、でも殺傷設定のそれが通過した瞬間、頬にヌルってした感触を感じた。

まあそれがどういふことか解るよね?気が付けば頬には一筋の傷、深くも無いし魔法使えば直るだろうけど、痛みは本物。

?
—— たった数センチ、たった一つの怪我……でもコレが後十センチずれていたら

それだけで、俺を本気で回避に専念させるのは十分過ぎるほどの脅しだった。ある時は回避し、ダメな時はラウンドシールドに角度を着けて魔力弾を逸らすことで必死で抵抗した。だけどさ母上、俺一応幼児だぜ？魔法使ったチートで動けても精々15分が限度だよ。

まあ当然のことながらアレだ、俺途中で集中力の限界に來ちまって……一瞬だけ意識が跳びかけた。時間にしたら0，1秒にも満たない時間だったけど、迫りくる魔力弾が回避不能な位置に來るのには十分過ぎる隙だった。

顔面に完全に直撃コース。母上の魔力弾で殺傷設定なんだから、俺の顔なんてドドリアさんもビックリな感じで弾け飛ぶに違い無い。ホントはそれほどじゃ無いらしいけど正直ね、マジ絶叫したよ。再び感じた死の恐怖でさ。

前世では平和世代の日本人、ゲームでは撃つ撃たれるなんてシチュはあっても現実にもソレを体験したことは無い。避ける事も出来ず、混乱した頭では魔法で障壁張る事も出来ない。俺は迫りくる恐怖に叫び声をあげながら、何を考えたか両腕で魔力弾を受けとめようとしたのさ。

イヤホント冷静に考えたらバカなことだと思おうよ？相手は現役の魔導師、対して俺は

ちよつと前世の記憶を受けついだお陰で成長が早い幼児。そんな俺が現役が放つ殺傷設定の魔力弾などに耐えきれぬ筈も無いのだ、精々よくて肘が残れば良い方だと思おうよ？ 威力的にさ。

——でもその時、奇跡は起きたね。

魔力弾が俺の腕に当たった瞬間、腕を切り裂きながらもその魔力は俺の腕に吸い込まれていった。感じたのは物凄い充足感……そして両腕に異物が入るかのような激痛。それと、気絶しそうになるくらいに神経系の痛みだった。

——つかそのまま気絶した。目が覚めたのは3週間もたった後でした。目が覚めた時、ベッドの横にいた母上が泣きだした事には驚いたけどね。そもそも泣かれましたよ、もう訓練は止めようかって言われるくらい。でもさ、ココまでやっておいて今更宙ぶらりんつてのもいやだから続けるようには頼んだ。

それが良かったのかは知らないけどな。

——まあそんな訳で、俺は訓練で覚醒しレアスキル持ちであると、病院で診断された。

その名も『リサイクル』、空間にある魔力素子や魔法使った後の霧散した筈の魔力を吸収、自分のモノとして活用できるってヤツだ。理論上魔力が充満している空間なら、魔力切れが起こる事もないという、もう魔導師ならちよー有り難いスキルであると言つても過言ではない。

おまけに吸収とかの副産物としてSクラスの魔力収束が可能。

——うわっチートと思つたけどその実、問題が多かった。

まず吸収できる魔力だが、撃たれた魔法の場合だと大なり小なり関係無しに半分しか吸収できない。おまけに吸収した魔力を自身の魔力に変換する際、制御が繊細な為無意識に神経系にかなりの負担をかける事になる。

ソレで生じる痛みは………そうだな、前世でトラックに潰されたアレ並みかな？いまままでの訓練で痛みになれた俺じゃ無かつたらショック死してたかも知れないくらいだった。一応使用すれば徐々に身体が慣れて行くので気絶しない程度に痛みは治まるらしいが痛いのはイヤでおじやるツ!!

もうマジ勘弁やっちゅーのツ！痛いのは訓練で沢山だ!!っーか、転生でチート能力が

発現するんなら普通に使えるヤツにしてくれよッ!! 中途半端に痛みが来ると戦闘に集中出来ないじゃないかッ!!

まあ、このスキルのお陰で、俺は常人が考えられない程の長い時間、単独戦闘が可能になった訳だが、それは正直言つてあんまり良く無い。いや強くなる事に反対はしないんだが、レアスキルの覚醒によって魔法的な持久力の大幅上昇が果たされたんだが、ソレの所為でまた母上の訓練の内容が増えちまつてよ？

レアスキルの制御に馴れる為だッ!とか言つて魔力スフィアに手を突っ込んで、火箸を突っ込まれるような痛みを我慢しながら魔力吸収を行つたり。弱くても常時発動しているから、マジでぶつ倒れるまで魔法使わせ続けられたり……etc。

——そんなこんなあつて、気がつけば更に一年たつていた。

四歳になつて、更に魔法に磨きがかかったよ。無口にも……。最近は声に出さなくても、両親が乏しい俺の表情を読んでくれるのであまりしゃべらなくていい。返事は首を縦に振るか、横に振るか……お陰で最近会話してない……。

それが原因で関係が崩れることは無くて、コレが普通つて認識されてるから、家族と

の関係は良好だ。今は母上から中距離の戦い方を伝授してもらっている。とりあえずまじキツイ…でも楽しい！

母上也教えるのが楽しくなったのか、それともゾンビーみたいに這い上がってくる俺を痛めつけるのが楽しいのか、最近手を抜かなくなってきたから、俺の耐久力レベルはどんどん上がってる。

実質いまだ冷戦状態にあるこの世界、おまけに国名が国名だ。いつ戦争が始まるか解ったモンじゃ無い。最初こそ魔法覚えられるゼヤツフウウツ!! って感じだったが、もしもの時の為にも力を付けといて悪い事は無いね。

———主に俺が生き残る為にわなッ！

あ、今日は感覚遮断室で精神鍛錬訓練だ。急がないとまた特別訓練が入っちゃうぜ。

それじゃあ皆さま、また生きていたら会いましょう。

「専用機…うん良い響きだ」

いやあ、人間のみなさん、こんにちは——なんて鬼太郎の真似かいッ（ビシッ）

さて冗談は置いておいて、母上から言いつけられた地獄の訓練メニューを消化していたある日の事。俺はその日、珍しく父上から呼び出しを受けていた。はて？俺なんかしたかね？褒められることも叱られることもしてはいなかった筈何だが？

まあ考えてもいたしかたない為、言われた通りに父の居る工房に行くと、予想を斜め上に行くような展開が俺を待っていた。

「やあフェン。ようこそ我が城へ」

「狭い城、だね」

「そういう事言っちゃうんだ。パパ泣きそう」

しばらく親子の会話が続いたので割愛するが、要点だけ述べるとこうなる。曰く、そ

ろそろ自分の専用デバイスが欲しいんじゃないかと？当然俺は即答したね『凄く：欲しいです』って。ああ、話し方がアレなのは訓練のやり過ぎと人と接する機会が少なかった所為だから気にするな。

それで、この時は当然俺専用デバイスを造ってくれるのかと思ってた。こう見えて父上はその筋では有名な職人らしく、フルオーダーメイドで作ると豪邸が建てられるというほどのデバイスを作る人物。そんな人がデバイスが欲しくないかと聞いてくれば、作ってくれるもんだとおもうじゃん？

「さあ、見せてあげよう。新世代デバイスの雛形を」

そういつて俺を工房の真ん中に連れて行った。そこには白い布が被せられた何かが置かれている。なんだろうとソレに視線を送ると、パパ上は勢いよく被せてあった布を剥ぎ取って見せた。

——そこにあつたのは、金属と回路と配線剥き出しの、中身が無い人形だった。

なにやら蛇腹上の金属を支柱にそこから包み込むような金属の籠みたいなのがある。うーん、あえて言うなら金属か何かで作り上げた人間の骨格？でもなぜか廃材で作り上げた前衛芸術みたいな感じにも見えるし、パパ上にそんな趣味はあつたつけ？

見せられたその骨格：フレームを不思議そうに眺めて（いや表情は出てないと思うんだがね？）いると、父上はさらに説明を続けた。

「すごいだろう？基本となるフレームは組んでおいたから、拡張性だけはすさまじく高い。後はフェン、おまえが思い描くデバイスを造り上げてみなさい。それだけの知識はもう与えたからね」

何故か自分の手で組み上げると言われ、何か知らないけど大きな骨格やら部品みたいなモノ渡された。えーと父上、コレなんですか？

「まあアレだ、色々機能つけてやろうかと思ったんだが、色々アイデアが湧きすぎてな？それに母さんとの訓練を見ていると、お前に合いそうなヤツが解らなくて、とりあえず機能を付けられるだけ付けたらそこまでデカくなってしまうんだよ。うん」

なじえソコで目をそらすのですか？父上、それと出来れば普通に完成された高性能のデバイスが欲しかったのですが？そこんところどうなん？

「うんそのままでも十分高性能だよ。でもほらそう言うのって自分で決めたいと思わないか？」

まあ解らなくもないんですけど……コレって所謂丸投げって言わない？

「そうとも言う、じゃあ後は頑張ってね。ココの工房好きに使っていいから」

そう言うのと逃げるかの様にスツと工房を後にする父上、逃げたなありや。なんか途中から視線だけで会話していたような気がするが気にするな。家族とはすでにツーカーなのだ。

いたしかたない、とりあえず訓練用のデリンジャーサイズじゃなんか物足りないと思つてたところだ。こうなれば俺の好きな様に改造させてもらいまっせ？さて部品は何があるかな？

——こうして、俺は自分のデバイスを自分自身で組み上げる事となつた。

.....

.....

.....

さて、変な骨格を見せられてから2週間が経過した——。

母上に体がなまならない程度の訓練にして貰つて時間を造り、空いた時間を寝食を忘れるくらいにデバイス造りに当てる。その結果、俺専用デバイスは漸く形が出来て来たのだ。作業台には大きな鎧の様な代物が鎮座している。

内部フレームがまだ一部露出しているが、全体的に直角で無骨なそれは鎧というより

かはS Fの強化外骨格に見える。普通はデバイスと言えば杖とかそういうったのなのが、なんとか母上の魔法訓練でいじめられた所為で命がすこぶる惜しいのか、コレはそう言うのとは運用方法がまるで違うのである。

——コレは俺が今の自分のスタイルに合わせた結果なのだ。

当初は空を高機動で動き回れるのをコンセプトに、高速飛行をメインに据えようと考えていた。しかし、考えてみたら今の段階では真つ直ぐにしか飛べない俺が高速飛行用モジュールをデバイスに組み込んだところでたかが知れている。

別に最初はそれでもいいかと思っただが、どうにも世界情勢が怪しい状況になりつつある今。上手く操れないデバイスを持つていてもしょうがないと思い、拡張性を残してある程度オミットした。

代わりに足周りに全方位で駆動する特殊なローラーと魔力モーターを組み合わせる事で、装備者にすごい機動性を与えるローラーダッシュという機能を搭載した。コレにより愚鈍な外見に見合わず、すばやい動きが地上でも可能となった。

さて、高速飛行型は諦めた訳だが、ならば逆に重装甲にするのはどうだろうと思ひ、こ

のデバイスはかなり野暮ったい装甲で覆われる予定である。バリヤジャケットとの防御力は基本的に魔力任せな所があり、それ以上の魔力が来ると脆弱なのは否めない為、それなら物理と魔法を組み合わせたら最強じゃね？という考えが浮かんだ。

俺は装甲素材として魔力による疑似物質とカーボンの複合素材を使用し、重量をそれほど上げることなく防護服のバリヤジャケット展開時の強度を上げる事に成功する。数値にすれば僅か数十%にも満たないだろうが、その数値が生命を分ける可能性を考えると捨てきれない数値ではあった。

更に更にBJ機能展開時に装甲表面に薄いシールドを絶えず張る術式を自動作動させる事で耐物理、耐魔法において鉄壁の防御力を誇る。その所為でバリヤジャケットを維持する為の消費魔力がバカみたいに増えたけど、元々レアスキルで常に魔力だけはみなぎっている俺には関係無し。

ただ一応、もしもの事を考えて魔力バッテリーを改造した箱型マガジンの形状をした魔力チェンバーと呼ばれる半カートリッジシステムを搭載した装置を組み込んでみた。コイツは大型の大容量魔力バッテリーの中に、自分の余剰魔力を常にプールさせておき、必要に応じてカートリッジの様に必要分の魔力を爆発させて使う事が出来る代物だ。

まあ試作段階のものであるが、強度だけは高いから壊れる心配も低いのが取り柄かな？
んで、鎧にしておもうとは思ったけど、普通に鎧にしておもうのはどこか面白くない。
どうせなら強そうなロボットみたいな感じにしても良いんじゃないかなあと思っ
ちまった訳だ。

そして色々候補がある中で結局選んだのは、汎用人型兵器ヴァンツアーの中の一機。
生前最後にやったフロントミッション5に登場するヴィーザフをモデルに造り上げた。

なんでヴァンツアー？それはこの世界がフロミ成分も混じってたからさ。

フロミなのに一機もヴァンツアーが居ないのはおかしいッ！ならば俺がつ！って感
じでつい乗りで造っちゃった。作ってたときはちょうど魔法訓練が終わってハイに
なってたから、若さゆえの過ちというやつである。後悔はしてないけどなッ！

もうこのデバイスは普通のデバイスじゃ無い、祈祷型ともストレージとも違うそれ
は、あえて言うなら強化装甲型デバイス。今の俺が組み込めるだけの技術を組み込みつ
つも、これからも拡張：成長の余地がある俺専用のデバイスだ。戦車砲が直撃しても無
傷だZ E！

それにしても、作っておいて何であるが、ココまでごつくなるとは思わなんだ。自

重って大事なんですね。まだ配線剥き出しだけど何とか基礎フレームが完成した時に一度試着してみたけど、大きさが4歳児の見た目ヴァンツアーじゃん。なんか前の世界で某○ンダイのプラモデルで人間サイズのがあったけど、そんな感じ？

とにかくこうしてガワは完成しつつある。次はオプションとか武装システムも構築せねばなるまい。幸い材料はまだあるし、そのプランも脳内に浮かんでいるので兵装モジュールとしてのストレージデバイスも製造する予定。

あと、全部一人で統括するのは大変だし、母上との高速機動時の訓練を考えると、一人では扱いきれない可能性を考慮して、それらを統括できる程のAIも搭載せにやならん。そうだッ！AI乗つけるんなら、喋れる機能は付けておこうッ！

いつか図鑑でみたインテリジェントだったかインテリジェンスとかいう種類みたくな！それだけで夢が膨らむぜいッ!!さてさて、それが出来るパーツはどこじやいなあ〜♪
確か空間圧縮された倉庫に……この機能も欲しいな。今度解析しとこ。

こうして自重しなかった結果のデバイスが作り上げられていく。それにしても父上殿の新作部品から際物まで、この工房には何でも有るから楽だね。考えてみたら、実戦であんまし際物ばつか使ってたったりなんかしたら、整備する負担が増えるなあ〜コ

リヤ。

市販の部品で流用できそうな所は流用しとかないと。サバイバルしてたおかげか妙などところで節約意識が付いている俺は、ガチャガチャと部品の山をかき分けながら、そんな事を考えていた。

決定事項のおさらいとしては、自動で出来るシステムの制御系については所謂インテリジェントデバイスと呼ばれるモノと同じように、AIに統括させる事にする。術式制御についても同様だ、この方式なら戦闘中にリソース配分に余裕が出来る。

基本術者は魔力タンクとなってしまうけど、どうせ戦闘で使う術式なんて二つ三つくらいなんだからな。増やし過ぎたら制御が難しくなるだけじゃわい。

—— 戦闘に使わない奴は自分自身が覚えれば良いだけの話だしね。

一応演算装置はこれまた試作品のデバイスコアに使用できるものから、一番強力なモノを選び交換して、術式の容量がでかくてもいいように記録メモリの方も大容量にしておこう。強度を増す為にブラックボックス化させて、後はデバイス自体に適当に経験積ませれば色々楽しめるだろう。

「お……ナノマシン……発見」

なんか掘り出し物ないかなと、父上の作業台の引き出し探ってたら『試作XA―20 5FO』とラベリングされたナノマシンが出て来た。

えと取扱説明書は……あつた、コレか。

「……………すい」

思わず目を見開く。なんじゃこのナノマシン？簡易じゃなくて文字通りの修理用だと？来た！コレで勝つる！父上から“工房にあるモノ”はすべて使つていいつていう言質は貰つてるから使つてしまおう。そうしよう。

今見つけたのがどんなナノマシンだったかというと、基本的には普通の簡易修理用魔導ナノマシンと変わらない。ただ“簡易”じゃなくて文字通り“修理用”の魔導ナノマシンってなだけだ。これのすごさは魔導技術系を齧つて無いと理解できないだろう。

そうだな、普通のデバイスについている簡易修理ナノマシンは、応急修理しかできな

い。もちろん1〜2週間くらい時間かければある程度の修復可能だけど、戦闘中は無理。術者が大魔力で無理やり魔力を糧とする魔導ナノマシンを活性化させれば何とかなるが、それだと後で修復箇所がもろくなったりして副作用が起きる可能性がある。

だが、この試作型魔導ナノマシンは通常の魔導ナノマシンと比べると多大な魔力を消費する代わりに、戦闘中でも瞬時にデバイスの修理修復が可能になる……らしい。父上が作ったカタログスペックがあてになるならそう言う事になる。これがあれば多少の傷などものともせず動き続けられるだろう。

一応自己増殖出来るし、ナノマシンの構成物質は大気に含まれている成分や微量な塵芥を魔力で編みこんだ疑似物質製だから少しでも残っていれば自己増殖で補填されるらしい。なんかアルティメットなガ○ダムな細胞みたいな事にならないか心配だが、そこは父上を信用しよう。そんな事態になったら親父の所為って事で。

そんな感じで訓練しながらデバイスを作る作業が続ぎ、気がつけば俺は5歳となっていた。デバイスも一応稼動状態に持ったので、最近はもっぱら新しく相棒となったヴィズに新しい魔法プログラムするかたわら、新機能を取り付けたり、追加兵装のストレージ作っていた。

ちなみにヴィズって誰かというと、俺が作り上げた強化装甲型デバイス、ヴィーザフ

の管制AIの事である。ヴィーザフそのままと少し言い辛いから略称にしたんだ。何？安直？いいんだよ俺が言い易ければさ。

.....

.....

.....

さて、本日も訓練かと思いきや、今日は母上に有無を言わさず連れられて、どこぞの基地に来ていた。たしか母上の部隊が駐屯している基地である。普通子供連れで入れるのは何かの祭典の時くらいだと思っていたのだが、門で母上が何か許可証の様なモノを見せて一発で入る事が出来た。

一応突っ込むけどココ軍事施設だよな？なんで家族とは言えボディチャックしないの？危機管理に問題無く無い？面倒臭くなくていいけどさ。そんなことがあったが、今は母上の後について施設内を移動している。

なんせ俺は部外者だからな。母上の後を金魚のフンのように着いて行かないと迷子

になっちやうしね。

そんなこんなで基地のPXに連れてこられたんだが――

「隊長殿に、敬礼ッ！」

《――ザッ！》

――母上がPXに入った事に気が付いた隊員の一人が号令をかけた途端、屈強の男たちが一糸乱れぬ動作で一斉に敬礼を行った。

は、迫力がすげえ。驚いて心臓が飛び出るかと思つたぜ……顔には出ないけどな。

「楽にしろ、今日の私は非番だ。いちいち敬礼は必要ない」

《――ホッ》

おお、いきなり安堵の空気がッ!?

つーかどんだけ恐れられてんだウチの母上は？その後はまあやや緊張している様だったが、隊員たちも各々食事に戻ったりゲームに興じたりしている。そんな中恐らく

母上の副官と思われる人が、俺の方にちらちら視線を向けながら母上と何か話している。

俺？目立たないように母上の後ろで黙って突っ立てたよ？だってこんなところで目立ちたくない。

まあそういう訳で置物の如く立っていただけの筈……だったんだが——

『フエンちゃん？準備は良い？』

「……イエスマム」

——何故か気が付けば、模擬戦用の廃墟につれてこられていた。

母上の職場の見学だけかと思いきや、認識が甘かったという事が大いに悔やまれる。こういつてはなんだが、普段でも仕事モードでも母上の行動には無駄がないというのに……そして母上フエンちゃんががんばってね！とか言つて素敵な笑みを浮かべながら、いきなり模擬戦に参加させやがりましたよあの人。

どうもPXにいた時に副官と話していたのは模擬戦の為だったらしい。しかも部隊のみなさんVS俺という八百長も吃驚の対戦カードという始末……：幾らなんでも戦力違いすぎないか？すでに複数つて段階で俺詰んでる気がするんだけど？

いやマジでビビったよ？だって相手は現職の魔導師さん、しかも見た目叩き上げの鬼軍曹って感じのおっさんだ。対する俺は最近やつとこぎデバイスを扱えるようになったペーパーの幼児ですぜ？レースドライバーに若葉マークドライバーが挑むようなものだ。

尚、訓練内容としては廃墟の両極端にてスタートし、お互いCPのサポートが無いまままで進行、および索敵を行う事。これは突発的な遭遇戦および単騎偵察などを想定しての訓練ということらしい。とはいえ少数のこちらが圧倒的に不利なのだが…。

「…ヴィズ」

『Yes, マスター、セットアップ』

とりあえず俺もデバイスを起動して装甲を展開する。全身を白い装甲に包まれた俺はまさに小さなヴァンツァーだ。兵装モジュールはマシンガン型ストレージのアル

アツソーとワイドシールド…もつともシールドは魔法があるのでイミテーション兼バラストであるが。

それと狙撃ライフル型のウイニーが魔法で作った格納領域に一つ保管されている。いまのところ完成している武装ストレージはコレだけなので、これらを駆使して戦いに挑む事になる。一応家でもチエックはしてあるが、まだ開始まで少し時間があるので簡易チエックする為に走査する。問題は無し、オールグリーンだ。

おつと、大事なことを忘れていた。模擬戦が始まるそのまえに魔法設定は非殺傷へ変更。ストレージのデフォルトでの使用魔法を射撃魔法レールブラスターに設定しておく。威力だけなら相当な威力が出るからな。銃機関銃三個分くらいかしら？とにかく準備が整ったので母上に通信を入れ、開始の合図を待つ。

ふと考えてみたら母上以外の魔導師との初めての模擬戦である事に気がつき、少しブルルと背筋が震えた。怖いというのもあるのだが、同時に少し楽しんでる気が見られるな。実戦じゃないからこそその心境だろう。イカンイカンと頭を振って余計な事は考えないようにしないと。

俺がそんな事を考えているうちにもカウントは進んで開始時刻となり――

『——時間だ。状況開始ッ!』

——開始の合図と共に、俺はローラーを駆動させて廢墟に躍り出た。

「ヴィズ、索敵レベル最大…」

『イエス、マスター』

ある程度進んだところで、俺は一度ローラーを停止し、壊れたビルの陰に背をつける。センサー類を稼働させると、ヴィズが索敵した情報がヘルメット内部に表示されているHUDの左下にレーダー範囲を示す簡易マップとして表示された。

まずは相手がどこに居るのかを探さなければならぬ。魔法系のほかに動体センサーやレーダーなどの科学的なモノも駆使して索敵を行う。ここからは徒歩で移動を開始した。ローラーのほうが断然早いのだが、音がうるさいので位置がバレやすい欠点があるのだ。

また聴音装置、所謂パッシブソナーなどの稼働効率も低下する。足音一つでも十分相手の情報が得られるので、こちらも静かに移動しないと。そろりそろりと抜き足差し

足ほどじゃないにしても慎重に進んだところ、訓練用廃墟の中心に近づいたあたりでセンサーに反応あり。

『動体反応検知、数は5、魔力反応も確認』

「(ふむ、奇襲かけられるかもな)……術式レールブラスター、装填」

『了解、アルアツソー、安全装置ロック解除』

反応は5、だが伏兵もいるかもしれない。カシヤリと、手に握ったMGアルアツソーから金属音がする。いつでも撃てるようにヴィズがセイフティを解除したのだろう。アルアツソーに魔力をこめつつ、様子を伺おうとビル陰から覗き込もうとしたその時

『警告！魔力反応検知！オートディフェンス作動！』

ヴィズのその警告が流れる前に作動した防御魔法プロテクションが俺の身体を包んだかと思うと、直後障壁に数発の魔力弾が直撃した。なんてことだ、すでに俺が近くに潜んでいた事は既にばれていたらしい。いやむしろ誘い込まれたのかもしれない。流石は母上の部隊の人！

とはいえその場に留まれば攻撃の手数が更に増える上、あんまり攻撃に当たると監視している母上からストップが掛かってしまう。勿論それは心配ではなくて、その程度の攻撃がよけられなくてどうするの的な意味合いだけ。俺的には訓練が増えるという死亡フラグに他ならない！

「——っ」

脚部に魔力を回す。魔力を受けた魔力モーターが駆動し、すばやくここから離れる事が出来た。なんで位置がばれていたのかは知らないけど、すでに発見されたのなら音を隠す必要は無い。

ドギヤギヤギヤと、割れたコンクリートの半ば引つpegがすようにして削りながら、俺は比較的大きなビルの陰に入った。そこらじゅうに身を隠せるほど大きなコンクリート片がゴロゴロしていたが、誘導魔力弾を使える魔導師がいれば隠れてもあまり意味が無い。なんせ山なりにも飛ばせるからなアレ。

すぐに身を隠した俺は、アルアツソーだけビル影から出すと、相手に向けて全力掃射していた。内心こちらの位置がばれていた事に鼓動が早鐘を鳴らしていたし、実力というか経験的に手加減する余裕もないから（結構怖かったんだよう）手に持ったアルアツ

ソーを乱射しちやつたのである。

——ところで、ヴィズには基本兵装としてマシンガン型の兵装が取り付けてある。

このMG型のアルアツソーというストレージデバイスは形状どおり魔力弾を撃つという事に特化させる様に設計した兵装デバイスである。コンセプトは現実世界にあったアサルトライフルの魔導師版で、デザインはフロミでの同名MGといったところ。

俺は生まれつきの体質で魔力弾の誘導が出来ない。だったら目視できる魔力弾の初速を今自分で出来る技術で高められるだけ高めるればいい。そう考えた。勿論今使える技術は魔法だけに留まらず、魔導関連の魔導メカも含まれる。いわば母上と父上から受け継いだ技能の合作といえよう。

まず自力でもデバイスありきでも両方で使用可能な魔法の制作が必要だった。既存の魔法ではやはり速度が遅い。尚、ある程度の力量がある魔導師なら誰しも独自の魔法を一つや二つ作成するので問題はなかった。

んで独自に作り上げた魔法の名はレールブラスタ。使用した基本術式はフォトンバレットである。文字通り光の弾みたいな魔力弾を無誘導で打ち出す魔法だが、それを根底に母上にも手伝って貰い、術式プログラムをやや変更し、初速を高められるだけ高

めてみたのだ。

だが想定していた速度に到底及ばなかった。威力はあっても前世の映像で見た機関砲やら大砲とかのように目に見えないという訳ではなかったのである。普通の魔導師なら誘導魔力弾を覚えるので速度はそれなりの方が操作しやすいのだろうが俺は違う。誘導できないから速度は可能な限り上げなければ意味が無い。

自力での速度向上は自身の力量増加を待たねばならずそれ以上はいじれなかった。なので別アプローチの「デバイスのサポートによる連射力と弾速の向上」に掛かった。これは父上から受け継いだ技術が非常に役に立ったといっておこう。

とにかく、速射と高初速、そういうコンセプトの元で兵装デバイス・アルアツソーは形作られていった。このアルアツソー、魔導師の杖というよりかは、むしろ兵器としての銃のような作動機構を導入してあった。

何せアルアツソー機関部の内部では、普通の銃における薬室の部分に魔力弾を形成する。この魔力弾形成時、実は薬室の中では火薬の代わりに薬室内で魔力を爆発させ装薬にする事で射出速度を大幅に高めているのだ。かつこよく言うところと魔導と機械の融合、悪く言えばいいところ取りのちゃんぽんというヤツである。

また、俺はそれだけに飽き足らずレールブラスタアの術式で魔力弾に電位を加える効果を付与させた。コレだけでは速度は上がらないがデバイスに一工夫した。銃における銃身、いわゆるバレル部分に追加の術式細工を施し、機関部作動時の余剰魔力を使って電位差を発生させる事で磁場の相互作用を作り出す事に成功したのである。

要するに魔導師式のレールガンさせることに成功したので……ある意味すごくね？これにより初速が毎秒3,400km位になっており、照準もヴィズの高速演算のサポートを受けてHUDに表示されるから、余程の事が無い限りはずさない。もつとも生成やら術式やらにソースを取ったので、単発の威力は程ほどといった感じ。

ちなみに母上には避けられた。何でも銃というものは槍と似たようなもので、銃口の向きを見ればどう攻撃が来るのか簡単に予測できる、とか……ホントに人間かあんな？ともかく我が母には通用しなかったモノの、それなりにいいものが出来たと俺は思っている。

そう、“それなり”……これにも問題があるんだよな。

『機関部熱量、レッドゾーンに入ります。強制冷却開始まで、あと——』

兵装デバイスのアルアツソーを模擬戦相手に連射したのは良かったが、十秒も撃たない内に管制AIヴィズからの警告が入る。これがアルアツソー使用時のレールブラスタアの弱点。上記のとおり、なまじ凝った仕掛けと術式を使った事でいい魔法となったが、アルアツソー自体に熱がたまりやすかった。

アルアツソーの構成部品は、基本的に熱に強いものを使っている。術式にも耐熱術式の応用を加えてある。だがそれ以上にこの兵装デバイスと魔法の組み合わせで発生する熱量が膨大であった。要するにまだ制御が未熟なので余剰魔力が抵抗で熱量に変わっているという無駄が発生しているのである。

『——機関部、強制廃熱開始。再起動までお待ちください』

なので一定以上熱がたまると使用できなくなるように設定したのだが……少し失敗したかもしれない。今の設定だと廃熱シーケンスをキャンセルする事が出来ない。

『左右に動体反応、回避を』

「くっ…」

弾幕が切れた途端、待ってましたとばかりに誘導魔力弾とバインドのバリューセットが襲い掛かってきた。幸い速度は遅いので廃ビルを盾にしたり、落ちている瓦礫を身体強化魔法とヴィズのパワーアシストで持ち上げて投げつけて誤作動させたりする事で回避した。

「……格納領域、ウイニー、装備」
『イエス、マスター』

尚も向かってくる魔力弾をギリギリで回避しつつも、現在冷却中で使用できないアルアツソーを収納し、同時にヴィズに口頭指示で新たな兵装ストレージを格納領域から引っ張り出させた。手に握っていたアルアツソーが消えると同時に、身長と同じ大きさの馬鹿でかいライフルが両手に握られるようにして出現する。

兵装ストレージデバイス、第二弾は狙撃銃タイプのウイニー。基本的な機関部構造と動作はアルアツソーに酷似し、外見はこれまたフロミで同名のライフルを肖っている。魔法的な処理と素材を使っても通常なら大人でも持つのに苦労するであろうソレは、身体強化魔法とパワーアシストが付いた俺たちにとっては羽のように軽い。

『——敵性反応、囲むように展開中』

新たな兵装を装備した瞬間ながれた警告に内心舌打ち。

これは母上との座学で習った対魔導師戦術の一つ。低位の魔導師が高位の魔導師を狩る為に行う予備動作。警告を聞くや否や、強化魔法とパワーアシストをフルに使い、近場のビルの壁を足場にタタタッと軽いステップを踏んで飛び上がる。

『高魔力反応、結界と思われます』

「見れば、分かる」

二つのビルの間を飛び上がり、屋上に着いたところで先ほどまでいた場所を一瞥。

ちようどドーム状に展開した光の壁が崩れ去り、先ほどいた場所が抉られているのが見えた。たぶん食らっていたら抜け出せない拘束となったことだろう。

それを行った魔導師たちはどこかと思えば、廃ビルの瓦礫にまぎれて三点、標的を中心に三角形を形作るようにして隠れている。結界魔法の同調。取得は難しいが訓練すれば到達できるベテランの領域。しかし狙って発動する事は、こと戦闘中には難しいも

の。

「——はっ」

『マスター？』

「流石は…母上の部隊…」

背筋がぞくぞくとした。怖い、痛いのはいや、だけど楽しい。二律背反の思いが身体の中を駆け巡り蹂躪する。それにより感じていた恐怖が薄れていく。アドレナリンが分泌されているかもしれない。とりあえず最高にハイッてヤツだ！とでも言えればいいのかもね。

すぐにその場を離れ、ビル伝いに逃げた俺は一つの廃ビルの窓に飛び込む。おそらくは追跡してくる母上の魔導師たちに網を張った。もちろんあの母上の部下さんが馬鹿正直に迫ってくるとは考えられない。だが、一人でも落とせればこの先楽になると、俺はウイニーのアイアンサイトを向けた。

さて、その後模擬戦はどうなったのかというと――

『――私の期待を裏切った蛆虫どもには地獄さえ生ぬるい！再び人間に戻れるように訓練を強化してやろう！どうだ嬉しいか！』

「「「「サーツ!!イェッス、マムツ!!!」」」」

――勝てました。無様に転がされたり転がしたりして勝利を得ました。

最終的には廃墟で息を潜めて持久戦に持ち込み、持ち前の高機動力を駆使して常に逃げ回り、超長距離からウイニーで時折狙撃して連中の魔力を消耗させることで、魔力切れを狙えたのが勝因だと思う。

いま目の前では模擬戦をしてくれた部隊員の方々が、通信ウインドウに映る母上の前で直立不動のまま命令を復唱していた。なぜか日ごろ見たことある光景なので、なんだかおじさんたちに仲間意識が芽生える。

『――それとフェン、今回の貴様の評定だが』

そんでこれで終わりかと思った………だがソレは甘かった。

今度は俺の行動についての評価が始まるが、まあ最初からぼろくそに言われる事を覚悟しておくと思外と罵倒にも耐えられるよね。つまりそれくらい俺の評価はひどいモノであつたという事だ。

曰く、接敵の際にうかつに近づきすぎだの、持久戦に持ち込んだ判断は一見正しいかもしれないが、もしもコレで相手が敵の大部隊の斥候部隊であり、増援が背後に控えていたら押し切られて潰されるだの、そうなる事を見越して何故通信のジャミングを最初に行わないのか、等々のお説教がされました。勿論聞いている間、俺は正座です。

言われてみれば、たしかに敵部隊とあたる時は通信をジャミングするのは基本だった。相手の力量を推し量り、しなくてもいけるともしかしたら心の隅で思っていたのかもしれない。すこし強くなったからって天狗になっていたのかもしれないと思うと、母上には頭が下がる思いである。

この模擬戦は、本当に俺の糧となった。

特に今回思い知らされたのは、近距離の武装が無いとキツイって事。何度か懐に入り込まれた時は本気で焦った。なにせ模擬戦中にこんな事が起きたのだ。

「——手加減はしないっ！貫けッ！ストライクブレードッ!!」

連携を仕掛けられ、無様に逃げ回る俺を待ち伏せていた一人が、大剣のクレイモアのようなデバイスに魔力を張らせ、真正面から一気に特攻してきたのである。子供相手に本気で魔力斬撃を繰り出してくるとか…おまけに連携してきて逃げられん。

大人げねえええよ！おまいらああああ!!と思っただけど、相手は待つてくれない。

馬鹿正直に突っ込んでくるだけなら回避できたかもしれないが、周囲の仲間が連携してきて逃げ場が無いと来たもんだ。

「多重、プロテクション」

逃げられないと踏んだ時点で、回避はやめて迎え撃つと覚悟した俺は魔法障壁を展開する。単純に防御魔法としてなかなかの高度を誇るプロテクションを幾重にも重ねた多重構造障壁。この時点では展開した防御魔法で防げると考えていた。

その直後、相手の剣先が第一層目のプロテクションに食い込んだ。瞬間、すごい音と共に障壁は簡単に吹き飛んでしまった。相手の魔法にシールド破壊効果が付与してある事に気が付いた時には、剣先が8層ある障壁のうち6層まで貫通し、7層目も崩壊寸前だった。

だが8層目あたりで勢いが鈍ってくれたおかげで、シールドを貫通した剣先が俺を穿つ事は無かった。危うく腹をやられそうになったが勢いが鈍ったと同時にプロテクションを解除し、ローラーで急速後退をしながら再度使用可能になったアルアツソを、こんどはFPSでいうところのタップ撃ちをして逃げたのである。

分かったのはクロスレンジにおいて、銃タイプの装備だと剣タイプのデバイスの斬撃は防げない。防御をより強化するか、新たに近距離兵装を追加するか……俺の選択は後者だった。だって一杯武器があるとかっこいいと思っただ。ふと武蔵坊弁慶のようなイメージが浮かんだが、すぐに振り払った。

「お疲れ様フェンちゃん、でも驚いたわ。まさかウチの部隊に勝っちゃうなんて……」
「ギリギリ……だったし……手加減されてたから……」

模擬戦が終わった帰り、母上はにこにこしながら俺を抱っこし、そう語りかける。

………しょうがないじゃん、体力的に結構きつかったんだから。俺はすこし話をするのが億劫ではあったが、ここまでしてくれる母上の好意を無駄にすまいと無理やり会話を続ける。

実際、部隊の人たちは口では手加減しないといていたが、あれは嘘ではないがホン

トではないのだろう。だって一度も、彼らから殺意というべき圧力を感じなかったのだ。純粹におじさんたちは、俺のために訓練をしてくれていたのだ。

「いいえ、あれでも私が手がけた部隊なのよ?——誇りなさいフェン」

「おかあ…さん?」

「あなたは気づいたのでしょう?天狗になっていた自分に。そして彼らの胸を借りてソレを自覚し、さらには苦戦したけど打勝てた。それは傲慢にしてもいいのよ」

「……ありがとう、おかあさん」

自信は時として傲慢さに、そして傲慢さは迂闊さにつながる。俺が得た教訓は何も技術面だけには留まらない。元から高かった精神がさらに成長した事に、不思議な喜びを感じている自分がいる。

——ああ、ここが居場所なんだな。

母の腕に揺られ、漠然とそう思った。

なんでそう突然思ったのかは分からないけど、もつともつと成長して両親を喜ばせた

いと、俺は思ったのだろう。母上には勝てない。この先どうなるうとも。

俺は疲れて襲い掛かる睡魔の中で、そう思いながら視界が暗くなっていく。

「……………おやすみ」

やさしい、とてもやさしいその言葉を聴きながら――。

かくして、俺はこの日からちよくちよくこの人たちの所に行くことになった。

実戦積んでる人の動きは参考になる。連携とかも覚えられるのがいいね！

かくして俺は母上の部隊のマスコットになるのであります。

「でも、これで……………いいのかな？」

『私はマスターについてきます。』

ありがとう……ウイズ。

「キナ臭いとは思ってた…」

S i d e 三人称

「ふあああ…ねむいぜ」

その日、とある軍需施設を警護する警備兵は、代わり映えのしない景色に飽き飽きしていた。ここは本国から遠く離れた火山島の一つ。赤道に位置するここは海流の影響からか熱帯と温帯とが同居する、この世からもっとも遠く、もっとも楽園に近い島だった。

発見当初から地下資源が豊富な為にUSNとOCU両国が入植し、資源採掘を行っているのだが、両国は対立している為に島の中心国境に東をUSN、西をOCUと半分に分けている。その為、国境周辺は常に緊張が付きまとう土地のはずなのだが、ここ二十年は小競り合い以外の紛争が発生していないので、警備の気も緩むというものだろう。

あー、そろそろ昼だし、パラダイス・バーガーのクーポンもたまってきたから、ラン

チは豪華にトロピカルグランバーガーが2個も付いてるスペシャルセットでも頼むかな。あのバーガーはまさに悪魔の食い物だ。うまさという罪に脂肪という罰がまつている——などと、門兵に立つ男が考えていたその時。

《ウーーーーー——！！》

「んがっ!? 警報だどっ」

ハンバーガーの太りやすさについて脳内考察をしていた男は、突如鳴り響いた警報に身をすくませる。ここはUSN直下の軍需施設であり、そこで警報が鳴り響くと言う事は、何かがあつたということ。

「おいっ！こちら北門だが何があつた！」

『侵入者だ！国境を越えてやつらが——っ』

「なんだって!? よく聞こえないぞ！おいっ！くそ切れやがつた！」

門番の男が悪態をついて回線が途切れた電話を床に叩きつける。工場の中で何か起きたのだろうかという事だけは分かったが、ほかは依然として分からない。しかたなく男は車両通行止め用の杭をセットして、門の遮断機を下ろそうとした。

その時、工場のほうから爆発音が響いた。驚き工場に目を向けると軍需工場から火の手があがっている。そしてその炎にまぎれて何かが飛ぶように地上をかけてくる姿も。

「——っ！とまれっ！とまらんと——」

お決まりの定型文、警告を行おうとした男だったが、走る影の手元が光ったかと思うと、そのまま門の柱に叩きつけられてしまう。その影が魔導師であり、自分を吹き飛ばしたのが魔法である事に気が付く余裕もなく、再び爆発音がとどろいた。

ただし、それは近隣にまで被害が及ぶほどの大爆発。門番の男がうつすら目を開けたとき、すでに炎の壁が音速を超えて迫っている。バーガーのクーポン、どうしよう。それが門番が最後に考えた事だったのは、誰も知らない。

その日、USN領のラーカス地区の軍需工場が爆発炎上するという事件が発生した。擲弾やミサイル用の爆薬も扱っていた為、工場の爆発で約80余命の命が奪われた。コレに対しUSNではこの事件にOCUの魔導師が関与していると報道。しかしOCUはそれをUSNの狂言であると反論し、和解にいたることなく紛争状態へと発展した。後の世における紛争の火種となったラーカス事件は、こうして発生した。長き沈黙をやぶり、再び大国同士が戦うという事態に世界が揺れる。それは勿論、自国内の間人も例外ではなく、当事者たち以外のほぼ全ての人間が驚きを持って紛争を迎える事となったのだった。

Sideフェン

・この世界に生れ落ちてから早七年、俺が7歳になった時だった。戦争が起こった。USNから海を挟んだ位置にあるOCUが、海の真ん中にある大きな火山島で起きた小競り合いが元で勃発したらしく、相手の国がとった軍事的挑発の制裁を行ったら、向こうが国境を越えてこつちの街をいくつか占領したらしい。

・同時多発的に国境を越えて攻める電撃戦だったらしく、随分と前から準備を進めていたらしいOCUは一気に国境を越えて侵攻した。戦線は拡大し食い止めるUSN側が必死の抵抗を見せた事で、現在両陣営は膠着状態となり両国とも現在本国からの援軍の準備を進めているんだそう。

たまたまテレビをつけたところ、無名のカメラマンが撮影したという件の火山島での戦端が開かれた映像が公開されていた。火山島の中心部にある都市に乱立する高層ビルの一つに飛来した一発の空対地ミサイルが突っ込み、あれよあれよという内に瓦礫と粉じんとなって崩れ落ちる光景が映っていた。

朝ごはんのシリアルを思わず口から漏らしたのは悪くないだろう。だってコレもろフ○ント・ミツシオンだ。島の名前なんてそのままハフマン島だったし、人型機動兵器ヴァンツァーが出てこないとか、少しだけ戦争の様子が異なる以外は、フロミの展開そ

のままだった。

そして、この戦争の名前は第二次ハフマン紛争なんだそうで…。

ああ、やつぱり、と妙に納得している自分がいた。

まあソレくらいなら本国にいる俺たち市民はどうって事は無い。なにせ最前線で直接戦闘が起きているハフマン島から何千キロと離れており、今朝もご近所さんたちは普段どおりの生活を営んでいる。基本的に本土決戦にでもならないと、自国民の危機感は薄く対岸の火事くらいにしかならないだろう。

しかし、まだ世界は平和ムードなのに対し、我が家は少し勝手が違った。ハイそうです。軍の上級士官である我が両親は至急の命令で最前線へと赴任していきました。さすがの母上も俺を連れては行かなかった。戦争と訓練は違うのだと、そういう事なのだろうと俺は納得していたので別に問題は無い。

だけど、そうなる则ち一人っ子の俺は家で一人ぼっちだった。普段からボツチだが、家族がいらないと比べ物にならないくらいに寂しいと感じた。前世のニュースで紛争地帯の実況とかを見た時と同じく、すぐに家族が戻ってくると、その程度でしかないだろうって高を括っていた。

でも実際にそういう状況におかれると、尚更家族が戦争に行ってしまったと言うこと

を実感できてしまい、不安とかが凄まじい事になっている。母上の部隊の連中も全員前線に行つちまつたそうだし、あの濃いメンツが見れないのも少し寂しい。父上はともかく、母上が落とされるところは想像がつかないけど……でも心配だった。

——主に俺の命がなッ!!

なんでかつて？ 決まつてるだろう？

俺も戦線に送られる可能性があるからだよッ！ 冗談抜きでなッ!!

実は両親が前線に向かつてから一ヶ月が経過したんだが、紛争は相変わらずこう着状態が続き長引く様相を見せていた。両軍とも短期決戦を望んだからか、最初から超兵器扱いの魔導師がどんどん投入されて少くない犠牲者が出ているそう。国土が広いからかそれなりに魔導師の数はいる物の、全力投入すればすぐに磨耗する。

人の命をそうたとえるのは気が引けるのだが、実際OCUの魔導師の質はUSNに並ぶ程であり、数も同じくらいいる。それが小さな島で乱戦になれば、それはそれは沢山の命が流れて赤い河を作つてもおかしくはないだろう。要するに会戦してから僅か数ヶ月なのに両陣営ともかなりの戦力を削られたらしいのだ。

そんな中でたまたま近所のマーケットに食料品の買出しに出かけた際。飽きもせず

に噂話をしまくる奥様方の間でとあるうわさがある事を知ったのだ。曰く、磨耗した戦力の補充のために予備役の他にも、軍の高官の家族および親類で魔導師資質を持つ子供たちが次々と軍学校へ突っ込まれている。それも半ば強制的に。——というもの。

普通なら眉唾モノだと、どうせエセアナリスト気取りの誰かが変なうわさを流したんだらうと気に留めなかっただろう。だって一般では戦場の感じは勝っていないが負けでもないってのが広まつてるからなあ。平和なものである。

だが魔法という力を知った今なら分かる。この世界なら魔法を覚えられる子供は戦線に送る事くらいやりかねないだろうって事をな！良くも悪くも、この世界も魔法第一主義が蔓延していたりするから……だから、まあ解るだろ？

要するにだ。俺みたく資質のある子供は、年齢を問わず徴兵されて、戦争させる為に教育を施されて前線に送られる可能性があるって訳ッ！おまけに軍の高官の子供たちならば、両親の為に子供たちが憎い敵と戦うという立派なプロパガンダにもなるんだからな。一石二鳥だ。

でもここまですら、まだ唯のうわさだと流せたんだが、いるんだよね。うちの周りを探るいかにもな黒スーツを着た人たちがちらほらとね。見えないところにも不審な人物の反応をヴィズの高感度センサーが探知しているから、もうだめぽ。

うん、間違いなく俺ってば狙われているね。一般に流れるうわさに続き、この怪しげ

な人たちの姿を見てしまうと、うわさが実は真実であると確信してしまう。というかコレでなにも無いわけが無い。賭けてもいい。

もつとも、実際は誰なのかわからない以上こちらは後手に回るしかない。しかも連中は直接手は下してこないという悪辣さ。ずっと視線を感じるあたり、監視か何かのつもりなのだろうと思うが、私生活を大つぴらに出来るほど豪快じゃないので、あまりいい気分ではない。

どちらにしろ嫌な予感を感じていた俺は、空いている時間は全て自主訓練にあてていた。魔力の成長度合いはまだまだ延びるはずだけど、手っ取り早く最大値を上げる為に、気絶するギリギリまで魔力行使したり、魔力を多く含むと言われる食物を食い、逆に近場の洞窟に行き、吞まず食わずで真つ暗な洞窟の中をさまよった。

数撃ちや当たる方式で本当に上がるか微妙だったが、洞窟での臨死体感で結構最大値は増えた。やっぱ死を擬似的に体感するだけでも違うのだろうか：死に対する恐れが薄くなり、精神の揺らぎが少なくなる。生き残る為だと自分に言い聞かせココまでやったけど……ホント今まで良く発狂しなかったなど自分で関心したほどである。

不安や心配事を払拭したいが為に、このような無茶な訓練をしたのは、まあ若気の至りだろう。だが十中八苦、俺は軍にしょつ引かれるだろうから、かなり鬼気迫るくらいのレベルでやるのかもしれない事だった。俺の中の軍隊の認識が母上の部隊が基準

だった所為というのものもある。

あれでも部下さんたちの技量は、スーパー母上についていく為に他の部隊よりもはるかにレベルが高いのだが、俺は2年間それを近くで見続けたが為に見慣れてしまっており、母上の部隊のアレが普通の魔導師部隊のレベルであるという基準が出来上がってしまったっていたのだ。本当はもつとレベルは下だって、この時はまだ気が付いていない。

結局、俺に出来た事はソレくらいであった。ただ洞窟での訓練の際に監視の人間が何度か俺を追いかけけるようにして洞窟に入ってきた後、なんだか監視の数が減った気がするの、もしかして何人か遭難してたりして……ま、まさかねえ。

……

……

……

監視の目がつく様になり早数週間。

自己鍛錬とヴィズの強化が一段落し、少しは休めると思ったある日のこと。

———《ピンポン》

突如鳴り響く玄関の呼び鈴。

『マスター……“例”のお客さんです』

そして、我が相棒の解析の結果、黒服さん方がようやく重い腰を上げたと。

『ちなみに、何時も来ていたヒト』でもあるみたいですよ?』

「そうか…」

運命の時が動き出す……なんて言ってみても7歳児じゃ絞まらないな。とにかく鳴り続ける呼び鈴を無視するわけにもいかず、玄関に向かう。

《ガチャ…》

「どちら様…ですか?」

「こんにちは、ココはリーダー夫妻のお宅ですか?」

「はい、そうですが…アナタは…?」

「あ、紹介が遅れたわね? 私はUSN軍人事部所属のエリカ・タスト中尉です。よろしくね?」

「はい…どうも」

玄関に立っていたのは人懐こそうな笑みを浮かべ、いかにも子供が好きですと言う仮面をかぶった女性…タスト女史であった。ちなみに玄関の鍵はかけてあったはずだが、なんで中にいるのかは聞かない方がいいのかもしれない。

奥へと案内すると、彼女はさも珍しそうに視線を這わせる演技をして見せた。だが俺は知っている。この一カ月程、この近辺を嗅ぎ廻っていたのは彼女である。なんせヴェズがとらえた魔力パターンと完璧に一致するからな……少しは隠せよ。

果たしてコレは試されているのか、それとも素でばれてないと思っているのか。どちらにしても俺にはあまりいいことではなさそうである。

「……御用件は？」

「あら、いい茶葉…ん？あ、そうそう要件ね？じゃあハイこれ♪」

一応客人扱いなので客間に通した後、紅茶を振舞ってからここへ来た理由を尋ねたところ、彼女は手に持っていたバックから、それこそまるで回覧板を渡すかのような手軽さで大量の書類を客間の机にどさつと置いてくださりやがった。

中身は——まあ想像つくんだが……。

「——非常特例による幼年徴兵令……ですか？」

「ええそうよ？君は国の為に闘う魔導師に選ばれたのよ？」

そういう彼女はニツコリとした貼り付けたような笑顔を崩さない。普通のガキならころつとだまされそうな人のよさそうな笑みなのだが、あいにく魔導師として早期から訓練を受け続けた俺は、彼女の動作に違和感を覚え、それが危険であると勘が告げていた。

大体選ばれたってなんだよ選ばれたって。愛国心は無くはないが、まるで『テレビのヒーローになれますよー』見たいなえさには釣られないクマー。残念だけど、この身は子供であるが、中身は普通に精神年齢が馬鹿高いモンで。

「選ばれた…ね」

感情は表に出ないが呆れと嘲笑の視線を送る。気づかれない…くそ。

「2〜3日くらい経った後に出せばいいからネ？」

2〜3日つてのはせめてもの良心のつもりなのだろうか？大方曲解した場合には強制連行とかして、素敵な義務教育（洗脳もあるよ）に放り込むとかするだろう。そうしたほうがやりやすいだろうし。特に魔導師という即戦力がほしい軍部にはね。

「いいえ…今書きます」

「……あら、どうしてかしら？」

「コレに拒否権は無い…と知っているから…です。それに、先ほどから…貴女は断つてもいいとは一言も告げて…いない」

正直、化かしあいつてのは好きじゃない。腹のうちを探るくらいなら腹を撃ち抜く方が楽でいい…あー、母上に毒されてるう。

「ど、どうしたのかしら？突然頭を抱えて…風邪でも引いているの？」

「いえ、ちよつと自分の成長がコレでいいのかと…」

「は？……よくわからいけど、まあいいわ」

ま、うわさを聞いてから遅かれ早かれこうなるとは思ってたから、別にいいんだがね。

「……とりあえず従いますから……我が家の周囲に展開している人たち……どうにかな

りませんか？正直……目障り、です」

「……いつから気が付いていたの？」

「一カ月程前……ですかね？まさか監視していた本人が来るとは……こちらとしても予想外でしたが……」

「随分と鋭いのね？」

「親に……仕込まれましたから……」

正確にはヴィズの高感度センサーのお陰だな。

「ふふ、探知能力も優秀、魔力も高い……あとは駆け引きを覚えればそれなりに優秀な士官になれるわね。合合格よ？」

「合格……？」

「ええ合格、そこまで鋭い子なんて今までそうはいなかった。私がそう報告するからアナタは短期教育プログラムを終えたら尉官待遇で赴任出来るわ。下士官すつ飛ばして尉官なんて、なんてエリートなのかしらね、ホント」

わーお、流石魔法世界。魔法第一主義万歳様々だね。つまりコレはテストの一環だった訳か。監視していた存在を見抜ければ、さらに優秀な個体として評価し、教程過程の余計な手間を省く。

確かに……これは随分と効率のいい事で——クソツタレめ。

「それじゃあ早速行きましょうか？リーダー君。戦線は緊迫しているから、一人でも多くの戦力があるのよ。解つていたなら準備も終わっているんでしょ？」

「アイマム、10分ください」

「8分お願いします」

「厳しい事……で」

荷物を取りに二階へあがる……ふう、とうとう来ちまった。

両親が両親だし、俺の魔導師ランクも病院での解析データで持っているだろうから避けられない事かと思つてたけど……。

あ……死にたくねえよ……。

『マスター、質問の許可を』

「ん、何？ヴィズ」

あら珍しい。こいつが俺に質問してくるなんて。まだそこまでAIが進歩してないと思つてたんだが……どらどら、何が聞きたいのかね？

『何故そこまで抵抗も無しに従っているのですか？』

「……逆らつても意味が無い……から」

『マスターは常日頃から死にたくないとか戦争は嫌とおっしゃっていたじゃないですか？嫌なら逃げれば良いのでは？』

「そうしたいのも…山々なんだけど…ね」

ふーむ、普段の俺のを見ているから出た質問か。それはともかく、質問についてだが、なんせ命令してるのが国家だからな、一個人である俺が逆らえるわけがない。大体今俺のそばには守ってくれるはずの庇護者がいないんだぞ？どうしろって？ちなみに逃げる考察は何百通りもしたが、結局最後はつかまるぞ？全部。

泡良く逃げたとしても、この国にいる以上絶対に捕まるし、海外になんて逃げるルートなんて戦争が始まった段階でアウトだ。それに下手に逆らって両親に迷惑が掛かったり、国家反逆の意志ありとか思われて、この国の暗い部分に連れてかれたりなんかしたら…：…：…：…：…：…：そんな太いの無理（白白剤の注射だよ？）

そして、最後は身元不明の遺体に…：…：…

「——流石に…：…：…：そう言うのは、遠慮したい」

それならば普通に国に従順なフリをして、戦線に行った方がずつとマシ…：…：じやないけど、八方塞りならまだ自分で決められる道の方が生き残れる可能性が高いだろう。

『しかし…：…：戦争に行けば…：…』

「うん…：…：いままでと違って、生きるために…：…：俺は、確実に相手を…：人を殺す事になる…：…：だろっね」

——覚悟はしている……訳が無い。

俺は元は平和な国日本生まれだぞ？人を殺す覚悟なんて……ムリだ。

だがそれでもやらなきゃならん……転生した場所と時期が悪かったとあきらめて、俺はこの手で人を殺める。生んで愛してくれた両親の為、そして生き残る為に。

「とつくに逃げ場なんて無い……」

『……私はデバイスです。ですのでこの状況に見合う語呂をライブラリから見つけられませんでした。しかしマスター、幾らなんでもコレは——』

「言うな……ヴィズ」

『……了解しました。一時スリープモードに移行します』

ヴィズはそう言うのと黙りこんでしまった——随分と優しい子に育ってくれたようだ。ふふ、しかし戦争か……戦争なんて対岸の火事位にしか思ってたのに……な。ありえそうだと思うっていたから覚悟を決めたと思っていたんだが、どうやらやっぱり怖いんだろうな。身体が震えてるよ。

壁を思いつきり殴ってみる——魔法の力はなしで——すこし壁が凹み、痛みで身体の震えが収まった。精々死なないように……敵は倒すしかない……か。ホント厄介な世界に転生しちまったなあ……魔法使えると浮かれてた前の自分を叱りたいぜ。

俺はやるせない思いのまま、準備していた荷物を手に取り、そのまま我が家を後にした。まさか、もう二度とこの家に戻れなくなるなんて……このときの俺は知るよしも無かった。

「貴様の口から垂れる言葉の最初と最後にサーをつけろー」

S i d e フ エ ン

いようみんな元気か？俺は今——

「どうしたクソ虫どもがッ！自分よりもはるかに小さなガキに負けやがってッ!!!それでも兵士かッ!!!」

「「サー！申し訳ありませんでした！サー！」「」」

——フリーダム基地軍仕官学校にて鬼軍曹からシバかれているよ。

タスト女史に連れられた俺は、生まれ育った土地から遠く離れて、隣の州にある軍仕官学校へと連れ込まれた。まだ年齢一桁なのに随分と鬼畜なのねとも思ったが、これはこれできちんと配慮した結果らしい。何せ、うわさの高官の子供たちと比べれば俺は選ばれたエリート街道に乗ったと彼女は言うのだ。

事実、士官学校の教官たちは年齢一桁な俺を見て驚いていたし、軍士官学校に入れた大丈夫なのかとタスト女史に何度も確認を取っていたほどだ。この時まで知らなかったんだが、高官の子供を集めているといっても13〜14歳が最低ラインであり、実はソレより下の子は前例がなかったんだと。なら何で俺つれてこられてるんだオイ？

だけどタスト女史も、これまた狡猾というか準備がいいというか、そういう質問がされるのは予想の範疇だったようで、俺に関する資料を十分に用意して入学をこり押ししてくれました。どうも不安を振り払いたいが為に行った無謀な訓練の数々を一人でこなしていたという実績が士官学校の入隊レベルにある事を示してしまつたらしい。

あのアマア……いつか又つころす。ホントありがた迷惑といわねばなるまいて。

おかげで新兵入隊式の際には周りの平均年齢がおよそ16、5歳。でも俺は7歳。中学生の集団の中に一人小学一年生が混じつてるような光景です。本当にありがとうございました。いろんな意味で最悪でした。主に視線的な意味で。痛い！視線が突き刺さるよお！そんな珍獣見る目で見ないでくれ！これも全部タスト女史の所為だチクショー！

んで、俺は軍に入隊した。一応両親に近況報告の手紙を出したが着いてるかは不明。

だって半ば誘拐だし……あれ？でも任意の場合は誘拐じゃないんだよな？でも行かない選択肢選ぶといろんな意味でバッドエンドでガメオツベラ一直線だったし……任意誘拐ってカテゴリーはあるんだろうか？

「全員10周追加だツ！あと声が小さいぞFNGめツ！ジジイのフ○○クの方がまだ声がかいぞツ！気合はどうした！どこかに忘れたか！励めっ！」

「二「サーイエツサーツ!!」二」

こうして始まった軍学校生活であったが……はつきり言おう、俺には温い。訓練内容が母上と似たり寄ったりだったからだ。しかも母上程じゃ無いから物足りない。

「走れえツ!!そして声をあげて歌えツ!!」

「[[[[~♪~]]]]」

それにしても……この走りながらエロ歌を歌うって言うのは、軍隊でのセオリーなんだろうか？正直、子供の教育にはすこぶる悪いよなあ。始めはまだ純朴で純粹だった子供たちが、徐々に目をにごらせていく光景には、悪質な洗脳に対する吐き気を感じる

よ。俺はもう手遅れだから別に来た時と変わらないけどな。

んでこの後は座学である。俺たちは腐っても魔導師のガキであり、そのほとんどが思考分割術であるマルチタスクを修得していた。このマルチタスクという技術により俺たちは通常の何百倍の速度で知識と詰め込まれた。スタンドアロン、チームワーク、戦術に戦略の構想、指示の出し方、敵の使う武器の種類、魔法の種類、サブイバル知識など e t c.

元から覚えている俺を除き、これらを全て修得するに掛かった時間はおよそ2週間である。もう一度いうが2週間である。大事なことなので二度言った。コレだけでも判るだろうが魔導師の子供はこと知識に関して学習力は化物レベルなのだ。基礎の基礎であるマルチタスクを修得していれば、ついでに読書魔法と検索魔法も修得すれば、経験地獲得量はうなぎのぼり。一般兵の比じゃない。

こうして必要知識を詰め込まれた俺たち新兵（ルーキー）は座学だけはギリギリ合格ラインというなんとも歪な状態になった。普通はもつとゆとりを持って教えるが戦争中なので詰め込み教育という訳らしい。何よりも教育速度優先だそうだ。

そうして座学では教わる事が殆ど無くなった後。俺たち魔導兵士見習いたちは、フリーダム基地のとある施設につれてこられた。そこに並ぶは怪しげなシリンドー。そ

れに関する説明は一切なく、全員シンダーに放り込まれてしまい、怪しげなガスを吸わされたところで意識が一時飛んでいる。

そこからありのままに起こった事を話すぜ。気がつくともルーキーたちは見知らぬ基地のど真ん中に整列していた。何を言っているのか判らねーと思うが、違う基地に転送されたとか、過程をすつ飛ばして結果だけ残されたとかじゃ断じてねえ。もつと魔法らしい物の片鱗を味わったぜ。

実はそれ、魔導師の幻術系魔法を利用した集団シミュレーターだったんだそうなの。とにかく戦力を逐一戦線に投入したい為に普通の訓練メニューを繰り返して行われたシミュレーター訓練。本当の体は眠っている状態で、いわば意識だけがブートキャンプに送られた状態と思えば判りやすいだろう。

要するにさっさと教程過程を終わらせちまおうという速成栽培な訓練だった。このシミュレーター内の時間はとても早く、肉体作りを考えなければ魔導兵士の育成には最適だった。そもそも魔導師は魔法を主体とする兵種である。よって魔法に比重が傾くのだから、筋トレよりも魔法トレの方が優先されるのは考えれば分かることだよ。

だがそれでもあえて言わせてもらおう。肉体が鍛えられないだけで、それは一体どこ
の精神と時の部屋ですか？魔法だからで全部済ましていいのかよ。健全な精神は健全

な肉体に宿るんだぞ？促成栽培したいにも程があるだろうに。少し釈然としないがルーキーが文句を垂れる事は許されない為、文句を言う暇もなく、現実世界で眠らされている身体が限界に来るまで訓練が行われた。

尚、シミュレーター訓練の説明をダイジェストでお送りすると、こんなかんじ――

『えー、ここでは攻撃魔法は基本使えなくしてある。そして貴様等にはこれから一般兵の苦勞を味わって貰おう。血と泥と糞尿に塗れたクソ虫には御似合いの訓練だ』

『サーッ！イェッサーッ!!』↑訓練兵全員、すでに鬼教官の洗礼済み。

『さて、訓練における前提想定を説明する。今回使える魔法は身体強化魔法だけ、それ以外は敵に受けた特殊な魔法攻撃により使用不能である！そして貴様等は銃火器を用いての戦闘演習を最後に体験して貰う事になるだろう！――質問はあるか？そこのお前、いいぞ。言ってみろ』

『サー！我々は魔導師で魔法を使うのが本職なのは！サー！』

『いい質問だ。だがなFNG、戦場で求められる兵隊とはなんだと思う？』

『サー！どんな状況でも生き残り、命令を遵守する存在ですっ！サー！』

『それはつまりどんな状況下でも戦える事だ。だからこそその実銃訓練である。十二、こ

こでやる最初の訓練は実にイージー。遠くに立っている目的目掛けて銃を撃つだけではない。質感、重量共に我が軍で採用されている正式銃と同じである。この思考加速空間を利用して、身体で銃火器の使い方を覚えて貰おう。さあ詰まらん質問タイムは終了だッ！楽しい楽しい訓練を始めようッ』

——と、いきなり最初からこんなんであった。

ここで疑問に思うのはバーチャルな体験で現実に戻ったときに銃火器を扱えるのかという事だろう。だが人間が普段感じている感覚は基本的に身体の感覚器の情報を脳が認識した物である。言い換えれば脳に与える情報が極限まで現実と同じ情報量だったら、それは実際にやったのと変わらないのだ——と教官はいつていた。

どこのマ○リックスかと小一時間問い詰めたところだ。大体頭で思考できても鍛えていない身体が動くわきやねーだろー！といたい。努力で鍛えた筋肉は裏切らないからだ。ところがより詳しくこの訓練について知ると、これはあくまで魔法というチート技能が使える魔法使いだからこそ許される訓練だと理解できた。

まず魔導師と違い魔力を持たない一般兵は、まず身体を鍛えなければならない。なぜ

なら魔導師に通用するほど強力な銃火器ほど大口徑で重たいのだから、一般兵は1に筋肉2に筋肉。ムキムキにならないと戦場で戦えないのである。一般兵の装備にはパワーアシストが付加されているのもあるが、ソレを扱うにもかなりの筋肉が要求されるのだ。

だが身体強化魔法を扱える魔導師は肉体における筋肉への訓練比重を極限まで抑えられる。最悪銃が持てる程度に強化できる魔力さえ残せば、その継戦能力が段違いとなるからだ。軍隊で要求される魔導師とはMP切れになると戦えない魔法使いなどではない。魔力が切れても肉体言語で戦える魔導兵士が望ましいのだ。

だから訓練は筋トレよりも身体をどう動かすべきかに絞られていた。たしかにソレは重要な訓練だった。俺はすでに母上から受けた訓練でそれを体験していたからきびきび動けたが、他の訓練兵たちの動きはなんともお粗末としか言いようがない程だったからだ。魔導師でなければ戦場で戦えるレベルになるまで数年掛かったかもしれない。

もつとも筋トレが大事じゃないかといえどもない。トレーニングを繰り返せば体力が尽き、体力が尽くという事は精神的にタフになれるという事でもある。魔法の力にはある程度精神力が作用するので、常に一定の力を発揮するには体力からくる精神

的タフさが求められるのだ。ついでに心肺機能も向上すればスタミナもつく。要はバランズだ。

こうして俺を含めた訓練兵たちは基礎からのバーチャルブーツキャンプにご招待された。知識だけのズブの素人が白兵戦技能から銃の撃ち方に銃を用いた戦術を全て身体で覚えさせられた。当然マルチタスクの力により、毎時訓練内容はどんどん引き上げられハードなものになる……気がつけば訓練兵の4割が自分の小銃に名前付けてるのを知ったときはドン引きしたっけな。

そして俺たち訓練兵はいろんな体験をした。近接戦闘術、ナイフ格闘術、室内戦闘技法、銃を用いた狙撃、銃弾を受け止める防御魔法訓練、銃の解体と組み立て、応急処置法。それに何故か野戦料理実習等々多岐に及ぶ。そういえば魔導師地獄マラソン付きの走破訓練もやった。身体強化を使うあのマラソンに重りとして銃火器などの兵装を追加。銃を手放す事無く障害物を乗り越える訓練である。

例えば教官がすぐ脇で銃器をフルオートで撃ちまくり、地面を銃弾で耕している中、その音をBGMに有刺鉄線の下を潜り抜けながら背面匍匐して泥水の中に飛び込んだりした。バーチャルなのに無駄にリアルな泥の感触が実に気持ち悪い。もちろん泥水は他の訓練兵の背丈ギリギリで深く掘られており、俺は足が着かなかったから余計にき

つかった。

でも俺はやり遂げた。何せ俺の場合は他のルーキーたちとは前提条件からして違う。他のルーキーたちが今ようやく形にしている基礎の基礎は俺が数年前にはトラウマ込みで学習したモノであり熟練度は段違いなのだ。だが困った事にそれが教官の目にとまったのは痛かったかもしれない。ことあるごとに俺の事を指差して、候補生諸君はアレくらい出来ないのかというのだ。

対抗意識を燃やしてつてのはセオリーだから判らなくはないんだけど、その所為で周囲から孤立するのはなあ…自業自得もあるけどちよつと辛いもんだ。あーあ、はやくシミュレーター訓練おわらないかな。この間のサバイバル技能の時に妙にリアルに作られた動物に癒されたからいいけど、俺なんか疲れたよ。ホント…。

Side 三人称

——フリーダム士官学校・シミュレーター管制室——

「システム・オールグリーン、同調率は97」

「早いな。そろそろFNG-Dプログラムでも投入するか」

「おいおい、せつかくの原石たちを粉みじんにするつもりかよ」

「でも訓練予定に組み込まれてるぜ？」

「え？——なにそれ怖い」

訓練兵たちが加速された仮想空間にて悲鳴を上げている中、現実世界では訓練開始から3時間ほどが経過しようとしていた。冷たいコンクリート施設の中でシリンダーが並んだシミュレーター室。その少し上にはガラス窓で仕切られた管制室がある。シミュレーター内での出来事は全てそこに常駐するスタッフが監視および管理を行っていた。

普段は規定業務に勤しむ魔導師たちで騒がしいこの施設も今日ばかりは静かである。USNで初めての若年魔導兵士の短期育成の為に、現在シミュレーターは全て訓練兵たちに割り振られ、一般兵士はすこし使い勝手の悪い屋外の演習場で訓練を行っているからである。

そして新兵の基礎訓練プログラムのシミュレーター訓練を起動させたオペレーターたちは、静寂が流れるシミュレーター室を眺めながら、コーヒー片手に訓練課程が終わ

るまで睡魔との闘いを消化していた。そんな彼等のいる管制室に一人の男が入ってきた。

「訓練兵たちの様子はどうか？」

振り返り管制室の入り口に立つ壮年の男の階級章を確認したオペレーターたちは、身体だけを男のほうに向けながら敬礼する。男はそれに返礼を返すと仕事を続けてくれと返した。入室してきた壮年の男は教官の一人であり、現在シミュレーターを実行中の訓練兵の担当で、すこし席を外していたが様子を見に戻ってきたのだ。

オペレーターの一人が操作するとモニターが起動してデータが表示される。個別に振られた番号にバイタル値に精神グラフなどなど、情報は非常に多岐に及んだ。

「は、現在フェイズ2です。訓練経験値の平均が一定値を超えるまで後30分ほどかと」
「……予想より早いな」

本来予定されていた訓練のほとんどが繰り上げて行われている。このまま行けばこの訓練兵たちは訓練の最短終了記録を塗り替えるだろう。オペレーターはそのことを

自慢するかの様に楽しそうに口を開く。

「情報部の連中の目利きは確かですよ。特にこの訓練兵T―6の能力が群を抜いて高く、周囲がつけられているとデータは出しています」

「……君はいつから集団心理の精神分析ドクターになったのかね？」

「――っ！サーっ！分野をわきまえず申し訳ありませんっ」

だが、訓練教程がいい結果を挙げているのに教官は不愉快だと言わんばかりに眉間に皺を寄せた。その様子を見てオペレーターは慌てて口を閉ざして仕事に戻る。教官はフンと鼻を鳴らし、再びモニターに向き直った。

モニターの中では仮想空間内での様子が投影されている。加速状態なので早送りのような映像だが、教官であり魔導師でもある彼には見えていた。

「まあいい……最終演習の設定は？」

「仮想空間内時間の二日後の夜間、基地襲撃にセットしてあります」

「限りなくリアルに近いとはいえ……やりきれんな」

「たしかに子供に銃を持たせてなんてのは、いい気はしませんね」

「ハフマンの時には通常兵器が使えない魔導師が殺されたと聞きます。そういう連中みたく死なない為にも必要でしょうコレは」

クロスレンジに熟達した魔導師でない限り、こと詠唱前の魔導師は懐に入られると弱い。それを露呈したのが先のハフマン紛争であった。ハフマン島における戦闘で大規模な戦闘に発展した際、魔力切れを起こした魔導師が次々と餌食になったのである。それは多くの場合、敵の魔導師との戦闘で魔力切れを起こした者や魔法詠唱中の極僅かな隙を狙われたというのがおおい。

デバイスを用いても対象を視認して魔法を構築するという動作は、銃を構える動作よりも遅いのである。勿論だからといって魔導師の優位性が失われた訳ではない。防御魔法やエリア型のシールド魔法、B Jなど魔導師を守る魔法は数々存在し、その殆どが小口径の銃火器を無効にできる。また大口徑も防御魔法を使えば確実に無効化でき、場合によっては野戦砲ですら無効化できた。

しかし、いかに魔導師であっても十字砲火を浴びせられれば、その優位性が絶対のものではない事を思い知らされる。絶え間ない放火によりシールドを破られた魔導師の末路はミンチすら残さず痕跡も残されないといい悲惨なモノとなる。ハフマン紛争開

始時に撃墜された魔導師の遺族へ送られた棺桶の多くが空だったのはそういった経緯もあつた。

故にU S N軍上層部ではこういった主戦力である一般魔導師兵の損耗率による戦力の低下を重く見て、どの職種にも関わらず通常兵器が扱える技能を持たせる方針を打ち出した。低ランク魔導師兵の場合は最低でも拳銃程度は扱えないと前線から外されるし、現在訓練中の者たちには訓練項目に銃火器訓練が追加されている。

高ランク魔導師ともなれば戦闘中に銃火器で撃墜される事はほぼないが、休息の際や基地間の移動などB Jを展開したりしない時を狙われて殺される可能性もなくはないので、こちらも即時対応時の技能として最低限の銃火器訓練が職務規定とされている。様々な犠牲を経てこういうプランが打ち出された訳だが、だからといって新兵の…それもまだ子供に銃火器を持たせるといのが正しいのか？

戦争では倫理観は無視される。正気で出来る事ではない。
教官の男は理解はしつつも内心では納得していなかった。

「ですが軍は兵力を必要としています。割り切るしかないのでは？」
「判っている。判っているさ……言われなくても、重々にな……そろそろか？」

何時の間にかモニターの中では訓練兵たちの訓練が最終ステップに差し掛かっていった。それをみたオペレーターは少しあせりすぐにコンソールを操作する。

「あ、はい——えー、最終訓練を消化。演習プログラム開始まで、あと——」

「少しいいか？演習内容をしつかりと確認したいから、仮想空間内の時間を加速から等速にしてもらえんだろうか？」

「……イエス・サー。等速に戻します。あとはじっくりご鑑賞を親父さん」

「ああ、そうする」

「コーヒーは？」

「……いたどころ」

——仮想空間内ブートキャンプ・PM7:45——

仮想空間であつても体感的には現実世界と変わらず一日が進む。つまり朝日が昇り、昼間は太陽が輝き、夜は闇に包まれる。長期間の仮想訓練において訓練中の兵士が現実

世界との違和感から来るストレスをなるべく軽減する為にそういった配慮が為されていた。その為、仮想空間内においても食事・排泄・睡眠は滞りなく行われている。

そして仮想空間に放り込まれた訓練兵たちは夕方の訓練を終えて、ある種の楽しみである食事の為に兵舎に戻ってきていた。仮想空間であるが故に外部とのかかわりが極力制限され、娯楽が少ない彼等にとつて食事は唯一の楽しみであった。もつともこの食事こそが現実と仮想空間との違いをもつとも多く垣間見れる瞬間でもある。

何せ現実世界の基地よりもPXのメニューは国際色に富んでいた。おそらく開発者が酔狂を効かせ、世界各国の珍味から高級料理までデータを入れたというのだから、意外と遊びが含まれている仮想空間である。

「あー、ここに来て何日目だろう：俺、これだけが楽しみなんだ」

「全部架空なんだけど、だからこそその楽しみだよねー」

「ねえ、ラスク訓練兵。私たちの班が朝4時起きになつてサービスをしなきゃならなくなつたのはあなたたちの所為だつて知っているわよね？」

「あー、ラスクのヤツまたやらかしたのか」

「毎度の事だろ。気にスンナ。俺たちもしくればまたやられる」

「うわーん！また僕のキツシユ取つたっ！」

「今日の訓練で助けてあげたでシヨ？シヨーン」

訓練兵でこつた返す食堂では雑談で騒がしい。だがその中である一角はとても静かであった。8人は並んで座れるはずのテーブルにはたった一人しか座っておらず、その人影は周囲の訓練兵たちと比べると大分小さい。訓練兵の中でもっとも小さい彼は言わずもがなフェンである。

このブーツキャンプにおいて唯一の娯楽は食事以外殆どない。眠る行為もあくまで体感的な一日のリズムを崩さない為に行うことであり、必ず必要という訳ではないからだ。擬似体験故に寝たところで夢も見ない為、寝てる間の時間を感じないのが唯一の利点といえば利点なのだろう。だがそれ以外にメリツトは無い。それでもフェンが眠るのは周囲に相手にされないから暇だっただけからである。

「おい、あいつまた寝てるぞ?」

「よく寝るよなあ。そんなに疲れてたっけ?」

そんなフェンを指差した一部の集団がフェンの元に近寄っていく。

ゆつくりとした足取りでフェンを取り囲むと、なにやらジツとフェンの顔を見つめて

いた。傍から見ればフェンを睨んでいるように見えるソレは、まるで彼等がフェンを誤闘にかけようとしているように見える。フェン危うし!?——と思われたが。

「見ろよ。この綺麗な寝顔。眠ってるんだぜ」

「いやソレ当たり前だから」

「ああ、あの無防備であどけない寝顔……じゆる」

「おいしい、可愛いからって触ろうとするのは紳士アンド淑女協定違反だぞ」

この一部の訓練兵たちは特殊だった。いろんな意味で……。

実はフェンが訓練兵全員から避けられていると感じていたのは、それはまったくの誤解、勘違いであり、一部の訓練兵たちはフェンを気に入っていた。なまじ女の子みたくに可愛らしいのに愛想を振りまかない姿がクールに見えたそうなの。

もともと人気が出たのはサバイバル訓練において仮想空間に作られた森の中、そこにいた動物の何匹かをひそかに可愛がっている姿が目撃されたからでもある。ギャップ萌えとは恐ろしい武器だと目撃した何人かが倒れたとか。それ以来ある一部の連中の間では紳士協定が結ばれており、フェンを一步はなれた位置から観察するという暗黙の了解が出来ていたのである。

これは果たして自業自得なのか？それとも偶然が絡まりあい完成してしまった空間なのか？……判断に悩むところであるが、それに気がつかないフェンはちよつと寂しい思いをしていると思うと、ここでフェンを取り囲んでいる訓練兵全員にお前等自重しろといったくなる。

「……………なあ」

「なんだよ」

「ちよつとだけ、ほつぺたを触ってみたくないか？」

「おいー」「テメエー！」「それは駄目よっ！」「むしろ俺がへブツ」

「うるせえよテメエら。そんなガキ一人になに盛ってんだ、アア？」

ガラの悪そうな声が響く。そうフェンの事を気に入っている訓練兵は全体から見ればごく一部。他は無関心か逆に敵対心ムキだしの輩も多くいた。そういつた輩の多くは思春期真っ盛りで尚且つ自分は選ばれたエリートで特別な存在だと信じて疑わない……あと純粹にプライド高いのもそういう連中だった。

彼等がフェンに敵対心剥き出しな理由は一つ。フェンが幼い見た目よりもずつとレベルが高い事が原因である。大人であるならそういうやつもいると理解できても、自身

は特別だと考える彼等にとって年下であるフェンの活躍はさぞ生意気に見えた事だろう。よって何時も絡んでくるのはフェンは目障りでしょうがないと思っっているグループだった。

「盛つてないよ。むしろ見て楽しんでたんだよ」

「それがおかしいって言ってるんだ。大体なんであんなチビスケがここに何故いるのか疑問だぜ。そういうのは家にいらってるの」

「お前、自分がいつも成績2位だからってひがむなよ」

フェンをやさしく見守る訓練兵の一人が絡んできた方にそういうと、周囲の気温が少し下がった。

「……ころすぞテメエ」

「やれるもんならやってみろよ。俺はなあ？ワンパンで沈むぞ」

「私はキック一発で昇天よ」

「睨まれるだけでもう逃げたいッス」

「それは弱すぎだろオイ」

「……やる気あんのか無いのかはつきりしろや！」

「おい見ろ！あいつが叫ぶからフェンが身じろぎしたぞ」

「マジでっ!?」

「いや聞けよっテメエら!?」

一触即発……には見えないが、彼等は本気だった。かたや目障りなヤツをぶん殴つてやろうと、かたや乱闘に発展したらフェンが起きる前に周りを出し抜いて連れ去つてやろうと……どう考えても片方はどこかおかしいのだが気にはいけない。どこかハイスクールなノリなのは、彼等もまだ子供である証である。

あと少して仮想空間での訓練も終わりを迎えるというのにアイツら元気だなあと周囲の目が眠るフェンを中心に睨み合う彼等の乱闘を暇つぶしにでもなるだろうと眺めていた、その時――

《ヴーーーーーっ!!!》

「なっ！警戒警報だど!?!」

突如、食堂内に……いや基地全体にサイレンが鳴り響く。それだけならまだいいのだ

が、今度はどこからか爆発音が響いてきた為、この場の訓練兵たちは皆困惑した。

『基地内全職員に告ぐ！本基地は現在敵OCUの攻撃部隊から攻撃を受けている！全部隊直ちに迎撃せよ！繰り返し返す、直ちに迎撃せよ！訓練兵各員は非常体制基準に従い、各部隊事に所定の配置にて基地防衛戦に参加せよ！尚、これは訓練ではない！』

「な、なんだよ突然!?!訓練じゃないってシステムの故障なのか?!」

「いや訓練だろ。突発的な基地防衛訓練を抜き打ちで入れたんだきつと。急いで迎撃準備しないと減点されるぞ！」

『訓練の成果を見せる最後の実戦式演習である！常にモニターされているから各々奮力に期待する！』

「ほらな？急いで装備を確認しねえとっ！」

アナウンスを聞いて急にあわただしくなる訓練兵たち、そこで一人がある事に気づく。

「あれ？フェンがもういないぞ？」

「え、ええーっ！っ!!」

見ればすでにそこに彼の姿はなく、ロッカーに移動した後であった。訓練兵たちはそれに驚きを感じつつも身体を動かし、各々が所定の配置に着く為に食堂の入り口へ殺到した。こうして仮想訓練の演習プログラムがスタートした。

ある意味でとても、長い夜がはじまった。

現在、魔導式シミュレーター内で行われている演習は、ハフマン島にて実際に壊滅した軍の基地が受けた攻撃の記録をそのままデータ化し、スーパーコンピューターを用いた統合戦術システムがシミュレートを行い最適化した演習プログラムを流している状態で、きわめて実戦に近いモノを訓練兵たちは体験していた。

敵側が取る作戦は国境線を越えた高機動車と軽装甲車を中心とする陸戦部隊が数を生かして波状攻撃を行い、それと同時に進行で基地に空挺部隊が降下してくるというオーソドックスな戦法だが、単純ゆえに破られにくく、相対する側も正攻法を使わざるを得ない。おまけに敵対プログラムとはいえOCU兵の姿そのままの敵と対峙しなければならない場面が多く、相手を殺すところもばっちり見える。

しかも演習設定において、他の基地も同時多発的に電撃戦にさらされている。つまり夜明けまで周辺の基地からの救援は無く、敵に攻められたまま孤立しているという絶望的な状況が展開されるというプログラムである。孤立しているという意味では訓練兵たちに勝ちはない。なぜなら、この演習に限り参加した訓練兵が生き残れる確立は限りなく低く設定されているからだ。

唯一の温情措置として訓練中に使えなかった攻撃・防御魔法が使用可能に設定されているが、敵側も使える設定なので勝率は五分五分であろう。この演習をする意味は訓練

で培った技術を持ってして、最後まで任務を放棄せず戦う兵士を篩い（ふるい）に掛けつつ、訓練に慣れた訓練兵をワザと厳しい演習で死亡させる事で天狗とならぬように引き締める意味合いも込められていた。

「毎時10人は死んでしまうな。バイタルデータも興奮、恐慌状態が多い：」

「弾丸に慣れても弾丸飛び交う戦場にはまだ慣れないのでしょう」

「そうなるよ、演習が終わり次第。重度の者には精神浄化魔法があるだろうな」

「そんな状態になっても魔導兵士に仕立てなきやいけないんですよ。やだなー」

「それが上の要望だ。外にバレなければ問題にならない。バラしたら問答無用で銃殺だな」

「こわいこわい。給料以上の事はしませんよってね」

精神浄化魔法。

一応は回復魔法に分類されているが、効果は対象の深層心理においてある特定の事項やイメージに対しブロックを掛ける幻覚系統に属する魔法であり、実質的などころ深い領域での洗脳といったほうがいいかもしれない。精神的疾患を表に出さなくさせるという意味では治療行為として黙認されるが、人文的にはあまり良い目では見られない魔

法であった。

「ストレスで超過負荷状態となった者も十数名。彼等は精神浄化を施しても前線で戦える兵士にはなれないでしょうね。重度のPTSDが起きると現場では使えません。ま、我々としては後方で活躍するCP仕官の後輩でも出来たら嬉しいですけど」

「それを決めるのは我々ではなく人事部と上層部だ。だが篩いは厳正にな」
「イエスサー。でもそろそろプログラムは佳境ですよ」

管制室の中でコンソールを操作する音だけが響く。次々と開いていくシリンドラーを見ると、戦死判定を受ける者が多くいるように感じられたが、実戦に参加したことがあ
る教官にしてみればこれだけの損失はまだ軽いほうだと感じていた。実戦において魔法が使えない数だけが多い一般兵の損失はコレの比ではないのだ。

ましてや今の訓練兵たちの能力は身体能力が高いだけの一般兵とそう変わらないだろう。魔法が使えてもとっさに運用できなければ持つていないのと同じである。すぐに戦死するのも仕方がないのだ。教官はモニターの画面をシミュレーター室とリラックスルームに向けてみた。シミュレーター室では仮想世界ダイブ用シリンドラーの中で呆然としている者や泣いている者のすすり泣く声だけが響いている。

リラックスルームに移った者は流石に泣いてはいないが多くが顔を伏せて頭を抱えている者が多い。短期間で育成せねばならぬとはいえ、未熟な彼等には十分すぎる衝撃だったのだろう。最悪カウンセラーの要請もしなければならぬと考えつつ、こんな無茶な訓練を課してきた上層部直轄の戦略情報局の連中は一度同じ物を受けてみると内心毒づいた。

教官ゆえに新兵を傷物にしない程度に虐めあげる事は得意であるが、これは虐めではなくもはや唯の暴力だろうと、教官は苦虫を噛み潰したよう表情を隠そうともせず眉間に皺を寄せたままモニターの向こうの戦況をジッと見つめていた。

刻々と告げられる戦死判定報告を聞きながら、別モニターに表示されるコードが割り振られた訓練兵たちの生存表示が、緑から次々と赤に代わり戦死していく様子を眺めコーヒーを啜る。大分冷めたコーヒーの苦味だけが強い味に辟易しつつも誰でもいいからもつと長く生き残れと内心願っていた。だが長く生き残れば、その先は――

「仮想空間内で拠点防衛用火力タレットが一つ破壊されました」

「随分と落ちるのが早いな」

「操作している訓練兵どもが他のタレットとの連携に失敗。火力の集中運用が出来ずに

懐に攻め込まれ陥落した模様です。周辺についていた部隊は破壊の際、弾薬の誘爆に巻き込まれ全員戦死判定。一気に40名近い脱落ですね」

「防衛目標が設定されていたから結構な数が周囲に展開していたんでしょな。開始してから30分で三分の一近くが脱落……訓練成果が高くて必ずしも優秀とは限らないってのはホントだなこりゃ」

「私語は慎め。まだ彼等は戦っている」

「イエスサー、失言でした——西部防衛線についていたインディゴ、ロミオ、シエラ、キロ部隊と侵攻して来た仮想敵プログラムが接敵。交戦を開始しました。映像を出します」

シミュレーターで新たな動きがあったようだ。オペレーターがコンソールを操作すると仮想空間内の映像がモニターに現れる。視点はちやうど仮想敵と訓練兵部隊の上空であり、全体を見れる位置からの映像である。仮想OCU軍は基地を制圧する為の高機動車を大量に投入しており、そこへ防衛側の火線が集中しているが高機動車に結界魔導師が同乗しているらしく、あまり効果を発揮していない。

対して敵は超長距離からの砲撃魔法による支援も付いているというオマケ付きである。高機動車がかく乱しつつ座標を後方へ送り、そこに迫撃砲や誘導砲撃が打ち込まれ

ている。訓練兵たちも負けじと弾幕を張って敵を近づけないようにしていた。高機動車の幾つかが破壊されており、新兵としては良くやっているといえるだろう。もつとも、それはこの状況が長続きしなければの話である。

「——精々、持つてあと20分だな」

「ですね。彼等は久々に魔法が使えて嬉しいのかペース配分が出来てません」

「通常火器の運用法は座学で習っている筈でも、戦闘の混乱の中じゃ思い出せるヤツは極僅かつて所ですかね」

「話している内にロミオとキロが壊滅。負傷者を担いだインディゴが防衛線を下げ、彼等の撤退をシエラが支援してますが、こちらも押されています」

訓練兵たちの多くは、やはり通常兵器を使う者は少なかった。事実、高機動車に張られたシールド魔法に対しての魔法攻撃は有効であり、車載機関砲の掃射を防ぎたい彼等が手早く高機動車輛を撃破したいが為に多用していた。結果として高機動車の何輛かを撃破できた功績は大きい。

だが別問題として、この演習中の救援は無い。つまり後方からの補給が見込めない状況である。弾薬を交換するだけで済む通常兵器と異なり、短時間での魔導師の魔力回復

は容易に行えるような物ではない。他者に魔力を譲渡する魔法は存在するが、果たして総力を挙げて基地防衛に回っている中、魔力補給に各部隊を回れる魔導師が何人いることか。

「基地の反対側にいたタンゴが西部防衛線に到達。シエラの救援を開始し——はあつ!?」

「どうした？ 瞬時に全滅したか？」

牽制の為の弾幕は通常火器に任せ、攻撃魔法は要所所で使用するように教えたが、それがあまり実行されていない事に教官が頭を抱えていると、オペレーターが突然素っ頓狂な声を上げた。オペレーターは何度かモニターを見てから目をこすったりしている。

「なにがあった。報告は正確にしろ」

「し、しつれいしましたっ！それが救援に向かったタンゴが敵部隊を殲滅」

「なあにイ!?!」

「現在殿についてシエラの基地内への撤退を後押しして——ああつ!?!敵増援部隊まで

喰った!? 化けものかこいつ等!」

モニターに映った光景は、これまで訓練兵が殺されていくところしか見ていなかったオペレーターに衝撃を与えていた。砲弾や魔法が飛び交う映像の中では、他の部隊の救援に来ていたタンゴ部隊が物陰に隠れ、一人は何を考えたか敵の装甲車を奪取。車載兵器で敵の増援を一方的に叩いている。そしてそこから反撃に出た夢想のような光景が繰り広げられていた。

その装甲車を奪取した一人は、味方からの支援攻撃を背にしながらも一気に敵との距離を詰め。そうかと思うと懐へと入り込む。敵がまごついている間に銃火器で撃ち殺し、敵がシールドを張っていれば手榴弾や高速徹甲弾を当てシールドを剥がし、アサルトライフルのセミオートでブレの無い見事なヘッドショットを決め、そうかと思えばすぐさま離脱して友軍に敵を攻撃させるように指示を送っている。

B J装備の敵はまるで蛇のように絡みついたかと思うと、躊躇せずに首や間接を押し折り、銃の弾が尽きれば敵が落とした武器を拾って使っている。迫撃砲の砲撃がくれば、その爆風にまるで木の葉の如くに吹き飛ばされ無様に大地に転がるが、致命傷は受けていないのかすぐに立ち上がると敵の元へと駆けて激戦へと飛び込んでいた。恐怖を感じていないのか、彼の顔はずっとポーカーフエイスのままである。

驚くべきはそれが一人の訓練兵だという事。

その訓練兵は、部隊コードT-6・タンゴシックス。名前は――

「リーダー訓練兵？あの成績はいいが協調性が0の問題児…」

――フェン・リーダー訓練兵。軍の若年者年齢をさらに下げた子供。

「な、なんてヤツだ。BJも使わないでシールド魔法だけでキルゾーンを突破しやがった。あんな事できるヤツはラーズ軍事演習でもお目に掛かった事が無い」

「魔法ありでならベテラン魔導師なら出来る事だろうけど、魔法なしだと進んでほしいとは思わない動きですね」

オペレーターたちが思わず面食らってしまった中、モニターの向こうでT-6は殿（しんがり）をかってでたのか、他の部隊の撤退を支援している。遮蔽物と遮蔽物との間をすばやく移動し、またどこかで拾ったのかグレネードランチャーを障害物の岩を

カバーに敵に向け発砲。敵魔導師の放つ誘導魔力弾だけはシールド魔法で防御していた。

常に動き、効率的に敵を撃破していくその姿に、一度は後退した味方も士気を盛り返している。最前線で迫撃砲の弾幕の中を飛ぶように突き進む姿は、まるで舞っているようで、戦場で味方を鼓舞しているようにも見える。されども飛び散った土に塗れたその姿は華美とは程遠い。しかし敵を屠る時のその光景は味方の目を離さない。

シミュレーターの中だというのに、タンゴが救援に来てから防衛部隊の風向きが変わっていた。

「……こりや逸材ですね。すごいヤツもいたもんだ」

「ふむ。これは……」

「——教官殿？」

「ん？ ああいやすまない。少し考え事をな」

「そうですか——ん？ お！ 仮想敵が一定数倒されたから敵側の空挺部隊が出撃しました」

「さらに戦局は悪化するか……さいごまで見てやろうじゃないか。どれだけ生き延びれるかを」

教官はそういうと顔をモニターに向けたまま動かなくなった。オペレーターたちもソレを見て再び自分の仕事に戻る。そして彼等は気がつかない。教官の男が手に手帳を握っていた事に：そこにフェンの名が書かれており、それが後に彼の命運を変えたという事に今は誰も気がつかず、誰も知りえない。

唯いえるのは、演習プログラムはまだ動き続けている。それだけであった。

—— 仮想空間内・基地最終防衛ライン・AM4:38 ——

「2時の方向！敵、軽機動車！くっそ、マシンガン乱射してくるぞっ！気をつけろっ！」
「だ、だれか弾をもつとよこしてくれ！もう弾がないっ！だれかっ！」

「早くアレを片付けないと。フレアをまだ持っている人はいない!?いたら投げてっ！」
「もうスモークしかありませんよっ！」

数百に及ぶ仮想敵部隊に攻められ基地は、今まさに終わりの時を迎えようとしてい

た。東側防衛にあたっていたタンゴ部隊を防衛線にまわしたとはいえ、防衛ラインの再構築はおろか負傷者を基地へ後送する時間を稼げるかどうかも怪しいところであった。

一気呵成に、さりとて確実に防衛線を破壊した仮想OCU軍。その攻勢に戦死判定をくらった多くの仲間が散っていった。防衛線をいまだ維持できているのは、ひとえに唯一残っている20m重機関砲、デイフェンスタレットの弾幕と、砲弾が飛び交う中でも生き延びた個々の魔導師が、ある者は杖を、ある者は銃を手に必死に抵抗しているからに他ならない。

ここにきて、もう彼等に残された時間も少ない。

最終防衛ラインに運ばれた弾薬は殆ど空。若き魔導師たちの魔力もすでに限界を迎えている。増援としてタンゴ部隊と共に防衛線部隊の救援に来たフェンも同様で、満足に動く装備は一般兵用のアーマーと敵から奪った銃火器がいくつかあるだけであり、もはやこの状況を覆すことは不可能といえる状態であった。

弾も救援もない。だがそんな中で更に状況は悪化した。突然HQからの通信が途絶し反応が消えたのだ。座学で知識だけは学んでいる彼等はその状況をすぐに理解した。すなわち基地は敵の手に落ちたのだ。或いはコレまで情報を送っていた司令部だけが

破壊されたのだろう。どちらにしる上位指揮系統が破壊された訓練兵たちは浮き足立ち、また一人と仲間が火線によって消えた。

そして、演習は続いた。防衛すべき基地が陥落したにも関わらず演習は終了しなかったのである。しかしまだ希望はあった。基地の司令部が陥落直前にゴルドー非常宣言を出していたからだ。非常宣言発動により、各部隊は自己の判断で最寄の基地への撤退が許可されたが、いきなり全員が撤退できるわけが無い。

「……なんだよ。なんでだよ」

「ビクター3」

「もう防衛目標は消えた！なのに何でまだ終わらないんだよっ！」

「ビクター3！口を閉じて敵を撃てっ！嫌ならうすぐまつてろ！邪魔だっ！」

「もう嫌だ。人なんて撃ちたく無いよお……」

「チツ、おい。鎮静剤そいつに打つとけ。本気で邪魔だ」

フェンの隣で北部防衛線から撤退支援に来ていたビクター隊の一人がストレスに耐え切れず取り乱し、興奮を抑える為に部隊長に鎮静剤を投与されていた。一番被害が大きかった西部防衛線の防衛部隊は負傷者を引き連れて生き残ったCPと共に東側へ後

退を始めている。その為、負傷した部隊以外の動ける部隊全てが負傷者を守る為に、いまだ攻勢を続ける敵を防ぎながら徐々に後退していたのである。

これはシミュレーターである。例えば粉みじんにされようが現実世界には何の影響も無い。

だがもうすでに参加している彼等にそんな事は関係なかった。仮想現実であるのに痛みも苦しみも全てが本物と同じだった。それよりも神経をすり減らしたのは敵に止めを刺した時である。シミュレーターだというのに、敵は撃たれば痛みが、時には断末魔を上げて絶命し、至近距離で爆発があれば吹き飛んだ肉片が回りに散らばった。

徹底的にリアルさを追求したゲームならまだいい。だがこのプログラムではコンティニューはされないのだ。仲間の死体もそのまま、それが余計にゲームではないという認識を生み出し、疲れきった今の彼等は仮想現実であることすら忘れていた。最初こそ死体袋に死体を詰めていたが途中からは半ば放棄である。それだけ真に迫った演習プログラムだったがゆえ、いまだ生き残る彼等に降りかかるストレスは半端ではない。

「タンゴ6つ！マシンガンを黙らせろっ！」

「……了解」

「タンゴ6つ！右翼に増援が来た！何とかしてくれ！」

「……まかせろ」

「ミサイルランチャーが壊れちゃった！6つ！何とかしてくれっ！」

「……工具を貸せ、すぐ直す」

「俺たちはここで待つ。先に行つて道を開いてくれ！」

「……仕方ない。これより吶喊する。邪魔はするな」

その所為か、先の撤退戦において見せた人間離れした活躍に目を奪われた訓練兵が挙つてフェンを頼り始めたのである。内心嫌がるフェンであるが彼の鉄面皮は嫌がる感情すら浮かべない。悪化している状況もあり嫌ながらも渋々手伝つていた事がフェンの出動回数を増加させていた。なまじ両親に仕込まれて大抵の事態に対処できてしまふ彼はいろんな部隊で引つ張りダコであつた。

「タンゴ6！」「助けて6つ！」「チビスケっ！早く俺を助けろっ！」「あ、ごめん。間違えて撃つちまつた」

「……………（アーマーに穴が…俺を殺す気なんだな？そうなんだな?!チキショー！グレてやる後でっ!）」

「6えもーん！早くなんとかしてよー！」

「……はい、重機関銃。雑兵なんていちころ……」

涙をバイザーで隠しつつも皆を助け続けるタンゴシックスことフェン。彼等は気がついていないのだ。この妙に長引く演習の終了というのは、彼等の全滅をさしているという事に気が付いてはいないのだ。もっとも気が付いた所ですでに演習に放り込まれた彼等がそれをやめる事は出来はしない。嫌ならさっさと自殺するか、敵の射線に飛び出すか、最後まで足掻くかのどれかしが選択肢は無かった。

フェンはその点では臆病者であった。彼は妄想とはいえ自ら命を絶つ勇氣は無かったのだ。それは前世において望まぬ死に方を経験した事が無意識に作用していたからかもしれない。そうで在りながら、彼は戦いに参加した。度重なる訓練で恐怖が麻痺し、彼は死ぬのなら敵の手で、だが巻き添えにするという自己犠牲に近い精神状態にあった。二律背反な思考だったのは否めないが、この事に彼は疑問を感じてはいなかった。

こうして戦闘は激しさを増していく。フェンはタンゴチームの一員として常に前に出て戦った。うぬぼれでは無く事実として彼の能力はソレを可能としていたからだ。だが彼とて人の子である……信じられないかもしれないが人の子である。その能力には限界があり、戦える範疇も戦場から見れば極一部。そして彼には戦場をカバーできる

ような大規模魔法はまだ使えなかった。

—— 仮想空間内・近隣基地まで50km地点・AM6:38 ——

また一人、また一人と仲間が倒れていった。

常に自分を遠目から見ていた者たちは、敵の手榴弾で粉々になった。敵意を向けてきた者たちは高速ライフル弾や魔力弾に撃たれた。特に関心を向けてこなかった大多数の者たちは、彼が救援に向かう前に敵の無人機の餌食となっていた。シミュレーターの癖に死体が消えない光景は地獄のように見えた。それでもフェンは戦う事をやめなかった。仮想敵を倒しては倒しては、次はどいつだと言わんばかりに武器を持つ。

気がつけばフェンはただ一人。破壊された最後の戦闘指揮車の影に立ち、朝焼けに染まる空を眺めていた。朝は空けたが彼の周りには誰一人いない。味方は誰一人として残ってはいなかった。皆朝が来る前に仮想OCU魔導師兵たちに戦死させられた。最後の一人は何を思ったか自分を魔力弾から庇って死んだ。シミュレーターなのに、ただの演習なのに、満足した顔を浮かべた最後の仲間が散ったのをフェンは見た。

或いは、彼はもう戦わなくていい理由を見つけたかったのではないか。自分を守る事で自己犠牲という大義名分を得たかった。そこまで考えてフェンは首を振る。自分も人のことは言えない。フェンはただ死にたくなかったから：でも強い力を持つていたから敵に殺されようと思いついた。それも死への大義名分ではないと誰が言える。思考はネガティブ、もう疲れ果てたが身体はまだ動く。

ここまで鍛えた身体は自然と魔力を温存し、少ない体力を魔力強化と揺るがない精神力で補い、後は自暴自棄に近い死んでなるものかという意地という気力だけで戦った。後に残されたのは孤立無援の戦場だったのは皮肉だろう。魔法とは凄い力だ。ただの幼児が戦場で生き残るマシーンになれるなんて前世では想像もつかなかった。

《——ブルルルル》

ふと、耳鳴りがする聴覚に空気を切る軽い音が聞こえた。フェンは朝焼けに赤い世界の中で目を魔法で強化して音が聞こえる方を見つめてみる。遠くの空に20センチほどの大きさをした、竹とんぼのようなプロペラが伸びた丸い物体が浮かんでいる。OC U無人偵察システム “ドリアンズ” に見つかったようだ。

ドリアンズが浮かんでいる空からすこし下に視線を向ければ、大量の土ぼこりが舞っ

ている。敵の機動部隊が残兵狩りに来ているのだろう。こちらも攻性偵察機である。マッドソーサーが欲しいが贅沢はいえない。こうも絶望的なら彼等に投降したいところだがフェンは知っている。武器を捨てて投降しようとした味方を容赦なく撃ち殺した仮想敵プログラムの姿を……。

「……………（そろそろ、俺も終わりたい…切実に）」

フェンは銃のマガジンを確認する。残り8発、また敵から奪わねばならない。こんな時ほどヴィズがいれば楽なのにとフェンは一人ぼやく。シミュレーターの中ではレアスキルが発動しないので持つていてもすぐガス欠だがアレがないのと在るのでは安心感が違う。貧弱なこの身を守るのは一般兵用アーマーとヘルメット一体型バイザー、あとは運だけだ。

「……………（迫撃砲……俺にも命中してくれてれば良かったのに）」

そんな事を考えながらも身体はすでに駆け出していた。直後フェンがいた指揮車が爆発する。長距離からの曲射砲撃魔法が残骸を吹き飛ばしたのだ。そのままいけば演

習を終えられたのだが、もう疲労がピークのフェンはそこまで考える余裕は無かった。ここまで生き延びた自分が易々と討たれてやる訳にはいかない。自分を鍛えてくれた人たちの為。最後に残された訓練兵がみせる意地を仮想敵のプログラム共に見せ付けてやるのだ。

それは正常な思考ではなかったかもしれない。ただの意地だと払拭されてしまうものかもしれない。だがフェンにはこの意地を貫き通したいと願った。ただやられるだけなのは、あの母の子として、なにより男として認められるものではない。

「グッ……はアッ！」

手に持った銃の最後の弾をフルオートで吐き出す。8発は全て一番近くにいた敵に吸い込まれるようにして命中した。腹部を押しえ崩れ落ちようとする敵にタツクルするように突っ込み武器と手榴弾を奪う。さっきまでの銃はすでに捨てていた。弾切れの銃に用は無い。戦えないから。

「……………」

無言のまま、手にした手榴弾を投げつける。安全ピンは敵の弾薬ベルトから奪ったときにすでに抜けていた。敵が投げつけられた手榴弾に驚き叫ぶのを耳に、投げつけた方向とは逆の位置に銃口を向ける。迷うこと無く発砲した音は手榴弾の爆発音にかき消された。何人倒したかは見ていない。その時には彼は別の敵に飛び掛りナイフを刺していた。

身体強化魔法の力で弾丸のように飛びかかったナイフは、いとも簡単に敵の首筋を引き裂いた。動物の解体と変わらないソレにもはや嫌悪感を感じなかった。そういう感覚はすでに麻痺している。そして首を刺した敵兵を足場に後方へと一気に飛び去りながらラウンドシールドを展開した。

直後、地面を滑るように宙を舞っていたフェンを幾条もの魔力弾が撃ち据えた。デバイスも無しに展開したシールドは脆く、数発の魔力弾を受ける内にすぐにひび割れていく。フェンはすぐさまシールドをパージし、指向性を持たせ自爆させた。反応装甲、リアクティブアーマーの如く機能したシールドが一時であるが敵弾の殆どを相殺する。

「…雷光よ、いまこの手に集え…」

敵の真ん中に飛び込み、ワザと敵兵を殺さないようにして敵弾を避けながら、トリ

ガーキーを口ずさむ。我が手こそ銃身、我が身こそ杖。そのイメージに呼応するように彼の手先にスフィアが形成され、そこから環状魔方陣がバレル状に展開していく。

「…大気よ、雷光の前に道を空ける…レール——」

環状魔方陣の中から、薄いレーザーが照射され、それは敵の一人に向かい——

「ブラスタ—っ！」

——その光条に沿って環状魔方陣により加速された魔力弾が射出されたっ！

トリガーキーにより発動したレールブラスタの魔法は単発。デバイスの補助も無いので速度も下がっていたが、相手の顔すら視認できる距離では関係ない。上げられるだけ上げた初速と貫通力を前に普通のポディアーマーは無効。一人二人三人、直線状にいた敵を巻き込んで大空へと一筋の光を残して魔法は消えた。

「さあ…っ！まだ…戦えるっ！かかって…っ！っ！」

返事は、面制圧のような弾幕であった。

自動小銃、バトルライフル、軽機関砲、魔力弾、魔力誘導弾、砲撃魔法——あらゆる攻撃がなだれのように押し寄せてくる。その中をフェンは動き続けていた。彼が思うは母が一度見せてくれた見切りのソレ。視界や勘として感じる情報をすべて同時に、マルチタスクにて処理したソレを元に射線から僅かに身を逸らすのだ。

前から、右から、左から、たった一人の生き残りにしては豪勢な弾幕の中を蠢く姿は、まるで舞を踊っているかのようだ。小さな体と身体強化魔法、そして致命傷を避ける防御魔法が彼を生き長らえさせている。だが未熟なそれは完全には攻撃を避けられない。致命傷を避けても細かな傷が増えてゆき、血は流れ、強化した体が悲鳴を上げる。

体が限界を超えようとしたその時。運悪くふくらはぎを抉るように誘導魔力弾が着弾し、彼の動きが鈍る。それを機に次々と銃弾が体を抉っていった。小柄な体は宙を舞い、地面に叩きつけられ血まみれとなる。だがまだ死んでいない。意識がある内はシミュレーターが戦死判定を下さないからだ。

「……………ぼ（うげえ、血の味、声もだせやしねえや）」

壊れたバイザーを外しながら立ち上がるようにするが、力が入らない。穴だらけな体に

無理やり強化魔法を使ったところ、血液が一気に流れて出ていくのが感覚で理解できた。それでも立ち上がった。最後の意地を魅せるためにフェンは立ち上がっていた。その小さな体には幾ばくも血は残されていない筈なのに、彼は立ったのだ。

気がつけば、敵からの攻撃が何故か止んでいた。その間にフェンは敵から奪った自動小銃を杖に、拾った拳銃を向けようとすが、腕が震えて照準が出来ない。再度魔法強化を試みるが上手く魔方陣を構築できない。そして更に追い討ちをかけるかの如く、遠くから何かが落下したような衝撃が彼の身体を揺らした。

「…………げぼ（な、なんだよ!? って敵側の無人戦闘機?!）」

フェンのすぐ目の前に降り立った機械兵器。敵国OCU製の無人戦闘機体と呼ばれる無人兵器である。箱に人の手がついたような形状をした胴体に四脚の足を持ったそれはタウルスと呼ばれていた。

「…………（けッ、一人相手に4体もタウルスがいるなんて、これ絶対生かす気ないだろ）」

フェンの前の一体だけではなく、周囲に更に三体。全部で四体もの無人兵器が兵装を

こちらに向けている。三銃身旋回式機関砲、ようするにガトリング砲がアイドリングを始めている光景を前に、もはや立っしか出来ないフェンは覚悟を決めた。

「……（もつと強くなろう、絶対）」

そして旋回式砲のマズルフラッシュを最後に、フェンの視界はブラックアウトした。

「フルボッコ？そんなのは天国だ！まずは地獄を見て来
いっ！」

S i d e f e n

俺は生きているぞー
!!!!!!!

つい叫びたくなつたが、ついに現実世界に帰還したぜ！いやあ実にむちゃくちゃなシミュレーター訓練だった。普通新兵にあそこまで追い詰めるような事するのかよ。大體いくら促成栽培したいからって無茶させて潰したら元も子も無いだろうにね。実際俺最後の方なんて殆ど覚えてねえや。疲れとかMAXだったし。

まあとにかく現実世界に戻り、今度は身体を鍛えたりとかいろいろする筈だったんですが相変わらず俺はボッチとなつてしまった。どうもがんばりすぎてドン引きされたらしく、あの演習以来俺は皆から敬遠されているような気がする。というか俺だけ何故か演習が終わった途端、他の訓練兵たちと隔離されたんだよな。何でもいろいろと検査するとか何とか……健康診断っぽくは無かったが、何でだろう？

その後は一週間、訓練免除である。教官曰く最後まで生き抜いた御褒美とかなんとか言っていたが、それでいいのかUSN軍?はやく前線に兵士を送りたいんじゃないのかといたい。こちとらあんな演習みたいな最後を迎えたくないから強くなりたいのに、部屋で軟禁状態にされてつまらないったらない。なので暇つぶしに閉じ込められている部屋でも出来る腕と足の訓練を始めた。魔力無しでやると実にいい訓練だ。

——んで筋トレをしているある日、部屋がノックされる。

「リーダー訓練兵、入るぞ」

そういつて俺の返答も待たずに扉を開けて、誰かが部屋に入ってきた。

「…………お前は一体何をしてるんだ?」

「ハッ!両手両足の訓練をと思いまして…」

そういうと何故か入ってきた人物が額を押さえている。頭痛かしら?

「……いや、なんか息子が持っていたコミックにそんなキャラクターがいたと思ってな。確か蜘蛛男とかなんという名前だったな。というかふざけてないですぐに降りて来い」
「イエスサー」

俺はそういうと部屋の隅っこの天井から降りる。

実は部屋の角を利用して天井に張り付いていたのだ。筋力要るぜーこれ？

「それでだラーダー」

「なんでしようか？」

「どうだ？訓練を再開したいか？」

そう問いかけるのはワイズ教官……この軍士官学校での最古参の教官の一人だ。フルネームはジョナサン・ワイズマンといい、卒業した訓練兵たちからはその真摯な姿勢と真面目な教導から「親父さん」と親しまれている。俺に対しても厳しくも優しく接してくれるいい人である。

「……命令とあらば」

「そうか……」

そんな人の問いに俺は言葉少なくそう答えた。いやもう少しちゃんとしやべりたいんだけど、これが限界というかなんと言うか。とにかく今の状態だと問題が無い訳じゃない。俺はどつちにしろ逃げられないのだから、鍛えられるだけ鍛えておかないといけないのだ。

この世界に来て7年と少し。どつちにしろ死ぬには早すぎる。平和になってからいろいろと経験したい事も沢山ある……あれ?俺魔法以外でなにかしたいことってあったか?うーん……俺的にはパソコンとネット環境とドリンクさえあればあとはいらない気が……これ駄目人間の発想じゃないか?いいのか俺?もう少し考えないと――

「リーダー?どうかしたか」

「いえ、何でもありません(変な方向に思考がズレた事は言わないでおこう)」

「ところでリーダー。貴様は夜中に自主訓練を行っているそうだな?」

「……いけないでしょうか?」

「いや、俺にも経験がある」

そう言うのと彼は自嘲気味にクククと笑った。なんとも歳に似合わない悪戯っ子みたいな笑い方だ。

そして再び沈黙……BGMには外から漏れ聞こえる訓練兵たちが歌う声が流れている。

「貴様は……」

そして僅かな逡巡の後、教官は思いもよらない質問を口にした。

「貴様は……何故そこまで頑張る？」

「ハッ……もうしわけありません。自分には……質問の意味が……理解しかねます」

——俺がココに来た理由。教官の貴方が知らない訳は無いだろう。と言外に言う。

「質問の仕方が悪かったな。まあアレだ？貴様の自主訓練はだ。我々の新兵に対する常識からしたら少し度が過ぎている……ある意味異常だと言っても良い」

「そうです……ね」

母上直伝だからなあ、常人には異常なのかも……つまり、俺って変態?

「その事を踏まえてだ。なぜ貴様はそこまで頑張る?自分自身を苛める?もしや……」

「別に自傷行為という訳ではないので……安心してください。そうですね……自主訓練にあえて理由をつけるならば……」

「——ならば?」

「——生き残る……為です」

正直に打ち明けてみる。いや真面目な話、本当にそれが理由なんですワイズ教官。

シミュレーターの時は無茶したけど、あれはあくまで恐ろしくリアルなシミュレーションで割り切ってたからな。

でもマジで死にたくないんすよ……俺は。

「後は……臭い話ですが、家族を守りたい……その為の力が欲しい……それだけです」

「いや、いい心がけだと俺は思う。」

「そう……ですか」

「ああ」

「……………」

再び流れる沈黙——き、気まずいぞい。

「最後に同じ事を聞くようだが、生き残りたいんだな？死にたくは無いんだな？」

「はい…そうですが？」

「その為なら、どこまでもヤル覚悟もあるんだな？」

「はい」

——んと、教官は何が言いたいんだ？

「そうか…まあ俺が聞きたかったのはそれだけだ。訓練に戻ると良い」

「ハッ——失礼します」

《ザッ》

立ち去るワイズ教官を敬礼をして見送り、俺は部屋の隅をよじ登り訓練に戻った。

.....

.....

.....

—— 数日後 ——

俺はいきなり呼び出しを受けた。はて?特に問題がある行動はしていなかった筈だが?大体基本的に部屋に軟禁されていて、夜中に外に訓練しに出る事くらいしかしてない筈……自主訓練って禁止されてない筈だけどなあ……その事を不思議に思いながら、教官待機室の扉をノックした。

「——誰だ?」

「フェン・ラーダー訓練兵……です」

「ん、入れ。」

「……失礼します」

部屋に入ると、ワイズ教官を含め複数の教官達が部屋にいた。

———というかアンタら、他の訓練兵の訓練は？

「短答直入で言う、貴様は他の訓練兵との訓練から離れ、我々教官団が対一で行う特別訓練に参加させる。なお、貴様に拒否権は無い。」

え？———なに？新しい死亡フラグ？

「質問が…有ります。発言の許可を」

「許可しよう」

「自分は何か…失態を犯しましたでしょうか？」

なるべく怒られないように、言われた事は全部平均よりも高めにクリアしたのですが？

何故こないじめの様な事になるんですか？嫌マジで…。

「逆だ。貴様は訓練で失態を犯した事がない…むしろ優秀な訓練兵だ。」

「でしたら…」

「だが…優秀すぎる。正直貴様の實力はとつくに訓練兵のソレを逸脱している。このままでは他の訓練兵たちの士気に影響が出る…いや既に出始めている」

——あーそう言えば演習の間もボツチだったのはその所為か? いや知ってたけど。

「そういや夜の訓練に行こうとした時にも、なんか嫉妬に包まれたヤツに闇討ちされたっけね。ん? 闇討ちされて大丈夫だったのかって? 大丈夫だったよ? じゃなかったらココにいないモン。俺母上の訓練のタマモノなのか敵意とか殺気とかが解るようになってさ? お陰で相手が仕掛けてきた時も何とか撃退できたんだ。」

「とりあえず襲ってきたバカはMP（ミリタリーポリス）に引き取ってもらった。勿論ボロボロにして—— 閑話休題。」

「——そう言う訳だから諦めろ」

「……イエッサー」

別に良いけどね、年齢が年齢だから友達とかなんて出来なかったし……言つてて哀しいなコレ。

「話は以上だ。下がっていいぞ」

「ハッ！——失礼しました」

カツと靴が鳴るくらいの敬礼をして、俺は教官待機室を出た。

《カツカツカツ……》

一人寂しく廊下を歩く音を聞きながら自嘲する俺、はは……ホントお笑いモンだ。まさか、やり過ぎで余計に目をつけられる羽目になるとはなあ。でもさ……そうやって訓練にでも打ち込んで無いと、不安で押しつぶされそうだったからな。全部あのやり過ぎなシミュレーターの所為だ。クソツタレめ。

「ちよつといいか？ラーダー」

「ワイズ教官」

「敬礼はいい」

「…了解」

帰り道、俺が隔離されている部屋に戻ろうとしたところ、突然声をかけられ後ろを向くと親父さんが立っていた。軍施設内なので敬礼は欠かさない……のが普通なんだが、このヒトはそう言うのを嫌う様で、周りの目が無いと敬礼しなくていいらしい。でも調子狂うよなあ。

「とりあえず、コイツを返しておくぞ?」

「え?あ…」

敬礼を解いたところ、突然ワイズ教官が俺に何かを投げ渡してきた。慌てて掴んでなんだろうと思ひソレに視線を向けた俺は、思わず驚いて変な声が出ちまった。

なんせ手渡されたのは——

『マスター!お久しぶりです!』

「ヴィズツ！」

——ココに来る時に訓練兵には早いと没収された、ヴィズだったのだから。

「どうして…ヴィズがここに…本来は卒業後の筈では？」

「なに、どうせ貴様はココを出たら尉官として着任させられるんだ。尉官は他の訓練兵と違って自分専用のデバイスを持つ事が許可されるからな。予定を繰り上げたにすぎん」

「しかし…」

「それにだ。俺達からの特別訓練を受ける事になるだろう？薄着のままじゃあ実力を発揮する前に落とされる。演習の時みたくな」

うぐ、なんか痛いところ突いてくるなあ。あの演習の時の事はあんまり思い出したくない。そう言えばワイズ教官。このヒト今は実戦を退いて教官職してるとはいえ、若いころは歩く災害とか呼ばれてた人だっけ？他の教官もなんか二三名付きだった様な……そんな人たちから受けるスペシヤルな訓練。ヤバいかも知らない。

「——まあこちらの楽しみを増やしただけにすぎんから貴様は気にしないでいい。」

「……………(唾然)」

「ん、もう時間か?それじゃ俺は訓練に戻るからな?貴様の特別訓練は明日からだが…」

ワイズ教官は俺に視線を向けると、ワザと悪戯を企むかの様な笑みを浮かべ——。

「覚悟しておくことだな?ラーダー訓練兵?」

「ツ——サーイエツサーツ!!!」

——プレッシャーと不安を煽ってきた……教官、アナタ意外とSなんですな?

教官は言う事は言ったという表情を浮かべると、そのまま廊下の角を曲がり見えなくなつた。

「……………(はあく)」

『溜息なんて幸せが逃げちやいますよ?』

「ほっとけ…」

何だか余計めんどくさい事が起こりそうな予感がして溜息をつく俺。あーもう、優等生ですまそうと思っただけなのになあ。夜中の鍛錬だって、母上から言われてたのを欠かさずやってただけだし…そうしないとすぐに勘が鈍っちまうんだよな。習慣付けつてのは恐ろしいもんだぜ。

『今更何言ってるんですか？』

「……地の文に突っ込むな」

『それよりもこれから忙しくなりますね。再びマスターとご一緒できて光栄です』

「ありがとう」

『でも特別訓練。大丈夫ですか？』

「どうしよう…死んじやつたら」

『葬儀屋を手配します』

あはは、なんて事を覚えてるんだこのやろう。

——ちきしようめ。

——フリーダム基地 第4訓練場——

軍士官学校で同期生たちと切り離されて、特別な訓練を受けさせられるようになって早数週間。俺は模擬戦に使われている市街戦を想定した屋外訓練場に来ていた。

『熱源接近。 接敵まであと20秒』

「——…アルアツソー、ファイアーロック解除。術式レールブラスター装填」

『ロック解除、FCSと同調—— 敵の反応ロスト、情報を処理中。お待ちください』

「大丈夫だ。ロストする前に…必ず痕跡がある…ソレをさがせ」

『ログを検索中』

そして今現在、教官の一人と模擬戦を行っている。まあ訓練兵が外に来たのだからする事何ぞそれくらいしかない。さて、相手は魔ビルを模した建物の中に入ったか? いや…以前は地下鉄を模した地下道内に隠れていたな。あの時は突然地面から魔力弾を撃

たれて度肝を抜かされた。しかし引き出しの広い「アノ教官」が、以前と同じ事をするとは考えられない。

『ログ検索終了。極少量の幻術系魔法の反応を検知。警戒を推奨』

幻術？幻術系でセンサーを騙した？ということとは……………まさかッ!?

慌てて上を見上げようとしたのと同時にHUDがレッドアラートを響かせた！

『上空魔力弾接近ッ！自動障壁展開』

《ズガガガンンツ——》

「くッ！…その程度っ！」

射撃地点と思われる所を狙い、レールプラスターを放つが——手応えなし。

『反応ロスト——敵未だ顕在』

「壁を削つただけか…広い空間まで後退する…策敵レベル最大で起動」

『警告、デイレイバインドの反応多数！トラップも検知！そんな一体どうやって?!』

「無駄口を叩くなヴィズよ…それよりも、トラップの少ないルートを…検索」
『り、了解——ルートを検索。HUD上に表示します』

——姿が見えない相手に翻弄される。遊ばれている。……畜生、忌々しい。

『後方警戒に反応!障壁展開!』

《ズガガガッ!!》

「…ぐう!」

クソツ!敵は一人な筈なのに何でこうもいろんな方向から攻撃が来るんだよツ!!

「はあ…はあ…」

次は、上か?下か?それとも左右か?どこから、どこから来る!?

『マスター、バイタルに異常が見られ…右後方から魔力弾ツ!』

「またか…くツ!」

『障壁展開効率60%に低下——コレ以上は危険と判断します』

ええいコレが実戦経験者とそうでない者の違いってヤツなのかッ!?

魔力量も技量も攻撃も防御も速さも全て優っている筈なのに!!

俺は、俺は手も足も出せないのか——!!

「姿がみえない…厄介だ」

『魔力隠ぺいも完璧ですね。あちらが攻撃してこないと位置の特定も出来ませんし…』

「さすがは…ワイズ教官か」

経験というのがいかに大事なかがホント良く解る。しかも容赦がない。ワイズの高感度センサーすら騙す隠ぺい能力といい、どうやっているのか不明な全方位からの同時攻撃といい、伊達に教官では無いって事か。

『今度は左です！魔力反応！』

「毎回…やられるかッ！」

俺は周りにあるトラップに注意を払いつつ、なるべくトラップが無い所を走る。
そう “無い所” を…そして――

《ブン》

「デイレイ…バインドだと?」

『バインドブレイク開始!ブレイクまで10秒』

――――― 巧妙に隠された “罠” に捕まった。クソツ!逃げ道に罠を置くのは常識じゃないかッ!

「そこまでだ。貴様は “戦死” だ。ラーダー訓練兵」

「……イエツサー」

気がつくくと首筋に充てられている小さな魔力刃。大きさはナイフ程度の魔力刃だが人を殺すのに大きい刃物は必要ない。小さな魔力刃でも首周りの関節部分を狙われたら、俺ご自慢のバリアアーマーすらも貫通するだろう…その結果はデッドだ。それに今まで姿が全く見えなかった教官が、俺の目の前に姿を現した時点で俺の敗北は決定した

訳だしな。

シミュレーターとは、なんだったのかと、数週間まですこし天狗だった俺を殴りたい。

「今日の模擬戦はココまでだ。それとリーダー。貴様はセンサーに頼り過ぎだな。もつと全体を見て流れを掴まんと死ぬぞ？ 気配の一つくらい察知できるようになれ」

「…了解」

無茶言うなよ。大体アンタ気配消してるじゃないか。どうやって察知するんだ？

まあ考えてもしようがないだろうけど…鬱だ。

「何が悪かったのかをレポートにして明日までに提出しておけ、シャワー浴びたら今度は座学だ」

「了解」

「では解散」

———こうして俺の負けた模擬戦の数が二桁を超えた。ちくせう。

Side ジョナサン・ワイズマン

今日も教え子を扱き模擬戦での評価報告書を自室でまとめる作業を行う。主観と客観、双方のかね合わせた評価をレポートのように書き記すのは、ここ十数年変わらぬ俺の仕事の一つだ。成績も良いヤツも悪いヤツも関係ない。俺はただ教えるだけ。若い連中が一端の口を叩けるような新兵に成長するまで仕立ててやるのが教官のお仕事ってヤツだ。

そんな彼らに教えるのは生き残る為の技術であり……そしてもっとも効率の良い敵の殺し方だ。これは決して褒められる仕事ではあるまい。言いかえれば俺は人殺しを大量に育成する為に教育しているのだ。だがその殺人術が前線において若い命が生き延びる為のモノだと考えると、すこしは気が楽になる。だから少しでも長く生きられる様に、扱き罵倒し慢心を砕いてやる。そうして一人前の兵士を作り上げるのが、俺の仕事……そう思っていた。

その年はすこし何時もとは違っていた。USN軍は一応志願制だった筈だが、戦争が始まってすぐに類を見ない程の戦力低下を強いられた軍は特例として短期魔導師育成

プロジェクトを立ち上げ、徴兵という形で素質があると判明している者たちを秘密裏に集めた。まるで近未来SFにでもありそうな設定だな。暴挙とも言えるそれが何故世論で問題にされず、議会を通過できたのかはなはだ疑問である。

だが事実として、そのプロジェクトは行われた。

全州のメデイカル・データバンクに登録されている魔導師の素質を持つ者たちを対象に徴兵が行われた。多くは軍人の家系に連なる者。当然だ。基本的に魔導師の多くは軍人なのだから、素質を持つ者の多くがそうなのも普通の事なのだ。魔導師は一般兵に比べて成長が早く、早期の戦力補填はコレで補われると思われた。しかしこのプロジェクトには並行してもう一つ、ある実験が行われる。

短期育成プロジェクトの中で特に優秀な者。それを限界まで鍛え上げたらどれだけ
の兵隊になれるか。或いはその可能性の模索である。馬鹿げている。荒唐無稽だ。なんとでも呼べるだろう。だが軍は大真面目に検討し、そして被験者を見つけ出した。それは魔導式シミュレーターにおける内部演習、別名殲滅プログラムの中で約8時間もの間生存し続けた。

普通に鍛えた魔導兵士部隊なら6時間前後である事を考えれば、その特殊性は尋常なものではない。むしろ異常である。俺はそうは思わないが一部の訓練兵や教官が陰で

そう呼んでいたのを聞いた事がある。もちろんそんな輩にはお灸を据えておいたがな。蔭口はみつともない。確かに異常ではあるが、俺は彼の詳細データの血筋を見て逆に成程と納得していたのだ。

それはともかく被験者に選ばれたのは特例で配属された特殊訓練兵フエン・ライダー訓練兵。若干7歳の子供だった。さすがに最初詳細データの年齢欄を見た時、いくら特例でもコレは無いんじゃないだろうかと思ひ、正直これにG○サインを下した人間の正気を疑った。もつとも、ライダーの実力を見てソレは無くなつたがな。

——だが一方で、他の人間がアイツをそう呼称するのも解ると言うのが本音だ。

戦い続けて30年前、前線を退いて10年、かれこれ40年も軍に居た俺だが、あんな教え子は初めてだ。確かに7歳児に軍の魔導師訓練をさせる酔狂な輩はそうはいないだろうが、それはともかくとしてだ。俺達USN軍の魔導師は通常の魔導師とは訓練の密度、質、量、全てが通常のソレを上回る。当然、訓練について来れず、脱落するモノ達も存在する。

それをアイツは脱落どころか、他の訓練兵を大きく引き離す成績を訓練で修めている。事前に鍛えられていたのは当然として、彼自身が初めてやる訓練ですら何度か試し

ただでソツなくこなし、その次からは必ず今までの成績を塗り替えた。そしてシミュレーターではあの大暴れ。お前は一体どここの超文明からやってきた超人なんだと突っ込みたくなつた。

それにすら飽き足らず、他の訓練兵が寝静まつた夜中に自主練習をいれ更なる高みを目指す。だが……まだ早すぎる、早すぎる筈なんだ。魔導師の子供は総じて早熟であると言える。親がそうであるし、マルチタスクなどの並列処理を覚えた子供は、様々な思考を同時に処理できるようになる為、精神への負荷値と受容性が高く、それにより心の成長が早い。

だがそうだとしてもアイツのそれは幾らなんでも早い。だから異常なのだ。まるで大人が子供の皮をかぶっているかの様な錯覚すら覚える。そして何より俺達大人を困惑させるのは、見た目は小さな幼子であるにも関わらず、アイツはどんなに苦しい訓練ですら顔色一つ。表情をまったく崩さないと言う事だ。

俺も長いことこの仕事でおまんま喰っている身だから、職業柄精神的なショックがきつかけで無表情になる子供はごまんと見たことがある。目の前で両親が死んだり犯されたりと原因はいろいろだが、感情を殺されるといふヤツは沢山見た。だがアイツのそれはソレとはすこし毛色が違う。あれは自ら望んでそうなつた、所謂兵士のソレに近

い。

何故彼はそこまで自分をいじめるのか?——正直俺には理解が出来ない。時折、まるで見えない何かに怯えるかの様に、無心で無我夢中で訓練に打ち込む様は悲しみすらおぼえるくらいだ。残念なことにこれらの事を俺達教官職に就く者は、上へと報告しなければならぬ。その所為で……彼は特例の実験に放り込まれることとなった。

——
現在、前線は膠着状態を維持している。

世論は戦争賛成派が大多数ではあるものの、時間が長引けば当然ながら、世論の敗戦ムードが高まる事による戦争反対派の運動が活発になる。何の解決策も提示せずに声高に戦争反対を叫ぶ馬鹿もいるが、別にそれは良い。愛国心も大事だがこちらも大事な教え子たちが戦争で散るのは勘弁してほしいのだ。問題はそれに応じた過激派がテロを行ったりした時だ。

上層部としては短期決戦が望ましい、なので使える戦力はドンドン前線へと送り込みたいのが、心情なのだろう。勿論、人の道を踏み外したとしても……だ。リーダーが唯一このプログラムを受けているのはそう言う訳だ。このプログラムは正直、彼のような特別な存在の為に行われる実験なのだ。魔法の才能さえあれば、どんな年齢の子供でも戦

場において活躍が出来ると言う事を証明する：それがこのプログラムの裏側である。

今までは最低でも15歳を超えていない子供は前線には送らず、後方勤務が殆どであった。今回の戦争で特例としてその最低ラインが引き下げられたが、それでもいきなり前線には放り込まれない。そんな事をすればすぐに死ぬ事は目に見えているからだ。だが恐らくアイツはデータ取りの為に、所定の訓練が終了次第、最前線へと配属される事がすでに決定している。

たとえ死んだとしても、一般にはすぐにはバレない訳だし戦争のドサクサという事で処理できる。逆に功績をあげれば、それは軍の功績となる訳だ。おまけとして幼年魔導師部隊というモノが作られるかもしれないのだが：狂気だ。これは戦争の狂気なのだ。人の死を数値でしか見れなくなった上層部連中には、人の命がどう果てるかなんて、そう言った事はもう関係ないのだろう。

—— アイツは優秀だ。

経験さえ積みめば、すぐに俺を追い越せる程の逸材だ。こんな大人の事情で起こったくだらない戦争で散って良い命では無い。だからこそ、俺は今まで経験した全ての技術を、リーダーに教え込む。血反吐を吐こうが、泣き言を言おうがやらせる：と言っても

普通に付いてきてるのだが……まあいい。

とにかくだ、俺に出来ることは、あいつが死なない様に、教えられる全てを教えると言う事に他ならない。例えその結果。俺の存在そのものがアイツの心にとつて大きな傷となろうとも、死なせはせん。前線を退いて10年。高ランク魔導師でもロートルである俺が出来る事は、アイツに人の殺し方を教える事……ただそれだけなのだから。

S i d e フ エ ン

死ぬ…マジで死ぬ…なんなんじゃこの拷問染みた訓練は? 実戦形式の模擬戦に次ぐ模擬戦。ワイズ教官ともう一人のお方以外の教官は倒したけど、それでもきついぞコン畜生。座学に居たっては……戦略ってなんですか? 美味しいんですか? 俺7歳だけ? お前ら人の皮を被った鬼かいな? 幾らなんでも苛めすぎやと思うで? それでも自主トレを欠かさない俺は…もう手遅れなのかな?

しっかし今日の模擬戦もワイズ教官には勝てなかったなあ。見えなければ、どうという事はない”を実戦で見せてくれたもんなあ…え? 字が違う? いや違うないよ? なんせ姿が見えないタネは、ミラージュハイドとかいう光学迷彩魔法。それと自身の魔力

操作の上手さだもんなあ。ミラージュハイドで姿隠して、そこから辺じゆうに設置型術式を同じくミラージュハイドで隠して回るっていう単純なもんだし。

まあイメージできない人は、そこから辺じゆうに見えない地雷が設置された様なもんだと思ってくれ。タネさえ解れば単純なもんだけど、魔道師からしたら相当厄介な人だよ。相当の熟練者か魔力探知に長けた魔導師じゃないと見破れないレベルの隠匿魔法だぜ？俺も段々感覚を掴んで、徐々に察知出来る様になっただけど、初見の奴ならムリだ。

というか、設置式術式＋隠匿魔法はヤバイコンボだろ…見ただけじゃ探知出来ねえし。辺りに魔力素子が充満していたら、幾ら魔力探知に長けた魔導師でも、発見しづらいしな。ようやく発見したかと思ったら、気が付いたらあの世だなんて笑えネエ…マジで。俺は夕飯がわりのレーションをほう張りながら、そんな事が出来る教官の事思い溜息をついた。

で、夜の訓練の為に次の教官の所へと足を運んだ。

ああ、さっきのとは違う意味で疲れる訓練か…鬱だぜ。

.....

.....

.....

俺が精神的に重たい足を引き摺り向かったのは、主に近接訓練に使われている施設。見た目は体育館といった感じで板張りの床には衝撃吸収マットが敷かれており、たとえ受身が取れなくても死ぬ事はない……そう願いたい。ワリと切実に。

「おお、ようやく来ましたねフェン君」

「はい……ソフィア教官」

「ふふくん♪フェン君?まえにも言いましたが私はソフィア。教官は要りませんよ?」

「いえ……規則ですから……」

そこで待っていたのは、一見フレンドリーな態度で接してくる殆ど黒のダークブラウンの髪をした女性。男むさい教官団の紅一点。このUSNフリーダム基地軍士官学校で唯一の女性教官であるソフィア教官であった。常にニコニコと笑みを絶やさない彼

女は……正直苦手である。

ナニが苦手といわれれば……いやソフィア教官はかなりの美人さんですよ？ただなんていうか性格というか、とにかく何か逆らえない空気を持つているといいますかね。彼女に見つめられるとゾクゾクするのだ。言っておくがそれは悪寒の類だからな？とにかく笑顔で隠された彼女の心が常にナニを考えてらっしゃるのが分からないから怖い。

ま、内心俺が怖がろうが彼女には関係ない。

「では、いつも通りに、まずは運動をしましょうか？」

「は……」

ソフィア教官はそう言ってゴム製のナイフを2本投げ渡してきた。とは言うモノの本だけでも俺が両手を使わねばならない程ずっしりとした硬質ゴム製の模擬戦用ゴムナイフである。実質山刀（マチエツト）なみの大きさだが、二本持つとバランスが取れるので何とか持てる。ソフィア教官も同じゴムナイフをすでに腰のホルスターから外していた——そう、彼女は珍しく近接攻撃が主体の魔導師なのだ。

俺は渡されたゴムナイフをすぐに構え走り出した。ナイフを受け取った瞬間に “こ

の運動”はすでにスタートしている。別に合図などは無く、いきなり始まるナイフでの戦いは身体強化魔法で身体を強化し、間合いを計って、懐に入り込む為に距離を詰める。というか身体強化以外使つてはいけないのが暗黙のルールだ。

始まって早々、俺は当たりやすいだろう胴体を狙って横一線にナイフを振るう。だが、ソフィア教官が一步下がった事でそのナイフは触れることなく虚しく空を切った。攻撃の手を緩めず、返し刃でもう一度薙ぎ払うかのように斬るが…当るかと思つた瞬間、彼女が視界から消えた。

「!?」

「下ですよ」

下を見れば大きく開脚してしゃがみこんだ彼女が居た。そして俺の首と腹にゴムナイフが添えられている…ちっ！死亡だ。すぐに弾かれる様にバックステツポオしてゴムナイフで袈裟切りに切りかかった。

だが――

「ん、狙いは悪くないですが、大ぶりはNGです」

《シュツ！》

「うぐっ」

カウンターですらない。ただの無駄のない動作で繰り出されたナイフは、まるで生き物のように俺の胴体を切りつける。ワザと浅く切られ…遊ばれている事にムカつきを感じながらも反撃してみるが、案の定というべきか。ソフィア教官にはあつさりと見切られて避けられてしまい。さつき斬られた場所と同じところを切りつけられた。

「アツツ…」

ゴムがこすれて熱くなりつい声を出してしまう。それを見て実に楽しそうに口元を弧の字に歪める教官。これが怖いのでよく。なまじソフィア教官美人だから、嗜虐心たっぷりな笑顔を近くで見るとマジで失神モノだよ。中身が俺じゃなかったら悪夢に出てきてオネシヨ出来るレベルだね。

「ほらマタ。いちいち無駄が多いですよ？」

今度は太ももにナイフが当てられた、コレも動けなくなると言う意味で1死亡だ。

「例え必殺にならなくても…」

《ススツ》

「浅からろうが何度も斬りつけなければいいのです」

テンションが上がってきたのか、手首足首同時に斬られた…：つか見えねえよ。俺これでも激戦だったシミュレーター演習を耐えたのに、あれは所詮シミュレーターでしかないのかっ！

「特に手足への攻撃は、相手の動きを制限させるのに有効です。痛いとフォークも持てませんからね」

確かに人間ってのは手足怪我すると、かなり動きが制限されるモンな。

そんな事を考えつつ、再び2本のゴムナイフを構えなおして連続して斬りかかる。

「そうそう、上手いです。軽くても当れば良い…：当たらない刃物は怖く無い」

「——シツ（なら一発くらい当たれよっ!）」

そう言いつつも未だに一太刀も当たらない教官。攻撃が当たらない事に苛立ちを覚えていく。このままじゃ拉致があかないと俺は左のナイフを投げつけた。

「うゝん、おいしいです。今のタイミングは悪くはないけど……必殺じゃない」

そんな俺の攻撃は意図も簡単に弾かれ。

「必殺というのは……」

いきなり体制を崩したソフィア教官が視界から掻き消えるかの様に動く。

重心が一気に下がった事で、腰の入った一撃が——

「地面をほうように……」

《ボッ!》

「入れるのです」

——俺の鳩尾よりかちよつとした…胃袋か肝臓辺りに当たった。イテエ…。

「ゲホツ!ケホツ…うげ…」

「予想だにしない動きで相手を止めるのもナイフ奥義の一つです」

いいですねフェン君?と実に楽しそうな彼女は、どこかハ虫類を思わせる笑みを浮かべ俺を見つめる…:ぐう、やっぱり苦手だ。そして何よりもこの後の展開が…:うう。

「はい、じゃあいつものように死んでしまったフェン君は、PXで私にデザートを奢る事。良いですね?」

「…アイマム」

はあ、コレだモンなあ…。物凄く強いけど、どの相手に対してもフランクで、どこかカラつとした態度を崩さない。コレが意外と人気があるらしいが、その延長線で奢らされてしまう俺はたまったモノではない。絶対いつか俺が勝って奢らせてやるモンなッ!!——永遠にムリな気がしてきた。

アレ？目元が暖かいな。なんでだろう？

「さて、今日も動きの確認をした後、組み手やりますよ。さつきみたいに手加減はしませんからね」

「了解」

———というか、さつきのですら手加減されてるんだもんなあ。

ソフィア教官の魔導師資質。彼女自体の総合的な魔導師ランクは一般的評定でC+とされている。この数値は正直な話、彼女の階級を考えると通常の魔導兵よりも大分低い。彼女と同階級の佐官の殆どがAランク越えているといえば、ソフィア教官のおかしさが理解できるだろう。使える魔法も高密度だけど小さな魔力刃が造れる程度で、射撃魔法はからつきらしい。

だがソフィア教官をソフィア教官たら占めている理由。彼女は近接戦闘、こと室内戦闘においては無敵を誇るのだ。極めて少ない魔力を効果的に運用し、どうすれば格上な相手を制する事が出来るのか、を極めた完成系がこのヒトであると言ってもいい。魔法第一主義が蔓延しているこの世界で特殊部隊に参加して一時期少佐にまで上り詰

めたというレジエンドな実力を持っているのだ。

つーか勝てねえよ…ホント容赦しないし…姉御肌だし。これ重要。

でも分かるんだ。このヒトもココまで来るのに血反吐を吐くと言うのも生易しく見える程の訓練と経験を積んでいる。鬼畜シミュレーターをある程度生き延びたチート性能を持つ俺でも、このヒトに勝つには時間が掛かるだろう。もしかしたら近接戦闘では永遠に勝てないかもしれない。つーかUSN軍内でも近接戦闘のみで一対一なら、彼女に勝てる人間はいないと思う。

そもそもどうして俺が彼女から近接戦闘を教わっているのか?ソレは俺も魔力刃を使った近接戦闘の魔法を持っていた所為だ。ココに来る直前に造って入れた術式なんだけど、自主訓練で組み上げてた魔法を何故か覗き見していたらしいワイズ教官に見られてしまい、気が付いたら彼女との近接戦闘訓練がプログラムに組み込まれてたって訳。

まあ近接戦闘用魔法持っていないても、肝心の使い手が扱えませんじゃ話にならないモンなあ。魔力刃とはいえ刃物は刃物。こうして昔ながらの近接戦闘訓練や組み手の方が、身体がなじみやすいのだ。なんか着々と最強魔導戦士育成計画が進んでいる様な気が

するけど……気にしたら負けだよ。うっ、こんどは視界がぼやけて見えるよ。目から潤滑油が漏れてるよ。

心技体全てが強くなれば戦場で死ぬ確率は減る事だろうから反対はしないけどね。

——
とりあえず。

「死なないよう……頑張らな……」

『マスター?』

「ん、何でも……無い」

何としても生き残らなければ……うん。

「あ、寝っ転がっているとところアレですが、また負けたの罰ゲームのお時間です」

「……うっ(ビクッ)」

「んふふ。今日はどんな罰ゲームがいいでしょうか?」

濁っり……もといにつこりと笑みを浮かべてそんな処刑宣告なんてひどすぎるっ!

「……がたがたぶるぶる」

「それじゃあ3日前と同じヤツで」

「きよつ教官!そ…れだけは…」

あ、あれは確か、夕食後に個人レッスンでボコボコにされてそのまま持ち帰りされて抱き枕扱いにされたじゃないですか!え?美人と添い寝できるから貴方によし私によし?……痛みで動けない俺を問答無用で湯たんぽ代わりにした挙句、朝は寝ほけのスリーパーホールドで天国と地獄の二重奏を奏でてくれたあれなんてもう一回さらたら死んでしまう!肉体強化つて関節技相手だとあまり効果ないんですねっ!

ああ、普通ならソレなんてエロゲな天国なのに、幼児だから女性に反応できないこの肉体が恨めしいっ!反応したらそんな事されなんでしょうけど、俺だつて男の子なんですよ!恥ずかしいんすよっ!簡便してくださいっお願いします!な、なんでもしますから!どうかそれだけはっ!?

「なんでも?」

「ア、アイマム」

「それじゃあ。普通に抱き枕で」

「ジーザスっ！」

抱き枕は決定事項なんですか!?!…………え?抱き心地サイコー?…………さいですか。

「怨むなら低ランク魔導師にボコボコにされちゃう我が身を怨むんですよ?力があつても弱いフエン君が悪いのです。強いものが生き残るのです」

「……………(放心中)」

「それじゃあ夕食後、教官棟に出頭する事。拒否したら…わかりますね?」

……………もう、ココロ折れても…いいよね?俺がんばったよね?うう。

「また会いたいよね」

Sideフェン

やあどうも。常に顔は鉄面皮。表向きクールに決めるフェンくんです。

個別指導の訓練を続けてから、ようやく一ヶ月経過しました。朝起きて牛乳飲んで魔法訓練して、昼飯食べてソフィア教官に弄られてから訓練して、ワイズ教官と模擬戦してから座学して、牛乳飲んでソフィア教官と格闘訓練して、8割は負けて抱き枕にされて一日が終わるを繰り返していたらこんな時間が経っていた。

正規軍のレベル高めの扱きのお陰で眼に見えて体力・気力・魔力がトントントン拍子に底上げされたのは嬉しいと思う。でも流星に対戦車模擬戦の単独クリアとかはきつ過ぎる気がするんだ。相手側の歩兵が教官とか俺に死ねといたいんだろうか？戦車の模擬弾は例えバリア・アーマー発動中でも当たると痛いんだぞと言いたい。事実逃げる方向を間違えて、まさかの模擬弾直撃で数十mも吹っ飛ばされるなんて思いもよらんかった。

「流星にそれはきつ過ぎてヴィズは無傷でも中身の俺が完全に伸びてしまった。慣性

制御機構のシステムがオーバーフロー起こす程の衝撃だったのだから仕方がない。後で整備部に申請を出してヴィズの強化とかも自分でしなきゃいけない。それはまだいいのだが、ここ最近の突き詰め特訓で疲労が溜まっていたのも訓練中に意識が飛んだ原因だと医務官に教官団もろとも怒られてしまった。

実際、教官団も俺に対しやり過ぎたと思われたのか、その日の午後から次の日まで、およそ24時間の休息を与えられる運びとなった。僅か一日分の休養だが貰えるだけありがたいので、せっかくだし休ませて貰う事にした。

大体、基地の兵舎には訓練で受けた疲労を次の日の朝には回復させるという。それこそ、まるで某RPGの宿屋システムの様な新陳代謝促進と治癒向上の魔法術式が組み込まれているのに、そのキャパシティを超える程、突き詰められた訓練を行っていたと聞いたのも休む理由だ。訓練で過労死とか笑えない。いやホント、マジな話。

「おーい、フェン君ー!」

「……ハッ!」

それで休暇で暇だった俺はたまたま誰もいなかった基地のロッカールームのベンチに座っていた。すると突如聞き覚えのある声が出て、俺は慌てて近くの用具入れの中に

飛び込んで息を潜め気配を消した。今の俺はただの箒だ。いや塵取りとかバケツとか使い古された雑巾だ。俺は物、俺は物…物。

「あれえ？さつきこつちにフェン君の気配を感じたんですが…気のせいでしょうか？」

「オイ、ソフィア。すこしは溜まった書類の整理くらい自分で…なにをしているんだ？」
「あれミスタージョンサン？なんでここに？」

「それはこつちのセリフだ。大体フェンのヤツを探しているようだが、今日はアイツは休みだろう。何をしようというんだソフィア？」

「んふー、それはですね…ぐふふ」

「……あー、いい。みなまで言わんでいい。その笑みで大体理解できた」

「ツーカーですね」

「ま、仕事仲間だからな」

俺は用具入れの中でひたすら息を殺し、ソフィア教官とワイズ教官がいなくなるのを待つ。いやね、そりゃ戦争という死亡フラグ満載な場所で死にたくないからこそ、無茶な訓練してきたが休みたい時くらい俺にだってあるんだ。ソフィア教官は俺をおもちゃにするからホントに休みたい時は隠れないと…。

「それよりも書類を処理しろ。いい加減事務方がせっついてきて大変なんだからな」

「わっ！ちよつと！襟を掴まないでください！セクハラで控訴しますよ！」

「安心しろ。お前にセクハラを働ける猛者はこの基地にはいないから」

「いやーあーだーあー！書類なんて積んどいて何ぼなんですー！」

「ええい！手間取らせるんじゃない！」

ドタンバタンと大きな音が聞こえる。……時折捕縛魔法のバインドの展開音と破壊音も……ソフィア教官も教官ならちやんと兵の手本になるようにすればいいのと思うが、まだ兵隊ですらない俺がいう事じゃないつか。そんな身も蓋もない事を考えていた時だった。俺や教官達ではない第三者の声が聞こえてきたのは。

「——あーつたく。一人で掃除しろとか鬼だろ」

ローカールームの扉が開く音が聞こえた。声から察するにまだ若い。たぶん訓練兵か誰かだろうと思うが、間が悪いときに来たもんだと思つた。なにせ目敏くソフィア教官が入ってきた第三者に眼をつけたのだから。

「あ！良いところに訓練兵A！」

「訓練兵Aって…俺にも名前はありません！大体以前にも会ってますよっ!？」

「そんな事よりも私の代りに書類整理の大任を任せようと《スゴン！》あぎやつ!？」

「あー、すまん。コイツは現実逃避しているだけだ。お前さんは何も見なかった。O
K？」

「イ、イエツサー…」

なんかドン引きしたような声が響く。まあソフィア教官の阿呆な姿に引いてしまうのもしようがないのかもしれないが、そこは温かい眼と言うもので――

「なんかフェン君が影で馬鹿にしている気がしますね」

…：…何でわかるんですかあっ!?! エスパークアンタっ!?!

「馬鹿な事を言うんじゃない…。ところで訓練兵。お前は何をしに来たんだ？」

「はい。ちよつとした事で一人でここの掃除を承りました」

「一人で清掃ね。ナニをやったんだ？」

「模擬戦中ずつと口を開いておりました。うるさかった、だそうです」

「そうか。じゃあ掃除を頑張れ訓練兵。俺達は今から消えるからな」

「イエツサー！」

「いやー！人攫いー！だれかー！」

「ええい往生際が悪いぞっ！」

ホントですよ。いい加減出てけ。それで俺に平穩《ガチャ》——ガチャ？

「……………(；；)。(；；)！」

「……………(・ω・)？」

ふと見れば、用具入れの中なのに明るいね。だってね。ドアが開いてるんだもんね。それでね。眼と眼が合う瞬間にくな感じなんだよね。つまりは眼の前に丸刈りのお肌が濃い青年が瞳目してらっしやるんですよね。あ、あう…。

「……………おおい……………」

「……《びく》」

「……いや、身じろぎじゃなくて返事しろって」

あ、どうも。第2期少年訓練兵中退で現第1特殊幼年訓練兵のリーダーです。と、口
に出来ないというか言葉に出ない。何故？それは私が鉄面皮だからです。あー無言の
俺に凄い怪訝そうなご尊顔をされてらっしゃる。ご、ごめんよお、無言なのは最近俺初
対面だと何故か声が出ないからなんだよ。昔はそうでもなかったのに何でだろう？

……なんか思考もおかしいな。疲れてるのかな。

「私はまだ捕まらない！」

「まてい！逃げるなソフィア！」

その時、どたばたと再び教官たちが……あんた等暇なのかよ。ってそれ所じゃねえ！こ
のドアが開いてたら幾ら気配消してもばれちまうじゃないか！

《《じい~~~~~》》

「……（……お願い、このドアを閉めてくれえ……）」↑無表情で眼でモノをいう

「はっ…??」

たのむ、このままじゃ俺はソフィア教官のおもちやにされちまう。せつかくの休養の時をそんなので精神すり減らしたくないんだ！俺は一縷の望みを託した視線を送る。正直日々の訓練で結構くたくたなんです。お願いだから黙ってて…ええい、無表情なのか伝わらん、だったら！

「おね、がい…」

「……っ!!??」

搾り出すように、なんとか声を出した。結構俺も必死だったのだ。なんか驚いた顔してるけど何でだろう？まあいいや、ついでにジェスチャーで指を口元に持つていつてつと。これで伝わるだろ。

「ん〜？あれ？その訓練兵。用具箱の前でなにしてるんですか？」

「ツ！いえ！なんでもありません！」

「そ、そうですか。ではお掃除がんばってください」

「いくぞコラ」

ふと隙間から覗いて見れば、バインドでぐるぐる巻きのソフィア教官を引つ張って、ワイズ教官がロッカー室のドアを潜るところだった。はあ、なんとか切り抜けた。

「んで、お前だれだ？」

「……………特殊訓練兵のリーダー、です」

「はふう……」

用具入れから出た俺は今度はベンチに腰をおろしていた。用具入れの中は正直言っ
てかび臭く気が滅入ったから、外に出るとその分 気が楽になった気がした。ちなみに
今いる場所は相変らずロッカー室である。理由は。

「うえーい。手伝いありがとな」

「ん、気にしない」

先の訓練兵、エドワード・コリンズさんのお手伝いをしてきたからだ。話してみたら意外と良い人だったよ。手伝ったのは他意はなく、ただ基地のロッカー室は部隊で利用する事が多い為に非常に広いから、一人じや大変だろうと思った次第で：まあ俺も身体を訓練以外で動かしたかったつてのもある。罰則を受けている人を手伝うのはタブーなんだが、俺は今休暇中なので問題ない。(問題あります)

ちなみに眼の前の面白黒人みたいなエド兄やん。俺や他の速成栽培な徴兵訓練兵と違い、志願組という別個枠で訓練中の訓練兵である。志願組とは今回の戦争が始まるよりも前に自ら軍に入隊した志願者達が集まった訓練兵で、速成栽培な俺らと違い正規の手順で訓練を経て前線に送られる人たちの事である。

徴兵組はある日突然そうなる事が決まった為、この様に志願者と徴兵とが同じ士官学校で訓練を受けるといふのはUSN軍の歴史の中でもある意味貴重な体験だということ。ちなみにエド兄やんは俺よりもずっと先にここにいるので俺からすれば先輩にあたる。彼は元々施設で育ち、魔法の素質を確認するや否や、手に職にとばかりにUSN軍に入隊したらしい。

……なんで知り合って十数分の俺がそんな事を知っているかというと。

「……ところでさっきドリンクを買いにPXまで走った訳だがそこで俺をこんな眼にあわせてくれた教官と鉢合わせしそうになったから大変だったぜ　だから俺は持ち前の機転を利かせてトイレに隠れてみたわけだがこれがクセーのなんのつてたまらんつて感じだったわけよ　でも貰いクソというかなんとかしたくなつてきたけど水洗のクセに流れそうもないのはまいったまいった　あと　身を潜めてたらなんかトイレに何人か来たんだけどなぜかアツーな空気が漂いそうだったから俺はとにかく走つて逃げた　その逃げ足はまさに風　俺はウインドオ　でも筋肉痛になりそうだが足がつかないか心配だ　そういえば俺の得意な兵科は戦闘支援兵科のメディックだから筋肉の疲労くらいなら一瞬で直せるわけよ　ニイヤんのはすげえぞ　しおれて垂れてるようなのがいっしゅんでびんびんになるくらいにはな　つてチビにはまだこの話題は早すぎたか！WAHHAHAHA!!!」

……すげえマシンガントークなんだよなこの人。

こつちが聞いていようがいまいが関係なしに放たれる言葉の重機関銃、いやもう速射レール砲みたいに止め処なく喋る。黒人系、しかも名前とこの性格。更にこつちから聞いてないのに、何時の間にか聞かされていたマシンガントークなどで語っていた内

容。施設の出身などから彼は恐らくフロントミSSIONの登場人物にいたエドワード・コリンズと同じ人だと思った。違うのは魔導師資質があるって所か。

ホント、原作でこの人との会話は3年に一度で良いの意味がわかる…。当然の事ながら、表情すら上手く表に出ない俺は、彼に話しかけられても言葉少なめにうんだの、そっうだの返すだけで、ずっと聞き手側だった。あまりのトークにこちらから返事を返す隙がなかったともいう。

そんな一般人なら話聞いてないのかよとそっぽを向きそうな俺の態度を気にも留めず。エド兄やんは関係なしに、掃除の間ずっと引切り無しに喋っていた。彼はリアルに壁に話しかけても平気な人種であったようだ。そんな奇妙なエド兄やんと共に掃除を手伝ったのは俺自身彼との会話を楽しんでいたからだと思う。なんせ俺と会話できる訓練兵なんて殆どいなかったからなあ。

両親や教官は除く。あの人たちは「教える側」だから「教わる側」のこつちからすれば隔たりがある。だからこうやってなんの隔たりもなく喋りかけてくれる彼は、ちよつとありがたかった。俺も結構会話に飢えていたのかもしれない……ヴィズはまだ成長中であんまり受け答え的なのは得意じゃないんだよね……。

「ところで聞いてなかったけど、チビ助はなんで道具入れに入ってたんだ？」

ちなみに俺の愛称はチビ助となった。理由はちっちゃいからなのと、彼の態度を見るにフェンは既にいるらしい。……やっぱリフロミに似ているが時系列とかがおかしいな。5の主人公なら俺と同期かそれ以前に卒業してもおかしくない筈だし……それを言ったらエド兄やんがここにいるのもおかしいけど。うーん。

「おいおいおい。チビちゃん無表情でフリーズしないでくれよオ」

「理由、訓練を無茶し過ぎて、俺強制的に休みに入った」

「ふんふん。訓練兵なのに休みがもらえるなんて実にうらやましいな。それでそれで？」

「ソフィア教官、怖い」

「……………え？そんだけか？」

「うん」

「いやいやいや、なにを当然の事言ってるのみたいな感じに頭傾けても事情を知らん俺には解らんってどうかお前無表情だからメツチャ怖えんだけど、そこんとこどうなの？」

「のーこめんと」

この表情筋の頑なさは俺の意思ではどうしようもないので。まあこんな風に駄弁つていくうちに、先輩後輩な間柄になれた…のかな？とりあえず会話交わせるくらいにはなっていた。この時、俺が以前受けた仮想空間演習の内容をえつちらおつちら話して聞かせたらドン引きされたけど。お前人間じゃねエって…酷いなもう。

でも、周りから見たらそうなのかもしれない。と、珍しく落ち込んでみたところ、エド兄さんはなんか同情してくれたのか、マシンガントークが3割り増しに……ごめん兄さん、流石に普通の会話に飢えていた俺でもそれはキツイ。

「そーいやチビ助を探してたのソフィア教官だよな？」

「そう」

「うらやましい！」

「《ビクツ》」

「あのような美人に追いかけられてナニを不幸そうにしているのか俺は理解に苦しむな。むしろ男なら男冥利尽きるだろうといえるだろう。だがチビにはまだはや——」

「理解は出来る。確かに美人。けど…訓練で…」

「——お前マセガキってよばれねエ？」

マセガキならまだしも、中身はれつきとしたオッサンですがなにか？

「エド兄は、ソフィア教官好きなの？」

「ああムリ」

断言したよこの人。

「俺も最初は良い女とか思ったけどよ、俺のあふれるパッションに従ってれつつアサル
トな突撃を掛けてスイッチしようぜべいべーってやってみたところ勘違いされたのか
気がつけば俺は地面へダイブダイブダイブッ！その後で追撃の蹴りがみぞおちにHI
T！顔面への止めまで流れるような動きで兄ちゃん顎が縦に割られて、自前のヒーリン
グかけても2ヶ月オートミール飯だったぜ！はっははははっ！うえ、うえええ…」
「泣き話？笑い話？どっち？」

黒人系の顔が笑みを浮かべながら悔し涙を流す姿は正直いって不気味である。

「お陰で女は追いかけるよりも追いかける方が良いって悟ったって訳だ！俺みたいな良い男をほうっておくような女は居ないだろうからな！いずれは高級住宅街で大きな犬を飼って高級車を乗り回して美人とにやんにやんしまくるって寸法よオ。その為にも毎日の筋トレは欠かさない見ろ兄ちゃんのこの割れた上腕二等禁のふつくしさ！めろめろになったって責任はもてないZ E！」

な、何でだろう、頭痛い。この人無意識に他人に精神汚染かけてるんじゃないだろうな？原作でもそういうキャラだったし、捕まえるのに味方から12ゲージショットシエル使えとか言われてるような男だったしなア：選択肢にバズーカあった気もするけどどうだっけ？なんか味方に精神汚染生物兵器扱いされていたような…。

とにかく、訓練兵エド兄やんとの出会いは劇的でも非日常でもなく、日常。そんな感じであった。この後は普通に別れ、お互い訓練の日々に戻ったが、時たま出会ったりしたときは言葉を交わす位の仲にはなっていた。と言っても、もっぱらエド兄やんが喋り続け、俺はそれに相槌を打つような感じである。

普通な感覚を持つ人間なら、あまり話さないし表情も変えない俺を見限っていただろうに、彼は生粋のムードメーカーであった。こちらが無表情で無口なのにも関わらず話

題が尽きなかった。しゃべりすぎて周りのテンションを降下させる事もあるが、それでも同年代が口も利いてくれない俺には兄やんの存在はありがたかった。一人で食う飯は味気ないのだ。

そしてなんだかんだ言ってもエド兄やんは世話好きだった。どうして周りが近寄りたがらない俺に気をかけてくれるのか解らなくて、彼に直接尋ねた事がある。するとこの人のいたホームの悪ガキ共と似ていると彼は言っていた。孤児院であるホームで育った彼にとって年下の面倒をさりげなくするのは頼まれていなくても常識だったらしい。

いつか、彼の弟分であるというウォルターさんとオニールさんとかに在ってみたいものだ。残念ながら病院での魔導師資質検査でも突出した資質は検出されていないらしく、俺みたいに徴兵されていないらしい。それを聞いてやっぱりこの世界はフロミ世界に似ているが少し違う世界だと改めて認識させられたが、まあ最初から解っていたから今更である。

——ともかく、兄やんと会ってからいろいろあった。

兄やんの同期さん達に紹介されたり、嫌味な教官のデスクに蛙を詰め込んだ嫌がらせ事件を起こしたり、どこで入手したのかお酒持込事件やら、USNのフランチャイズバーガー店・パラダイスバーガースペシャルセットとキョク張りの日用品が詰め込まれてしまった装備一式トランクの中身入れ替え事件やら…ホントにいろいろ。

最後のにいたっては別にエド兄やんがしでかした事じゃないが、たまたま兄やんのとこに少ない休み時間を利用して遊びに来ていた俺まで何故か共犯にされかけてしまった。もつとも俺は特別訓練兵だから訓練期間中の外出許可が下りないし、別の訓練兵だから大丈夫だったけど、兄やんを含めたその他の方々はパイプで出来た硬い三段ベッドが並ぶ寝舎で整列させられ犯人探しが行われていた。

本当はいろいろと兵隊の装備品が入っている筈のトランクを掲げた教官が、日用品に置き換わった中身を見せながら『——タオル一束に石鹼歯ブラシティッシュに冷凍みかん!?ここはキョクか!中の装備はどこにやった!それも喰ったのか!』と叫んでいるのを見た時は不覚にも少しだけプツと吹いた。鉄面皮の俺が吹く程ってどんだけやねん。

尚、結局犯人はわからずじまいで、犯人探しが終わった後で遊びに行った時は彼らによくも見捨てたなあ——!と意味の解らない逆恨みの箠った撫で回し攻撃をされた。俺は

小動物扱いか!?!と小さく溢すと兄やんを含め同期の方々には揃いも揃ってサムズアップをして来た。なんて奴等だ。流石は兄やんと同期、少しナニカおかしい。

でもそれ以来彼等のところにも寄り付かないようにしたら素直に謝ってきたから許す。同じような事をしてくるソフィア教官、アンタは許さない。絶対にだ。とかは口が裂けても言えない。それが私。

ともあれ、エド兄やんと出会ってから騒がしくも短い一ヶ月ほどが過ぎ。彼を含めた志願組は、なんと俺が前いた徴兵組と共に一足先に前線の何処かへ配属になった。まあ俺達よりも先にいたのだし、スケジュール的にも先に動員されるのは当然の話だった。むしろ少し遅くかつたらしいので、これで訓練校のノルマ達成といったところだろう。

尚、俺は教練が終っていないので彼等を見送る側になってしまったのはなんともはや。

「というわけで…やって参りました」

『見送りなんて必要あるのですか?というか今のは誰に言ったのです?』

腕に装着された腕輪型の相棒(ヴィズ)に突っ込まれたけど、やつぱりこういうのって大事だと思うんだ。転生してから絶賛コミュ障な俺が言うのもあれだが、人付き合い

は大事なのである。未だ人間の心の機微には疎いヴィズには、少し理解できない事らしいが、まあおいおい解るだろう。そんな風になる様に神経マップをアセンブリしてあるし…。

今、俺がいるのは基地の出入り口にある門付近のフェンスである。この場所は普段はなんもないただの駐車スペースなんだけど、今はそこに数台の大型バスが止まっていた。数百名もの訓練を終えた魔導新兵を輸送機が待つ航空基地に送る為に用意された移動手段である。

周囲は新兵でごった返し、人で一杯。係りの兵が新兵たちを誘導し、バスに押し込む為に張り上げる怒声が響いている。新兵たちはその誘導に従い、それぞれバスの前で列を作っていた。それを、昼休憩の合間にここに來ていた俺は、フェンスの向こう側から静かに見つめていた。

ただ、そう…ここへ來たのは、ただなんとなくだった。自分よりも先に戦線に送られる彼らの姿を、ちゃんとこの眼で見ることが出来る最後の機会のような気がしたから。

「……おいエド、あそこ」

「あんだよ？——おっ！チビ助じゃねエーか！」

フェンスの向こうからバスに搭乗していく彼らを眺めていると、何人かが俺に気がついて振り向いていた。その中にはエド兄やんの姿もある。バックバックを背負い装備一式身に付けた姿はいっちょまえの兵隊に見えない事もない。エド兄やんは周りの仲間一言二言話すと列を離れ、わざわざ俺の前まで歩いてきてくれた。それでフェンス越しに立ち、ヨツと片手を上げて軽く挨拶を交わす。

「ようチビ助、見送りか？」

「昼休みだから、時間あった」

「おおうそうかそうか。感動のあまり兄ちゃんチビ助に情熱の籠った熱いハグでもしてやりたいところだぜ。フェンスが邪魔だな」

「登らなくていいです。周りの目が……」

「時間もないしな。ま、お前も精々訓練がんばれや」

「そつちも、ね」

兄やんはそれだけ言うとそのままクルリと踵を返した。非常にカラツとしていなくもないが、逆に気兼ねしなくてもいいので気楽である。俺が出来たのは彼らが気持ちよく巣立てるように、無理やり指で唇の両端を上げて笑みを形作る事くらいだった。自己

主張を諦めた表情筋が恨めしい。

この時、寂しくなると思つて、ちよつとだけ涙腺が緩んだのは俺だけの秘密。中身いい年の人が泣くとかカッコ悪い。

「おいお前、リーダーだよな？」

その時である。エドワードはクールに去るぜと列に戻つたエド兄やんとは別の声が掛けられたのは。振り返るとフェンスの向こう側で、何人かの新兵たちがザツクを足元に置き睨んでいる。アレは、確かシミュレーターの際に一緒だった連中だ。徴兵組も前線行きなのは知っていたが、まさか途中退場みたいな感じになつた俺に声をかけてくるなんて。

なんせ他にも何人か前に敵意をむき出しにしてきた者たちもいる。流石に闇討ちにしてきた連中の姿は見えないが、ああして睨んでくるとなると、俺はやっぱ彼らに嫌われていたのかな？なんか、ストーンとはまり込むような感覚を覚えた。

まあ、俺みたいな不気味なガキ。いても目障りでしょうがなかつた事だろう。そういう意味では、彼らに迷惑をかけてしまったのかもしれない。

「はい。リーダー訓練兵であります。不遜ながらも自分は…皆様のお見送りをさせていただきます…。」

でも声を掛けられたからには返さねばならぬ。

声をかけてきた連中のほうへと向き直った俺は、エド兄やんの時とは違い固い口調で敬礼をして見せた。………ん？なんで困惑してるんだらう？

「見送り？なんでまたお前が——」

「………目障りでしたら、いないものとお思ってください…リーダーは、皆様のご健闘を、お祈りしています」

俺はとにかく角が立たないように彼らに頭を下げていた。彼らはすでに訓練兵ではなく、正規に部隊に配属される新兵である。対して俺はすこし特殊な立場ではあるが、ここではまだ卒業させて貰っていない訓練兵。すでに階級が異なるのだから不遜な態度を彼らにとる事は許されない。俺の立場はまだ、ひよつこの新兵にすら劣るのだから。

だが、何故か頭を下げた途端、目の前の彼らの困惑具合が増した。ははーん、まあ彼

らと一緒にの時は俺は成績優秀者だったからな。そんなのがいきなり頭下げてきたら、晴れても雨が降るような変な気分になるんだろう。これが終わったら俺も戻ろう。昼の休憩ももうすぐ終わるだろうから：はあ。なんだか、余計にわびしさが増したような感じを覚えながら、再び踵を返そうとした。

その時である。

「なあリーダー。頭を上げてくれよ。俺たち同期だろ？」

なんと、彼らの方からやさしい口調で声を掛けられた。どういう事なのだろう？

「もう話す機会なんて殆どないんだから、そんな他人行儀じゃ硬くていけないわ」

「それにそんな態度とられたら、すんなり感謝の言葉も言えやしない」

「感謝……？なんの？」

俺が彼らに感謝されるような事、なにかしただろうか？……思いつかない。

「もう二ヶ月も経っちゃったけどさ。ほれ、シミュレーターの人に俺を庇ってくれただ

ろう？ あんときはありがとうよ」

「俺の時は、確か装備が壊れた時に短時間で応急修理してくれたツス。あの時はホントにリーダーに随分と助けられたツス。ありがとうツス」

「私は、負傷してもう駄目かと思った時、味方のところまでアナタに運んで貰ったわ。戦えなくなったのに、アナタが言った後は任せろの一言で、どれだけ救われたか……とにかくありがとうリーダーくん」

そんな、前の事を？ 身体が自然と動いてした事なのに？ なぜ？ どうして？

今度は俺が困惑する番だった。仲間を助ける事は自然な事。そう叩き込まれていた俺にとって、その事で感謝される理由が分からない。だって大変な事ではあるが助けるという行為は必然であり、感謝されるような事ではないからだ。困惑して黙っている俺はただ無表情で立っている事しか出来ない。

そんなところへ、後ろにいた別のやつが歩み寄ってきた。

「……ふん、相変わらず人形みたいな面だな、リーダー」

「おい、レイモンド。お前なあ。リーダーだって仲間だろ？」

「俺の仲間は俺が決める。指図するんじゃないよ」

レイモンドと呼ばれた少年はそう俺に言い放った。彼は……たしか俺に敵意を向けてきていたヤツの一人じゃないか。名前までは知らなかったが、成程、彼に俺は仲間だと認められていないのかもしれない。訓練途中で違う方面に行かされた俺の事を仲間と思えないのかもしれない。

「だけど……まあ単独で突っ込みすぎたアン時に助けてくれた事は礼を言っとくぜ。お陰で仲間の大切さが分かったからな。だから、その……ありがとよ」

言外に仲間じゃないとツンとしていわれたと思ったら、デレられていた。うわっ、むず痒い！野郎にお礼言われると何だかとっても痒い気がする！

「ぶっ、あの融通が利かなくてプライド高いレイがお礼言ってるよ」

「珍しいな。今日はきつとグレネードとロケランとミサイルの雨が降る」

「ハフマン島が熱くなるな」

「おい！縁起でも無い事いうなよ!？」

「輸送機でこれから向かうんだからな!？わかってんのお前!？」

そういうと縁起でも無い事を言ったヤツの肩に手を回して頭をがっちり掴んでいる。されたほうは痛い痛いと手でタップしている。わいわいと賑やかな彼らのソレに、俺は思わず笑みをこぼした……非常に解り辛いだろうが、極自然に俺は少しだけ笑みを浮かべたのだ。

「……クスッ」

「おお!」「どうした!?!」

「ラーダーが……わらった……」「なん……だと……うだ、だれかカメラ!?!」

「もう笑ってないツス!くそ惜しい!」

「………なんでお前等あんなの解るんだ?全然表情変わってないだろう」

「おい!もうすぐ出発するぞー!早く乗れー!」

「あーあ、もう時間か。それじゃあな。最後にちゃんと話せてよかったぜ」

「紳士アンド淑女協定破りはすこし心苦しかったけどね。ま、そんなことよりも私たちは先に行くけど、そっちもがんばってね」

「俺たちよりもずつとラーダーは強いツスから、すぐに卒業できるツスよ。それじゃ」

「……ま、せいぜい脱落しないようしろよ。じゃあな」

そう言うと、彼らは俺に背を向けてバスへと向かっていった。その姿を見て、俺は。

「みんなっ……がん、ばってっ！」

何時もの外様向けの作ったような声じゃなくて、表情きんが上手く動かないから、すこしどもりながら心からの言葉を彼らに送った。急いでいたからか皆はとくに反応せずバスに乗り込んでいく。彼らを乗せたバスは時間通りにフリーダム基地から発車し、新兵たちと共にどこかへ行ってしまった。

こうして彼らを見送り、俺は再び訓練へと戻った。一足先に戦場に向かう彼等に俺は何もしてやれる事が無い。精々、バスが見えなくなるまで見つめ続けることしか出来ず、何も出来ない不甲斐無いこの身が恨めしい。それもまた運命なのだろう。だけど戦場に送られるはずの彼等がバスに乗り込む時、うっすらと笑っているのを見た。

彼らは厳しい訓練の中で、命を懸けるだけの何かを見出したのかもしれない。

祖国か、仲間か、それとももつと根本的なナニカか…。

また、あんな風に笑い合う彼等と話が出来ればいいのに…。

いや、そういう事はもう考えない方がいい。

何故か、俺は彼らとは二度と会う事が出来ないと感じていた。

そう、それは勘というべきか…なんとなく、そんな気がした。

——そして彼らを見送ってから一週間後、俺も現地へと飛んだのだった。戦いの地、ハフマン島に…。

第二章・部隊指揮編

「諦めはしないさ」

Side 三人称

コールドパール航空基地、ハフマン島USN領における唯一の空港は、いまやジャンクヤードと化していた。前線行きの倉庫に入りきらなかつた物資が滑走路の一部を侵食し、前線から送られてくる廃棄寸前の機材や大量の冷凍ボディバックの山が入り混じり、うず高く積まれている。前者は各方面の基地に、後者は本国へ送られる物であり、どちらも疎かに扱うことが出来ない大事な物資であった。

運搬車に積載されていくコンテナや兵器のリストを眺めるマッド・ウエーバーは、敵に撃ち殺される前に仕事に殺されそうだと愚痴を溢していた。只でさえ熱帯気候の島での野外作業は著しく体力と精神をすり減らしていく。「早くビールが飲みたい…キンキンに冷えた奴をな…」とボヤク同僚に軽く相槌を打ち、作業を再開した。

「あつい。熱すぎる」

「言うな。こつちまで熱くなる」

「しかしな。炎天下での作業に手当てくらい欲しいもんじゃないか？」
「そんなもん。俺達の監督役が貰ってるだろう。本人は涼しい室内勤務のようだけだな」

マッドは思わず監督役のいる部屋の空調がぶっ壊れればいいのに、と呪詛を吐きたい気分になった。そうすればエアコンも無く風の吹かない室内は、屋外よりも蒸し暑くなる事だろう。そういった想像で不満を紛らわしながら作業を進める。そうでもしないとサボタージュでも起こしてしまいそうな程熱い滑走路には陽炎が揺らいでいた。

そんな時、彼等が作業を行っている直ぐ隣の滑走路が慌しくなる。マッドがそちらに眼を向けると、ちょうど本国から物資を満載したアービトレイターM4輸送機が着陸したところだった。USN軍が誇る世界最大級の輸送機はペイロード350tという化物クラスの積載量を誇り、それだけでなく人員の輸送も出来る素晴らしい飛行機である。

素晴らしいが、またリスト作成の仕事が増えた事にマッドは軽くめまいを覚えた。だが毎度の事なのでそろそろ慣れたのか、マッドはアービトレイターM4の後部ハッチが開かれていくのを眺めていた。二層構造の内部を持つ輸送機から次々とコンテナが降ろされる一方で、乗員乗り込み口にタラップが接続され新たな人員が降り降りして

る。

恐らく本国で鍛えられたであろう新兵の魔導師たちが、パリツとノリがまだ効いた軍服を身に纏い、汗に塗れた作業着を着たマッド等の直ぐ近くを通り過ぎた。

「けつ、俺達が汗にまみれて働いていても連中は手伝う気なんぞ起こらんだろうな。軍も気を利かせて少しは魔導師を裏方に回しやがれっつてんだ」

同僚の愚痴にマッドは苦笑した。

「ムリだろう。あいつ等は俺達魔法の力を持たない凡愚とは出来がちげエんだから」

「でもさ。あいつ等が手伝えばこんな作業直ぐに終っちまうだろ？確認作業も運ぶのだったって魔法の力でちよちよいのちよいだろうに」

「そんな事に使うくらいなら、戦場に放り込んだ方がもつと役に立つって。大体俺はこの仕事キツイけどなくなっっちゃ困る」

「なんで？」

「仕事の後の一杯が、不味くなっちまう」

「ハッ！ちげえねえ！神は酒瓶片手に働けと仰せだっ！とつとと終らせちまおうぜマッ

ド」

笑う同僚に「ああ」と返しながらマッドは仕事に戻ろうとした。だがその時、金属を引きずる不快な音が響いた。音の方向に眼をやるとガントリークレーンの一つが積み上げてあった物資の山にコンテナごと突っ込んでいたのだ。暑さの所為で朦朧としたクレーンのオペレーターが操作をミスったらしい。しかも運が悪い事に倒れてくるコンテナの真下にマッドたちは立っていた。

同僚がアツと声を漏らすのを聞きながらも、奇妙にゆっくりと落ちてくるコンテナをマッドは見ていた。周囲で作業に当たっていた別の同僚たちが叫ぶ声が響くが、遠すぎてナニを叫んでいるのか解らない。マッドたちは自分達が置かれた状況に思考が追いついていなかった。前線を支える日用品などの物資が入ったコンテナは総じて重い。下敷きになれば、踏まれたハンバーガーのような体で墓石のしたに寝る事になるだろう。

——そしてコンテナは、彼等の上に落下した。

コンテナ同士がぶつかる鈍い金属の悲鳴が響く。マッドは視界の端に白い何かを彼を押しつけ、体が大地に無理やり伏せられたのを感じた。その直後、ズンと轟音が鳴り

響いた。落下したコンテナは歪に歪んでいた。全ての重量が一辺に集中したことで自重に耐え切れずひしやげたからである。

マッドはそれを見上げていた。なぜなら彼は何者かによつて滑走路に伏せさせられていたからである。一体誰が？彼が見上げた先には子供ほどの大きさの白い人型が、何十トンはあろうかというコンテナをその細い両腕で支えている。奇跡か？それとも神の助けか？いや違う――

「生きているか？」

白い人型は言葉を発した。高いソプラノ、それは子供の声。マッドは、彼の同僚は人の手で救われたのだ。マッドはあまりの事に驚く事も忘れ、目の前の信じられない現象をただ眺めていた。

「動くな」

人型は再び言葉を発した。機械のような外見にそぐわない子供の声。マッドを困惑させる。彼は頷き返すのが精一杯で声の一つも上げられなかった。人型はマッドに一

警する事無く、ただ自身がやるべき事だけを遂行する。重いコンテナをゆつくりと、誰もいない場所へと静かに降ろしたのだ。

ドズンと大地が揺れた。それだけの重さを持つていたにも関わらず、人型は何事も無かったかのようにして再びマッドの下へと歩き、彼に手を差し出して見せた。差し出された手をマッドは握るべきか迷ったが恐る恐る手を差し出す。近くで見ればやはり小さく、自分の半分ほどしか背が無いにも関わらず、引き上げる力は大人よりも強い。

急に立たされ、たたらを踏んだマッドは前のめりになりかけるが、何とか踏ん張つてみせる。まだ体が震えていたが何とか立って見せた彼が眼をやると、自分と同じく巻き込まれた同僚を同じようにして立たせて見せる人型がそこにいた。同僚は信じられないという顔をしていたが、次の瞬間には更に驚いた。

「アーマー、解除」

『イエス、マスター』

まばゆい魔力光が人型を包みこんだ。真っ白な光に一瞬眼が眩んだマッドたちが再び眼を見開いたその先には――

「USN陸軍所属の戦闘魔導師兵士、フェンです。第三駐屯地、セスル基地に向かう移動手段はどこに、ありますか？」

——明らかに年齢一桁の少女が、すこしつつかえながらも道を尋ねていた。

感謝とかよりも彼等が真つ先に考えた事。それは、魔導師は人間じゃねえ。

この体験をしたマッドと同僚達が心に刻んだ一件だった。

sideフェン

フリーダム基地士官学校での特別な訓練を終えた俺は、中尉の位をいただき、そのまま直ぐにM4輸送機に押し込まれてハフマン島に飛ばされていた。

あれれ？ホンの一時間前までソフィア教官に最後の模擬戦で負けて、PXメニューで一番高い物をおごらされていたというのに、気がつけばもう熱帯気候に来てますよあーた。一眠りしていたらもう到着していたって言うんだから、超スピードとかなんてちゃちなry…。

というか、なんか時差ぼけが激しくて気持ちが悪い。それに日差しが熱い、暑いじゃなくて熱い。ワイズ教官が長袖は要らないと言っていた意味が良く分かるなあ。

「…あつい」

『現在気温29度。まさしくアイランドです』

ビーチパラソルと折りたたみチェアとトロピカルドリンクでも欲しくなるような気温だなオイ。でも熱帯の割りには乾燥している感じがするから、今は乾季なんだろうか？とにかく温帯育ちの俺には暫くは暑く感じるだろうなあと、タラップを降りながらそう思った。

いや実際の所、暑いけどすごし易いほうかも知れない。母上が連れて行ってくれたサバイバルでジャングルに行ったけど、あそこはマジでサウナ状態だった。ハフマン島は若干太陽が仕事しすぎな直射日光でキツイが、これはこれでカラツとしている分ジャングルよりはまだましである。

「——ん？」

『マスター？』

タラップを降りて次の場所への移動の案内を待ちながら、忙しそうな航空基地を眺めていたところ、コンテナを運搬車に乗せるガントリークレーンが変な動きをしている事に気がついた。なんとというか、そう、フラフラというか：前後にしか動かないクレーンがフラフラといつてもピンと来ないかも知れないが、そうとしかいえない。

そうだなア。なんとというかこのままコンテナの山に突っ込み——

《——ドドーンツ!!!》

——そうだなアとか言ってる場合じゃねエ!?

マジでクレーンが積んであったコンテナに突っ込んでしまった。しかもその下には作業員と思わしき人達の姿が：！俺はすぐさま身体強化魔法で飛び出し、BAを纏うと落下するコンテナと作業員達の間割り込んでいた。助けなきやいかんと思つた時に、すでに身体は動いている。そんな感じである。

幸いコンテナは兵器とかのような重い物ではなく、日用雑貨などの“軽い”物が積ま

れていたらしく、重力制御魔法と身体強化＋デバイスの強化＋ヴィズに備わるパワーアシスト全力と間接ロックでどうにか受け止める事に成功した。俺と同じサイズならパワーアシストで事足りるけど、明らかに質量が違いすぎるから重力や慣性を魔法で制御しないとバランスが崩れて落下してしまいかねない。

バランスを取るのにシックハックしている俺の足元をふと見ると、衝撃で十センチほど滑走路のコンクリートに足がめり込んでいた。縦横に走るコンクリートの亀裂が、コンテナ落下の衝撃が普通に考えればペしゃんこ間違い無しの衝撃だった事を物語っている。修繕に苦勞しそうだが、俺に責任取れと言われまいだろうか？言われた時にどうにかしよう。

今度はすこしまわりにも目を向けた。みれば作業員の人が俺の直ぐ近くで倒されていて、ぼかんとした顔でこっちを見ている。落下するコンテナとの間に割り込むときに、二人いた作業員の膝の裏を蹴り、膝かっくんみたくバランスを崩してコケさせてあげたのだ。あのまま放置したら頭をコンテナに潰されていたんだから感謝して欲しい所だけど、驚いている今は多分ムリだよな。

とりあえず大丈夫か尋ねたけど、返事もなし動かないように伝えた俺はコンテナを降ろす事にした。このまま持ち続けるのは少し動き辛いね。でもここからが魔法制

御の本領發揮である。すぐにも降ろしたいとのだが、中身は重要な軍需物資である日用雑貨である。扱いを間違える事は許されない。え？なんで日用雑貨が重要な軍需物資かって？…そりや、トイレの紙が無くなったら素手で拭きたいか？

とにかく大事な物資なので破壊したり雑多に扱う事は出来ない。なのでゆっくりとコンテナを誰もいない滑走路に傷をなるべくつけないように降ろす必要があった。でもそのまま降ろそうとすると、コンテナの重さでこつちが引つ張られてドッシーンという羽目になってしまう。なので支える際に使った本来は飛行魔法の時に併用する重力制御や慣性制御魔法を使いコンテナを降ろした。

要するに魔法で何とかしました——である。

なんかいろいろと物理法則が乱れるような事をしでかしたが、これが魔導師の力の介入なのだから仕方が無い。ともあれ、これで人二人が助かったし、物資も無事だったのだから問題ないだろう。多分。

しかし、バリアアーマーを解いた途端、俺を見る眼が変な感じになったな。それはともかくこのままというわけにもいくまい。俺は周囲の人に新兵はどこに行けばいいのかを尋ね、とりあえず案内の人が来るまで待つ事にした。

何せ配属先はここではなく、さらに島の奥地に存在する軍事基地なのだ。とてもではないが一人でいける場所ではない。電車乗り継ぎの感じで乗り物を乗り換えなければ先へは進めない。

『通達する。先ほどの荷揚げの際の事故に関係する者は、事故の説明の為に司令部第4兵站課へと出頭せよ。繰り返す——』

進めないのであるが、こんな放送が流れた。荷揚げの事故つて多分さっきのアレだね？うーん、助けた手前、俺も当事者なので無視する訳にもいかない。仕方なく司令部の場所を尋ねてそこへ足を運んだ。行ってみれば別段たいした事はなく、先ほどの騒ぎについての質疑を少しされて、あと人員を助けた事に関しての感謝の言葉を貰っただけであった。

しかし、その所為で配属先へ向かう車列の第一便に乗り遅れたのは少し頭が痛い話だ。でもまあ、とっさの事態だったし、お咎めはなし。それどころかむしろ感謝されたので悪い気はしなかったが。とりあえず配属先に遅れるという旨の連絡を送り、そういった事の色んな手続きの後、俺は予定より一日遅れて配属先に向かう事になったのだ。

さて、その為の移動手段であるが、各軍事基地へ物資補充に向かうコンボイに便乗させてもらい、途中配属先の基地で落つことしてもらおう事となった。ただし、これからお目見えするのはただのコンボイではない。それは、ある意味ハフマン島ならではの輸送手段である。

『マスター、まもなくです』

ヴィズが輸送隊の到着時刻を教えてくださいました。俺はいよいよと手荷物をもって待合所から外に出る。基地の入り口のほうに眼をやれば、甲高い音と重低音を合わせたような唸りのような音を上げながら、輸送隊のコンボイが門を潜り入ってくるころであった。

「おおお……」

思わず声を上げてしまう。なぜなら入ってきたコンボイは地上1mくらいを「浮いていた」のだ。そう、何を隠そうこのコンボイは軍用で大型の輸送用ホバーコンボイにより構成された輸送ホバー隊であった。これで心躍らぬ男子がいようか？ 踊らないならそいつはオトコノコじゃないと俺は思う。

さて、なぜコンボイがホバーなのか？ それには結構深い訳がある。

ハフマン島は第二次ハフマン紛争が勃発した当初、両陣営がお互いの陣営へ向けて激しい砲火をお見舞いした。それにより主要都市は壊滅。軍事基地が置かれた地方都市は軍事基地が持つシールドに守られ無事であったが、主要幹線道路はその殆どが破壊、もしくは地雷による封鎖が行われ、通常の移動手段では通る事すら難しい状況に陥った。

こうなると兵站が損なわれ、前線の基地への補充が滞り、陸の孤島となるかに思われたが、超大国のUSNはすぐさまその為の対応を打ち出した。それがホバー隊である。

ホバークラフトは地上を這うように浮かぶ。踏まれる事で起爆するタイプの地雷なら、たいていは無事に通過する事が可能となる。これにより各基地への補給を行う事が出来るようになった。

勿論、他にも大型ヘリや物資投下も行われているらしい。だが、やはり大量輸送には地上に行く方が向いているらしく、こうやって車列を組んで各基地へ補給に向かうのだという。というか魔導師の登場以来。特に空戦が出来る魔導師が空の便の安全を脅か

しているのだそう。かくいうウチの母上も輸送機の墜落数は数知れず。お空の旅は必ずしも安全ではない事の証明である。

ともあれ、今は乗り込むホバークラフトについてだった。

見た目は大型トラックのタイヤがあるべき部分を急造でホバーにしたような感じであるが、なんていうか前世で言うところのアメリカンサイズ。7歳児である俺からすれば鉄で出来たモンスターに見える程大きい。それに申し訳程度の自衛用機銃が後付けされているといった具合であるが、いいよなあこういうシンプルなスタイル。男の子だよ。

その後、物資の詰め込みが行われている直ぐ横で、俺は邪魔にならない程度にホバークンボイの周囲をうろちよろしていた。どうやらエアードで浮かんでいるのではないらしく、魔導機械を一部使っているようだ。浮遊させるだけなら簡単に出来るから、移動の為に推進やバランスなどは通常の機械に任せているという感じか。

いやー、実に良い感じの急造車輛である。部品なんて上半分は普通の輸送トラックからの流用っぽいあたりがグッドである。

「次の便が出るぞ！乗客になる奴は急いで乗れ！」

操車長の声が響く、物資の詰め込み自体はコンテナごと取り替えるだけなので直ぐに
終わるようだ。少し名残惜しいが、次はコンボイの中から見せてもらおう事にしよう。

.....

.....

.....

景色が右から左へと流れ、ガタガタと視界が揺れる。ホバーなのに意外と乗り心地が
わるいな……。

少し前、ホバーコンボイ隊の三号車に荷物と一緒に同乗した俺は、操車長に一言二言
言葉を交わした後、キャビンへと押し込まれた。相変らず周囲から奇異の眼を向けられ
ていたが、もはやそういう眼には慣れっこだ。それを無視し、自分に宛がわれた席に向
かうと、黙して大人しく座った。

席といっても正確にはキャビンにある僅かなスペースに座らせてもらっただけであ

るが、まあ立ちつばなしよりは遥かにマシであろう。元々長距離移動用とはいえ、軍用のコンボイのパーツを流用した所為か乗り心地はあまり良くないのは仕方ない事なのだ。そう思わないとやってられん。

ともあれ、キャビンは数名が座れる程度の広さがあり、身体の小さな俺は別段スペースが要らないので座る分には問題はなかった。本来の兵員輸送の時はコンボイのコンテナ部分が兵員輸送用のコンテナに換装され、新兵を含め兵隊はそこに座らせられるらしい。

ギユウぎゆう詰めの缶詰のそのの乗り心地と比べればキャビンは天国だという話なので、配属先に向かうのが遅れたのはある意味良かったのかもしれない。

さて、俺が乗り込むと同時にホバーコンボイの搭乗口のエアロックが閉まり、独特のフワツとした感覚と共に浮き上がったホバーコンボイは、十数台程で直列に車列を組み、コールドパール基地を後にした。基地周辺の一応無事だった市街地を抜け、破壊された幹線道路をコンボイは進み、時折吹く横風の影響で揺れるが、それ以外はスムーズに進むので割と快適であった。

とはいえ、ただ乗っているだけでは暇である。俺は以外と好奇心旺盛なのだ。

初めて乗ったコンボイが珍しかった俺は、コンボイの乗員に頼んでキャビンから繋が

る機銃座から外を見せてもらおう事にした。

勿論、乗員にはすこし渋られたが、仮任官の階級を見せたら普通にOKされた。こういうところが軍隊の楽なところではある。話が逸れたが許可を貰った俺はキャビンから移動し、機銃座の直ぐ真下までやって来たのであるが、少し困った事に身長が足りないので外を見ることが出来ない。

子供の体はこういうとき不便である。仕方ないのでヨツとジャンプし、銃座の縁に両腕をひっかけるようにして上半身を外に晒した。その間足はプランプランとあても無くブラつかせる羽目になったが、致し方ないことなので諦める。

さて、外の景色であったが…なんとも殺風景な風景といえばいいのだろうか。街はあ。木々も道も川もある。だがその全てが焼け焦げていたり、亀裂が走っていたり、干上がっていたり、と…強いて言うなら廃墟の様相を呈していた。

何より今ホバーコンボイ達が通過しているひび割れた道路には、放置された乗用車が放棄されたその日のままで点在している。道路に残る不自然な陥没は爆撃の後だろうか？一般市民がいる場所を空爆されたのか…どれだけの人が巻き込まれ、どれだけ死んでしまったのか…俺にはわからないが、きつと沢山死んだだろう…。

こういうのを見ると、なんか居た堪れない気分になってくる。ちよつと見るんじやな

かったなあと後悔したが、他の景観は存外悪くない場所も多いので、そっちを眺めて気分転換する事にした。

そんな風に廃墟を眺めているとホバーコンボイのもう一つの銃座に射手が登って来ていた事に気がついた。あらつと思ひ下を覗くと、こっちの機銃座の射手もこっちを見上げている。

しかし俺はまだ外の眺めを見たい。すこし悩んだあげく、俺は身体を隅っこに寄せてみた。射手はこっちの意図を悟ったのか、少し苦笑しながらも俺の直ぐ脇へと登り、周囲警戒を始める。

すこしばかり窮屈になりはしたが、身体が小さい俺はあまり気にはならなかった。射手の人は若干窮屈そうだったが、ここいらは前線より離れていたで、俺のほんの少しのわがままを許してくれたようだった。見た目が子供なのはこういう時便利ではある、と少し腹黒く思ったのは内緒だ。

銃座に上がった射手さんは、廃墟を眺める俺を一瞥すると、独り言を呟くようにしてこの惨状がどうして起こったのかを独白してくれた。この周辺も元は活気のあつた地区だったと。時に笑い、時に泣いたりと極普通の人々が暮らしていたと。かつてはここにいたと。そして開戦初日にOCUのミサイル空爆を受けなければ、民間人に被害は出

なかつただろうと。

俺は終始無言であつた。何故射手の人が俺に話したのかは知らない。或いは知つて欲しかつたのかもしれない。この悲惨な現状つて奴を――。

訓練に明け暮れている間は気にする暇もなかつたが、この光景は五感を通じて、いやさ第六感まで響いて、確かに何かを訴えてきているように思えた。かすかに空気に漂う硝煙の匂いを嗅ぐと、ここが確かに戦場だつたのだと思ひ知らされる。

前線は遙か西にあるが、かつての主戦場跡の復興にどれだけ時間がかかる事やら想像もつかない。これが人の手による物なのか。映像データで知るよりも、より生々しく眼に焼きついていた。

「……………」

ふと廢墟の合間に人の姿を見つける。衣服はボロボロの穴だらけ。煤と埃と泥と血に汚れた包帯を頭に巻き、頭陀袋を手に廢墟の中を歩き回つていた。彼等は手にもつた少し歪んだ缶詰を袋に詰め、廢墟から拾い上げた何かの部品などを台車に乗せている。

「あれは……?」

「あれは難民です」

俺の眩きが聞こえたのか、同じ銃座にいる先ほど説明をしてくれた射手が答えてくれた。しかし、オッサンが幼子に対して丁寧語使ってくる姿つてのは何かしら違和感があるな。階級があるから仕方が無いが……とりあえず気になったので更に聞き返してみた。

「難民が、いる?」

「急な紛争でしたからね。本土へ戻れなかった人々ですよ」

「彼等は普段、どこに?」

「近くの難民キャンプです。しかしそこでも十分な物資がある訳ではないので、ああして開戦以来使える物を物色している。遅いものです」

「軍は、支援してない?」

「いいえ。一応軍も補助していますが、難民の数が多くて魔法でパンを作るようなもんですわ」

成程納得。あ、最後の言葉の意味合いは、前世で言うところの焼け石に水という言葉

に近い意味のコトワザです。魔法で出したパンは見た目こそ普通のパンであるが、所詮はまやかしに過ぎず腹を満たす以外は意味の無い物である。要は魔法でパンを作ると言う言葉は、意味の無い行為を行う、或いは見せかけである事を指す言葉となる訳だ。閑話休題。

ともあれ彼等難民は実に逞しく生きていた。周囲にはまだ撤去されていない地雷原が点在しているのに、その中を自力で動き回っているのだ。全ては生きる為である。本来なら後送して本土に送るのがいいのだろうが、彼等を輸送できる手段が限られていて、尚且つ敵に察知されると攻撃を受ける恐れがあり実行できないのだという。

ピストン輸送するにもホバーコンボイも含め、輸送は前線の維持に費やされていて余裕が無い。とりあえず戦火はあまりここまで及ばないので、難民達には悪いが、暫くはこのままになるといのが上層部の決定のようだ。本国には届かなかった現実の風景つてのは、ホントこう心に来る。彼等の無事を祈りたいところだが、あいにく俺は祈る神を持たなかった。

配属地に向かう道中、俺はそういつた人々を沢山見かけた。

皆ホバーコンボイの車列が来ると道を空ける。中には腕や足が無い人も居て、折れ曲がったパイプを杖代わりに歩いていた。皆、USN軍が守る事が出来なかつた人々だ。

戦火に家を焼かれ、簡易テントを家代わりに何時終るか解らない戦争の中で生きていく。

そんな場所に居るからだろうか？彼らのバイタリテイは凄まじく、途中休憩にコンボイが停止した時には、どこからとも無く集まり、こちらへと擦り寄ってきて、廃墟から引つ張りだしただろう花やら雑貨やらを売りに来たがる人もいたらしい。

もつとも保安上の理由から、護衛の兵隊が彼らを追い払う。非常にそつげなく冷徹に追い払う姿はとても同胞にする事ではないように見えたが、これは仕方が無い。間違つてOCUの工作員でも紛れ込んでいて、その上で爆弾でも渡されたら流石に笑えないからだ。冗談に思えるかもしれないが、ここではそれが現実起こるのだ。

そんな中、相変わらず銃座から外を眺めていると、こつちを見ている難民の子供の姿が眼に映った。彼等は俺の姿を見つけると、なにやらとても驚いた表情を……それもそうか。今の俺はまさしく子供なのだ。それが軍用車両から頭出していたら何かと思うだろう。

暫くはその子供らが驚いている様子を眺めていたが、少しして俺はキャビンの自分と与えられた席に身体を収めた。なんというか、被害妄想かもしれないが、彼らの俺を見ってくる眼が……とても嫌だった。だから俺は目を閉じて与えられた席で静かに眠りに

ついたのだった。

俺を乗せたコンボイはなんの問題も無く順路を進み、各所の基地や物資集積所の物資を山盛りにして、その足で俺は配属先に基地に降ろされ辞令を受けとる。その筈だった。

『敵襲——！』

この単語が眠っている俺を強制的に叩き起こすまでは——。

『輸送強襲部隊の襲撃だつ！キロチーム、リマチームは敵を迎え撃て！他は隊列を乱さずに車列を守れッ！銃座も各個の判断で迎撃せよッ！——砲撃が来るぞオ……今ッ！』

護衛隊長の怒号が無線のスピーカーを叩いたように振動させている。隊長の言葉が終ると同時に、外で何かが炸裂した時のくぐもった破碎音が聞こえた。迫撃砲の炸裂音

と似通ったそれが身体の芯に響いた瞬間、俺の目は完全に覚めていた。

《——ズダァーンツ!!!》

『こちら一号車！攻撃を受けたっ！ホバーユニット損壊！着地しますす！』

「くそっ！シールド発生器が間に合わなかったか！OCUのくそつたれ共め！」

無線を聞いた操車長がガンと壁を殴った。迫撃砲は先等の一台を集中的に狙い、足を止めた。ほぼ一列に並んで進んでいたコンボイ達は一時的に足を止めざるを得ない。前にぶつかからない為に逆噴射をかけたのか身体が前に引つ張られる。

『こちら二号車！こんどはこつちが集中砲火を浴びてる！だれでもいいから助けてくれ！』

『護衛隊のボクスターだ！シールド魔法はどれほど持つ？』

『さつきから狙撃みたいな砲撃魔法で《ドガンツ！》ひっ!?一分持てば良い方だ！』

『待ってる！直ぐに助けてやるっ！直ぐにそつちにグハッ』

『隊長が撃たれた！頭で即死だっ！指揮権は副長が受け継ぐ』

『右や左からわんさかきたぞ。こりや待ち伏せだな』

『前によつた休憩所にスパイでもいたか?』

『無駄口を叩くな! 敵を撃てッ』

そしてつけっぱなしの無線からは、あまり良くない味方の戦況が流れてくる。こりや準備しておいたほうがいいかもしれない。いつでもヴィズを展開できる心構えだけして、先ほどまでいた銃座がドラムの音にも似た銃声を響かせる中、静かにその時を待った。俺だつてここで死にたくはない。というか配属先に着く前に突発的な初陣で死ぬのは御免である。

その時、キャビンから繋がる銃座の片方から銃声が途絶えた。そちらに首を傾けるとほぼ同時に何かが落下した音が聞こえた。その理由は見ないでも解つた。射手の人が撃たれてその拍子にキャビンに落下したからである。その人はここまでの道中、今のハフマン島の事を教えてくれたその人だった。それを見た時、俺は声も出せず驚き、眼の前の人間が流す赤い液体を見つめていた。

だが気がつけば俺はコンボイのキャビンに常備されていたエイドキットを探し出し、そこからテキパキと治療キット一式を取り出すと、眼の前の負傷者の治療に当たって

た。数年以上に渡り訓練を続けてきた俺の身体は、半ば条件反射に近い速さで、負傷した人間に応急処置をする為にそう動いていたのである。

幸い流れ出る血は一見派手であったが、一番大怪我に見える左肩は弾丸が貫通しており止血すれば問題なし。意識を失った原因は左耳の上の辺りを掠めた銃弾の衝撃で、脳震盪を起こしたらしかった。

俺はメデイックではないので詳しい事は解らなかったが、とりあえず頭部は揺らさないように気をつけながら、血を軽く拭い露出した傷跡へ止血剤を兼ねた人造蛋白質を拭きかけた。そしてエド兄やんに指導を受けた事で効率が上がった治癒魔法を蛋白質で滑る傷へと行使する。

蛋白質を使用したのは治癒魔法が専門ではない為、治療薬と併用したほうが早く傷跡が塞がる効果が出るからである。包帯でキック巻いてやるのが本来の応急処置なのだろうが、こつちの方が手っ取り早く、時間にして僅か十秒ほどで俺は射手の傷の手当を終えた。

うへえ、しかし圧迫止血してた所為で手が血まみれだ。ヌルツとした感触がなんともいえない。こういつちや悪いが生ぬるくて気持ち悪い。拭くものもないので仕方なく手についた血を野戦服の腹で拭っていると、キャビンと繋がっている運転席にいたサブドライバーの人と眼があった。なんだろうと思いなながらも俺は直ぐにそつちに顔を向

けた。

「何か？」

「い、いえ。すぐくテキパキと治療されたので……と、そうじゃなくて中尉、命令が来ます。申し訳ありませんが護衛隊隊長代理からの命令です。予想以上に敵の数が多く、通信途絶により味方が到着するまでの間、手が開いている人員は全員戦闘に参加して欲しいそうです。つまり中尉も戦闘に参加する事になります」

サブドライバーはそう言ったが、少し表情が暗い。それもそうだ。積荷を現地に無事に届けるのが彼らの任務だ。当然積荷には俺も含まれている。彼等にしてみれば俺まで戦闘に駆り出すような行為は、それこそ彼らが輸送隊として培ってきた誇りを踏みこじるようなものなのだ、と俺はこの時思っていた。

実際は俺のような子供を魔導師だからとはいえ前線に放り込む事に、大人として少なからず罪悪感を感じていたようなのだが、俺も俺でこれが初陣となるのかと若干緊張していて、そういった人間の感情の機微に少し疎くなっていた。ともあれ俺はサブドライバーからの言葉に了解を示し、すぐさまヴィズを展開、バリアアーマーに身を包んだ。

「中尉、これが今戦っている護衛部隊の魔導師用 I F F コードです」
「ん」

「言われなくてもご存知でしょうが、常に I F F は発信状態にしてください。そうでないと味方に撃たれます。後の指示は護衛部隊と合流してから指示を受けてください」

「了解した」

サブドライバーの人が渡してきたマイクロSDをヴィズに挿し込み、コードを入手した。これで戦場に出ても味方に突然撃たれる可能性は減った。

「キャビンの床に点検用のハッチがありますからそこから降りてください。あと常にバリアジャケット強度は最硬に設定しておいたほうがいいです。中尉が降りた後はハッチを閉じますので忘れ物はありませんか？」

「大丈夫だ。問題ない」

「……我々も援軍到着まで何とか耐えます。中尉も御武運を」

「そちらも——出るぞ」

そして俺は小さな点検ハッチから飛び降りた。

「この香りこそ戦場よ！」

S i d e 三人称

—— P M 3 : 4 5 ・ U S N 第三駐屯地・セスル基地司令室 ——

その日、ジェニスは司令に呼び出された。

自身が隊長代理を勤める部隊の連中と、*“健全”*なカードゲームに勤しんでいたところの呼び出し。これに対し彼は不満気な顔を隠そうともせず司令室に出頭した。何故呼び出しが掛かったのかは、司令に呼び出されるようなやましい事に覚えがない彼にとつて首をかしげるような事である。

しかしよくよく頭を巡らせてみて、呼び出されたのは別の一件である事に思い至った。ジェニスは：彼の眉間には、別の意味での深い皺が現れた。面倒くさいと思い、ため息を吐きつつも司令室へと急ぐジェニス。ただ、呼び出された所為でせつかくカードで賭けていた100USNダラーがパーになったのが後ろ髪を引かれる思いだった。

ジェニスがセスル基地の司令室に入ると、香を焚いた独特の香りが微かに漂ってきた。軍隊の基地で嗅げるような代物ではない筈だが、香はこの基地の司令の唯一の趣味

である。喫煙家ではないジェニスにしてみれば、煙たい葉巻の匂いよりはマシであると思いつつ、まっすぐと視線を部屋の中央にどつしり構えられた司令官が座る執務机に向けた。

エボニーで作られた如何にも重厚そうな執務机にて、香の煙を焚きながら書類仕事に勤しむのは、セスル基地を纏め上げる司令アル・マジードである。黒色人種特有の黒光りする肌は、常夏のハフマン島に来て更に黒くなったような感じを受ける。ジェニスはこの司令が苦手であった。よく言われる面白黒人とは違い、かの人物は非常に堅物でジョークどころかユーモアすら理解しない石頭だったからだ。

「ジェニス・ホールデン少尉、出頭しました」

「ごくろう。そこに掛けて少し待て」

マジード司令はそういうと、手にはんこを持ち――

「こおおお……はあああああ!!!」
《しゆたたたたたたたた!!》

——恐ろしい速さで書類に判を押し去った。あまりの速さにジェニスには彼の腕が8本あるように見えた。

「こふう…《コキコキ》…終わったな」

「そうですね（この親父。無駄に強化魔法使いやがる。何時もながらナニあれ？）」

「どうかしたか少尉？」

「いいえ」

本音を言うわけにもいかず、ジェニスはなるたけポーカーフェイスを保った。

「まあいい。それよりも喜ベジェニス少尉。現在空席になつてゐる隊長が決まつたのは前に話しをしたな？それについての書類が先ほど届いたから眼を通しておけ」

「はあ」

そういつて引き出しから書類を出して手渡してくるマジード司令に、ジェニスは少し素つ頓狂な声で返事してしまつた。それもその筈で、普通こういつた場合は司令自ら書類を渡す事はなく、たいていは人事の人間に持つてこさせるはずだからである。呼び出

したのは部隊の再編成に関する事ではなかったのか……そう不思議に思いながらも手渡されたコピー用紙の束を手取るジェニス。執務室に暫く紙をめくる音が響いた。

そしてある項目の部分にジェニスが見を通したとき、彼が動きを止めた。米神を解しながら険しい顔を司令に向ける。しかし司令はどこ吹く風、いや何時もと変わらない頂面を崩さない。それに苛立ちを覚えつつ、ジェニスは司令がガラにもない冗談を言ったといって欲しいと思いつながら口を開いた。

「これは……なんというか……ハハ、何かの冗談ですか？」

「残念ながら現実だよ少尉。到着が遅れている少尉は年齢一桁の子供だよ」

「ダムイット！本気ですか!？」

「本気も本気だろう。少なくとも士官学校出のボンボンでは無い事は確かだよ」

「なんてこつたい……」

書類に添付された写真には7〜8歳くらいの子供が写っている。その下には名前だろうか、フェン・ラーダーの文字が連なっていた。

「司令、命令の撤回は……？」

「無理だな。すでに撤回要求を送ったのだが、返ってきたのは撤回要求の撤回状だったよ。すでに根回しは済んでいるのだからな。しかも下手にばらせば機密漏えいに問われるという念の入れようだ。こちらも閉口するしかあるまい」

「しかし司令。こういつちやなんです。が実戦部隊である我が隊は人員消耗が激しい部署です。訓練しか積んでいない…それも短期育成プログラムとかいう詰め込み教育の即席将兵なんぞ足手まといにしかありませんし、無駄死にするのがオチだという事は上は理解しているんですか？」

「書類では埒があかんで通信で問い詰めたのだ。だが戦略情報部の——確かエリカとかいったか？その将兵曰く、此度の件は短期育成プログラムと並行して行われた次世代魔導師育成の為の実験もかねています。その為のデータ収集の為、ランダムに最前線の部隊を選抜しました。かの部隊は栄光あるUSN軍の重要機密の足がかりになれるのです」だと抜かしてきたよ」

「実験…」

ジェニスは無意識のうちに白くなるほど拳を強く握り締めていた。そしてこの話に腸が煮えくり返り返りそんな感情を覚えていた。戦う戦力が必要なのはわかる。その為の装備開発や戦術開発も必要な事なのも軍人として理解できる。

だが、わざわざ戦時中の最前線基地で実働部隊を丸ごと「実験と証した遊び」を行わせる等、いくら上層部が戦力を欲していて勝利を掴もうと必死だとはいえ、これは前線を軽んじているように思えてならなかったのだ。

「少尉。この件に関して怒るのが解るがこれは決定事項だ。反論は許されんし、反論する事は即ちU S Nに対する反抗と受け取られるぞ？」

司令の声にハッと顔を上げる。表情に出ているとは何たる事か。

「それで司令。件の隊長殿は本当にウチの部隊に収まるんですか？」
「空気がお前達のところしかないのだからあきらめろ」

ジェニスたちの部隊は数ヶ月ほど前の偵察任務中、突発的な遭遇戦により前の隊長を失っていた。本来なら直ぐにでも代わりの将兵が空いた隊長職に着くか、あるいはジェニスのような副官をしていた者が、階級を繰り上げられて隊長に付くのがセオリーである。どうりで今の今までそれがなされなかつた理由に合点がいった。

その為、ジェニスは司令の前であるにも関わらずため息を吐きたい気持ちで一杯で

あつた。いつその事、新隊長が体調を崩して後送されはしないだろうか、自分のいる部隊は紛争開始時からの生き残りが多い部隊である。その濃さを利用して：いやそれよりも、確か別の部隊に「喋る生物兵器」とかいふあだ名が付いた奴が居たが、そいつに任せるとか…。

「言つておくが隊長とはいへ子供である事には変わりはない。また貴様等の立場も命令を聞けないようなら切り捨てられる事も忘れるな。だから：くれぐれも壊すなよ？」

「…了解」

心の中で舌打ちしつつ、ジェニスは仕方なく了承してみせた。いや、正確には理解させられたが正しい。なぜなら基地司令自らが説明してくださった、ありがたくも傍迷惑な話である。しかも眼の前の石頭司令よりも上の方々が、書類まで送付してきたのだ。一仕官でしかないジェニスに出来る事は、黙つて命令に従う事だけである。

——そんな時、司令の執務机に取り付けられた内線が鳴る。

「私だ。……ああ……ああ……ふむ。解つた——仕事だジェニス少尉」

「またOCUが警戒ラインを抜けたんですか？」

「抜けたついでに奥地に来て我が方の輸送部隊を襲撃した。輸送経路破壊作戦だと推測される。ジェニス少尉以下、待機中の部隊全員を叩き起こせ。直ちに攻撃し輸送部隊の救援に当れ……なにをボサツとしている。今すぐだ！」

「サー！ イエツサー！」

司令の響くような大音声に反射的に敬礼を返したジェニスは、駆け足で司令室から立ち去った。

『——おい隊長代理。返事してくれ』

「……ん？ すまねえ考え事をしていた。なにか見えたか？」

場所は移り、ジェニスが居るのは破壊された市街地。ブリーフィングを行わずに緊急出動した隊長代理のジェニスが率いる小隊は、廃墟となったビルの瓦礫の上を跳ねるようにして一直線に目標に向かって駆けている最中である。

一応移動手段にはトラックやホバーなどがあるが、周辺が廃墟と化しているので、下

手な乗り物に乗るよりも身体強化した脚力で一直線に走ったほうが速いのだ。

そんな中、ジェニスは先程の司令との会話に思考を割いて、部下の念話に気付くのが遅れた。そんな彼の様子を見て部下の一人で分隊を指揮するハーヴィー・デュラント軍曹が呆れたような思念を送ってきた。

『見えたもなんもねえよ。何をどうすりゃいいかは道中聞けつて隊長代理が出発前に言つてたんだぞ。だから聞いている』

デュラント軍曹の上官を敬わないような口ぶりにジェニスは苦笑する。これがなければ昇進して自分と同じく戦地任官で同階級になれるというのに。それはともかくとジェニスは頭を振り、これからの事を話す為に頭を切り替える。

「ああ、そうだったな。概略を説明すると――」

・ 友軍の輸送部隊が潜り込んでいた敵に襲撃を受けた。

・ 事態が発覚したのはおよそ20分前。定期連絡が来なかった事と、上空を通過した数少ない友軍の偵察衛星からの観測により、未だに輸送部隊と敵とが戦闘中である。

・出撃した我が小隊は全力を持って輸送隊の救援にあたれ、可能ならば敵を殲滅せよ。
・尚、先月の敵の爆撃により、周辺の地雷原はほぼ消滅しているので、常に接地戦闘が可能であるが、障害物も多くある為、射撃戦の場合は誘導魔法を使われたし。

「——以上だ。なにか質問はあるか？」

『……要するに全員ぶつ飛ばせばいいって事か？』

「向かってくる奴だけな」

デュラントは脳筋であった。その事に頭を抱えなくなつたが、ジェニスには時間がないとマルチタスクで切り捨てる。適当に返事を返して何度目かになるかわからないビルを飛び越えた。そのとき、彼の視界の隅にチカツと光るものが映りこんだ。ジェニスは部隊全員に念話を送り停止させると、通信機と念話双方で通信を送り始めた。

「こちらセスル基地所属の第23駐屯部隊レッドクリフ。救援に来たがそちらの正確な位置がわからない。現在位置を知らせよ」

『こちらコールドパール基地所属の第8護衛小隊。隊長は戦死され、現在副隊長が指揮している我々はサウスバーク通りを抜け、パラダイスバークシャーショップ跡地前にて停止

中。敵は道路周辺の瓦礫を盾に包囲網を展開していてこちらは長くは持ちそうにない」

「レットクリフ了解。支援砲撃は必要か？」

『周囲の瓦礫ごと吹き飛ばせるなら是非に』

「それはムリだが、後5分で到着できる。通信終わり」

通信が切れると同時に、ジエニスは再び部隊に進行を促して駆け出した。銃声が段々近くなるのを肌で感じつつ、彼は彼がもつとも得意とする魔法をマルチタスクを用いて準備を始める。レットクリフ隊の面々も言われずとも準備を始め、移動しながらすでに準備は整った。

『隊長代理。右前方、距離700の位置にある廃ビルに魔力反応を検知。IFFは確認されず』

「解った。俺が一発ぶちかますから——」

『後はド派手に突入すりゃいい、でしょ？』

『やることは出てくる敵はぶん殴る』が作戦か？』

「……もうそれでいい。とにかくクソヤロウ共をブチ殺すぞ！」

部隊全員から了解の意が籠った念話が帰ってくる。それを聞きながらジェニスはその速度を上げた。空を飛べない陸戦魔導師である彼らだが、足が着く場所であればその速度は決して空戦魔導師に劣るものではない。

速度を上げた事で敵までの距離が一気に縮まっていく。距離にして500、400とUSN正規兵ヘルメットのバイザーに映るHUDのカウンターが縮まっていった。

——そして、カウントが100を切った時、ジェニスは彼らは叫んだ。

「そこどけ消えろ今すぐにつ！騎兵隊のお通りだーッ!!」

『『『うおおおおおおおおおおおお』』』』

関の声に敵が一斉に振り返る。動揺を見せない敵はジェニスたちの存在に気付いて待ち構えていたのだ。敵は無能ではない。現に救援である彼等の接近に気付いており、レッドクリフの突入に合わせてバリアを展開している。だがそれでもレッドクリフ隊には関係なかった。魔力弾を発射しながら、ジェニス等は包囲網の一角に喰らい付いた。

「さあさ！お祭りの時間だよオ！お祭りに必要なものはなんだっ?！」

ジェニスはそう声を張り上げながら、予め準備しておいた魔方陣を展開する。

途端彼を包み込むように、小さな黒い魔力スフィアがその姿を現し、拳程度の黒い球体が、戦場にばら撒かれた。

半ば撃ち捨てのようなその球体は、まるでゴムまりのように跳ね回り、そして――

「それは……花火だァ！ 炸裂魔法 フラグマイン 破片爆弾！ コイツは痛いぞっ！」

——その言葉と共に、大音響と閃光があたりを包み、戦場に大輪の華を咲かせたのだった。

ジェニスたちの突入により、輸送部隊を取り囲んでいた包囲網の一角が潰された。強襲にもめげず反撃してきたOCU部隊の攻撃を何とか防ぎつつ、レッドクリフ隊は護衛部隊とのコンタクトに成功する。

OCU側も救援が来た事を把握したのか、直ぐに包囲展開している部隊を動かして集結。レッドクリフ隊はその動きに反応し、直ぐに護衛部隊と合流、それに対抗する。これにより戦力が拮抗し、戦いは佳境に入った。

「ぐへえ…」

もつとも、初撃で敵を蹴散らして見せた男はぐったりとしていたが…。それもその筈で彼は残り魔力がギリギリの状態にあった。初撃で使った大規模魔法でかなりの魔力を消費してしまったのである。

勿論考えなしというわけではない。

「おい隊長代理。敵をぶん殴ってきたが次はどうすりやいい？」

返り血の付いた拳を下げながらデュラント軍曹がジェニスに駆け寄ってきた。そう、初撃でかなりの敵を削り、また怯ませる事で味方の進む道をジェニスは作り上げた。そしてその後は味方に任せただけである。これは決してサボったとかそういう訳ではなく、そういう風に元から役割分担されていたのだ。

なにせ、ジェニス少尉の元々の立ち居地は――

「おい特攻隊長さんよ？」

「あん？次は右翼側がヤベエからかち込んでつてオイ」

「解ったフオークを持つほうだな！」

「お前左利きだろ！逆だ逆！」

「解った！殺つてくるぞ！ウオオオオ！！」

「……やれやれ。あれだとどっちが特攻野郎なんだか」

――突撃隊長というか特攻隊長みたいな立ち居地だったのだから。

故に、最初から全力で魔法をぶち込むのが彼のスタイルである。その所為で動きが鈍る上に魔法が暫く撃てないが、そこはチームワークでカバーするのである。ジェニスは軍曹が雄たけびを上げながら、彼が唯一ちゃんと使える魔法であるシールド魔法を全開にブルドーザーの如く敵兵に突っ込んでいくのを見つつ、背中に担いだ金属の塊を手取る。

魔法が撃てないなら銃を持てばいいじゃないとばかりに、担いできたのは対魔導師用の銃器だ。それを片手にジェニスは瓦礫の影にもぐり瓦礫の隙間から敵兵を探した。

魔力がなくても兵士としては問題なく戦える、休んでいいのは死んだ時だけ。それがレッドクリフ隊の隊訓であった。

「ううう…」

「シツカリ！いま回復させます！」

そんなジェニスの隣では、負傷した兵士を衛生兵が治療している。一家に一台ではないが一部隊に付き治療魔法が使える魔導師が一人か二人帯同するのがUSN陸軍式である。緑色の仄かな明かりが魔方陣から零れ、その光に包まれた兵士の顔から苦痛の色が薄れていくのが見て取れる。

しかし、それは戦場において非常に目立つ行為。

「アブネエツ！」

ジェニスが気が付き、治療実行中の治療魔導師を慌てて引き寄せる。直後その魔導師がいた場所から小さな粉塵があがった。銃弾で狙われたのだ。

「隊長代理！ありがとうございます！」

「おいこらレンチャック！魔法使う前には結界魔導師つれて行って」

「それよりも治療が先です。早くしないと後送しても手遅れに——」

「あーもー解ったツ！ジム！トニー！ジャミング得意だろ！レンチャックを守ってやれ
！」

「イエッサー！」

聞き分けのない事に怒鳴りたいが、そんな暇も惜しいとジェニスは、近くにいた結界魔法に優れる仲間を衛生兵であるデビット・レンチャックにつけてやった。戦場での一番に狙われる治癒魔導師ならこれが普通なのに、目標重視型なレンチャックに内心呆れるジェニス。

とりあえずさつき撃ってきた敵に銃弾を返してやろうと、彼はアサルトライフルの残弾を確認しつつ、コッキンググレイバーを引いた。そんな時、空気を揺さぶるような振動をジェニスは感じた。それは波動、魔法発動時に起こる余剰魔力で起こる現象である。

だが、そういつたのは未熟な魔導師が魔力制御をミスった時に起こすモノ。些細なミスが死に直結するような戦場でソレをする者はいない。となれば、先ほどの振動はなに

か？

『こちらK-3！敵に増援部隊確認！自分達を座標に味方を引き込みやがった！魔力規模から複数のハイクラス魔導師もいると思われるツ！——クソツ！K-9とK-11が殺られたツ！こつちに——』

「K-3！通信が途切れたぞ！K-3！……くそ、ダメか。この念話帯を受信している全部隊へ通達！ハイクラスが出た！各員陣形を整えて応戦しろ！ボサツとしてると喰われるぞ！」

それはハイクラス、俗に言うエース級やベテラン級の上位魔導師が魔法を使った証明であった。ジェニス直ぐに傍受した短波念話を最大出力で近場の友軍へとリークする。その直後、近くの瓦礫が轟音を上げて吹き飛ぶと粉塵を上げながら崩れさった。

そして、崩れ落ちる瓦礫の噴煙の中を、蒼い光を纏う魔導師とそれを追いかける白いナニかが、飛び出すようにして出てくるのをジェニスは見た。蒼いのはOCUのハイクラスであろう……だがそれを追いかける白い物はなんだ？ジェニスは一瞬だけ困惑を覚える。白いモノは人の形をした何かだった。

だが魔法で操る戦術人形の傀儡兵にしては動きがスムーズであるし、無人兵器にして

は小さすぎる。今、眼の前でハイクラスを追い詰める白いソレは、銃と思わしき武器と盾を手にし、魔力光を発しながら地面を抉るような速さで駆け抜けている。

そして空に逃げたハイクラス目掛け、その見た目からは想像もできない俊敏さで白い奴が飛び跳ねた。一直線に迫る白い奴に対し、ハイクラスはシールドを展開。白い奴はシールドに弾かれる。攻撃が防がれたかに見えたが違った。敵の展開しているシールド魔法に何かが付着している。

大きさにして僅か十数センチあるかないかの小さな物体であったが、直後消されていないシールド魔法の表面で凄まじい音と光を放ち炸裂する。遠くから見ている方も一時眼が眩むほどの明かりと鼓膜に響く音、アレはスタン系のグレネードの光であった。

流石のハイクラスも至近距離では音と光を防げなかったのか、少しだけ動きが揺らいだ。秒にして僅か一秒。白い奴はその決定的な隙を見逃さなかった。弾き飛ばされて大地に降り立っていた白い奴は、魔法で収容しておいたのかワイヤーを取り出すと、それをハイクラスに絡みつかせたのだ。

そして、そのワイヤーを思いっきり引いた。

直後、空中にいた蒼いOCUハイクラス魔導師の姿がブレる。常人の目なら消えたと錯覚しかねない程の速度で、ハイクラスは直ぐ隣にあった廃ビルに叩きつけられた。それを可能にした白い奴の恐ろしい膂力と魔法の操作力を目の当たりにしたジェニスは

背筋が震えた。あれが敵だったなら、こちらは数分と持たないだろう。

「——つと、いけねッ！オリーブっ！ジェフっ！こっちに来いっ！」

別次元の戦いに見とれていたジェニスにはハツとすると、すぐに部下を呼び集め周囲警戒を行った。ここは戦場であり油断が死に直結するデスゾーンである。案の定、ジェニスが敵ハイクラスと白い奴の攻防に見とれている間に、敵の部隊が直ぐ近くまで迫っていた。彼は部下に指示を送ると、迎撃の為に瓦礫をカバーポイントに銃火器を構えた。

彼はその昔実戦教官が射撃戦において常にこう言っていたのを思い出す。『いいか？戦場ではカバー命だ』実に納得がいく話である。そんなしようなでもない事を思い出しつつ、ジェニスは手に持つライフルの射撃設定をバーストに切り替えた。バーストといってもビームが出る訳ではなく、この場合は三点バーストといって連続で三発撃てるモードの事である。

瓦礫を盾に覗き込んだドットサイトに敵の姿を捕らえて、ある距離まで近付いた瞬間、発砲。タタタンという振動が彼の肩を揺らす。銃撃はOCU兵に命中するが、彼等の纏うBJが銃弾を弾き返した。フィールドタイプのシールドが機能していればライ

フル弾はそうそう貫通しない。

しかし、対魔導師用に調整された大口徑ライフルのストッピングパワーは、その動きを制限するには十分すぎる威力を持っていた。ドットサイトの中でたたらを踏んだ敵兵を見たジェニスは好機とばかりに、ライフルを片手で保持したままで、空いている手で腰にマウントされた武器をすばやくスイッチし構える。

構えられたソレは実に奇妙な形をしていた。形は拳銃に似ているが、拳銃より二周り大きく、また本来銃身がある部分は御椀型にふくらみを見せ銃口が存在しない。それもその筈で、ジェニスが構えたそれはそもそも銃ではなく、G12小型擲弾投射機と呼ばれる個人携帯火器の一つであった。

ジェニスが躊躇なく引き金を引けば、カシユンとガスが抜ける独特の音と共に御椀型の膨らみが飛び出した。御椀型のソレは丸い形をした弾頭であり、放物線を描いて敵兵へと飛翔し：照準が甘かったか、弾頭は敵兵の直ぐ手前に落着する。

外れたか？——いや違う。

「…ポーンっ」

ジェニスが呟くのとほぼ同時。対人弾頭のセンサーがOCU兵の反応を感知して起動。直後地面に落ちた筈の擲弾が再び宙に浮かんだかと思うと、炸裂。周囲に音速の玉を撒き散らした。たまらないのは傍にいたOCU兵だ。全方位に放射されるベアリングを回避する事は出来ない。シールド魔法もバリアも間に合わず、全身にベアリングを浴びてBJに穴があいた。

しかしそれでも敵兵は立っていた。一人くらいならミンチに出来る殺人爆弾でも、魔導師の前では致命傷を与える事はできない。だが、いかにBJであっても衝撃は伝わる。一定以上の衝撃が与えられたそれは、袋に入ったトマトを潰すようなもの。擲弾を受けたOCU兵は：アツと声を上げたかと思うと、目をグリーンと裏返し意識を失った。

それを逃す友軍はない。直ぐ近くでジェニスをカパーしていたオリーブ・フォレスト伍長とジェフ・ゾーン上等兵が倒れた敵目掛け、あつという間に魔力弾の火線を形成する。爆弾でダメージを追ったBJは、弾幕の如き魔力弾に対して脆弱となり、見る見る内に穴が広がったかと思えば、直後、ジェフの放った直上から強襲したクロスファイア・シュートによって脳天から貫かれ、絶命した。

『ジェフがワンキル！ワンキルッ！』

「いいぞー！もつと殺れ！——うおつそおいッ！」

ジェニスは念話を送るのと同時に残り少ない魔力でシールドを形成した。直後シールド魔法を展開した頭上から、雪崩の様に誘導魔力弾が降り注いだ。瓦礫は銃弾や射撃魔法の盾にはちようどいいが、誘導魔力弾とかには盾にならない。その為ジェニスはやつべやつべと呟きながら頭を抱えて瓦礫から飛び出し、無様に転びながらもすばやく近くの傾いたビルの際に飛び込んだ。

隠れた方がいいがビルの際には袋小路。ゲツと息を漏らす暇もなく、再び魔力弾と銃弾の雨あられがジェニス目掛けて襲い掛かる。先ほどの攻撃で厄介な敵と思われたか、心なしか火線がジェニスに集中していた。目立つんじゃないかと内心悪態を付くも後の祭り。彼は金属製のデカイゴミ箱に身を隠し、コンクリートを掠めて出た粉塵を頭から浴びた。

『隊長代理！』

「は、はやくなんとかしてくれっ！ししし、死んじまう！」

情けない声を出す、仕方がない。なにせほんの少しだけゴミ箱の陰から覗かせたヘルメットに魔力弾が掠めたのだ。HUD機能が死に、何でと思いいヘルメットを外してみ

れば、魔力弾が掠めた場所が溶けている。ジェニスは使えなくなったヘルメットを投げ捨てながら自身のBJの強度を上げようとした。

その時、彼の頭に硬いものがぶつかった。BJのお陰で痛みは感じなかったが、落ちてきたモノを見たジェニスは背筋が凍る。丸い形状、拳よりも若干大きく、チカチカと赤く光るランプと電子音が鳴るそれは敵が使う手榴弾。USNが使うパイナツプル型と異なる爆弾はジェニスの反応を感じたのか、電子音が止まると共に炸裂した。

叫ぶ声も上げられない。爆風に吹き飛ばすのは慣れているが、それでも苦しみは消えない。

BJは魔力で編み上げる非常に優秀な防御服である。その防御力は一般兵用のコンバットアーマーを5枚重ねにした時よりも上だといわれている。当然ジェニスも魔導師なのでBJを纏っていたが、手榴弾が発揮した至近距離での爆風は、全身を打ち据えて吹き飛ばすには十分な威力を誇る。

やった事をやり返された気分ってのはこういう事なのだろう。ジェニスは袋小路から無理やり弾き飛ばされて、無様に地面を転がった。怪我は、ない。BJの機能がしっかりと機能している。だがそれでも多少ふらつく程度のダメージは受けていた。ジェニスは起き上がろうと頭を上げかけた。その時――

「……うげ」

——こちらに杖を向けている、先ほど白い奴に倒された奴とは違うハイクラス魔導師の姿を視界に捉えていた。

展開される魔方陣。高まる魔力。間違いなく砲撃魔法。やばいやばいと焦る思考と冷静に分析する思考の両方が告げる。逃げろと。どこに？どうやって？考える暇もなく、ハイクラス魔導師の魔方陣が光り、先端にあつた魔力スフィアが砕けるようにして怒涛の魔力の本流が五条、彼を？みだまんと流れ出した。

ジェニスには迫るビームの流れが非常にゆつくりと見えていた。だが身体が動かない。魔法も唱えられない。本能で解る。何をしても間に合わない。ジェニスは遂先日亡くなった自身の隊長の死に様を思い出す。アレは綺麗に胸を撃ち抜かれて死体袋に詰められていたが、自分はこのままだと死体も残せない。

まア、葬式してくれる家族はいないが……と自嘲しながら、視界一杯の光を眺めていた。——しかし、ビームが命中する直前、何かと彼と砲撃魔法との隙間に飛び込んだ。

ゆつくりと動く視界の中、それは腕につけた平たいものを光に向けて構える。直後、激震、轟音。砲撃魔法が万物を焼き尽くさんと、肌を焦がすような熱量でぶつかつた光流は、間に割って入つたそれを基点に四散しながらも、ジェニスの直ぐ横にあつた瓦礫

を融解させている。

だがそんな爆炎と熱線が織成す嵐の中で、ジェニスはまだ生きていた。割り込んできたソレの影にいる彼は、砲撃魔法によって焼き尽くされる事を免れたのだ。いま彼が見ているのは、とても……とても小さな人間の背中だった。

その小さな人は、ジェニスと砲撃との間に割り込んだ小さなそれは、全身を装甲で覆われていた。その半身を隠せるくらい盾の上に幾重ものシールド魔法を重複展開させ、小さな人の身体を後退させるほどの威力を持つ砲撃魔法を押し返さんとするかの如く、腕を交差させて光の奔流に耐えている。

その小さな人の正体……それは先ほどハイクラス魔導師を単騎で片付けた。あの白い奴の姿であった。信じられない光景に、だがソレでいて目の前にいる子供ほどの大きさの背中を見たジェニスは、どこか守られているという安心感を感じていた。

……いやいやまてまて、なにをバカな事を思っているんだ俺は。

ジェニスはふと思い浮かんだ考えに思いつきり頭を振った。そりや確かにピンチではあったが、それを助けられたからといって……とか考えている間に、砲撃魔法はみるみると細くなり、遂には消えてしまった。インターバルに入ったのだ。周囲から相変らず

弾丸が飛んでくるが、気がつけば白い奴と自分との周りにバリア魔法のプロテクションが張られており、銃弾を防いでいる。

「……………無事だな？」

そして白い奴が声を発した。ジェニスと白い奴の見た目から、もしや傀儡兵の一種ではないかと思っていたので少し驚いた。驚愕の顔をするジェニスを前に、白い奴は手に持った銃のようなデバイスのカートリッジマガジンを取り替えている。

「あ、ああ。あ、あんたは一体？」

ジェニスが、搾り出すようにして発した言葉。

聞こえていたのか、白い奴は頭をジェニスに向けると、こう返した。

「……………フェンと呼ばれている。後は任せろ」

直後、白い奴…フェンは姿勢を低くすると、ローラーを使い急速にその場を離脱。周

辺に固まる敵に魔力弾とどこかで拾ったライフルの銃弾を浴びせつつ、ジェニスたちレッドクリフ隊の視界から離れていく。

その後、駆けつけた仲間に助け起こされるまで、ジェニスは少し放心状態のようにフェンが立ち去った方向を見つめていた。

「フェン…フェン？」

「おい隊長代理。大丈夫か？」

「まさか…いやでもサイズの…」

「おい！」

「うわっ!?なんだ軍曹!?敵か?!」

「敵地だってわかってんならぼうつとするな!杖もって戦え!つーか次はどうすりゃいい!」

「どうするって…」

何時の間にか戻ってきて、ジェニスを支えているデュラント軍曹に、ジェニスは一言。

「……あの白い奴の食べ残しを平らげちまおう」

フェンの方向を指差し、そう呟いたのだった。

「まさか、こいつらがねえ…」

sideフェン

「はあ…」

先日の戦闘、そして初めての实战。敵部隊との戦闘。何もかも初めての経験だった。そして何時かこうなるだろうと思ったが俺は童貞を卒業した。ヒトゴロシと言う名の童貞である。別の意味に聞こえた人は出頭しなさい。母上直伝の訓練メニューつけてあげるから。

そう、俺は遂先日、配属先に向かう途中で巻き起こった戦闘において、初めて人間を殺めた。それも一人や二人ではない。両の手で数え切れない程の人間をこの手で消し飛ばしたのだ。一人殺したら犯罪で十万人殺せば英雄と、前世における偉大な映画俳優が言っていたが、俺もその仲間入りと相成った訳だ。

人を殺したのは堪えたのだが、それよりも本当に辛かったのは “ 自らの手で殺した実感がわからない事 ” であった。確かに俺は人を殺した。兵装デバイスのアルアツソーを撃ちまくって敵を穴だらけにし、高所から落ちた時用に格納領域に仕舞っておい

た非常用ワイヤーで敵を捕らえ、ぶん回した拳句ビルにたたきつけた。

だが、戦っているその時は何も感じなかった。感じる事が出来なかったのである。戦闘中の俺の思考はひどく冷たく覚めており、敵という人間を血の詰まった袋程度の感覚で効率的に処理していた。

何とか守れた輸送部隊と共にセスル基地に行き、その日の内に見事なスキンヘッドをした黒色人種な司令官に挨拶をして、とりあえず疲れているだろうって事で与えられた部屋に行きベッドに座った時、俺はようやく人を殺めた事を自覚し：吐いた。部屋にトイレ備え付けのユニットバスがあつて本当に良かったと思う瞬間だった。尉官万歳。

ともかく、あの時は酷かった。新兵特有の興奮状態が消えた直後、手は震えるし頭は痛いし嗚咽が止まらないし：拳句の果てには、自らが殺してしまった名前も知らない血まみれの敵兵が俺の事を罵り、さらには両の手が血でべつとり何ていう幻覚まで見えた。

まるで映画だ。廃人が見るような幻覚だ。これまで培った精神力と我が片腕で相棒であるヴィズが拙いながらも俺を励ましてくれなかったら、今頃重度のPTSDになつてたかも知れない。そう思うと色んな意味で危なかった。本音を言えばこつちとしても別に人殺しに慣れたい訳じゃないんだけど。ほら、こんなご時世だしね。

あん時も後で捕虜にすればよかつたとか思つたけど、相手も殺す気で来ていたからな

…。初めての实战で手加減とかなんて出来る程…俺は強く無かったよ。

ただ、ちよつと気になるのが、情けない事に吐いて軽い錯乱状態になりながら、居もしない誰かに許しを請う姿を誰かに見られたっぽいんだよな。ドアが少しだけ開いて、誰かが走る音が聞こえたし。今のところ変な噂は聞かないし、次の日からはちゃんと胸を張って新しい部隊の隊長として振舞ったから多分問題ないとは思うが…。

そこで次の日。目覚めは最悪だったが、自分の率いる部隊の初顔合わせだという事で、俺は気を引き締めて事に臨んだ。軍隊だし、さぞかし厳つい面々が揃っているのだろうなと思っていたが、案の定筋肉の塊みたいな人が沢山並んでいたのには、内心密かに面食らった。

一応女性もいたけどメスゴリ…げふん、もとい女性ビルダーみたいな立派な体格の人が多かった。その威圧感は形容しがたいものがあり、正直ちびりそうだったです。けど持ち前の無表情の所為で誰にも気付かれなかったぜひやつほー！…お陰ですつとみんな怖い顔だったから、無駄に精神が削れたけどな。

それは於いておいて、紹介された部隊の人たちだが何か見覚えがあるなアとぼんやり眺めていたら、副官さんの顔を見てバツチン思い出した。この場にいる全員がこの間の戦闘の時に救援に駆けつけてくれた部隊の人たちじゃん。

しかも俺の副官になる人は、昨日の戦闘でたまたまピンチだったのを見かけたから助けた人だったので二度吃驚。思わずあつ…つて声漏らして指差ししてしまった俺は悪くないと思う。だれだつて見たことある人がいたらそう思うだろ？

まあとにかくそんな感じで彼等の隊長になって一週間が経過した。俺のようなガキが隊長だから、命令を聞いてもらえずにお飾りにされるのかと思っていたが、やってみると意外な事に普通に過ごせている。キチンと指示を出せば命令に従ってくれるし、それに対する文句を聞いた事はあまりない。

それもこれも副官のジエニスとか言う少尉さんが、部隊運用初心者の俺を結構フオローをしてくれるからだ。いい部隊に配属になったと思つたもんよホント。

もつとも最初こそ少しギクシヤクしてたんだがね。そりゃこんな子供に指揮権があつて、部隊に命令を下せば大人なら困惑するだろう。ソレばかりは仕方ない事だと割り切つて、俺はみんなよりも常に前に出て戦つた。

それからだろうか？徐々に皆に優しくしてくれるようになったのは…でも何と言つても、ある出来事があつてから急に仲良くなれたんだよなア。

ちなみにその出来事は何かというと——

基地に配属され、顔合わせをした更に次の日。俺はレッドクリフ隊が生活している兵舎に向かっていた。着任して直ぐであったが、部隊長不在の間に溜まった書類などの仕事について、それまでどうしていたかを副官に聞きに行ったのだ。引継ぎつてのは大事な事なのである。

しかし残念ながら副官たるジェニス少尉は自室にいなかったのだ、恐らくは兵舎にいるだろうとあたりをつけてそっちに向かったのだ。なんでそう思ったか？自室と部隊がいる場所以外に屯できる無駄な場所なんて、この基地には存在しないのだ。ぶっちゃけっていうと大人の遊び場がないのである。

「…すこしいい？」

「なんだア…って中尉（の階級）!？」

「敬礼はいい、レッドクリフ隊の兵舎って、どこ？」

とはいえ何もない基地といえど、駐屯している部隊はそれなりにいる為、レッドクリフ隊の兵舎の場所がわからない。なのでその辺の兵士に階級見せてながら道を尋ねて歩いていった。俺の場合、幼い見た目だから、こうやって階級を見せないと話が進まない

事がある。その回避方としてソフィア教官から習ったやり方だ。

縦社会の軍隊では効果ありなのか、名もなき兵士くんは困惑を隠せないながらも、俺を兵舎の前まで案内してくれた。まア年齢一桁に見えて中尉の階級持ちなんてこの基地じゃ俺しかない。だからこそ芸当なんだろうな。俺は悪い意味で目立つんだもの。ともかく、そうやって兵舎の場所を突き止めてやって来たはいいのだったが――

「なに……これ……？」

『第3兵舎棟……棟とつきますが、これはUSN軍の仮設プレハブですね』

——なんとというか、前線の凄まじさというものを垣間見た。

プレハブなのはわかる。だがなんとというかそれは非常にオンボロだった。個室なんでもものはなく、中は三段パイプベッドが敷き詰められており、寝るための寝台以外に使われていないらしかった。更にはシャワーにトイレに洗濯室まで、全て外に丸出しの状態で設置されていたのである。

流石にトイレには戸板があつたけど、洗濯機は5台あるうちの2台は壊れており、シャワーなんて水道パイプに如雨露の先っぽっつけただけ。

え？USN軍って、こんなに凄まじい生活環境だっけ？

『記録によると、以前の兵舎は敵の奇襲攻撃でシールドが間に合わず大破した為、臨時に置かれた物のようですね。もっともこの状態は開戦の時からみたいです。敵の進行を食い止めるトラップ作りの為、連日工兵隊が出動状態なのも原因の一つかと』

ヴィズの説明及び想定を聞いて成程と納得した。ところどころ日曜大工レベルで手を加えた後があるのはその所為か。しかしシャワー丸見えとか、流石にこれは色々と不味いだろうとショックを受けた俺の行動は早かった。気がつけば俺は工兵課に足を運んでおり、何とかできないかを尋ねていのだ。

だが人手がないと追い返され、しようがないので司令のサインがいる書類を持って途中司令室に寄り仕事を終えた後、工兵課から工具だけを借り受け、資材課に行つて必要な材料だけを貰い、それを使って一人ピフォーアフターを行つてみたのである。

日ごろからデバイスはもとより、兵器の修理までなんでもござれな俺ならピフォーアフターくらい朝飯前。足りない資材は、鹵獲して研究した後、適当に打ち捨てられた敵の無人兵器から引つpegしたりして工面し、色々工夫を凝らして作業を頑張った。

その後しばらくして、何という事でしよう。戦場で必要最低限どころか最低だったプレハブ小屋が、ものの一時間でシャワールーム&コインランドリー完備、更には匠の遊

び心溢れるエアコン付き豪華プレハブに生まれ変わったではありませんか。自分でやってみてドン引きであるが、住処の良し悪しで士気が上がるなら安いものだろう。

「……………これは一体……………なにをしたんだ？隊長さんよ？」

いい仕事したぜ、と内心ムツフンと息を吐いていたら、背後から声を掛けられた。見ればジエニスを含めレッドクリフ隊の皆さんがあんぐりと口をあけてプレハブを眺めている。

「ン……改装……？」

なんでもないように言ってみたのは、隊長として頑張っているというちよつとした意地という奴である。もつとも隊長はビフォーアフターなんて普通はしないけど。それに弄くつたのはガワだけで中身は変わらないから安心してくれ。

俺の言葉を聴いてジエニスは何故か頭を抱えている。なんで？

「隊長さん。こんな事したら撤去の時に移動とか出来なくなるじゃないか。大体こうい

うのはしかるべきところに許可を得ないと」

「……………これ」

「え?……………司令の許可状?」

「ソレくらい言われなくても抜かりない。あと…撤去に関しては、問題ない」

「おいおい。何言ってますか?こんな大きくなったら持ち運べないでしょう?」

「見るがいい。USN軍脅威の技術力を…(ポチツとな)」

「へ?何を言つて——ハアアアツ!?みるみる内に外付けのシャワー室が!」

俺がプレハブ外壁に取り付けられた、黄色と黒の縞模様に囲まれている赤いスイッチを、これ見よがしに押してやると、ガシヨンガシヨンと音を立ててシャワールームとコインランドリーが折り畳まれ、収納の匠も吃驚な程平たくなり、プレハブの壁の一边に収納された。USNというか父上から受け継いだ技術力は世界一い!

「これで、運べる。でしょ?」

何か問題ある?見たいな感じにジツと副官を見つめるが、驚きすぎたのかあごが外れそうなくらいにあんぐりとして俺の視線に気がつかない。あれ?俺対応間違えたかな

?

「あろう」

呆然としちやった副官の反応にどうしようと思っていると、今まで声を発していなかった女性隊員の一人が俺に話しかけてきた。何とばかりに首を向ける。

「これって、お湯でますか？」

「でるよ」

え？だってシャワーって普通お湯でしょ？JK。
そう口に出す前に俺の視界が真っ暗になった。

「ありがとー小さな隊長！」

「ぐえ……！」

なにせその女性隊員にガバチョとばかりに抱きしめられていたからだ。なんでも今

までの水道直結だったから水しか出なかったんだと。ハフマン島が暑い島とはいえ、温かいお湯で汗を流したい欲求は女性ならひとしおだったらしく感謝されたのだ。同じく少ないとはいえ我が隊に属する女性隊員と、一部の男性隊員に熱い抱擁をされた。とはいえ、女性隊員の殆どは二の腕がムキムキなアメリカンな体格をした人達であり、嬉しさのあまりハグをしてきたのはまだいいのだが、強化魔法を使っていない俺の身体は、その辺の少年とそれほど変わらない訳で…。

「オイ！オリーブ！小さな隊長の顔が青くなってるぞ！」

鯖折りの如く締め上げられた俺は息が出来ずに、昇天一歩手前まで行ったのだった。

「え!?!衛生兵っ!！」

「叫ぶ前に締め上げるのをやめてやれよ…ん?なんか隊長ブツブツ良い始めたぞ」

「——大きな、川…渡し守…カロンさん?渡し賃、いくら?」

「ちよっ!その川は渡っちゃダメだって!というかこれで死んだら俺が司令に殺される!戻って来いッ!」

——まあそんな事もあり、ちよつとだけ彼等と打ち解けられたつて訳だ。

ん？なんか回想で死に掛けてなかつたか？甘いな。俺の母上との訓練経験だと、あのレベルならまだ戻つてこられる範疇さ……あれ？視界がちよつと滲んでるなア。それより俺の顔が青くなつた時のジエニスの焦りようは結構笑えたぜ。ケケ。

あ、ちなみにこのプレハブの出来が見事だつたから、あとで司令に図面作つてレポートを纏めてから提出つていう宿題を出されたのは大変だつた。なんでも技術部に上げて、兵の生活向上に役立てるとか……あれ？俺なんかヤラかしちまつたかな？

ともあれ、この一件以降、俺はどうやら便利な奴と認識されたらしく、また普段の哨戒任務でも誰よりも先頭に立つて働いた事で実績を示し、彼等との溝を埋める事に成功したのである。人間頑張れば少しは認めて貰えるつてことだろうね。

んで、俺はいま部屋にて書類整理に追われてる。隊長つてのは事務作業も給料のうちだからな。ウチのところは優秀な連中が多いのか、他のところに比べたら少ないほうらしいが……多い。

「はあ、7歳児にやらせる量じゃないな……」

『マスター、お気を確かに……』

「まあまあそう腐らずに中尉。俺たちも手伝いますから」

「そうそう」

「…と言いつつ、ソファアでくつろいでる奴等に言われたくは無い」

ところで何でだか知らんが、最近俺の部屋は小隊連中が屯するところになっちゃまった。なんだかんだで、よく書類整理を手伝って貰えるから助かっている…けどな。

「コーヒー飲む人ー？」

「「はーい」」

「…それ、俺の…私物」

俺が家から持ってきてチビリチビリ大事に飲んでるコーヒーや紅茶を、極自然に消費するんじゃない！幾ら隊長職でも前線ですういうの手に入れるのって大変なんだぞ！
まったくもう。

「あ、ごめん隊長」

「うん？」

「全部つかっちゃった」

「……………えっ?!」

さて、書類仕事を適度に終らせてちよつと気分転換に部屋から出て散歩中。途中なのに外に出たのは、決して終わらない仕事に嫌気が差したからではない。人間集中力を持続するためには時折休憩も必要なのだ! ……はい、実は家から持ってきた私物のコーヒー全部アイツらに飲まれてうわーんと部屋から飛び出しただけです。

別に泣いてないし無表情だったけど、心情はまさにソレである。今の今までヴィズの格納領域に隠しておいたのに、こんなに早くなくなるなんて…。迂闊に手伝ってくれた連中に振舞うんじやなかった。一人内緒でちびちびやれば良かったよホント。

なんともいえない気分を紛らわしたくて、俺は自分が配属されたセスル基地の中を散歩してみる事にした。この基地は駐屯地という事もあり、それなりの規模の基地として作られている。都市部にあるので長方形に近い土地面積を持っており、隅にあたる場所には監視塔にあたる建物が建っている。

この監視塔、外向きにかなりの精度を誇る速射砲が取り付けられており、更にはこの

四隅にある監視塔が主要魔法シールド発生器の役割を果たす為にかなり頑強に作られた強固な建物でもある。たまに制空権の隙間を縫ってやってくる爆撃機なんかの爆撃をこれで防げるらしい。配属されてから一度も見ていないから良く知らないけどね。

基地と周辺の市街地はフェンスと金網で仕切られている。非常時には金網近くまでシールド魔法が降りるので、物理的な壁は予算の無駄だという事で作られなかったらしい。フェンスの直ぐ近くには車両や無人兵器用のハンガーが軒を連ねており、近くを通るとオイルやガソリンなどの臭いがする。中では整備士たちが出撃して帰ってきた無人兵器の整備に追われているようだ。

他にも武器庫やら倉庫やらが連なり、あとはグラウンドの様に開けている。これら設備のほぼ中央にはこの基地の中核である司令部が、ドンとその存在感を余す事無く發揮して腰を据えている。この基地の中で一番立派というか強固な造りである司令部は、非常にバンカーになるように設計されているからか、地下に発電施設などの主要設備が集中している。バンカーバスターにも負けないぜ。

後は：通信塔がドンと立っている。赤い鉄骨のドデカイ奴が司令部に隣接してどっしりと構えている。多分戦闘がここまできたら真っ先に狙われるんだろうなア。目立つし派手だし：まアこれがセスル基地の概要である。これ以外はホント何も無い戦う為の場所といった感じだ。

娯楽設備が全くないのは、そういったのを基地の外に依存していたというのもある。ハフマン紛争が開戦した事によって、周辺の市街地が破壊されたから、娯楽を提供してくれる人々もいなくなってしまうたので色んな意味でここは非常に退屈な場所でもある。

それ以前に戦争しているから娯楽に興じる暇もないんだけどね。どちらにしろ俺の年齢だと絶対にその手の娯楽には行けないから、俺にとつてはあまり代わらないけどね。中身だけならオッサンに手が届くのに…なんでもつたいない。

《——ガンッガラガラ》

「……？」

俺がブツブツ文句を垂れながら基地を取り囲うフェンスの傍を歩いていると、フェンスの向こう側から何かが落ちる音が聞こえてきた。音のするほうに目を向けると、廃ビルの中から二人ほど子供が顔を覗かせていた。

一人は12歳くらいの男の子。その後ろで男の子の裾を掴みながら付いてきている子は男の子よりは年下であろうが、今の俺よりかは年上…まあ大体9才かそこらだろうが…女の子がいる。多分、難民の子かな？ここいらで子供がいるなんて難民キャンプく

らしいかないだろうし：俺は勘定に入れない。だって兵隊なんでもん。

俺が眺めているとも知らず、彼等は廃墟の中を行ったりきたりして、時折何かを拾っては手に持っているダンボール箱にいられている。表情から察するあたり、空爆などで瓦礫に埋もれてしまった物資を拾い集めているのだろうか。そういえば輸送隊で聞いたところだと、難民キャンプに届く物資はギリギリであるらしい。彼等がああやって廃墟を行ったりきたりするのも、生きていく為に行っている事なのか…。

俺とは違うベクトルで戦っているんだ。そう思うと少しだけ彼らに対して憐憫の心がふつつつとわいてくる気がした。そう考えるだけでも本当はとも失礼な事なものと解っているのであるが、表情には出ない：というか出せないので安心して欲しい。ともかく、俺達が敵を倒す事に熱心な様に、彼らも日々生き残る事に熱心であるという事を、この光景を見て理解できた俺であった。

そんな訳でしばしの間フェンス越しに彼等の働く姿を眺めていた。見ていて気付いたのだが、彼等は主に生活用品を集め、たまに見つかる食料などはその場で食べている様だった。生活用品はマーケットがない現状、自力で掘り返すしかないから貴重品である。食料は：まあ育ち盛りだしな。沢山食べたいだろうに…。

しかし、コールドパール航空基地で見たあの沢山の物資はこういう難民キャンプに行き届かないんだろうかね？コンテナ一つ分あれば節約すれば三日は持つと思うんだよ

ね。あ、でも確か輸送されている物資って殆どが砲弾とかの弾薬だったか…なんで知っているかっていうと、航空基地で司令部に呼び出しされた時、その事務室の近くで待たされてたんだが、あいにく待合室なんていういい場所がなかったんだよな。

でも待つている間暇なので、仕方なく暇つぶしに事務方の書類を遠くから覗き見していたって訳。身体強化魔法の応用で視力を強化していたので、細かい文章までよく見えたんだが、その中の物資リストの殆どは武器弾薬であるっていう記述があつた子とを思い出した。

確か今のハフマン島は、北から南にちょうど線を引いたかの様に、島の中央で完全に分裂しているような状態らしい。OCUを押さえ込む為に日夜砲撃陣地は大忙しと噂で聞いていたが、その為に使われる弾薬の消費量が凄いつて事なのかも…あと考えてみれば俺が襲われたみたいに敵に輸送部隊が襲われる事もあるんだよな。基地に物資が優先されるから…難民キャンプで物資が不足するものもしょうがない事なのかも…。

ん？…あ、女の子が俺に気が付いた。なんか男の子の袖を引っ張つて俺のほうを指差してヒソヒソ話してるんだけど…ってどっか行っちゃったよ。なんだ？感じ悪い。

『マスター、そろそろ戻りませんかと終りませんかよ？』

……その前にお仕事しないと、ああもう面倒くさい。

S i d e 三人称

OCU、USN。この両者の対立により巻き起こったハフマン紛争。激化する戦争の中で両軍とも文字通り死力を尽して互いに互いを撃滅せんと、島を中央から半分にする形で戦っていた。

熾烈な戦闘。こと魔導師という局地戦における最大級の兵器の存在が、二次元的平方戦をさらに高度な三次元立体における空間戦にシフトさせるのにそれほど労力は要らない。陸戦を主とする陸軍、空戦を主とする空軍という枠があるとはいえ、魔導師の存在は既存の兵器とは違う世界を戦場に与えていた。

そして戦えば戦う程、お互いを潰しあう為に成長する。ソレが人間。ソレが魔導師であつた。相手が魔力弾を使えば、それをさえぎる防御魔法を。防御魔法が使われれば、それを貫くシールド貫通魔法を。さらには強力な魔導師を殺す兵器をといった具合に繰り広げられるイタチごっこは、古来から変わらない戦争の様相その物である。

故に、垂れ流す憎悪は底知れず、泥炭の如き浅黒さで蓄積していた。

とてもではないが、この思いやりが払底した世界で、ことOCUとUSNという大同士のこの戦争に、誰かが介入できる様には思えない。現にこの世界の国際連盟は両大国の意思によりねじ伏せられ、この戦争では役立たずのレットルを影で貼られる程の静観ぶりを發揮している。

官僚は定時に帰り、政治家は高級料理に舌鼓を打ちながら、戦争による経済情勢について話し合うか天下りの相談がされているとなれば、世界とはかも不平等であると理解のない者は言うだろう。

そんな世界であったが故か、ハフマン島においてUSNともOCUとも、まったく違う。ある種別の動きをしてるモノたちがいる事に、戦う者たちはまだ誰も気が付いていなかった。

——ハフマン島の北端にあたる原野に、今は廃棄された工場跡地が存在した。

それなりの敷地に分厚い壁を張り巡らせ、天高く伸びる巨大な煙突をはやしたソレは、かつてOCU主本の製薬会社が建築した建物である。この呆れた戦争が始まるよりまずと以前、経営不振から本社が倒産し、随分と昔に廃棄された施設であった。当然廃棄された場所である事だし、そこに人の気配は感じられない。朽ちてゆく廢墟。それ

がこの工場に割り振られるべき名称。

だが、経済不審で廃棄されたという、実に有触れた理由が伴う廃棄工場の中で揺らぐ光があった。魔の森の樹海の如き絡み合ったパイプが連なる空間の更に奥。今でこそ乾いているが、嘗ては膨大な量の水を溜め込んでいた筈の巨大な貯水槽。それに伸びる巨大なパイプの一つは、地上の工場のどこにも繋がっておらず、パイプの森の途中で海抜0よりもはるか地下へと、その巨体を潜らせていた。

そのパイプの中を行来するのはトラックの列だった。USNのコンボイ、OCUの武装トラック、第三国の廉価トラックまで様々な車種が勢ぞろい。まるで統一されていないソレは、まるでトラックの国際市のようにもある。そうここは廃棄された場所ではない。正しくは廃棄されてからも工事が行われていた場所であった。

いわば、それは秘密基地と呼べる場所であった。トラックがらくらく通り抜けられるようなパイプはそれだけで巨大なトンネルと化す。今は乾いた貯水槽は広大なVTOL用のランディングパッドに様変わりだ。今でもパイプに残された腐った薬液が熱を発する為、衛星の探査でも工場の地下に何かがある事には易々とは気付けない。

そして、この様な秘匿された場所を使うのは、往々にして後ろ暗い者たちだといえる。ここで蠢くモノたちは誰一人としてUSN・OCU双方のワッペンを着けてはいなかった。変わりに二羽の赤い鳥がすれ違うような意匠が施された「グリムニル」と第三国

で使われる言語が刺繍された紋章を貼り付けた者たちばかりである。

しかしその者たちを第三者が見れば異様といわざるを得ないだろう。行き交う誰もがキビキビと、まるで機械の様に働いている。しかし多くの者たちの目には光がなく、纏う雰囲気からも生きる意思というものが感じとる事ができない。

蠢く彼らはまるで大事なモノを置き去りにしてきてしまったかのように：そうでありながらキチンと仕事をこなすその姿はよりいっそうの不気味さを加味していた。動く死体、生きた屍、リビングデッドと称する方が相応しいと思えるような者たちばかりである、不気味である。

また、そんな彼等の多くは側頭部あたる部分に、大きさは様々であるが銀板のような板が皮膚に縫いこまれていた。明らかに外科手術により縫いこまれたソレは、小さいながらも時折発光してみせるので、彼らの異質さをより際立たせるのに一役買っていた。

そんなゾンビーたちがひしめく地下空間の中を闊歩する一人の男がいた。その人物は40代前半であろうか？若干後退しているくすんだブロンズをオールバックに、白色人種特有の白い肌を持つ彼は少し急ぎ足で通路を歩いている。彼は周囲の生きながら死んでいるモノ達と異なり、目には爛々とした輝きを宿していた。正し、その輝きは濁りに濁った泥水の如き混沌を孕んでいたが。

そんな彼は地下空間の一室に入り、大量のケーブルに繋がれた端末の前に座ると、端

末を操作し始めた。薄明かりの部屋。ディスプレイの明かりが煌々と輝き、男の顔を部屋の中に浮き立たせる。そんな男の顔は、口が三日月の様に開かれて、ひどくおかしく歪んでいた。

「フッフッフッフ——」

ディスプレイのデータを洗い流すかの様に流れる文字の群れを正しく理解しながら見続ける男が、顔をおかしそうにゆがめたままで——嗤う。

楽しそうに：面白そうに：。壮年男性の低音のまま、濁った声音で響かせる狂気に純粋な嗤い声を木霊させる姿は、完全な狂人という印象を抱かせるであろう。だが男はそんな事を露ほどもきにせず嗤い続けていた。

なにせ、彼にしてみれば笑いが止まらないのだ。自身の興味を満たす、ある種狂った欲望の為に人の道を逆走するように踏み外した男は、いままさに踏み外した人間が行うような研究を好き勝手に行っていたからである。自身の興味と合致する事をUSNともOCUとも違う国家に提示、支援を受けての研究はまさしく信じられない成果を上げていた。

今宵も男は歩く死体が聳く工場の地下で嗤い続ける。USN軍、OCU軍、そして周

辺の軍基地の人員リストが載ったデータを見ながら、男は嗤っていた。

「だんな。試作品が完成——あー、取り込み中なら後にしましうか？」

嗤い声で支配された部屋に今度は別の男の声が響く。赤毛の上からバンダナを被った男は壁をノックしながら入ってきた。赤毛の男は周囲にいるリビングデッドとは異なり、ちゃんと意思を持ち合わせているらしく、狂笑を響かせている部屋の主に對し、少し引き気味で語りかけていた。

「いや今すぐに見に行こう」

それに対し部屋のヌシはピタリと……まるで機械の様に嗤う事をやめると部屋の入り口へと歩き出す。入り口側に立っていた赤毛の男は部屋から出てくる彼に道を空けるとその後に続いた。

「それにしてもだんなが手がけたアレ。随分と儲かったですよ」

「ククク、試験も終えて廃棄処分した駄作達を上級の監視から隠れて君等がどう処分しようが私には関係ない事だがね」

「それでもSは傑作ツスよ。なんせこれまでの経験が直接生きてくる兵器はなんてのは裏じやいい値段になるんで」

赤毛の男は歩きながら自身の商売の話が続ける。彼が話題に上げたのは、目の前を行く金髪の男から貰い受けたモノで、本来失敗作として組織ぐるみで闇に葬られる筈だっ

たモノたちの話だ。秘密裏に処理される事を逆手にして、処理せずそのまま赤毛の男へと手渡し、その男の伝手で決してバレる事が無い場所へと売られたのである。

赤毛の男にしてみればマージンが入ってウハウハ。金髪の男は売り上げの金で自身の私的資金を作れるとあって、ビジネスとして成り立っていた。

「ただ記憶障害で人間性がドンドン失われてアホになる事は文句言われましたがね」
「フム：仕方あるまい。あれはあれで失敗作だ。基礎理論だけで構築すればああもなる」

金髪の男は赤毛の男の言葉にどこか呆れた色を混ぜながらそう返した。

彼が作り上げたソレは初期の基礎理論を検証する為だけに作ったモノ。より高次的かつ彼の目的に見合ったタイプを作り上げた現状では、前段階の手法で手がけたソレは失敗作の烙印を押したも同然だった。

「もつとも君達にとつては都合がいいのではないかね？記憶欠落が進めば、その分扱いやすい」

「殺戮機械になるって意味なら。単体戦力なら一騎当千になるんで」

「最近のはまだマシだがね。アルバムでも持たせておけば事足りる。第一アレの利点の前では人間性の欠落などは問題ではないのだよ」

そう、彼が構築したそれらの利点は、そのような些細な事は度外視できるのだ。暗に

そう語る金髪の男の背中を眺めながら赤毛の男はふーんと軽く返し、ふと気がついたことを口にする。

「ところでだんな？なんか機嫌よさそうですが、なんかあつたんですか？」

「なに。『異邦人』というべき君等がもたらした新たな技術を使うことで、私が思い描いていたプランがペーパープランとデータだけで終らず、実際に存在できる物へと変わる事に年甲斐もなく喜びを覚えたのだよ。腐つても人間というだけなのだがね。人間性はどんな存在にも宿るようだ。しかもだよ？もう直ぐ検体も複数確保できる。思わずダンスでも踊りたいほど嬉しくもなるのだ」

「だんなが楽しそうで何よりだ。だんなが更に良いモン作って、それを高く売る。そしておこぼれで俺達が儲ける。実に良いビジネスもあつたもんだ。管理局の手を逃れてここまで足運んだ甲斐はあるつてもんでさ」

「そうかね。ところでこの間の補給でいい物を手に入れてね。君もどうかね？」

「おお！だんながそういう事を言うなんて初めてだ！」

「あとで私の部屋にくるといい」

酒とは一言も言っていないがね……と口の中で呟く彼に赤毛の彼は気がついてはいない。そろそろ移動したいと思つていたところだし、ちようどいいのかもしれない。そんな事を考えていた男であつたが、急に視界が狭まったかと思うと足をもつれさせた。

「……ぐっ」

「だんな？急にどうしたんで？疲れたんですかい？」

「どうだかね。かれこれ一週間ほど研究に没頭していた私はまだ元気だ」

「それ元気って言わねえ…休んだほうがいいんじゃない？」

「いや。大丈夫だ。すまない……フム、この個体も、もう限界のようだ」

「だんな？なんか言いましたかい？」

「なんでもない。それでは実験室に向かおう」

赤毛の男はヘイと返事を返すと男に従った。こんな陳腐な男が世界の壁を越えてきた犯罪者だと誰が気付くだろう。後に彼はただのリビングデッドに成り下がるのだが、それはまた別の話。

——モーガン・ベルナルド。国際指名手配されたテロリストは、今はまだ闇の中。

「こつこつて最前線だよな？アルエ？」

sideフエン

配属から二週間が経過しそれなりにこの生活にも慣れてきた。人間住めば都というが、まさしくその通りで環境適応能力つてスゲエと思ひ始めている今日この頃である。

そんな俺のいる部隊の仕事は、もっぱら偵察任務かスクランブル要員の待機任務だ。偵察は監視ラインを超えた敵とかを探す仕事なので割りとは大変で遣り甲斐がある。…が、待機は文字通り敵が侵攻してきたりするまで待つ簡単なお仕事である。

——ぶつちやけ前者はともかく後者は暇だ。

基地に設けられたPXで何かあった時に直ぐに出撃できるように待機する。勿論デバイスは準待機状態にしてあるし、直ぐに出動できるように装備を着たままにしてあるが、長時間ハラハラしつゝ勤務時間が終るまで待つのだ。これ程心臓に悪い職務つてあるのだろうか？

さて、この流れから解るかと思うが今日はその待機任務なのだ。朝からずーっと装備を着たままPXの一角を占拠する筋肉ムキムキマツチョマンの集団…これだけで犯罪

臭がヤバイが、それを率いているのが子供となれば、それってどこのコミック?と問われそうな感じである。

一冊は5USNDドルだよ。冗談だけど。

くだらない冗談はさておき、前にも言ったがこの基地に娯楽と称するものは何も無い。あるとすればテレビくらいだが、戦争真っ只中なのにテレビ局に人が居る訳ないし、そうなるも頼みの綱は衛星放送しかない。

だが、それもこの基地の誘導ミサイル対処用ジャミング装置が常時働いている所為でノイズしか映らなかった。それ以前に衛星用のアンテナが無い。これじゃあ産業廃棄物同然である。くそ、カートウーンくらい見せやがれってんだ。テレビすら使えないという事に対し、そんな悪態を付いたのも良い思い出です。

だから、ウチの部隊の連中も暇なので思い思いに暇つぶしを行っている。例えばカードゲーム：普通にトランプであり金を賭けているようだ。他にはボードゲーム：ぶつちやけチェスだけど、そういうのを使って時間を消化している。考えてみると違う世界なのにトランプとかチェスとかのような遊具が似通っているってのも、なんだが妙な感じがするよなあ。

「あれー? チビ隊長はなにしてるの?」

「…新魔法構築」

各言う俺も暇つぶしに空間にウィンドウを投影して魔法を組んでいる最中である。術式の構築はいわばパズルのようなものであり、非常に乱暴な言い方をすればコレコレこういう術式がアレコレな効果を生む、それらを組み合わせでバランスを…といった具合。

これがまた奥深いなのって、1足す1が2になるのは一般的な算数での常識だが、術式の組み合わせ次第では1足す1が4とか10になったり、逆にマイナスに転化してしまったりする訳で、色々弄くついても空気がこないのである。俺が異常なだけかもしれないけどな。

「ふーん、やってておもしろい?」

「意外と」

「ほーほー。あ、こんな術式使ってみたら?」

「わお…良い感じ」

「お前小さな隊長さんとなにやってんの?」

「なんかチビ隊長が魔法組んでるから面白そうで」

「どうしたどうした?」

……あら?なんか他の連中が集まってきたぞ?暇はつぶせそうだな。

sideジエニス

PXの片隅に人が集まっている。その中心にいるのは我等が隊長殿だ。ついこの間、我が隊の隊長に就任なされた齡7歳のお子様隊長である。普通ならそんな事を言えば正気を疑われ病院で薬を処方されそうなどころなのだが、あいにく眼の前に現実として存在する以上、俺が異常なんじゃなくて他が異常なのだ。

「フラツシュだ!ジエニス今度こそ!」

「フルハウスだ。惜しかったな」

「げえ!……けつ!もってけドロボー」

「毎度」

隊長殿周辺が騒がしくしているのを横目に、大人な連中は「健全」なるポーカークをしている。今回も親の総取りになりそうな勢いである。カードを再び切りながら、俺は視線だけを隊長殿に向けて様子をうかがっていた。

何時もながらアレの表情は読めない。正確には表情を浮かべるといふ行為その物をどこかに置き忘れてしまったらしい。それでいて顔立ちだけなら目を見張る程のモノを持ち中性的である。なんだったか…:そう、ビスクドールだったか?陶器製のよく出来

ているお人形つてのはあんな感じなのだろう。

どんなときでも表情を変えない。完全なるポーカーフェイス。苦しからうが辛からうが、アレはそれを表に出す事をしないのだ。泣きも笑いもしない顔を見つめ続けると此方まで感情が消えていくような錯覚を覚える。それくらい、アレは異常なのである。

もつともそれはイコール嫌いという訳ではない。というか嫌いという面と向かってアレにイえる奴はウチの隊には居ないだろう。なにせ顔だけでなく身体全体を見れば：へんな意味じゃないぞ？：ウチの隊長殿は中々に表現力豊かなのだ。何か間違うと慌てて手足をバタバタさせるし、怒ると少しだけ眉が釣りあがるし、悲しい時にはシユンと頭を垂れるし：結構多彩だな。表現。

そんな隊長だが目に見えてこのレッドクリフ隊に馴染めたのは：自慢するわけじゃないが俺のフォローの所為だろう。

フォローしようと思つたきっかけは、確か隊長が就任した最初の夜だった――。

「はあ、どうしよう」

その夜、俺は小さな隊長殿の部屋へと足を運んでいた。昼間の輸送部隊の救援の中、敵の砲撃魔法の射線に出てしまった俺の命を救ってくれた件で、アレに礼を述べねばと

思っていたからである。

だが本音を言えば俺はこの時、まだアレを隊長と認めていなかった。というか昼間の戦闘の中でアレの戦いぶりを垣間見、その後に基地に帰還し任務をして興奮が冷めやり冷静になれた事で、敵のハイクラスと互角に渡り合ったアレがどれだけの異常性を孕んでいるかをよりはつきりと認識してしまったという事もある。

記憶に残っているだけでも、アレは躊躇という言葉をどこかに置き忘れてしまったかのように、淡々と…ポキヤブラリーが少ないから何と言えればいいか…そう、まさしく機械の様に敵を屠っていた。その事に安心感を覚えつつ、ソレでいて同じくらい恐ろしいと感じる俺は、まだ人間らしいのだろう。

これが相反する気持ちなのは重々に理解している。確かに俺はアレに命を救われはした。だが、同時に感じたその機械的な存在感への恐怖は既に記憶してしまっている。異常な存在に対する忌避感をこれほどはつきり覚えたのは後にも先にもこれが最初だったのだ。

だから、あの隊長に割り振られた部屋から、小さな嗚咽が聞こえた時、俺の心臓が跳ねたのは必然だったのかもしれない。

あの隊長の部屋は、様々な配慮から尉官宿舎の端っこに位置している。その部屋への廊下は照明の明かりが一部切れていて、その所為で昼間でも薄暗い。それが夜になれば不気味に映るといふ場所である。

考えても見て欲しい。そんな薄暗い場所から子供のすすり泣くような声が響いたら？

不覚にも戦場に出るのは別の意味で恐怖を感じた。ホント不覚である。

だが直ぐにその声の出所は隊長のいる部屋からという事に気がついた。昼間アレだけ冷酷なほどの戦闘力を見せた部屋からすすり泣く声？ホラー映画でも見ていやがるのか？——そんな程度にしか思えず俺は部屋のドアをノックした。

「レッドクリフ隊のジェニス・ホールデン少尉です。ラーダー中尉、いま少しよろしいですか？」

——返事は無かった。

相変わらず廊下に響くすすり泣くような声に段々と辟易してきた。大体どれだけ泣くシーンが長い映画なんだと勘違いした俺は何気なくドアの取っ手を回した。

《カチャ》

ドアは開いていた。部屋に鍵をかけないとは無用心過ぎる。考えたくも無いがこの基地には“そういう趣味”のやからも居なくは無いだ。特にあの独特な防護服を収

納した時に見たアレの容姿はそういうやからには涎ものだろうに…。

「……まさか」

嫌な予感がよぎる。よもやこの泣き声って…すでにそういう事なのか？

「ああもう、クソツタレ!」

返事は貰っていないが俺は悪態を付きながらも静かにドアを開けた。邪推かもしれないが、司令からくれぐれも壊すなどという言葉が賜っているのに、着任早々に変態の餌食にされて精神崩壊とか笑えなさ過ぎる。

つーかあの戦闘力だと逆上して返り討ちにしてしまい、良くて大怪我、悪いと殺してしまうかもしれない。そんな事態になったら、ある意味お目付け役の俺が司令に殺される。

考えたくも無いし見たくもないが最悪の事態も考えつつ、俺は確認の為に音もなくドアを開いて部屋の中を覗き込む。指揮官の部屋だが着任したてという事もあり、最低限のものしかないその部屋は薄暗い。部屋の照明をつけていないからだ。

ざっと見渡してみるが、そこに人影は無い。部屋に人影がないのに響く泣き声なんぞ、軽いホラーだと思つたもんだ。だがよく部屋を見ると、まるでこの部屋を分断するように一筋の光が漏れていた。光の出所に目を向けると、ユニットバスが置かれた個室の隙間から光が漏れているらしい。

そして、すすり泣く声はそこから響いていた。どうか手遅れになっていませんようにと祈りつつ、足音を立てないようにして俺はその光漏れる隙間に近寄ると中を覗き込んだ。

そしてそこには…トイレに寄りかかるようにして蹲る、小さな子供しかいなかった。

アレは…いや小さな隊長殿は、泣いていた。小さな身体を更に縮み込ませ、両手で肩を抱きながら、何かに耐えるようにして嗚咽を溢す。その姿は昼間に見たあの戦闘機械とはまるで逆の…人間の子供が泣いて助けを求めるとき姿だった。

思わず息を呑んだ。自分の目が信じられなかった。幻覚魔法でも掛けられたのかと思ってしまう程、昼間見た姿とかけ離れたその光景に目が放せない。思えば悪趣味な事だ。泣いている子供を前にして何もせず眺めているだけなんて…。

時折呟く言葉は小さくて聞き取れない。だが辛うじて謝罪を告げている事は解った。そしてソレは軍隊経験者ならいやでも理解できる新兵特有の症状だった。人を殺めるというのは生半可な事ではない。特にそれが銃や魔法などの遠距離ならともかく、クロスレンジでの戦闘となればより顕著になる。

見えるのだ。殺めてしまった敵の顔が…断末の瞬間に浮かべる相手の表情が…。苦

しみに歪み、助からないと悟ったその瞬間、引き攣られそうな程に濁った目の光が…。

その光景は決して忘れる事は無く心に刻み込まれる。各言う俺も未だにクロスレンジの戦闘で手にかけて敵の顔を見える程だ。あれは生半可な事じゃ忘れられやしない。あの小さな隊長殿も…トラウマを刻んじまったか?

どうすべきか迷った時、今度は別の声が聞こえてきた。

「うううう…ごめんなさい…ごめんなさい…」

『マスター。失礼を承知でいいいます。諦めますか?』

「……」

それは、小さな隊長殿の持つデバイスの電子音声であった。

『所詮AIでしかない私には、マスターの苦しみは解りかねます。しかしマスターは以前おっしゃっていました。逃げ場なぞ無い、と』

「……」

『只のデバイスである私は、最後までマスターと共にあります故、どうか…元氣を出してください。立ち上がってください。負けないでください。本機が壊れるまで、私はあなたを支えます。だから…泣かないで』

「……」

抑揚の無い電子の言葉。だが俺にはあのデバイスが心底あれを慰めようとしている

ように感じられた。

「慣れるしかない…慣れるしか、ない…」

『マスター』

「俺は…絶対に、生き残って、やる…オエエ」

一瞬、俺はユニットバスの戸に手を掛けかけて、やめた。知り合って数時間の男が何を言おうとも、それはプレッシャーにしかなるまい。第一俺は医者じゃない。そういうケアはまったく出来ないのだ。だから俺は音を立てずにこの場を離れる事にした。

俺にはあの小さな背中をさすってやる事もできないが、だとしてもやれる事はある。静かに部屋を出た俺は急ぎ足で兵舎に向かったのだった。

「——エニス！おいったら！」

「……あん？なんだ軍曹？」

「なんだじゃねえよ。カードをまわしてくれって」

おっと、いけねえ。少し前の事を思い出していて忘れてたな。

カードを切りながら隊長を見る。まあアレだ？あの後は俺は部隊の連中に対して隊長のフォローに回ったりした訳だ。不満を言うやつとかも居たがアレ自体が次の日に

は何も無い風を装って出てきたから様子見にしようぜと言って回ったのだ。

まったく、どうせ装う気があるなら目の下に出来た隈を隠すくらいはして欲しかったね。気丈に振舞おうがわかるやつにはわかるんだからな。

だけど俺の配慮の事を知ってか知らずか、気がつけばちやんと職務をこなしてやがるから恐れ入る。それでもフォロワーの為にについて回る内に、あの小さな隊長がかなりの努力家である事を知り余計に嫌えなくなっちまったんだよなア。

「だから! 魔力弾はパワーなんだよ!」

「いいえ! 量です! 弾幕を張る事こそ至高!」

「いや誘導しなきゃだめだろ? というわけで誘導弾の特訓を!」

「肉弾戦だ」「全方位攻撃」「チョコバー」「俺がガン〇ムだ」

そしてその隊長はいま、どうしてこうなつたと頭を抱えている。何時の間にか隊長の周りに人だかりが出来ており、やれ魔力変換がどうだのプラズマを使えだのなんだの騒いでいる。

隊長はどうもシツカリしているようで抜けている。ここにいる全員、力量差はあれど魔導師なのだ。そんな連中の近くで暇つぶしとはいえ術式の構築なんぞ始めたら、口を挟みたくなるのは魔導師のサガというもの。

「魔法は爆発だろjk!」

各言う俺もそう叫びながら人だかりに飛び込んだ。後ろでポーカーの相手をしていた軍曹が勝ち逃げするなーと叫んでいるが無視する。大体君は勝てない勝負をし過ぎだ。俺のポケットをもう少し注目すべきだった。だからアホなのだ。

そして俺まで参加した事で更にカオスになった術式構築会であるが割愛しよう。途中で隊長が静かに切れて魔力弾を乱射したけど、そんなの屁でもないぜ。なんだかんで俺達は新しい隊長を受け入れた。これでいいじゃないかと俺は思う。

「もういい…全部まぜこぜにして…凄いの作るもん」

『マスターも彼らの前ではかたなしですね』

———こうして今日も退屈だけど楽しい待機任務が終るのであった。まる。

side 三人称

レッドクリフ隊の濃ゆい面々と魂は大人身体は幼児のフェンが戯れているちようどそのころ。セシル基地があるペセタ市から西に約80km。メール川を挟んだロクス
タ砂漠の真ん中にあるO.C.U.の前線基地において部隊が集められブリーフィングが行われていた。

《——ハッ!ハッ!ハッ!ハッ!》

暗くされた部屋の中、スクリーンに投影される映像。そこには廃墟となった市街地が映っている。その映像は一人称視点、即ち兵士の装備に記録されていた映像だろう。瓦礫と化した廃墟の中を走り抜ける映像と同時に録音された音声と共に流されている。前を走るポイントマンを走って追いかけて居る為に記録された音声の息は荒い。

《居た!距離80!11時方向!数は6!一般兵!》

《合図と共に斉射!——今っ!》

《死ね。死んじまえ》

銃声が響く。同じ部隊の仲間と共に瓦礫の影から一斉にアサルトライフルを放ち、マズルフラッシュで一瞬画像が乱れる。この記録をとっていた兵士はそれなりに腕が立つのだろう。敵USNの一般兵を一回で撃ち抜き、次の敵兵へと照準を合わせていた。

あまり品が無いが、撮影者の男の声も録音されているらしく、ブツブツと敵に呪詛を吐いている。もつともこの場の誰もが似たような意識を持つている為、誰も気には留めない。やがて場面は進み、6名の敵兵を全員排除したところに移る。

《制圧完了!》

《こちら203D分隊!予定通りにD-4ポイントを制圧した!敵の輸送隊を探す!》

映像の中で203D分隊と呼ばれた彼等は輸送部隊を探していた。彼らの目的は敵

地にて補給の妨害工作を行うのが主任務であったのだから、同じように探しているのだろう。

《203ヘッドより203各分隊へ。C—2エリアにてB分隊が輸送隊を発見。各分隊はC—2へと集結せよ》

《203D了解。すぐむかいます》

《直ぐ隣か。ニアミスだな》

《今日落とせれば通算3部隊目の撃破数、箔がつくつてもんだ》

《この間は命乞いした連中がいて楽しかったなア》

《無駄口終わり！足を動かせ！》

さらに場面は移り、こんどは激しい銃撃戦が写り込む。時折光弾が頭上を飛び交い轟音が轟いて至近距離で瓦礫が吹き飛んだりしている。映像の主は頓挫した輸送ホバーを狙っているらしく、その為に周囲に展開している敵護衛部隊を排除しようと躍起になっていた。

《友軍の支援魔法砲撃、着弾——今っ！》

直後、爆発。轟音。粉塵が上がる。友軍の曲射砲撃魔法が敵の直上から降り注ぐ。熱した鉄よりも熱い雨は周囲を固めていた護衛部隊ごと消し飛ばし、輸送車輛が張っていたシールドを強制解除させるに十分な威力をもっていた。

《ペンゴー!効力射だ!結界が消えた!》

《ミーシャ!ホセ!輸送車輛にロケットを撃ち込め!》

《了解!》

《派手な爆発最高オー!》

部隊から歓声上がる。味方の支援でシールドが消えた敵の輸送車輛を歩兵が担いだきたロケットで破壊したからだ。魔導師ではない一般兵が混ざる彼らであつても、重火器を扱える点では敵にとっては脅威であろう。

だが歓声の余韻に浸る暇もなく、激しい雷雨のような光弾と曳航弾の入り混じった攻撃に彼等は晒される。ロケットを使った事で危険と判断された為に敵から集中砲火を受けたからだ。

この記録をとっていた主も慌てて瓦礫の影にしゃがみ込むが、となりに居た味方はほんの一瞬、それこそ刹那の差というべき差であつたにも関わらず敵の攻撃の餌食になり、血潮をばら撒きながら背後へと吹き飛んだ。カメラにも血が降りかかり映像は一瞬真つ赤に染まる。

だがそれだけだ。記録主はこういった事に慣れていいのか動揺せずに生き残つた味方と共に場所を這うように移動していた。勿論今さつき撃ち倒された味方の首からドッグタグを回収するのも忘れない。

やがてカメラは建物の中に入る。記録主は匍匐から立ち上がったので視界が一瞬高くなった。そして分隊長のハンドサインに領いた記録主は今度は階段を駆け上り始める。彼等は狙撃銃で建物の上の階から狙撃を行うつもりであった。

敵の魔導師には余り効果が期待できないが、敵に帯同する一般兵相手になら肉割き包丁となりえる銃を設置し、狙撃体制に移る。だからこそ彼等は見えていた。

《なっ——!?!》

突然、記録主の隣にいる分隊長が驚愕の声を漏らす。敵部隊が展開している方向から伸びた光線のような光が下で戦っている戦友を貫いたからだ。しかもそれは一つではなく幾つもの光弾が視認できない速さで放たれており、逃げる事すら出来ない。

カメラは自然と光弾の発射されたポイントへと向けられた。友軍の反撃により粉塵が舞う中でカメラは確かにその姿を捉えた。粉塵煙の中で眩い発火炎を滾らせている存在。目に見えない程の速度を持つ光弾を放つモノ、いや物が映像の向こうにいた。

そのアンノウンは見れば見る程奇妙な形状をしていた。頭部と思わしき部分には短いリーゼントの様に伸びたセンサーヘッドがあり、その下にメインカメラと二つのサブカメラを備えており三つ目である。全身が白く直角な装甲に覆われていて、胸元と思わしき部分は分厚い装甲が大きく出っ張り、そこにもまたセンサーと思わしき機械が顔を覗かせている。

言い表すのであれば、アレはどう見ても人型ロボットの様な存在であった。

《なんなんだアレ?隊長…》

《俺も知らないが…大ききから推測すると敵の新兵器か?》

記録主も驚きながら分隊長と敵を分析する。その人型はこれ迄確認された事がない、前例の無い存在だった。今迄確認された敵が使っているどの無人兵器の特徴とも一致しない。

《魔力反応?…魔導師の類か?》

《しかし敵兵と比較すると半分のサイズしかないですぜ》

《もしかしたら魔導技術を取り入れた無人機で長期戦を考えダウンサイズした試作モデルかもしれない》

《新兵器か…魔導機械だとすると只のAP弾くらいじゃ弾かれるかも》

《魔法系は魔導師に任せればいい。こっちは普通の連中を殺りながら記録でも取る事にしよう。お仕事のし過ぎは体に毒だからな。ドリアンズは何個ある?》

《残り4個。全部つかいますかい?》

《俺にもリンク入れるよ?よし投げろ》

そういつてバイザーを降ろした分隊長に頷いた記録主はバックパックを下ろすと中から筒を取り出した。筒のふたを外して振ると、中から四つの凸凹した球体が転がり落

ちた。

記録主はそれらを握り締めると建物に空いた穴から外へ放り投げる。すると球体から軟物素材で出来たプロペラが伸び宙に停止したではないか。小型偵察マシーン、ドリアンズが起動したのである。

《うえっへ》

《どうした？》

《いえ、いつもこの「目玉」が増える感触には慣れネエんで》

《我慢しろ。サイボーグなお前しか使えないんだからな》

《ヒデエや。給料もつとよこせよ》

《掛け合つてやつてもいいぞ？この仕事が終わったらな》

記録主が呻いてみせるのは、ドリアンズが使えるのは脳みそに電極を挿してあるようなサイボーグだけだからである。誰だつて視界が複数見えるようになったら慣れるまで気持ち悪い事だろう。

このシステムは装備に付随する記録装置にもリンクしているらしく、記録映像は複数の視界が同時に投影されていた。記録主が脳直システムで画像を調整し、映像の視点が白いアンノウンへと向けられた。

——そして、ここで一旦映像が停止する。

スクリーンの隣に立っていた指揮官が映像を一時停止にさせたからだ。指揮官は停止映像に映る白いアンノウンを指差しながら、この薄暗い部屋で共に映像を見ていた者たちに問うた。アレは脅威に見えるかと。その問いに見ていた者たちは概ねこの様な見解だった。

射撃は正確だがたいした脅威ではない。

ここにおいて、この記録映像を見ていた者は大体こんな感想を抱いていた。確かに強力無比な射撃ではある。だがそれだけだ。誘導も無ければ着弾地点で爆発を起こすという事も無い。目に見えない程早い弾速というのも通常火器の銃などなら当然の事なのでそれほど問題ではない。

一般兵にしてみれば脅威だろうが、バリアジャケットを備える魔導師に対してはそれほど脅威とは思えなかった。重ね掛けしたシールドを展開すれば防げるだろうというのが大方の見解だといってもよかった。

再び映像が再開される。今度は一人称ではなく、頭上から見下ろすゴッド視点だ。

ドリアンズが中継して記録されたその映像。戦い続ける白いアンノウンの行動は第三者からの視点で見ているとあまりにも奇妙であった。

強力正確無比な射撃でUSN兵を援護するが、時折アンノウンは自分自身で撃ち殺したのが見えた瞬間、ほんの数秒であるが動きを止めている。機械であるならなんらかの

構造的欠陥だと思われるが、かと思えば時が経つに連れて、その戸惑いのような動きが薄くなっていき、逆により淡々とした動きへと変わっていく。

学習する機械、高度な人工知能を搭載した無人兵器、等々と見ている者たちはそれぞれにその理由を思いついていたが、どれも何かが違う気がしていた。彼等は無意識であつたがこの映像を見ながらある共通の考えが根底にあつた。あのアンノウンはまるで人殺しを戸惑っているようだ、機械であるならありえない事な為、誰も口には出さなかつた。

戦況が変わる。最初は友軍に有利であつたのだが、映像が進むに連れて：特に白いアンノウンが表れたあたりを起点に分水領となつたように思えた。この場にいるOCU部隊の誰しもが苦い顔を始める中でも映像は続いていく。

映像の中のアンノウンの動きは最初こそ、まるで機械の様であつた。淡々と友軍を屠る様は戸惑いのような間があつたとはいえ機械的である。しかしそれが取り払われて更に機械的に動くのかと思えば：そうでもなかつた。OCU部隊が放つたロケット砲が再び護衛についていたUSN部隊を運よく分隊規模固まっていたところへと直撃した。

弾け飛ぶ人影、飛び散る肉片。映画の様にスローモーシヨンなどの演出は掛からないが、それ故に敵に起こつたそれが現実の映像としての姿がくつきりと現れる。見ている

モノ達も思わず静かにガッツポーズしたりして、ざまあ見ろと映像を見続ける。

そしてそんな映像の片隅で、白いアンノウンが動きを変えていた事に気がつく者は、このブリーフィングルーム中では一握りもいなかった。白いアンノウンはUSNの分隊が吹き飛んだ方向を見て再び動きが止まった。それはまるで人間が呆然としているかの様にも感じられるような動き。

だが直後、アンノウンは何を思ったか空いている手を瓦礫に叩き付け、かと思えば持つていた大型ライフルを投げ捨てていた。その動きはソレこそ、しくじった人間がとる動きそのものである。

そして何処からか取り出した大きな盾と片手持ちの機関銃を一瞬で装備し、腰掛けるかの様に体勢を低く崩した瞬間、白いアンノウンの周囲から粉塵が立ち上った。アンノウンはその場で足をまったく動かさずにターンをして見せたのだ。

足の裏に何か仕込まれている、と記録を見ている者達が理解するまでに時間は要らなかつた。アンノウンはド派手な粉塵を巻き起こしたかと思えば、ものすごい速さで飛び出し、展開するOCU部隊へと突き進み、先程ロケットを撃ち込んだ部隊を含めて十数名を瞬く間に二階級特進へと誘った。

飛び交う銃弾をその装甲で跳ね返し、魔力弾の直撃を物ともせず、一般兵も魔導師兵も関係なく、手に持った魔導銃から放つ光弾で死を降り注ぐ姿はさながら鬼のようで

である。

さらに見ている者達を驚かせたのは移動している最中に空中に浮かぶドリアンズを撃ち抜いた事だった。ビルよりも高いところに浮かぶ、ゴルフボールより一回り大きい程度の球体を補正射撃なしで手に持った火器で破壊した。何と言う正確な射撃、アンノウンの異常なまでの正確な射撃をここまで見続けた者達も、映像越しであるが戦慄を覚えていた。

《イツテエ!?畜生!なんだアイツは!化物か!》

《もういい。記録は取れた。アレは無視してとにかく輸送車輛を破壊しろ!》

ドリアンズが破壊された事で、再び視界は一人称へと戻った。

中継器であるドリアンズが容易く吹き飛んだ反動で、痛みを訴える頭を抑える記録主のボヤキが混じる中で、無線から部隊長の声が響いた。

その為部隊は火力を白いアンノウンが離れた事で手薄になった輸送車輛へと集中させる。彼等の目的は補給の妨害である為、作戦目標は敵の殲滅ではなく輸送物資などの破壊に重きが置かれているからだ。

これには白いアンノウンも無闇に撃つて出られなくなり、シールドを減衰させる効果が付与された魔力弾の阻止や、動けない輸送車輛には致命傷となりかねないロケットの迎撃に借り出され、その場に釘付けとなった。

白いアンノウンの優先目標が輸送車輛の護衛でなかったら、或いはアレが単騎でいたならば数だけは多く居るこの場で展開している部隊は危なかったかもしれない。白いアンノウンにしてみれば友軍が足かせとなっていたのである。

《なんだ?よく聞こえない——?…っ!敵の増援!》

——だが敵の援軍が直ぐ近くまで向かってきているという情報が入る。

その後、映像は援護に来た敵の援軍と戦い、此方の救援に来た友軍の上位魔導師が白い奴を引き付けて、倒されるところで記録映像は終っていた。

《い、いやだああああ——!!》

白のアンノウンの銃撃によって蜂の巣にされるところで。

「以上が、先日回収された記録装置から抽出した記録映像だ」

非常に後味の悪い空気が漂う中、パチンツという音と共に薄暗かった部屋の照明が点され明るくなる。部屋に居る者たちは明るさの違いに一瞬目が暗くなったが、すぐに姿勢を正すと指揮官のほうへと向いた。

「今回、この映像を諸君等に見せたのは他でもない。今後、我々の作戦下において、映像に出てきたこのアンノウン…白人形と呼称するが、この白人形との遭遇が予想されるか

らである」

白きアンノウン、コードは白人形。全身白い装甲に覆われた機械人形に見える事から、コードネームにはその名前が与えられている。実際いくつか不可解な動きをする以外は機械に見える為、似合った名前であるといえた。

「見ての通り、敵が保有する従来の兵器と違い、映像に残ったこれは完全な人型を持つ。これが一体なんなのかは今のところ解析中である。だが見たとおりの戦闘力を有する事から、各隊はより警戒を厳として、たとえ遭遇したとしてもムリに撃墜を選ばずに撤退して欲しい。今はなによりも情報が必要だ——なんだ？」

「もしも補足されて逃げられない状況になったらどうします？」

一人の士官が手を上げてそう質問した。指揮官は少し思案すると口を開く。

「その時は仲間と連携し、少しでも時間を稼ぎながら友軍が展開する場所まで逃げろ。あいにく情報が少なくて今はこれ以上の事は言えない。ただ、アレは味方の危機に関して非常に敏感な癖があるようだ。輸送車輛への攻撃の場面は見たな？」

「はい、敵車輛を破壊しようとするのを防ごうと動き回っていました」

「アレが生物にしる機械にしる、何かを守るといふ点でかなり精密なプロトコルがされている可能性がある。接敵してしまった場合はそれを思い出すしかあるまい。他に質問がある者は？……居なければこれにて解散とする。私からは以上だ」

その言葉に部屋の者が全員立ち上がり敬礼する。指揮官もそれに返礼を返し部屋から出ていった。そして部屋には弛緩した空気が漂い始めたのだった。

「おいおい、なんだいありや? USN っつてのはトンでも吃驚メカでも作るのがすきなのか?」

誰かがそう呟くの皮切りにしてまだ人が残るブリーフィングルームは騒がしくなった。

「リアルロボット系に見えたけどな」

「いやでもどつちかっていうと特機だろあれ」

「ウチのタウロスなんかとは全然違うな。ワンオフ機かよクソツタレ」

「なんでだろうな? OCUの方がサブカルチャー上なのにこの先を越された感」

「実はあれパワードスーツで中に美少女が」

「「それは無い」だろ」と思う」

「ですよー」

笑い声が響く。約一名核心に非常に近い意見を述べていたが、まあこれがOCUで生きる人間たちである。彼らの場合にはサブカルチャー、特にアニメやら漫画やらが盛んな国が存在し、連合各国に輸出している所為か、連合全体でオタク率が高かったりするのだ。

特に軍隊のような給料を通販に使うくらいしか出来ない職場にいる彼らのオタク率も高い。もつともUSNも映画などの実写分野では連合を凌駕している上、その凄さを彼らも認める点であつたりするので、両国はどっこいどっこいだつたりするのであるが……。

「グレン大尉はどうおもいます?」

「おいおい、お前等の深〜いお話に誘われてもなんもいえねえよ」

そんな彼等に話しかけられる一人の士官、グレン・デュバル。彼は愛用のシガーケースから葉巻を取り出しながらポケットのライターを探していた。すると話しかけてきた部下がスイツと魔法で指先に小さな火を点したので、それで葉巻に火をつける。

彼は実に美味そうに葉巻を味わいながら、口から紫煙をワツカみために吐くと、ワイ雑談に興じる彼らに適当に返事を返した。オタクではない彼にとつて同じ部隊の仲間のテンションに偶についていけない時があつた。

「つーかマジでお前等のテンションについてけねえんだけど?」

「またまたあ。葉巻オタクなアンタがついてこれないわけないでしょ」

「待てつ!?なんだそりゃ!?葉巻は愛してるがそんな事言われる筋合いはねえよ!」

「……その銘柄は?」

「カラバ産のグリゼリア。コロナサイズのドライシガーだが?本音を言えばプラミアム

シガーでハンドメイドのいいが、滅茶苦茶高いからな。小さいほうはシガリ口だが形態性に優れるこれも中々オツなもんだ」

すんなりと銘柄までスラスラ語る男。この男が重度のタバコ中毒：いや葉巻中毒者なのは間違いない。話を切り出した男の方はグレンの反応にニヤニヤと笑みを浮かべふざけ半分に口を開く

「ほうら、やつぱりオタク——ごめんなさい調子こきましたその展開したデバイスを下ろしてください。大尉のイグチで殴られたら死んでしまう」

「オタクとかいうな。俺はオタクじゃねえし：オタクじゃないんだ」

音も無く展開した狙撃特化型デバイスのイグチを引つ込めながら、グレンは頭を抱えながらそう呟いた。なにやらオタクに対し偏見もあるようである。

「そんな連れないこと言わないで。ネ?」

「うわっサブ。サブイボが立った!シナをつくるな気色悪イ!」

「ああくん、ひどうい」

「アアン?オキヤクサン?」

「……やべえ、俺この部隊抜けたくなってきた」

「ナウいムスコ」

楽しそうではあるがオタク率が高いのも考え物ではある。だがこんなふざけた連中

であつても、甚だ不本意ではあるが、本当に不本意なのであるが、部隊の仲間である事に変わりは無い。こうやってふざけあう姿も明日には命を落とす彼らの刹那的な生き方の一つなのだから、それをあえて口に出して批判はしたくなかつたのである。

とはいえ直視したくないテンションになつていゝのも事実なので、グレンは彼らを視界から外すようにして、未だ付けっぱなしのスクリーンに眼を向ける。

そこには一意停止の状態で銃と盾を構えている白人形の姿があつた。

「……………アニメみてえなポーズだよな」

「え？よんだ？」

「呼んでネエから、そろそろここ出ようぜ？」

「へーい。あ、ところで大尉。次の任務はなんでしたっけ？」

「聞いて驚け。メール川近郊の監視任務だ。楽でいいだろ？」

「わーお。装備に釣竿を入れてもいいですか？」

「バレなきやいいじゃね？俺も束で持つて行つて思いつきり吸うんだ」

そう笑いあいながら、携帯灰皿に吸殻を吸い込み、部屋から出て行く彼ら。たとえ敵であつても、彼らは人間、血の通つた人間である。戦いは長引き、血は流れ続ける。この戦いが何時終るのかは、まだ誰にもわからなかつた。

「平和な日くらいあってもいいと思う」

sideフェン

U・S・N・陸軍セスル駐屯基地所属の第23駐屯部隊レッドクリフ。字面だけ見ると意外と長い名称である。なので厳格な場所以外、基本的に部隊単位で呼ぶときは略称であるレッドクリフと呼ばれることが多い。

そんな訳で今日もレッドクリフ隊は任務である。ついこの間も待機とはいえ任務があつたのだが、魔導師部隊は治癒魔法が使える分、一般兵よりも働かされるのは普通のことなのだ。

そしてローテーションで決められている今日の任務はというと――

《――ひゅううううううううううううん》

「いやはや、すごい攻勢ですね」

「そう、ね」

《――どがーああああああああああん》

「至近弾。いまのは危なかった」

「そう、ね」

《——ひゅうううううううううううん》

「ところで隊長」

「なに？ ジェニス」

《——ちゅどおおおおおおおおおおおんっ》

「魔力持ちます？」

「……集中力さえ持てば、だから黙ってて」

—— 難民キャンプへの物資護送だった。

「イエツサー、口をハマグリの如く硬く閉ざしますとも」

「……（焼けば開く、よな？ 硬いのそれ？）」

そして、ものの見事に敵に攻撃されている真つ最中であります。

以前、軍が難民キャンプにすずめの涙であるが支援をしているという話を聞いた事がある。俺がいるこのセスル基地近郊にも幾つか難民キャンプがあるらしく、そこへトラック数台分ではあるが少ない物資を回している。

んで今回、俺達の部隊はそういうところに物資を届けて回る補給隊の装甲トラックの一台を護衛任務の命令を受けた。行き先は難民キャンプである。市内にあるし、キャンプ付近の地雷原は撤去済みな事もあり、激しい戦闘は起こら無いだろう……ちよつとは襲

撃が来ないと勘が鈍るなア……とか思っていた数時間前の自分を殴りたい。

何せ物資を載せた装甲トラックを引き連れて、基地を出発して直ぐに、戦争で廃墟になって国境付近のセンサー網が甘くなつたのをいいことに、国境線を越えて潜り込んで来ている敵部隊と遭遇したからだ。

以前のホバーコンボイと違い、只の大型トラック一台だというのに敵さんお構いなしで対戦車擲弾発射機……要するにランボーとかで見るとようなRPG-7とかパンツァーファウストとかのようなアレをバカスカ撃ち込んで来たのである。

事前にヴィズが敵の事を察知していたので、防御魔法を予め展開できたから防げたものの、飛んでくる成形炸薬弾頭の炸薬量が多いのかプロテクションの強度がやばい勢いで低下していくから驚いた驚いた。魔力を入れ込んで補強しなかったらミンチよりひどい目にあつてたかもしれないな。

んで、とにかくトラックの屋根の上に陣取って、敵からの攻撃を展開した防御魔法である多重展開型ワイドエリア・バブルプロテクションで何とか受けきった。

つーか化学エネルギー弾であるHEAT弾頭のメタルジェットの高圧を防御魔法壁越しで肌で感じながら至近距離で見られるなんて体験、普通は出来ないよな。すげえぞ？着弾点を中心に圧力の波紋が広がる光景……今回俺は防御側に回ってたからもう腹いっぱいだから暫く見たくないけどな。

敵地に潜り込む事に関しては、こつちも似たような事をやっているといるらしいから、敵のやる事にどうとは言えないが、だからと言って難民キャンプ用の物資輸送隊まで狙う事は無いだろうに。もつとも敵さんにしてみれば、運ばれている物資が難民用なのか軍基地用なのか見分けが着く訳も無いのだし、ある意味仕方ないのかもしれない。

まア、だからと行って殺しに来る連中に容赦などはしないのだが…。

『こちらラルフ分隊。敵部隊は撤退。こちらに損害なし』

「レットクリフリーダー了解。こつちも損害は無い。隊列に戻つて」

『了解、通信終わり』

「車長オ、もう大丈夫だからトラック出してくれ」

「了オー解。ゆれますぜー」

迎撃に出した分隊が敵が撤退したと報告してきたので、隣に控えるジュエニスガトラックに前進するよう指示を出す。すると、穴ぼこだらけになった元コンクリートで現在土丸出しの道路の上を大型トラックがゆっくりと動き出した。揺れるとは言ったが本当にガクンガクン揺れやがる。

しかし妙だな。出会う敵出会う敵が皆軽く当たると直ぐに引いていく。こつちも任務があるから逃げる敵を追うことはしないが、散発的な戦闘が多過ぎる気がする。何か大きな事の前触れではないか？この時の俺はそんな事を考えていた。

「缶詰と日用品の配給です！並んでくださいーい！」

「全員分はきちんとあるのでちゃんと並んでつてそこ！喧嘩しないでくださいー！」

「一人5つまでですよ！5つ…そこ！だから喧嘩するなつてばー！」

「水は一人ポリタンク二つまででお願いしますー！」

ほどなくして、我々レッドクリフ隊は難民キャンプへと到着した。襲撃はあったものの物資は無事。到着するや否や補給隊とボランティアが一緒になって難民たちに物資を平等に行き渡るように配給していく。だが焼け出された住民が狭いキャンプに集中しているからか、一度に数百名近く並んでおり混雑や喧嘩が見られた。

その様子を見て、俺はレッドクリフ隊の半分をこの配給の手伝いに回す事にした。ボランティア十数名と補給隊数名では到底手が足りてないので、この申し出は向こうには

喜ばれた。

手伝いに借り出されたほうの部下達はちよつと不満気ではあったが、まあ人の役に立つのも軍人の役目だという事で諦めて貰おう。別に任務は護衛しろつて内容だったし、手伝つてはいけないなんて命令受けてないもんねー。

残り半分はもちろんキャンブ周辺の見回りである。人手は足りなさそうだが、任務が護衛である以上全員を手伝いに動員する訳にも行かなかつたからだ。道中で敵と遭遇したのもある。ま、見回りに回したのは最後まで手伝いを嫌がっていた連中だ。精々嫌がった分、敵が来ないか見回つて貰う事にしよう。

「さて、俺も……」

見回りに参加しようか。部下に手伝いを命じておきながら自分は楽な方に行く、これ上官の特権だよな。そんな事を思っていたら、ポンと肩に手を置かれた。

「隊長。隊長には未だかつてない程重要な仕事がございます」

「え？」

なんかバカ丁寧な言葉遣いをする我が副官《ジェニス》が俺の顔をグイツと無理やり動かす。顔を向けた先には大人たちが食料を受け取る間、暇そうにしている子供の群れが……まさか。

「隊長さんは、あちらで暇そうにしている彼らの相手をお願いします」

「ま、まで。俺も見回りを…」

「あーあ。流石ですナア。ご自分の年齢が彼らに近いから隊長自ら子供らの相手をしてくださるなんて。俺達にはまねが出来ない事ですナア。いよ！流石はチビ隊長！」

「ジェニス、おま」

「要するに俺達アガキの世話は出来ねえんですよ。んじゃそういう事だから——それ
！」

「…!？」

なんと、信用できる筈の我が副官が、俺の首根っこを掴むと子供らの方に向けて放り投げてくれたではありませんか。なにやら副官が楽しんでこいよーとかほざいていたが後でしばく。

とにかく、いきなり放り投げられたがさすがは俺、投げられたり落つことされたり、撃墜されたりする事には慣れていたので、見事に一回転して着地する。

「「「「……………」」」」

「……………」

遊んでいた子供らの、ど真ん中に。ど、どうしよう？

——そして、二時間後。

「パスだフェン！パス！」

「まかせろー」

なんか知らんが馴染んでいた。あはは、童心に返るってたのしー！サッカーなんて何年ぶりだろう！正確にはサッカーに似た何か別のスポーツだが、ルールもボールを使うって言う点でも似てるからもうサッカーでいいや。

「にやははは！こつちだこつちー！」

「まっつてー兄ちゃん！ほらフェンも追っかけよう！」

「あいよ、行こう」

子供らの一人に手を繋がれる。彼らの手は泥だらけで決して清潔な手とは呼べなかつたが、不思議と不快感を感じなかつた。戦争中であるのに、家を焼け出された子も居るだろうに：彼らはそれで笑顔になる小さな幸せを見つける達人のようだった：みために考えたら一端の詩人っぽいのかもな。

実際、放り込まれた当初は警戒されていたと思う。そりやまあ、見た目ゴツくて銃や杖を持っている怖いお兄さんお姉さんと一緒に来た子供を警戒くらいはするだろう。こつちはこつちでいきなり子供の相手しろと信用していた副官のアホに放り投げられ

た事で混乱していた。

なんせ俺はこの世界に生まれてこのかた友人と呼べる存在はいなかった。一時期は幼稚園的な場所に通った事もあったが、サバイバル訓練を明けてから無表情で謎の威圧オーラが出始めた上、魔法訓練を始めてからそこに行く事は無かったからである。

第一サバイバル訓練明けて少々気が立ち無表情でプレッシャーを放出するという不気味な子供であった俺に近づける幼児などいかなかった。いたところで友達と呼べるかはまた甚だ別問題だったが、少なくともこの身体の年齢に似合った友達はいなかったのは確かである。

勿論周囲への威圧感なんぞ毎日続けてたら疲れる事この上ないので、訓練に慣れた頃から周りを威圧する事とか一切しなくなっていたが、逆に感情まで出にくい謎の減少に現在進行形で見舞われている俺に隙は無かった。そんな無表情少年な俺と難民キャンプの子供達が突然見合っても、話すら出来ないわけで：両者見合ったまま千日手となり掛けた。

だがそれも、子供らのリーダー格の少年の一人によつて、いとも簡単に崩されたが。

なんて事は無い。彼らの中で一番遊びの中で先導していた少年がいた。そいつが真つ先に俺を遊びに誘ったのである。あまりに唐突に「かけっこ」しようぜとまぶしい笑顔で言われて固まったのもいい思い出：というには早過ぎるが、とにかく吃驚する

事態であつたのはいうまでも無い。

そんなこんなで驚き桃の木山椒の木とか光陰矢のごとしとかなんてチャチなもんじゃ断じてねえ、超スピード友達認定を味わつたぜ。

「俺の妹となんばしよつとかああ!!」

「……………あて」

さて、視点を今に戻して、一人の女の子に手を引かれていた俺は、何故か後頭部にドロップキックを食らっていた。派手に吹き飛んで転ぶ俺。ダメージは無いし、蹴られる直前に気配で察知していたのに何故か逃げられなかった。これがお約束のパワーか。

「兄ちゃん！フェンはまだ小さいんだよ！」

「知るか！こんのがキヤは身内に手を出しやがって！ヤローぶっころしてやるー！」

そして蹴りを入れた張本人の少年は、俺の手を握っていた女の子を背にやると俺にビシツと指を突きつけてきた。まったく、やる事が超スピード過ぎて何を考えてこんな事をしてきたのかわからないが、何を隠そう、この眼の前でシスコンを発揮している少年こそ、俺を直ぐに仲間に入れてくれたリーダー格の少年。その名も――

「エドガー……痛い、です……」

エドガー・キャデラック。くしくも以前に基地の近くまで来て、使える物資を物色していったあの少年であつた。エドガー君の事はフェンス越しに見かけただけであり、別

に知り合いでも何でもなかつたが、何となく印象に残っていたから俺も覚えていたのだ。

それにしても、いやはやバイタリテイが凄いとと思ったが、キャンプでは持ち前のそれで子供らのリーダーやつてるんだから恐れ入る。暗い雰囲気嫌いだからか、空元気でもいいからと笑顔で子供達を先導して遊びまわったり、廃墟に出て使える物を探して回ったりしているんだそう。

尚、あの時一緒にいた少女はエドガー君の妹であり、名をネリイ・キャデラックというらしい。兄妹そろって廃墟まで行つて使える物を探すなんて、危ないのに生きる為ががんばる姿には頭が下がります。

「ふーんっ！その割には全然怪我してないじゃないか！」

「鍛え方が違う？…軟弱者、め」

「オシ、表でろ貴様。この僕がいんどおうを渡してやる！」

「兄ちゃん、それいうなら引導だよ。ていうか二人ともワザとでしょ？」

「……でへへー」

ま、仲良くしてもらつてるからな。子供の相手くらいしてやるさ。童心を思い出したが俺の自身は完全におっさん。精々親戚の子と遊ぶ程度の気持ちでやってやるさ。そう自己弁護しておこう。

べ、別に楽しかったからとかそういう理由じゃないんだからね……一体誰に向かつて言っているんだろうな、俺。はは。

「まったく。どうして兄ちゃんとは会った子会った子と直ぐ仲良くなれちゃうのかな？」

「それは僕が紛れも泣く友達を作る天才だからさ！」

「……何も考えていないとも、言う」

「あはは！そのとおりかも！」

「にやにおー！フェンの癖に生意気だぞこのヤロー！あとネリイそこになおれ！」

「きゃー！やだー！あははは」

ネリイ嬢はそういうと向こうへと駆けて行ってしまった。ふふ、子犬や子猫の様にじゃれあう。成程、これが同世代の輝きなんだな。無表情だけど演技してる俺にはまぶし過ぎらァ。

そんな事を考えながら、彼らと遊んでいると少し離れたところでポツンと座っている少年を見つけた。あれ？ポツチ君が他にも居るのか？

「エドガー、あの子……」

「ん？ああラクトのことか？アイツはみんなと遊ぶよりもゲーム機で遊ぶほうが好きなんだとき。何処で見つけたのか、瓦礫から充電器まで持ち込んでるんだぜ。たまに皆でゲームしてるよ」

そういうと先に行ってしまった妹のネリイを追いかけて行ってしまった。俺はポツンとこの場に残される。ふむ、携帯ゲーム機片手に一人黙々と遊んでいるのか。エドガー君が気にかけてるあたり、別に仲間はずれて訳じゃないらしい。なら別にいいかと踵を返そうとした、その時。

「…っ!!」

「あ、ゲーム機たたきつけた」

一人ゲームをしていてラクトという少年が突然ゲーム機を揺さぶったかと思うと、何故かゲーム機を大地に投げつけていた。かと思えば途端青ざめてどうしようどうしようといった風に右往左往している。

なんなんだ？クリアできない事に腹を立てて思わずキーボードクラッシュャー化しちゃったのか？ええ若いモンが怒りっぽいのはいかんぜ。でもちよいと気になるな。話だけでも聞いてみてやるか。困っているのなら手を差し伸べるのは人として当然だしな。

「ねえ、どうしたの？」

「ん？だれだよキミは？見ない顔だ」

「なんか、モノを投げてたから」

「別に…騙し騙し使っていたゲーム機が遂におじやんになっちゃったんだ。こんな場所

じゃ修理してくれるお店も廃墟だし、もう散々なんだ。これでいいかい？イライラしてるから話しかけないで」

「……成程。ちよいと借りる、よ」

「え？なにを……」

ラクト君が返事する前に、彼が落としたゲーム機の残骸を拾い上げる。フムン、見た目はP〇P見たいなゲーム機だな。小型データチップ式だからどちらかと言えばDSか？まあどつちでもいいな。どれ…。

「（…ヴィズ、ちよつと解析。それとツール）」

『（イエス。マスター）』

少年等からは見えないように魔法陣を隠蔽してつと…。

うん、思ったとおりディスプレイに問題は無いな。一部接触不良があるみたいだけど、これは多分経年劣化によるものだろう。それにハードが頑丈な作りだからか、たつきつけてたのにダメージはフレームが歪んだ程度だ。これなら…。

「ねえ、何してるの？」

「……………」

「ねえ…ねえつたら！俺より小さいのに生意気な——」

「はい、直した」

「——は？」

面白いくらいにぼかんと口を開いている少年。ふ、この程度デバイスという精密魔導電子機器に比べればどうってこたあない。

「たたきつけたから……ちよつと液晶に傷ついてる……でも、まだ使える」

「嘘つくな！そんな簡単に直るなんて——嘘、直ってる？」

ラクト少年は驚きで目を見開き、途端ゲーム機を抱きしめて直った事を喜び始めた。相当思い入れがあつたんだろう。ふつ、我ながらいい仕事したぜ。

「んじゃ」

フエン・ラーダーはクールに去るぜ。

「ちよいまちー！」

「グエ」

「凄いや！ゲーム機を直せるなんて！ねえ！もしかして他にも直せる!!」

「うぐぐ」

「ねえ！こつちきてくれない？見せたいものがあるんだ！」

「……OK，解つ……た。だから——」

「え？なに？」

「……手を離して？首根っこ持たれると、息が……グエ」

どうでもいいんだが、10歳くらいの癖に随分と力強いんですね。お陰で襟元つかま
れた時に足元が宙ぶりりんになって、首が絞まつてる訳だが。一般市民にマーシャル
アーツ食らわせる訳にもいかないし…に、憎い。規則に縛られた我が身が憎い！きゆう
…。

さて、その後ラクト少年に連れられ（拉致られたともいう）やつてきましたはキャン
プの一角にあるゴミ捨て場。正確には廃墟から持つてきたはいいが、壊れてる所為で使
えない物置き場に来ていた。

「これなんだけど」

「……これは」

ラクト少年が見せてくれたのは、一抱えはありそうな大きな箱だった。正確には正四
角形のサイコロみたいな外見をしたPC本体みたいな物体。だがPCと違い箱には横
に三つ並んだレンズのような物が付いていて、その所為で横幅があるみたいだ。

「古い型だけど…ホロティック？」

「うん。電源もコードもあるんだけど、動いてくれないんだ」

それはホロティックと呼ばれる空間投影型の投影装置だった。所謂SFで言うところのホログラム、空中に浮かんで半透明のディスプレイ投影するアレである。結構色ん

なところその技術は使われていて、デバイスにも組み込まれていたりもする。俺のヘルメットの中のHUDも実はこれを使ったり…閑話休題。

さて、眼の前にあるのは大分古い型だが紛れも無くホロティックだ。何故なら胴体真横にデカデカとホロティックのロゴが描かれているからだ。誰だっで見れば一目でわかる。そしてラクト少年は俺に期待と心配のまなざしを送っている。成程、ゲーム機が直せるならと考えたのか。子供だのう。

まあいい。元からのその積もりで来たんだから今更断りなんぞせんよ。俺は使い慣れた本来はデバイス用のツールたちを取り出し、ホロティック修理に取り掛かった。ついでにその他もな。さあ壊れた機材どもよ？ 廃材の準備は万端か？

……………

——1時間後。

「……………はい、修理終わった」

「おお！ ありがとう坊主！ 形見だから壊れてどうしようかと…ありがとう！」

何故か、俺は大人に囲まれて色んな壊れた物の修理を請け負っていた。どうしてこうなった？ 俺はただラクト少年に頼まれてホロティックを修理してやっただけなのに…

それを大人に見られてあれよあれよという間に俺はタダで修理をやる嵌めに……これほど任務中で賄賂の類を受け取れない軍人の規則を怨んだ事は無い。せめてお菓子とか少しくらい貰ってもいいじゃんか……うう。

というか俺は隊長なんだぞ？隊長なのになんでこんなに……つてここにいる連中の殆どがキャンプの奥から来た人たちだから、俺が隊長やつてる場面を見ていないから知らないのか！……まあ逆に知っていても妙な目で見られるだろうし、変に構えられるよりも気が楽だ。そう考えておこう。

ちなみに俺が苦勞している最中、件のラクト少年共は旧式だけどその分鮮明というブラウン管みたいなホロティックで空間投影ゲームに勤しんでやがる。大人数対応ゲームのド派手なエフェクトにキヤーキヤー言ってる楽しんでおり、皆戦争の中とはいえ一時の笑顔になれたのだからいいのかもしれないけど……その分の負担、プライスレス。

途中様子を見に来た副官（全ての元凶）が俺の苦勞している姿を見て大爆笑していたが、ちよーつとイラついたのでジェニスが立ち去ろうとした時、奴の進行方向にバインドを弱出力で設置。腐っても奴は魔導師なのでばれないようにワイズ教官からパクツ……伝授して貰った術式隠蔽の技術で隠した魔法をタイミングを見計らって起動したところ、バインドに足を引っ掛ければ盛大にずっこけたので少し溜飲が下がった。

疑問符を浮かべながら足を引っ掛けた物体を探そうとするジェニスの姿は非常に滑

稽だった。奴が見る前に既に術式は霧散させているからな。ちよつと見渡したくらいじゃ解るわけがない。力の無駄遣いな気もするが世間一般でも力の使い方は大体こんなもんだ。

『悪戯ですか?』

「いんや、報復」

ちなみに俺が色々と修理していると、一通り遊び終えた子供らが俺の元に来て何故か心の友認定された。それだけゲームなどの娯楽に飢えていたという事なのだろう。単純で悪意なく本能でそう言ってくれている子供らに少しだけ嬉しさを覚えた。ローテーションで月に一回まわってくるか解らない補給任務な為、再び彼らの元に凝れるか微妙なのが残念である。周りの大人共はそんな俺達を見て微笑ましそうにしていたがね。

よほど絶望しない限り、人はどんな場所でも笑うことが出来る。そんな人の強さを垣間見たと共に、俺は、俺たちはこういった人たちを守る仕事をしているのだと思うと、少しでもだけ手を汚す仕事が誇らしく感じられた。例え、既に自らの手がどつぷりと血に塗れているのだとしても、民間人がこれ以上苦しまなければそれでいいと、俺は思った。

「ねえ僕。これ直せるかい?」

「あ、はい。今見ます」

さて、そんなこんなで難民キャンプ支援任務は想定した時間よりも早く終わった。本来なら物資を置いていくだけの作業を更に俺達が手伝ってやったのだから終るのも早い。時間的には3時を回ったところであるが、移動時間を考えるにそろそろ出発しないといけない。

夜間行軍は訓練を受けてはいるが、命令でもない限り好き好んでしたい事ではないからだ。特に護衛対象がいる今は…昼間ですらたまたま遭遇した敵に撃たれたのに夜中だったら闇夜に紛れられて余計に攻撃を察知するのが遅れて被害が出るかもしれない。それが解っているから危険を冒せないのである。

「隊長、各分隊の点呼確認。レッドクリフ小隊、揃いました」

「…行きと同じく、帰りもトラックを中心に展開し、基地に帰投する」

右手を上げて合図するとトラックが走り出した。俺達も魔法で身体を強化してそれに追従する。一瞬だけヘルメットのHUDに背後の映像を映すと、一緒に遊んであげた（と俺は思うことにしている）子供らがキョロキョロとキャンプ入り口に居た事に苦笑した。

そういうえば、別れの挨拶をしなかったな…そう思いつつ、トラック護衛の帰路に就いたのだった。

「隊長、どうでした？子供のお守りは？」

「ん、ジエニス……うん、意外と、楽しかった」

トラックの横を周囲警戒しながら走っていると、隣に並んだジエニスがそう聞いてきた。

こんな風に駆け回るなんて、少なくとも7年近くこんな遊びはした記憶がない。勿論それに後悔した事はなかった。前世では触れる事すら適わなかった魔法という技術にどっぷりと浸かり、厳しくも優しい両親から鍛えて貰える事に至上の喜びを感じていた。

だから、いま感じているこの感情は、きつと後悔とかじやない。俺はきつと、彼らを守るこの仕事に、楽しいと思えてきたんだと思う。いやそうなんだ。

そう考えないと、とても寒いと、思ってしまうから。

「戦場の一番のご馳走って温かい飯だと思う」

sideフェン

行きと違い敵を掃除しておいたお陰で、帰りでは敵と遭遇する事もなく無事にセスル基地に帰還した。次の任務まで待機：実質休みなのだが：一度部隊を解散させた後、俺は一人部屋に戻って今回の任務の報告書を書き上げていた。俺たち兵隊は上から色々な任務を言い渡されるが、どんな任務についても必ずと言っていいほどやらされるのがこの事務作業である。

何処で何をどうしたか？何があったのか？損害は？等々、隊長であるが故にやらなければならぬ事も多い。一応俺は肉体年齢的には一桁の子供なんだが、そんなのが書いた報告書とかつて受理されるん？という疑問もあるにはあった。が、どうもこういう行為を含めて、子供が一部隊を指揮できるかを試験しているらしい。中身が大人なので、今迄ついつい普通にこなしてきたが考えてみると異常な事なのだ。

そしてこれでこの先現れるかもしれない子供指揮官達の要求ハードルを押し上げていくのだ。やっというてよかったと思う。

「……あ〜う〜」

『誤字脱字は修正しました。お疲れ様です』

何とか書き上げた時には外はどっぷりと暗くなっていた。元々帰ってきた時間帯が夕方だった事もあり、この報告書作成の作業に時間を取られ夕飯を食い損ねたという訳だ。俺は凝り固まった身体を伸びをして解した。あー、ホント事務作業にPC使ってもよくて助かるわ。

重要書類だと全部紙媒体で手書きっていう化石みたいな事を本当にやらされるんだよな。今回の任務がさほど重要じゃないのが救いだぜ。出なきや報告書を仕上げるのが数日掛かっちゃう。

『さあ提出してきましょう。提出までが任務です…とソフィア教官が仰ってました』

「……遠足っぽい。まあいいや。これ出したら夜食たべよ…」

兎にも角にも非常に面倒くさいガツチガチの文章で固めた報告書を挙げた俺は、肩の凝りを解しながら何か軽く食べようと、ほいほいPXにやってきたのだ！

さて、夜のPXは閑散としていた。それもその筈でPX自体の営業時間は早朝、昼、夕方という風に決まっており、それ以外の時間では営業はしていない。PXは食堂も兼ねているのだが、残念ながら食堂の開店時間もまたPXと同じであり、厨房の火は落とされていて誰も居ないので注文もクソもありやしない。

こうなると夜食なんぞ食べられないと思われるかもしれないが、PXには弁当やスー

プ用に電子レンジや電子ポットが置かれている。俺もそれらの利器を用いて、前世での受験生時代と同じくレトルト食品を頂く事にしよう。

「ヤッ…」

売店自体は閉まっているので、持ち込んだ物の中から夜食を作る。ヴィズの格納領域を開き、どぐれにしよ〜かな〜と適当に掴んだ物を取り出した。

「……ふむ」

出てきたのはUSN軍のレーションである。何故こんなもの持ち歩いているか？非常用というのもあるけど、意外と美味しいから買える時に買い溜めしてるんですわ。USN軍は大軍なだけあり、レーションの種類はなんと70種類にも及ぶ。一日3食、別々のメニューで食べても一ヶ月は悠々食べ続けられるので飽きが来ないようになっているのだ。

もつとも当たり外れが多いのもあるが…今回のヤツは豆と穀類のブリート…不味くは無いヤツだな。当たりじゃないが俺は包み紙を取り、中からレトルトパックを取り出していく。元々レーションは野外で食す事が前提条件にあるので、中に水の化学反応で熱くなるヒーターが入っているが、電子レンジがあるので今回は使わない。

ヒーターだけを格納領域に仕舞い、適当な器に盛り変えたら後は電子レンジにIN。これで食べるのだから楽なもんだ。

「……あ、のみもの」

ドリンクを作るのを忘れていた。無くてもいけるが無いと味気ない。

「あ」

格納領域からコップを出そうとしたところ、手が滑って床に転がってテーブルの下に入り込んでしまった。いそいそとテーブルの下に潜りコップを探す俺。そんな時、PXの戸が開き誰かが中に入ってくる。

「——お前等にも見せてやりたかつたぜ。放り投げられて途方にくれてるチビ隊長の顔！」

「くく、それは、さぞかし……面白い光景だったんでしようね」

入ってきたのは、声から察するに我が隊の副長ジェニスと衛生兵のレンチャックだろう。まあPXは24時間使える談話室を兼ねているから彼らが来てもおかしくは無い。しかし、どうも話している内容が俺の事っぽいな……少し隠れて聞いてやるか。

「でも驚いた事にな？そのあとすぐさま順応してやがんの」

「ほう。あの隊長殿がですか！」

「俺も驚いたね。あのどんな時でも表情一つ崩さないアレが、キャンプの子供らと遊んでると、どこか朗らかに見えるんだよ。勿論顔には一切出てねえけどな！」

「それはそれは……さぞかし微笑ましい雰囲気だったんでしようね」

これは：難民キャンプで俺が子供達の相手をした話だろう。でもそんな驚く事か？第一順応したんじゃないやなくて、あつちから遊びの輪に入れてくれたんだが：つて第三者から見ればそう見えていたって事か？だとしたら、それは少し恥ずかしいな。

「んで見事お仲間に加えてもらえた我等が隊長殿は、俺達がサボリ：キャンプ周囲の哨戒に就いている間、子供達とボール蹴ったり駆けっこしたりとやりたい放題」

「なるほどなるほど、歳相応ですね」

レンチャックが実に愉快そうに呟くのが聞こえた。それにしても、ほう：ジエニスくん、キミはサボっていたのかい？それはいけないなア。報告書の追加でも書いてあげようか？……いや、やっぱいいいわ、書くの大変だし。

すっかり傍目から見れば俺も歳相応に遊んでいたように見えていたのか……。肉体に精神が引つ張られたかな？普段はどうにも感情が表に出ないくらいに齟齬が酷いのにたまにあるんだよな。

「拳句の果てには連中すら匙投げた壊れた品物を修理してたな」

「へえ……え？なにそれこわい」

「いやね？これは俺も別のヤツから聞いたんだが、チビ隊長は最初子供の為にゲーム機を軽く修理しただけらしいんだよ。それを目敏く見ていた他の大人の大人に囲まれて断らずにあれよあれよと修理しだしたって話よ。なんせ俺達の兵舎を魔改造できるからな。

うちの隊長」

「あー……」

スゲエ納得したって感じの声色である。正確には雰囲気的に断れなかったんだよなア。なんか思い入れのありそうな物品を抱えた人が藁にも縋る気持ちで俺みたいの子供に直せないかいと尋ねてきたんだぜ？

それを無碍にしたら人間としてダメでしょ？

「それでそのままずっと修理業者ゴツコの開催って訳さ。哀れ隊長殿は大人に捕まり、他の子供達はそんな隊長殿には目もくれず、立体ゲームに夢中だったらしい。恨めしうにそつちを見ながら、それでも修理を途中で放り出せないもんだから、どうしたもんかと困った空気を纏ってたんだぜ？」

「ぷくく……あの、あの何時も、何時も何でもそつなくこなすあの子が……困り顔、くくくッ」

「ひひひ——」

……………。

これは注意すべきなのか、不覚にも色々見られていた俺が悪いのかどちらだろう？

《——ピピピピッ！》

「ん？レンジが動いてたのか？」

「だれか先客がいたんでしょうかね？」

「……おまえら」

「「ゲエツ！隊長?!」いたの!？」

テーブルの下から這い出てきた俺を見て驚愕する二人を横目に、電子レンジから夜食を取り出す。——上官をなんだと思っている！キルハウスに連行だ！拒否は許さ
ん！とか言う事も出来るが、流石にこの程度の事でそれは大人気ないだろう。

「(な、なんで隊長がここにいるんですか!?)」

「(俺が知るわけねえだろ!)」

「……どいてくれる?」

「(お、おこつてらっしやる!?)」

なんか二人とも急に黙り込んでアイコンタクトで会話したら。それよりも夜食だ。俺は腹が減っているだけなんだ。

取り出したレトルトパックのふちを切り、パック自体を入れ物にする。このブリートって料理はトルティーヤ：要するにタコスの皮の部分だな。そいつに豆やら肉やらの具材を炒めた物を包んだ料理だ。皮ごとパックに入っていたのでそのままでは固形化した油がキツイがこうして暖めると春巻きみたいな食感になる。

早速口の中に放り込んでみた。少し油っぽい皮の中にピリリとスパイシーな味付けが嬉しい豆と穀類の具が入っている。租借すると豆特有の少し粉っぽい感じがするが、

ちゃんと味付けがされているのでそれ自体でアクセントとなっていていい感じだ。大きさは10センチ四方しかないが意外と腹が膨れるのもいい。

それで、何故か居心地が悪そうにしている部下二人を尻目に一人黙々と夜食を食べてたら二人が頭下げてきた。食べるほうが忙しいので彼らの方を向かず、別にいいと答えたらなんかより慌てた風に謝ってきた。どうやら俺が拗ねたと勘違いしたようだ。

「すまん！隊長！」

「申し訳ありません！」

「……………」

大人二人が子供にマジで頭下げるとか軽くドン引きなんだが…まあ人氣が無いから別にいいか。むしろ面白い物だと思えば面白い光景ではある。ちよつといじわるな気分なのだ。ま、兎にも角にも、悪意が無くても本人が知らぬ場所で笑い話にして笑っちゃだめだよな。

この後、副官と部下を適当にからかった後、ちゃんと解ってるから心配しなくても怒つてない事を伝え、夜食も食べ終わったのでPXから出た。時刻は大体11を回ったところか…：食べて直ぐ寝るのはある意味至福の時であるが、身体に良くないので最低でも20分は起きていないといけない。

(魔法訓練でもしてよ…)

新しい魔法が使えるように準備しておこう。この先、何があるかわからないしな。静かな夜の中、俺は一人部屋へと戻ったのだった。

——6日後。

この間、特に大きな戦闘は起きなかった。精々が敵の偵察隊や補給線破壊の連中が潜り込んで来る程度であり、散発的な戦闘こそ起きるが、それ自体俺がこの基地に来る時に遭遇した大規模な補給線破壊戦と比べれば優しいものである。相変わらず緊張状態は続いているが味方に死傷者が出ていないので気持ち的には幾分か気楽だ。

そして俺はこの戦闘が少なかった一週間の内に幾つかの新兵装デバイスを自作し新しい魔法を修得した。仕事の間にこつこつと作っていた成果が出たから嬉しいもんだ。新しい兵装デバイス、それは治癒魔法補助の機構を持つリペアバックパック。そして飛ぶ事は出来ないが跳躍や滑空、そして地上での速力補助を目的として作ったジェットバックである。

リペアバックはバリアアーマーを展開した俺の背中にあるジョイント部分に接続して起動する補助装置で、治癒魔法の効力を飛躍的に上昇させる機能を持たせてある。

ぶっちゃけ見た目はフロントミッションシリーズに登場するヴァンツァーを謎回復させる謎のバックパックと瓜二つなのだが、俺の趣味だから問題は無い。

そして後者も似たようなモノで簡単に言えば増設スラストターミみたいなものだ。飛行魔法の応用で魔力自体を推力に変える魔導推進器を内臓し、魔力を噴出する事で装備者の機動力の補助を行える。非常に燃費が悪いが、俺は元々レアスキル保持者。しかもほっとくだけで魔力が充填されるような体質なので、これくらいの消費なら問題ないのだ。世の魔導師の方々からは怨みの籠った目線を貰いそうだが、レアスキルだから仕方が無い。

んで、新しい魔法の方は訓練校のワイズ教官からパクった…もとい見ながら教わった迷彩魔法ミラーージュハイドと、以前待機任務中に部隊の連中のアイディアと教えてくれた術式をいくつか取り入れた結果、なんでだか知らないが誘導されずに飛翔して爆発する謎のオリジナル魔法である。

ミラーージュハイドは結界魔法の一種であり、透明…というよりは、光を結界表面に沿う形で屈折させる光学迷彩のような魔法だ。光の屈折という意味では京レのカクレミノのような熱光学迷彩に近いかもしれない。また結界とあるように魔法による探查にも引っかけにくいという便利な魔法である。もつとも展開したままでの攻撃は熟練者じゃないと制御できないので俺は使えるようにはなつたが要練習だ。

さて、オリジナルの方だが、その名も制圧魔法ガルヴァドスという。両肩に展開する魔力スフィアから広範囲に渡って炸裂する複数の高圧縮魔力弾頭をプレゼントする凶悪な魔法だ。

弾速が目で追えるくらいに遅いので、雑魚相手の制圧攻撃ならともかく、タイマンでの対魔導師戦では使いどころが難しそうだが、取り回しはいいが制圧力で劣るアルアツソーヤもとより狙撃特化のウイニーとは違う完全な制圧し様なので、ばら撒いて相手の動きを制限するには役立つと思う。

ただ少し問題があるとすれば：効果範囲や威力は申し分ないのだが、圧縮魔力弾という性質上、常時魔力供給して連射する事が出来ない。何故か四角く形成される魔力スフィアの中に何十発かストックしておけるが、全弾発射して撃ち切ると、再充填に少し時間が掛かってしまう。矢継ぎ早に推移する戦場では少し厄介だが強力なので使う事にしたのだった。

後、どこかで術式が競合したのか発射すると重力による干渉を受けてしまうという謎の特性をこのミックス魔法はもっている。これの所為で狙った場所へと直線的に放つ事が難しいのだが、この前線は障害物となるビル瓦礫の中での戦闘が多いので、むしろ曲射が出来るのはありがたい。直射するのは今のところムリ。だがこれも使えろと思いい採用した。

これらのお陰で更に戦術に幅が出来たのは先の見えない戦乱の中では喜ぶべき事だろう。しかし、ただでさえヴァンツアーをモデルにした外見がメカっぽいのに、これです更にメカっぽくなってしまった。IFFは手放せないな。未確認兵器扱いされて味方に攻撃されたくないしな。

さて、いろいろあつて部隊を率いる事になった俺だが、今日も今日とて上からの命令に従い、もはや恒例となった哨戒任務に借り出されていた。どこを哨戒するのかは全て情報部が決定しており、俺達はその指示に従って巡回して進み、監視網を潜り抜けた敵が潜入していないかを見て回る。

前のキャンプ補給任務もそうだが、意外と激戦区で戦闘に借り出される事は少なかった。そりゃここいらで活動していれば、イヤでも敵兵との接近遭遇戦が起るが、向こうも偵察部隊を小分けに出してきていて大規模戦闘に発展しないから、最近はどこか散発的な戦闘しか起こっていない。

だが先任である我が隊の皆に俺の拙いコミユ力で尋ねてみたところ、実際兵隊の仕事はこういった地味くなお仕事が多いそうだ。俺のイメージでは魔導師とかなんでもつとこう融弾飛び交う地獄の中で敵兵とド付き合うイメージがあつたんだが、それよりも

多いのはこういう哨戒のような仕事が目だそう。

実際、この仕事は最前線に敵の矢面に立つような華々しきこそないが、基地などへ奇襲される可能性の芽を摘むという意味では重要な意味を持つ。この戦争において死ぬ気など毛頭ない俺にしてみれば、むしろこういつた任務が多く続いてくれればいいという程である。戦えるのと戦いたいのとは違うのだ。俺はどちらかといえば前者である。だれが好き好んで曳光弾で空が狭いような場所に行くかってんだ。

それはともかく、移動用に高機動車：前世でいうところのハンヴィーに似た車一台と装甲兵員輸送車を借り受けて、指定された担当地区の地雷撤去済みで行ける所まで乗り物に揺られ、後は縦隊を組んで徒歩で哨戒ルート巡りを敢行することになった。

以前、幹線道路には地雷があると云ったが流石に基地周辺などの完全に占領した区域は既に重機の手が及んでおり、車で移動する事が可能ではある。だが残念ながら占領区域と作戦区域の境界線にあたるルートにはIED——ボールや空き缶に似せた即席爆弾がいたるところに放置されていて重機が侵入できず、未だ手付かずの状態である。

瓦礫で道がふさがれているので車輛では通過できない箇所が多々あるので、結局ワシら陸軍は徒歩で行軍となる訳だ。まあ、歩くのは歩兵の基礎だからいいけどね。

『こちらラルフ分隊。目標ポイントに到達するも敵影なし』

『トマス分隊も同じく敵影を見つけられず』

『ハーヴィーだ。こつちもだ。なーんもないぞ。周囲警戒しながら合流ポイントに行くぜ』

哨戒を開始して暫くして。

最後のハーヴィー・デュラント軍曹の言葉遣いに若干苦笑しつつも、三つに分けた各分隊長からの報告が念話に上がってくるのを行軍しながら聞いた。うちの小隊は約30名の人員で成り立っており、合流ポイントを設定した上で小隊を三分隊に分散して哨戒を行わせている。そうした方が小隊全員が進むよりも広範囲をカバーできて効率が高いからである。

しかし、この分隊長たちからの報告も、正直なところ耳にタコが出来そうなくらいに聞いた台詞ばかりだ。運がいいのか悪いのか、最近の俺達は哨戒任務において敵との戦闘はおろか遭遇すらしていない。戦場での運は最高の贈り物だというが、こうも敵に遭遇しないと逆に敵が何か大規模な何かと企んでいるのでは？と不安になってくる訳で。

「ジェニス…異常は？」

「センサーはウンともスンともいいませんね。今日も目に映るは瓦礫と化した灰色のコンクリートだけですな。ま、そういう日もありますよ。程ほどに仕事しやしようや」

「……（なにも起きなきやいいんだけどね）」

もう腕が鈍るとかいいません。言霊とかになつたら怖過ぎる。死にたくないのでも平和なのは歓迎つちや歓迎なんだが、戦争が終つてないからこの平和な空気は嵐の前の静けさのような気がしてならない今日この頃。

魔導師だけ人間だから、いつまでも常在戦場な心では要られないだろうから、敵はきつとこの何も無い日々にはだらけ切つたところを狙うつもりなんだきつと！なんて恐ろしい！

「はあ、しつかしこんな天気だと、パラダイスバーガーでレモネハフマンでもあおりたい気分ですよ」

「解る。アイランドコーラで、スカツとしたい……」

暑いもんなあ。魔力節約の為にBJはまだ展開してないから、瓦礫にさえぎられて風が流れない廃墟はより暑く感じる。俺は魔力自体の消費はそれほど問題じゃないんだが、敵も居ないのにBAを展開しつばなしなのは要らぬ緊張を部下に与えてしまう事に最近気がついたので、あえて展開していない。

ああでもパラダイスバーガーか……USNが誇る全州チェーン店パラダイスバーガーシヨップの品揃えはUSN一いい！とか言つてたCMが懐かしいぜ。

「お、隊長もわかる口ですな……ってまあその年なら当然か」

「……残念ながら、俺がパラダイスバーガーを初めて口にしたのは、数ヶ月前が最初」

「うそっ!？」

いや、マジです。訓練校で仲良くなったエド兄やんと愉快的な仲間達を買って来たやつのご相伴に預かりました。味は…いかにも本場つて感じだったと言っておこう。

「生まれてから、ずっと魔法訓練漬けだから」

「……なんかすまん」

「なんで? あやまる?」

「いや、とにかくすまん(普通じゃねえと思つてたが、まさかそこまで…クツ、お前さんの事は最後まで支えてやるよ)」

事実を話したらジェニスが突然頭を下げた。しかもなんか決意した表情浮かべるもんだから訳がわからないよ。そんな、俺は別にネグレクトされてた子じゃないんだから……自分で選んだ道だしな。

「あ、チビ隊長と副長にはなしてんの?」

「パラダイスバーガーの話」

「おうオリーブ伍長いいところに来た。お前さんもパラダイスバーガー食べた事あるだら?」

「いえ、あたしはあんまり…あ、でも軍曹がそういうの好きみたいでしたよ」

「……イメージどおり過ぎる」

筋肉ムキムキマツチヨマンで脳筋のデュラント軍曹。期待を裏切らない男。

「ちなみに、ジェニスと伍長は、なにがお勧め？」

「そりや、色々とメニニューがあります、オーソドックスなパラダイスバーガーセットが一番無難かと」

「副長意外と堅実」

「うっせ。そういう伍長は？クロワツサンか？」

「熱帯雨林特集のミミズバーガーですね」

「……………わんもあ」

「ミミズバーガーですけど…：なにか問題でも？」

熱帯雨林特集、それはハフマン島の南に位置する港町にあるパラダイスバーガー店では販売されていないある種究極の店舗限定メニニュー。マンガロブ貝のスープや蛇とカエルの丸焼き、そして熱帯雨林の代名詞たる人の腕ほどもある巨大ミミズの肉をすり潰して挟んだミミズパラダイスバーガー…見た目は普通のハンバーガーらしい。

成程、伍長さんはゲテモノ大丈夫なのか。

「うええ…ミミズなんて誰が…」

「意外といけるよね」

「へえい!？」

「っ！隊長！わかってくれるの!？」

「あの淡白な味わいは癖になる、うん」

「あ、ありのままに起こった事を話すぜ？個性豊かな面子の中で一人だけ鉄面皮というクール属性だと思いきや、実はゲテモノOKなスゲー個性を持ってやがった。しかも二人。頭のねじが吹っ飛んでるとかちやちなもんじや断じてねえ。もつと恐ろしいモノの片鱗を…」

「待てジェニス、それ以上いけない」

尚、俺は熱帯雨林セットは食べた事ありません。全部自分でキャプチャーして食いました。主に母上に課せられたサバイバル訓練で……見た目はともかく美味しいのよ？同じくゲテモノOKだったオリーブ伍長と俺がゲテモノ飯の良さを語らう中で副長以下その他の面々は非常に微妙な表情を浮かべていた。

ふん、これだからアングロサクソン系は困るね。美味しいものは見た目はともかく美味いのだ。これ世界の理の一つだよ。間違いない。

「マウスナゲツトって食べた事は？」

「丸焼きなら」

「おかしいよ。隊長も伍長も絶対おかしい…」

「大丈夫、一度食えば解る」

「その通りです！」

「お、俺まで仲間に加えようとするな！」

「えー」

「あーもうやだコイツら……。隊長、そろそろおしやべり辞めて仕事しましょう、伍長も列に戻るうな、な？」

「わかった」りました」

そんなアホな会話をしながら、さりとして哨戒にも手を抜かず行軍する俺達。マルチタスクというのは非常に便利なものである。

そして俺達が無駄口を閉じてから1時間後——

「隊長。合流ポイントの病院に到着しました。斥候からの報告では周辺に敵は確認されていません」

「…他の分隊と合流次第、1時間休息を取る、各員は見張りを立て、交代交代で食事を取れ」

「解りました。見張りを立たせ、食事を取らせます——おーいお前等！飯だ飯！」

「「いえああああ!!」」

副官のジェニスが他の人たちに伝えていく。飯にすると聞いた途端、これまで疲れていた彼等の表情に活力が戻るあたりなんというか…。ともかく飯だ飯。

「小さな隊長さんよ。こっちきて食おう」

「うん。ヴィズ…出して」

『イエス・マスター』

周りが食事を作り始める中、ジェニス少尉やデュラント軍曹がいるグループに声を掛けられた俺は、素直に頷き彼らの近くに座る。見れば彼等はバックパックからレーションを取り出したり魔法で取り出したりと収納方法がバラバラだ。

これは我が部隊の魔導師資質からくるレベルの差というべき現象である。魔法の格差社会という奴だが、どうもこの部隊の連中はそういうのは気にしない性質のようだ。お陰で俺も受け入れられている様だし結果オーライである。

それはともかくとして、俺もまた自分のデバイスであるヴィズの格納領域から、しまつてあるレーション一式を取り出した。デバイスってマジ便利。これ一つあれば重たいバックパックつけなくてもいい。

周りを見回すと、調理時間が短い奴はもう食い始めている。というか気が早い奴はヒーターすら使っていない。それでも食えるのがレーションクオリティ。そのまま

かつ込んでも何とかなるのだ。俺はそんな事はせずちちゃんと手順どおりにレーションを作る事にしよう。温かい飯は旨い、これ鉄則。

んで、適当に温めたところでパックの中身をスプーンで掬ってみた。

「これって、何のお肉、だろう」

「さあ？ 形成肉だつて聞いてますよ？」

「……元は？」

「食えりや同じですよ……多分きつと」

「それれんと？」

「まて隊長。なんだか解らないがそれ以上いけない」

マジでソレだったら正直笑えないんだが……こちらも腹が減っているので気にせず口に運ぶ。肉の塊をルーと一緒に掬い上げ口の中に収めると、肉料理特有の仄かな獣臭が感じられる。だがソレもトロリと野菜が溶け込み旨味が濃縮しているルーの中ではあくセントに過ぎない。肉を租借するとレトルト特有のハラハラとした肉が解ける感触が心地よい。それでいて肉の味は失われていないのだから、中々のものである。

シチュー味で一杯の口の中、そこに投入するのがパン代わりのクラッカーだ。前世であつたり○ツクラッカーを二周りほどデカくし、倍に分厚くしたようなソレに齧り付く。見た目とは裏腹にサクではなく、若干しつとりとした食感の後、シチューの風味に

溶け込んでくるのはチーズの香りだ。肉とチーズの実に濃い二重奏が繰り広げられるなか、クラッカーのいかにも主食といえる小麦粉系の味が中和し、口の中を調和へと導いていく。

うん、いいじゃないか。

そしてソレらを作っておいた粉末ジュースを溶かした飲み物で流し込む。さわやかな柑橘系の香りと若干水をケチった事で濃くなってしまった甘みが口の中を駆け巡った。しかし濃厚なチーズとシチューの味の前には、むしろこれくらい濃いほうが良い。ングつと？み込むと、胃袋まで落ちていく感覚がして、飯を食したという何ともいえぬ幸福感がして良い感じである。

当然手は休めずにそのまま第二第三と口へ運んだ。気分はハムスター的な小動物、身体の性質上大きく口が開かんで、ハムハムととにかく口を一生懸命に動かして食すのだ。というかそうしないと他の人たちが食べ終わるの間に合わないんだよね。それにしてもしチューのレーションはあたりだったなあ。

軍隊なのだしレーションは大味と思われがちだが、その実付属する菓子類は市販品のものとなんら変わらない。唯一気をつけたいのはおかずだ。これだけは契約会社があるのか軍独自の物らしく、基本的にはずれば少ないのだが、時折とんでもない味のが

あつたりするギャンブル飯である。

ちなみに俺がこれまで食った中で一番のはずれは水溶き麦粥でした。

アレは人の食い物じゃない。家畜のえさだ。マジで。

「ぐおおお、なんだこれは…信じられない…」

「どうした？」

「バーガーって書いてあるから信じてたのに！信じてたのにつ！」

「あん？……ライスバーガーって……邪道通り越してなんだこりゃ？」

ハムハムしてると、なにやら一部ではバーガー談義が行われていた。レーションの種類によつてはハンバーガーとかサンドイッチがあるらしいが、さすがの俺もライスバーガーがあるのは知らなかったので思わず聞き耳と立てる。

「うう、でも不味くない。不味くないんだ。だから余計に変な気分」

「いや旨いなら問題なくないか？」

「そういう問題じゃねえんだよっ！いいか？バーガーはバンズと！パティと！ピクルスと！ケチャップ&マスタードに刻み玉ねぎが王道なんだよ！！だがコイツはツ！ライスを固めて焼いた奴に何かのソースで炒めた玉ねぎと肉を挟んだだけなんだぞ！クソ旨い」

「……やっぱり旨けりや問題なくないか？」

ごもつとも。胃に入れば同じだが、美味ければ尚良し。元気が湧くからな。

俺も早く食べなければ、はむはむはミツ!?!——舌噛んだ、イタイ。

《——カタ》

「——う、ん?」

間違つて噛んでしまった舌べらを頬の外から手で撫でながら、部下の他愛ない談話に聞き耳を立てていると、なにやら背後から音が聞こえた。

「……(ヴィズ、俺の背後にスキャン実行)」

『(イエス・マスター)』

ちらりと背後を見るがそこは壁だ。しかし用心に越した事は無いので密かにヴィズに調べさせる。若干待機状態のヴィズが淡く光るが、幸いこちらに眼を向けている輩はいないので問題ない。

『(生命反応を検知。されど敵性レベル低)』

「……(うん? 敵じゃない? 動物?)」

『(金属反応や魔力反応がありません。可能性は20%、さらにスキャンを実行——換気口の中です)』

「……うしろ、ね」

すくつと立ち上がる俺。急に立ち上がった事で周囲が喋るのをやめる。これでも隊

長だから、俺の気に障ったとしても思ったのだろうか？まあ約一名は普段どおりだが。

「隊長？どうしたんですかい？」

「なんかいる」

「へ？しかしこの部屋は索敵済みですよ？」

副官の言葉を聞きながらも俺は壁の前に立つ。

ふむ。足元に換気用のダクトがあるな。正し小さいが…。

「ちよっ！隊長!」

しゃがみ込みダクトの蓋を開けて奥を覗いてみる。薄暗くて見づらいが、成程…確かに何かいる。魔力弾形成の応用で小さな魔力塊を作り、その光源で照らしてみたところ。

「なんでだ…」

ダクトの中に居たそれを見た俺は、思わず何で？と呟いていた。

「隊長？いきなりダクトに頭突っ込んでどうしたんです？」

「…：足を引っ張って」

「へ？」

「はやく、命令」

「りよ、了解」

足首を持たれる感覚。ズリズリとダクトから引き摺りだされた。そして俺と共にあるものが一緒にダクトから外に出される。そして出てきたものを見たジェニスたちから同様の声が上がった。

「な!?!子供!?!」

「ここはOCUとの境界線…一番の危険域ですよ!?!なんでこんなところに子供が——」

「そんな事よりも、メデイック…レンチャック、この子衰弱してる。診てあげて」

「……イエッサー、ボス」

明らかに衰弱してぐったりとしている子供をレンチャックに任せ、俺は立ち上がると身体についた埃をパンパンとはたく。それと同時に、見つけた子供の方へを視線を向けた。

「エドガー君、なんでここに?」

ダクトの奥でぐったりとしていた難民キャンプに要る筈の一人の少年に、俺は思わずそう漏らしたのだった。

「うえからくるぞー！きをつけろー！はフラグ」

S i d e 三人称

——母さん……

エドガー・キャデラックが意識を浮上させた時、彼は夢の中で母親の姿を幻視していた。病気に掛かり衰弱した自分の母は痩せ細っている。キャンプでの悲惨な生活が母親を病魔に侵させたのだ。

彼は知っている。母親が自分達を心配させまいと常に健常に振舞っているのを、だが夜には声を押し殺して斃されている事もあるのをキャデラックは知っていた。聡い彼は母がムリしている事を感じとり、だからこそ自分も明るく振舞うように勤めた。これ以上母親を苦しませない為に、自分よりも幼い妹の為に……最愛の家族を思う故の行動。

だが母の容態は更に悪化していった。夢の中であつてもはつきり見えていた土気色になった母親の顔に死の影を感じ取り、それは少年に悪夢としておぼろげに記憶に傷を付けていく。

彼は夢と現実の狭間の中で思い出していた。どうして自分がここに来たのかを……

エドガーが難民キャンプを後にした理由は全ては母親が風邪を引いた事から始まっ

た。ただの風邪。運よく戦火を生き延びた家族全員がそう考えていたのだが、元々あまり丈夫な身体ではない事と慣れない難民キャンプでの生活。物資不足から来る医薬品の不足。これらが合わさった事で彼の母親の病状を急激に悪化させるに十分なフアクターを備えている事にその時は誰も気がつかなかった。

気付いたときには手遅れに近かった。軍からの支援物資が運ばれてから3日後、その時に出会った不思議な少年を事を思い出しながら自分達家族に宛がわれたテントに入った時だった。母が咳き込みながら倒れてしまったのである。

突如倒れ付す母、呆然とする自分。泣き喚く妹。どうすることも出来ないしていると、同じく戦火を生き延びたご近所の知り合いが、母の咳き込む音を聞いて駆けつけ、直ぐに担架を作ると母親を載せ、どこかに運んでいった。彼は黙って妹の手を引いて担架で運ばれる母親の後を追った。

母親が運び込まれたのはキャンプに常駐していた医療ボランティアのテントだった。彼等に診せにいくと母は風邪が悪化して肺炎を起こしてしまったことが解った。安静にして栄養を取らせ、そして薬を使えば治せる。そう医療ボランティアの人は言っていた。

しかし、どうすればいいのだ。キャンプでの生活は生き抜くのにギリギリの物しか手に入らない。滋養のある食事も、清潔な水も、栄養剤も…ましてや病気に効く薬すらも、

平時なら幾らでも溢れていたそれは、ここでは手に入らない貴重な代物ばかりだった。また只でさえ体が丈夫ではない母は彼の目からしても今にも死んでしまいたいように見えた。少年は考えた。大好きな母親を治すにはどうすればいいのかを、妹の泣く声を聞かずに済むにはどうすればいいのかを……。看病しながら泣き続ける妹を泣き止ませるにはどうすればいいのかを……。

そこでひらめいたのが病院で薬を探す事であった。子供であった彼は母の具合の悪さを考えていて、薬Ⅱ病院という短絡的な思考に支配されてしまったのである。彼は医療ボランティアから必要な薬の種類を教えてもらおうと、母を妹に頼みそのまま難民キャンプを飛び出したのである。

しかし、物資が不足しているここでは、そういった物資がありそうな場所は全て探索されており、診療所の薬局は勿論ドラッグストアも物資は全て回収済みで、近隣ではお目当ての薬は手に入らない。だがエドガーにはプランがあった。危険だから近付くなと大人達に言われていた地区。即ち西側の元国境付近にある医療設備に向かうというプランだった。

戦争が始まってから、だれも足を踏み入れなかつたそこでなら、医薬品が残されている。そう考えたエドガーは走る速度を上げる。目指すは地下鉄の駅だ。開戦以来、地雷原が設置された地上と違い、地下鉄にそういった危険な代物は無い。

彼は懐中電灯と放置された車から拝借した発炎筒数本と共に、人の行き来が絶えてからぼつかりと暗い口を開ける地下鉄構内へと一人降り立った。地下鉄の駅は戦争が始まりダイヤが運行されなくなったその日のままの姿で静まり返っていた。時折響く風の音が構内で反響し、恐ろしいモンスターが闇の向こうに潜んでいるように少年に感じさせる。

彼はつばを飲み込んだ。こんな恐ろしい場所：遊園地（ワンダーランド）のホラーハウスに入った時のようだ。誰も居ない筈なのに響く金属や建物自体が軋む音が彼の足を竦めさせる。

だがエドガーはすぐに立て直すとおくびもせず歩を進めて、改札だった場所を潜った。今の彼はとにかく母親の為に急いで薬を取りに行くので頭が一杯だった。漆黒の空間を彼の懐中電灯の光だけが切り裂いていく。闇に光を当てると、そこに潜むモンスターも消し去れる気がして、彼は懐中電灯で前を照らし続けた。

地下鉄の案内図を見つけた彼は総合病院の場所に一番近い駅を思い出し、その方面へと続くトンネルへと降りた。トンネルには電車が停まったままで放棄されている。半ばトンネルを塞ぐような形であったが、子供である彼なら余裕をもって通り抜けられた。暫く線路に沿って彼は歩き続ける。懐中電灯の光すら届かないトンネルの奥はあまり見えないようにした。そうしないと引き込まれそうな感じを覚えたからである。

足元は水浸しだった。開戦からいままで動力が停止した地下鉄に、ハフマン島に豊富に降り注ぐ雨水が入り込んだ結果だった。動力が無いので排水する設備が稼動してないのだろう。エドガーは成る丈水を避けて進んだ。浅いのは解っていたが、薄暗い空間に溜まる水溜りには水掻きを持った怪物が要るような気がしてならなかったからだ。

少年は歩き続ける。暗い地下鉄の中を。パイプが軋む音だけで泣きそうだったが家族の為にと勇気を出して歩を止めなかった。途中の地下鉄の駅では運良くパンの自販機を見つけた。地上への出入り口が瓦礫で埋まった事で誰も降りてこなかったのが幸いした。早速落ちていたコンクリートの欠片でガラスを叩き割り、中から食べられそうなパンを幾つか見繕い腹に収めた。

そして腹を駆逐した彼は、目指す駅まで一直線。だが、彼の快進撃はそこまでであった。目指す地下鉄の駅が「見えた」後、彼は――

「……………うう、うう……………」

少年は夢から覚めた。

頭がボーっとして重たい。フラフラする身体を起こそうとするが力が入らない。何とか力を振り絞り絞り上半身を起こしたがそれと同時に襲い掛かったあまりの気持ち悪さにえずいた。

「気がつきましたか？」

彼は身体を震わせた。今この場に誰か居るとは思わなかったからだ。慌ててそっちに顔を向けようとするが、疲れきった身体はいう事を聞かない。アツと声を発する間もなく、視界が斜めつて行き、せつかく起こした身体が倒れそうになる。

「おっと。まだ無茶してはダメです。あなたは発見された時、大分衰弱していたのですから」

「レンチャック、どう?」

「脱水症状を起こしています。とりあえず水分を取らせたほうがいいでしょう。ハフマンは暑いですからね。隊長お手柄ですよ」

ゆつくりと振り向いたエドガー少年が見たのは、野戦服に身を包んだ兵隊…と子供。兵隊は誰なのかわかる。自分が生まれた国、USNの兵隊の姿は廃墟での散策の途中何度も見ていたからだ。彼等は愛想がいいとは言いがたいが、それでも物資援助をしてくれたりする。『良い人』たちだとエドガーは認識している。

一方、子供の方も彼には見覚えがあった。六日前に難民キャンプに突如現れて一緒に遊んだフェンという自分より小さい子。そのフェンが自分のほうを覗き込むようにして立っていた。視線が交差する。兩人とも、まさかこんな場所で再び出会うとは思っていないかった事もあり、お互いの間に沈黙が流れたが…。

「あつつ…」

エドガーは肩に痛みを覚えてそこを押さえた。やわらかい感覚。見れば痛みを覚えた場所には柔らかな包帯がやきつめに巻かれている。だがエドガーは痛みと共に、ここに来るまでに体験した色々な恐怖を思い出してしまい、混乱のあまり肩を震わせながら、意味も無く口から助けを求める声を吐き出し始めた。

「たすけてえ！たすけてエエ!!」

意識が目覚めた事が、それまで塞き止められていた感情があふれ出した。それは恐怖。少年はこのダクトに逃げ込むまでの間に命を失うという恐ろしい体験をして、それを思い出し錯乱してしまったのだ。特殊な訓練を受けているわけではない彼は只ひたすらに痛々しい声で助けを求めて叫んでいる。

それを見たレンチャックは鎮静剤を使うべきかと考えた。落ち着かせない事には情報も得られなければ下手すれば自傷行為に走ることも考えられる。だが軍用の鎮静剤は非常に強力なものであり、未成年の子供に対して使用する事は戸惑われる。量をどうすべきかレンチャックが逡巡したその時、彼の横をフェンがするりと通り抜けた。

「たすけてえ！たすけ——むぐ」

《——ぎゅっ》

「大丈夫、大丈夫だ」

そして、我等が小さな隊長は恐怖から喚き続ける少年を後ろから抱きしめていた。錯乱した相手に接触する事は非常に危険だ。余計に混乱をきたし両者を傷つける事もあ
る。だがフェンは迷う事なく取り乱している少年をその小さな腕で掻き抱いていた。

するとどうだろう。驚くべき事に錯乱していた少年が静かになつたではないか。レンチャックはあつけに取られて彼らを眺めていた。人間にとつて一番安心できるのは人肌の温度だという。まさかこの小さな隊長はそれを用いて少年を静めたというのか? まだ生まれて10年も経っていない子供が人の心に平安を与える器を既に持っている? ありえない…だがこの不思議な子なら或いは…。

レンチャックはありえないと頭を振ると再度フェンたちを見た。座り込んでいたエドガー少年を立つたままのフェンが背後から首に腕を回す形で抱き絞めている。暴れても大丈夫なようにフェンの腕はエドガー少年の首をがっちりホルドしている。エドガー少年は最初こそ少し暴れたように見えたと、今ではおとなしく両手をダランとなげてフェンにされるがままとなっている。

時折、その腕がピクピクと痙攣するかのようにな——痙攣?

「ちよつ! 頸動脈を絞めてるぞ! そのガキに止めを刺す気かっ!」

「あ」

——それを見守っていたジェニスがか叫んだ事で、エドガー少年は危機を脱したのだつ

た。

メイックのレンチヤックは評価を訂正する。小さな隊長殿はやつぱりどこか螺子が抜けている。

「——申し訳ございませんでした」

正座をし、頭を床につける。そう土下座だ。日本人なら誰でも知っている。悪い事をしたと心底思っている時に謝罪すべき相手に対して行う謝罪の為の動作である。うっかり絞め落としかけた手前、本当に悪かったという意味を示す為にフェンが全身で表現した結果がこれである。

「え、えつと…べ、べつにいいけど…」

この後、気付けをしてもらい再び眼を覚ました少年は再び錯乱する前に、眼の前で土下座をしているフェンを見て、何故フェンが頭を下げているのか解らないという困惑を与えられた結果、逆に冷静になっていた。混乱には混乱をぶつけるという状況が図らずとも為されたのである。本当に偶然だが。

だが誠心誠意謝る心が通じたのか、少年は良く分からないうちにフェンを許していた。まあ彼の場合錯乱していた上に頸動脈を絞められた時に酸欠ですぐに暗転したので、なんで気絶したのかとか以前に何時気を失ったのかすら覚えていない。哀れな事で

ある。

それとフェンの土下座の雰囲気流されたというのもある。純粋なUSN国民であるエドガー少年が異世界の日本のソレを知っている筈も無い。だが土下座は見れば見る程に居た堪れない感じを覚えるのは世界共通のようだった。

ちなみに土下座という恥の文化というものを始めて見るジェニス以下レッドクリフ隊の隊員たちも困惑していた。「こいつはまた…なんというか…」と隊員達の心境を表すようにジェニスが呟く…というかドン引きするほどーにフェンは見事な土下座を披露していたのだった。閑話休題。

とにかく許されたのでフェンはとつとと情報を引き出す事にした。幸いエドガーとフェンは顔見知り。なので尋問というか調査は隊長のフェンが行う運びとなった。それはエドガーにとつてもありがたかった。何せフェン以外は全員大人であり、しかもほとんどが厳つい顔したムキムキマッチョマンかメスゴリラ…それなら誰だって中性的な少年を選ぶだろう。

「どうして(ハハ)に?」

「……………母さんの、薬を探しに」

フェンに尋ねられ少しだけ言いよんだエドガーだったが、フェンに見つめられ続け、その視線に耐えかねたのか僅かに口を開くと、ボソボソと小声で話しだした。母親

が倒れたがキャンプには母を治せる薬品が不足しており、自力で入手するしかないと思
い立ったから、この廃病院まで足を運んだのだと……これは隠すような事でもない。

まだ衰弱していたので言葉はつつかえつつかえだったが、フェンはせかす事もなくそ
れどころか水の入った水筒を彼に与えたまま、エドガーが話し終えるまでずっと耳を傾
けていた。そのお陰かエドガーは嘘偽りもなく、まるで懺悔するかの如くに覚えている
限りのこれまでの経緯を口にしていった。

どうしてそこまで喋ろうと思ったのかはエドガーにも解らない。だが眼の前の静か
に聞き耳を立てている自分よりも小さい子の眼を見ると、彼は話さなければならぬ気が
がしてならなかった。

「成程、母親の為……か」

「どうしても薬が欲しかった。もう家族が居なくなるのは、いやなんだ」

とりあえずエドガーが地下鉄に降りたあたりまで聞いたフェンは呟くようにしてそ
う溢した。その一方で生来揺らぐ事があまり無い自身の鉄面皮の下に、フェンは複雑な
心境を覚えていた。エドガーの行動は、あまりにも無謀かつ考えなし、無鉄砲だといえ
たからである。

「事情はわかった。けど……なんでUSN軍に連絡入れなかった？」

「え？……それは、えっと」

「USN軍は、近隣キャンプに援助を行っている。勿論、命に関わるような病気を患ったりしたら、優先して医薬品を回したりする用意くらい、ある」

そう。エドガーは本来なら周囲の大人を頼り、USN軍の基地に連絡を入れてもらうべきだった。確かに最前線にあるだけあって、キャンプの人間を移送するのが難しい現状ではあるが、緊急時なら話は変わる。良くも悪くも人権を尊重する：ここらへんフェンは鼻で笑いたくなるのだが：お国柄なので、生粋のUSN国民であるエドガーの救援を求める声は問題なく軍に送り届けられる筈だ。

そうなれば、医薬品が届けられたり最悪キャデラック親子だけでも少人数で後送する手筈くらい整えられる筈である。実際、大規模に移動こそ出来ないが細々とキャンプにいる難民たちは具合の悪い者を最前線から離れた街まで移送した事例はあるのだ。

もつとも、その行動を事前に敵に察知された所為で何かの作戦行動と勘違いされて護衛部隊などに少くない被害が出たこともあるが、ソレはソレである。

そしてエドガーはフェンの指摘になきような顔になった。いや、泣きそうではなく目頭が熱くなつていて既に泣いていた。急いで飛び出した上に数日間人と会わなかった緊張感が今まさに崩れている。そんな中で直接ではないがあたかも自分の行いが否定されるような言葉を聴かされれば泣きそうにもなる。エドガーはまだ子供だった。

「……でも、その心は、無駄じゃない」

「え？」

フエンに指摘され、じゃあどうすれば良かったんだ……とぐちゃぐちゃな心境で、震えてしまう肩を抱えていたエドガーだったが、それを眺めるフエンはまだ言葉を紡いでいた。

「誰だつて、護りたい、助けたい人はいる。それは、人として、人であるために大切なもの……なくしちゃいけないもの——どうしても、助けたかった。でしょ？」

「……うう……」

「エドガーの行動は間違いだったけど、間違いじゃない。だから——」

フエンはエドガーの手に自らの手を重ねる。はっとしたエドガーが顔を上げると、そこには彼の瞳をジッと見つめるフエンの黒い瞳がそこにあつた。その瞳にはエドガーの顔が映りこんでいる。いまにも泣き出しそうな、子供の顔。

「——後は任せて……それと、良くがんばった」

表情こそ浮かべないものの、フエンは勤めて優しい声色で喋りながら、ギュツとエドガーをハグした。先ほど見せた締め付けるような力ではなく、どこか元氣付けるようなそんな感覚を与える優しいハグ。フエン自身氣をつけて力加減をしたハグは強すぎず弱過ぎず絶妙な力加減でエドガーを包んでいる。

ハグが与える安心感ともいふべき感覚を感じたエドガーは、この瞬間それまで抱え込

んでいた色々な感情が溢れだし、それまで支えていた緊張という堤防はいとも簡単に決壊した。

「うう、うえええええ……!」

エドガーは泣いた。声を上げて泣いた。ただの子供が一人、誰も居ない廃墟と化した地下鉄の暗闇の中を歩き続けたのだ。そのストレスは計り知れないものがあつただろう。顔をくしやくしやにしてぼろぼろと涙を流す少年の嗚咽だけが廃病院に木霊する。

フェンはもう一度腕に力を込めて抱きしめた。見た目こそ、この場の誰よりも子供であるが、彼は転生を体験したが故に心は大人である。しかし成熟した精神を持ちながらも肉体に引き摺られた幼き精神もまた彼の中には同時に存在している。それはフェンが大人が持つ父性とも呼べる性質と子供への仲間意識の両方を手に入れているという事でもある。

だからだろう、本当の意味で子供であるエドガーが、どこちなくも慰めるかの様に撫でるその手を払いのけなかったのは…。そしてこの場にいる兵士達がエドガーをあやすフェンの事を嘲笑つたりしなかったのは…。無表情だし感情も解り難い。けど心は同じなのだと兵士らは改めて我等が隊長を見直していた。

「あー、あはは。おほん。ああ隊長。そろそろ話しを進めたいんだが?」

さて、甚だ奇妙であるが年齢一桁で鉄面皮に定評がある少年が、苦難の中を進んでこ

こまで来た少年に対して見せた父性により、戦場なのにとこか暖かな雰囲気広がっていたが、このままでは話が進まない。レッドクリフ隊の副隊長であるジェニスはこんな雰囲気の中で発言するのは、正直：いやかなりやり辛いと感じたが、意を決して口を開いた。

未だに慈愛の籠ったハグを続けていたフェンであったが、隊長という立場を理解しているからか、存外素直にエドガーを腕から解き放ち、少年から一步はなれた位置に立つと副官のジェニスを見つめる。相変らずの無表情であるが眼に映る光は先ほどまでの優しい光からどこか鋭い色を湛えて、スイツチが切り替わった事をジェニスに伝えている。

副官はそれに頷き、エドガーのほうを向いた。

「ありがとう隊長。んでその坊主、親の為に薬を探しにここまで来たのは解ったが、なんでダクトに隠れていたんだ？」

ジェニスがエドガーに問いかける。エドガーはここに来る理由を話したが、何故目的地の病院に隠れ潜んでいたのかを言わなかったからだ。

「そうだった！フェン！早くここから逃げないと！いるんだ！地下に！沢山のお化けが！」

「お化けとききたか」

正直、この仕事をしていればそういう体験の一つや二つ…と、ふざけている場合ではない。それだけ眼の前で座り込みながらも恐ろしい体験を思い出して身体を震わせている少年の声は必死だったのだ。あまりにも必死なその叫びをフェンはどうどうと肩を軽く叩いて落ち着かせる。

「何を、見たの?」

「地下鉄のトンネルを歩いて、ここに近い駅まで来たんだ」

正確な時間はわからない。何故なら腕時計や携帯に該当する機器をエドガー少年は持っていないからだ。だが恐らくであるが少年は昨晩くらいには廃病院近くの地下鉄のステーションに到達していたのである。

「それはさっき聞いた——」

「聞いて!俺はこの駅に来た時に見たんだ!赤い光を宿した大きな棺桶みたいな箱のお化けが駅に繋がるトンネルに沢山いたんだ!慌てて逃げたけど大きな音がして肩が凄く熱くなつて!」

「大きさは?」

「俺よりもずつと大きかった!駅の天井ギリギリまで届く怪物だった。赤い目玉が三つ、ギョロギョロと動いてこつちを見たんだっ!!」

「箱のお化け…しかも目玉が三つ——隊長」

「どうも、ただの哨戒とはいかなくなつたかもしれない」

再び大きな声を上げたエドガーを今度は部下の衛生兵に任せ、フェンは副官と向き合う。エドガーが齎した情報がそれだけ危険なものである可能性があつたからだ。

「……………ジェニス、偵察とステルスが高い隊員を集めろ。エドガーの言つた事が本当かどうか確かめなきゃならない」

「了解です。誰に引き連れさせますか?」

「そうだな。今回は俺が行く」

「ちよつ!? 隊長自らが?」

「隠密系の補助魔法が使える。それと…予想が正しいなら、もしも〃に対応できる人間もいる。どちらも満たしているのは俺だけ。その間の部隊指揮は任せる」

「解りました。が、無茶はやめてくださいよ? 連続して上司が消えるのは御免です」

「こつちも願ひ下げ…準備を急がせろ」

フェンたちレッドクリフが慌しくなる。エドガーの言葉を鵜呑みにする訳ではないが、捨て置ける程の問題じゃない。兎にも角にも情報が入りだつた。ジェニスが部隊員に声を掛けていくのを尻目に、フェンは静かに自身の相棒であるヴィズ…待機状態である腕輪に手を乗せ、直後強い光に包まれた。

……………

.....

不気味に静まり返った地下鉄の駅。昼間でも日が差さないこの薄暗く埃っぽい空間を音を立てないように進む者たちが居た。彼らの姿は非常に薄く、辛うじて輪郭が解る程度であり、何らかの魔法的処理を施しているのが解る。そんな彼らの先頭を進む一人はブーツを履いているとは思えない猫の様な俊敏さで明かりが消えた改札を乗り越えて周囲を警戒し、何も無いことを確認するとスツとハンドサインを背後に続く者たちへと送った。

それに続いて同じように静かに移動した数人が改札を乗り越えて、両手に持つデバイスと銃器を向け周囲を警戒しながら、柱や自動販売機をカバーに据えて、暗闇の中を淀みなく動いている。彼らは完全に駅を満たしている影と闇に溶け込んでいた。音もなく進む姿はまさに一個の生命体の様だ。

そしてぼやけている彼らに混じって、小さなロボットのような輪郭をした存在もいた。言わずもがなフェンである。いつもの様にギヤリギヤリと脚部ローラーで移動するのではなく、硬質な素材で出来ている脚部でどうやって移動するのか音すら立てずに、先に行く者たちとそんな速い速い移動している。

またフェンのバリアアーマーの特色でもある防御魔法が常に展開している純白の装

甲は鳴りを潜めており、今は「かなり透明に近い半透明」という姿に変わっていた。辛うじて輪郭だけがぼやけて見えているのでそこにいる事がわかるが、フェンもまた音を立てずに移動しているの、注視しない限り見分けるのは難しいであろう。

これは景観や景色に溶け込み魔法探査すらも鈍らせる光学迷彩展開型の隠密結界魔法ミラージュハイドを纏っていたからである。この結界によりフェンは闇に溶けていた。ミラージュハイドは本来は完全に姿形を見えなくさせる魔法であるが、あまり魔力を使うとそれ自体を感知される可能性があり、身体に纏わせておく魔力出力を限定している為に薄っすらと見えているのである。

フェンと共に行く半透明の者達らも、レッドクリフ隊の中でも偵察や隠密行動に優れミラージュハイドを体得している者たちだ。彼らはエドガー少年の証言を確かめに、この暗闇に支配された地下空間に降りてきたのである。彼らは無駄のない動きで改札を抜け、先にあるホームへと降りる為の階段まで来るとそこで一度停止した。

『(階段に到達、敵の姿は確認できません)』

フェンの頭に声が響く。無線ではなく魔導師の念話による報告だ。ポイントマンを任せた部下。コールサイン、レッドクリフ10のワット・ターナーが、階下に続く階段を物陰からファイバーを使って確認したのだ。同時にデバイスを介した念話の信号に乗せた映像データも送られてくる。視界が増える。簡単に説明すれば頭の中にもう一

つの視界が現れるのだ。

確かに階下に続く階段には誰も居ない。ところどころに開戦時の爆撃で崩落したコンクリートの残骸が点在するくらいで他には何も映ってはいない。フェンは念話で進めと指示を出した。非常にかすかな、それこそ息を潜め近くに居なければわからない程の床を叩く音と共に部下達が移動していく。

ヴィズにより聴音補正された音により何処で誰が動いたかはフェンには解っていた。彼もまた遅れはしないと音を立てずに移動する。衝撃を和らげる魔法術式の応用で音を出さずに移動できる彼らは点在する瓦礫を転々と移動しながら、お互いが常にカバールできる動きで地下のホームに降り立った。

そこは完全に真っ暗であった。開戦以来電気も通っていないのだから当然といえる。身体強化による視界の強化と暗視がなければ一切の物が見えない完全な暗闇。視界補正をしているフェンたちですら見えているのは手前の物で奥にある物は霞んでいるようになり見えない。こんな場所をエドガーは一人で突破したのか…。家族愛は偉大だ。

『(周囲に脅威はあらず、動的物も反応なし)』

しかし、問題の敵の姿は見受けられない。ホームはシンと静まり返っている。エドガー少年が嘘つき少年でないのなら、場所は間違っていない筈である。

「(散開…調査を続けろ。かすかな痕跡も見逃すな)」

だからフェンも彼らにこう指示を出すしかない。本当にエドガーが嘘をついていないのであれば、だが……。暗い中姿を消したまま散っていく。フェンも何かしらの痕跡を探す為に先ずはホームのトンネルへと歩を進めた。路線図によればこの地下鉄は環状線の形を取っており、上りと下り二つの路線が同じホームにある。

トンネルも二つ通っている事になるが片方は崩落によりふさがっており、もう片方も半ばふさがっていた。しかし完全にふさがっては居ないのか、確かに子供一人は通れそうな穴がありトンネルの奥と繋がっている。

(……………ん?)

ホームから線路へと降りていたフェンは、ホームの縁の部分に一箇所だけ微かに色が違う場所を見つけた。液体をぶちまけたあとに乾いたそれは黒っぽく変色している。彼はそこに静かに手を置いた。彼が纏う強化装甲デバイスであるヴィズが腕部のセンサーを用いて変色した部分の解析を行う。結果はものの数秒で出た。血液だ。

それも人間の血液。流石のヴィズもDNA解析の機能は入れていないので、これが誰の血なのかは解らない。だが唯一ありえるのは……フェンの頭の中で眼の前の血痕とエドガーの腕の傷が等号する。血痕の固まり具合から十中八九この血痕がエドガーのものであるとフェンは確信した。同時に、ここでナニモノかに撃たれたという事も。

『(隊長。痕跡を発見しました)』

その時、フエンから見てホームの反対側を探っていた部下の一人が何かを発見した。フエンもその念話を送った部下の近くに移動する。

『(ここです。真新しい弾痕です)』

一瞬だけ、手首だけミラージュハイドを解除するという高等技術を見せた部下。その指が指し示したのはホームの天井を支える柱。そこには確かにごく最近に出来たと思われる抉るような銃撃の痕跡があつた。間違いなく、ここで地上にいる少年は襲われたのだ。

銃弾の抉り具合から大体の射線を割り出したところ、この柱を挟んで少年は撃たれたのである。むしろ軽症で済んだ事が奇跡であつた。しかし少し腑に落ちないのは撃たれたにしては柱の損傷具合がそれほど大きくないという事であろう。

ともあれもつと調査しよう。今は情報がある——そう思った矢先。

『(隊長!トンネルの奥から何か来ます!レールが震動している!)』

『(っ!身を隠せ!)』

先ほど調べた上りのトンネルとは逆位置の崩落していないトンネル。その奥から微かな風がホームに流れ込んできていた。部下の一人はその風とレールが極僅かに震動している事に気がつき警告したのだ。

彼らが遮蔽物になりそうな柱や金属の大ゴミ箱の陰に身を潜めると同時にホーム

に何かが入ってきた。それは暗闇を照らす灯りを点してはいなかった。だが外壁を外した貨車に乗って現れたそれらを暗視を掛けた視界で彼らはハッキリと捉えていた。

長方形の形状に赤く光る三つのセンサーアイ。《∴》の形に配置されたそれらには人ものものに良く似た似た四肢が付いている。貨車に載せられ現れたのはOCUが量産している汎用無人機。フェンが嘗て全滅必至のシミュレーターにて、思いっきり銃弾を撃ち込んできた無人機と同型機が6機。貨車に乗せられてホームへとやって来たのだ。

「地下で何かたくらむのは悪者だと相場が決まっている」

S i d e 三人称

…話を聞いた段階で予想はしていたけど、本当に地下鉄に居たとはね。

すぐ目の前で降車する箱型の無人機を見た時のフェンの心情はまさにそれであった。そりや確認されているだけでもタウルスのサイズ比は種類によって2m×4mの開きがある。小さい物ならばちよつとだけ背が高く横幅が広い成人男性と変わらない上、四肢の接合を解除すれば更にコンパクトになるので地下鉄のトンネルを潜るのはわけないだろう。

このサイズの違いは仕様用途が歩兵随伴か戦車随伴かで用途を変えているからである。市街戦や制圧戦を行う時には2mクラス、逆に野外での砲撃戦などでは4mクラスが活躍するのだ。またタウルスのデザインは全て同じなのでサイズの違う機体が並ぶと遠近法が狂う事があるが、それはいまはどうでもいい。

(うーん…居ても一体か二体だと思っていたんだが…まさかの鉄道輸送か)

フェンのデバイス、ヴィーザフによって感知された敵反応は、HUD上に表示されているだけでも今の所2mクラスが6機。それらは開戦後放棄されていた地下鉄車輛を

改造したであろう簡易貨車に乗せられていた。その簡易貨車は人が乗る必要がないので外壁を全て取り外したいわば基部分だけの貨車である。

固定器具が外れる金属音がホームに木霊し、簡易貨車から降車したタウルス6機は貨車後部へと移動した。一両だけの簡易貨車の後部には様々な機材が乗せられている。フェンの方向からはそれが何の機材なのかは確認する事は出来なかつたが、タウルス達は何かをしに地下鉄を利用している。それだけは確かだつた。

一方のタウルス6機がそれぞれ一つの機材を運びホームの開いた場所へと円を描くように等間隔、サークルを組むようにして設置する。固定の為に腕部パーツに取り付けられていたりベットガンで杭を打ち込み、機材を完全にホームに固定していた。固定した上でタウルス達は機材其々にコードを接続している。

フェンは首を傾げながらタウルス6機の動きを監視した。連中は一体地下で何をしているのだろうか。考えられるのは爆弾の設置だが地下に設置するのはいささか効率が悪。ほかはNBC兵器、毒ガスの類であるがそれは陸戦条約により禁止されている。敵が条約を必ず守るなどとはいえないが、流石に大量破壊兵器による報復合戦などは両国とも望まないだろう。

ハフマン紛争はあくまで領土権に起因する。プロパガンダなどでは殲滅殲滅などと騒ぐが、実際のところそういつた敵国を完全に叩き潰す戦争などは金の無駄なのだ。戦

争復興にも金が掛かる。敵国民を完全にこの世から消し去ると自国だけで戦後復興や開発を行わなければならない。それは国庫的にも国民感情的にもマイナスでしかない。

両国ともある程度疲弊し、それなりに力を見せ付けあったところで、和平交渉にいたる。尚且つそれなりに自国領土を押し広げられればさらに良い。OCUとUSN両国のどちらかが消えるとソレまで大国に押さえられていた国家郡も騒がしくなるので、パワーバランス的にもいづれ和平が結ばれる。故に徹底した殲滅戦はまず起こらないと考えられていた。

話を戻すが、その考えに概ね賛同しているフェンもまた、眼の前にいる敵が設置している機械は、爆弾や毒ガスなどの物質的なモノではないと踏んでいた。あり得るとするなら、お互いに魔導師が居るのもつと回りくどく、それでいて効果的な何かであろう。破壊するにしても調べるにしても、兎にも角にも敵が邪魔だ。

その為、フェンは記録レコーダーを回しながらタウルス達が移動するのを待つ事にした。殲滅する自体は簡単だ。無人機と魔導師なら魔法という物理現象に喧嘩を売っているような超技術を行使できる魔導師の方がずっと有利だからである。勿論それに対する対抗技術は既に完成しているが、それを差し引いても魔導師の方が強い。

だが、現状では敵の目的がわからない。故にフェンは部下達に隠密行動を続行させ、

自分自身もレコーダーを回し情報収集を継続させた。実のところこのままタウルスが帰ってくれば設置された装置を調べるだけで済むから、是非ともそうなつて欲しいと思っていた。

——だが、現実はそうそう甘くない。

ガコン、と音がした。それはタウルス達でもなく、ましてやフェンや彼に従う部下達が発した音ではなかった。ネズミである。フェンの前世における所謂ドブネズミやクマネズミと呼ばれる類の大きいネズミが空爆の衝撃で押し折れたであろうパイプから出てきたのだ。

運悪く出てきてしまったネズミは、パイプの上で足を滑らせたのか瓦礫の山へと落下した為、大きな音が発せられたのである。その音をタウルスは聞き逃さなかった。

《バクンツ》

タウルスの顔が割れた。《∴》に配置されたセンサーの下から、新たな装置が顔をのぞかせる。それを見ていたフェンたちは凍りついた。迫り出したソレが何なのかを彼らは知っていたからだ。

だがフェンたちが手を出す前に、タウルスはソレを起動させた。

《ヴオオオオオオン——ツ!!》

角笛を吹いたかのような重低音が地下鉄のトンネルに木霊する。まるで雄牛の嘶きの

如きそれは、タウルスに装備された空間アクティブソナーであった。カートリッジシステムと呼ばれる魔導師が利用するブーストシステムがある。それを流用し圧縮された魔力を意図的に崩壊、その際に発生する強力な局所的次元干渉すら起こす魔力波が籠った振動波を利用して周囲を索敵するシステムである。

勿論、純粋な科学を用いた空間アクティブソナーに比べると、純粋カートリッジではない粗製圧縮魔力なので効果範囲が限定されるといふ欠点もある。だが狭い密室空間で使用される分には問題ない上、それに加えて空間アクティブソナーには科学式にはない利点が存在した。

《バチバチバチ——》

「(不味いっ!)」

『(魔力素子の共振現象発生。ラウンデル光が発生した事で迷彩率30%にまで低下)』
「くっ、ワイドエリア——」

フェンが不味いと思った時には遅かった。地下鉄ホームのあちこちで紫電を伴った放電と発光現象が起こり、潜んでいたフェンと部下達の姿を顕にした。空間アクティブソナーの利点。それは使い捨てながら隠れ潜んでいる魔導師を索敵できるという物であった。

ソナーにより姿を見せたフェン達にタウルス達は一斉に攻撃態勢に移行する。工具

であるリベットガンの反対側にあった固定武装の14 m 機銃に一斉に火が点った。直後短銃身の機関砲からフルメタルジャケット弾による鉄火の嵐が吹き出された。

「——プロテクション！」

だが、触れば火傷ではすまない鉄火の前に、咄嗟にヤバイと感じたフェンが張った防御魔法が間に合った。タウルスと自分達を遮るようにトンネルを塞ぐ形で魔法の膜は敵の初撃を確かに防ぎきった。訓練校で幾度も訓練し、染み付いた対銃撃戦における防御戦術。魔導師であるからこそ出来る荒業をフェンは発揮した。

だが、彼らを守った防壁は決して鉄壁ではなかった。タウルスが銃弾を吐き出すたび、押し潰れた銃弾がバリアに波紋を浮かべることによりフェンへの負担は加速度的に増大していく。

『物理圧迫による負荷値増大、簡易展開の為、防御術式展開率69%まで低下』

ヴィズがフェンのHUDに警告文を浮かべる。フェンが展開した魔法障壁はヴィズが自動展開できる防御魔法術式を流用していたからだ。術式を簡略化した事で咄嗟の展開力に優れていたが瞬間強度はともかくその後の耐久度に難がある欠陥魔法であった。

あくまで自分自身が防御魔法を展開できるまでの僅かな時間を稼ぐ為の術式であり、本来の使い方をされなかった事で、人類が持てない重火器から放たれる圧倒的な弾幕を

前に徐々に防御壁へと穴が開いていく。

警告音がヘルメットの中を満たしていくが、フェンは慌てる事なく行動した。

「10カウント、展開停止、仕掛ける」

「イエツサー！」

フェンも彼の部下達も、ただ黙ってみているつもりは毛頭なかった。フェンは味方を助ける為に敵の攻撃を妨害したのではない。それも勿論だが、何よりも状況を立て直す為の時間を稼ぐ事が彼の目的であった。

下した命令は非常に短い命令である。だが、戦場で生き残って熟練した部下達にはこれだけでよかった。状況を判断し何をすべきかは彼らの経験が知っている。ここにおいてフェンは防御魔法を展開しつつも自身が纏うバリアアーマーの魔力を更に滾らせるだけでよかった。

そして簡略化した指示で敵の排除を下すのとほぼ同時、各々が防御魔法を展開した後、フェンが張った防御魔法が完全に破壊されシールド破壊による魔力片が輝く断片となつて辺りへ散らばった。

「左は任せた」

そう告げ返事が帰ってくる前に、フェンにタウルス達からの火線が集中した。防御魔法を展開する為に態々障害物から身を晒していたフェンを脅威と判断したタウルスの

戦術AIが集中攻撃の判断を下したからである。これが普通の魔導師であったなら、絶え間ない徹甲弾を前に容易くバリアジャケットを弾けさせられ蜂の巣となったことだろう。

だが、あいにくとタウルス達が相手にしたのは、彼らのデータにはない存在だった。飛来した弾幕に飲み込まれ地下鉄構内に金属音が反響する。だがフェンはまったくの無傷であった。彼が展開しているバリアアーマー表面に張られた薄いバリアが銃弾を逸らし、或いは運動エネルギーの大半を消失させた。

更にその薄いバリアを突破した弾丸もその先の幾重にも重なった魔力擬似物質とカーボンの複合素材を貫く程の威力を持ち合わすことが適わなかったのである。フェンが自分自身の命をいの一歩に考えた設計思想、レアスキルをいい事に魔力コストを考えずに防御面を強化した事が実を結んでいた。

鉄壁に護られしフェンは降りしきる銃弾の雨の中、腰を屈めると一人敵の中へと飛び出していった。脚部クローラーによるローラーダッシュと強化魔法による強靱な脚力は、彼に信じられない運動性を与えている。次の瞬間にはフェンの一番近くにいたタウルスの正面装甲を、紫電を迸る魔力刃が貫いていた。

そのタウルスは一瞬だけ機体を震わせたが機能中枢がある部分を貫かれた事でセンサーアイから灯りが消える。無人機であるタウルスは友軍機が破壊されても一切動揺

することはないが、あまりのワンサイドに戦術AⅠが数秒フリーズするような光景であった。

フェンの両手には近接兵装デバイスであるキーンセイバーが握られていた。魔力刃独特の薄い発光現象により浮かび上がるフェンの姿は、暗い地下鉄ホームも相まっつてまるで幽鬼のようであった。

手にした近接兵装デバイスは兵装デバイスと大層な名が付いているが、実際はデバイスですらなかった。あえて言うならそれは柄であった。この柄は柄と同名の魔法が魔力刃を発生させる為の唯の土台であり、ストレージデバイスのような術式補助や出力強化、術式記録などの魔導機械的な制御機構を持たない唯の魔力刃発生装置ではない。

ちなみにこの柄はフェンがソフィア教官によりナイフ戦の近接戦を叩き込まれた結果、微妙な重心の変化を感じるようになった事で生まれた物だった。更に言うとな魔法術式キーンセイバー自体は、己の持つ唯一の近接攻撃方法として彼が母上の部隊と模擬戦を行った辺り考案し、訓練校時代には既に完成させている。

こうして造られた柄は、普段振るっていた最も馴染んだナイフと同サイズの魔力刃発生機構を持たせた事で、あえて重心というものを生みだし、それにより訓練で染み付いた自身の刃物を振るうときの癖にあわせたのである。こうしてキーンセイバーは取り

回しを良くしつつも魔力刃自体の出力の向上と安定を手に入れた。

唯の出力装置でしかない柄である為に魔力刃生成以外に使い道がないが、これにはこれでデバイスには無い利点も存在した。それは術式の使い手の魔力をダイレクトで反映できるという利点である。つまり余計な機構を持たない単純な機構な分、壊れにくく、また使い手の能力にもよるが、総合的な魔力刃の出力を非常に高密度に仕上げる事が可能だった。

魔法の性能は魔導師の性能。それを地で行くことを可能とした事で近接魔法キーンセイバーは局所的に射撃系術式とは別次元の高い攻撃力を発揮した。無人機という対魔法処理が施される事もある硬い装甲殻で覆われたような機械を相手取るには、高出力で確殺できるキーンセイバーはまさに最適だったといえた。

「…ワン、キル」

キーンセイバーによりド派手に破壊されたタウルスは金属音を響かせ崩れ落ちると機能を停止した。だが一体破壊したフェンは立ち止まらなかった。彼の背後の部分：背中からカシヤンという金属で出来た何かが開かれる音が響いた途端、格納領域より何かが実体化してその背に装着された。

その間僅か0.1秒、タウルスが反応する前に急遽現れたそのバックパックは長方形の形状に加え、両肩の背後部分からアンテナの様に二本の棒が延びている。そしてその

バックパックから甲高い作動音が響いたかと思うと、直後背後に青白い光が瞬いた。次の瞬間、フェンの姿はその場から掻き消えた。

瞬きにも満たない刹那、何時の間にかフェンの姿は最初に居た位置とはまるで反対側でタウルス一体を押しつぶすように停止していた。この刹那の時間に彼は最初の位置と今の位置との間に居た一機のタウルスを切り捨て、最後の押しつぶすように体当たりしたタウルスにはキーンセイバーが突き刺さっている。

この機体は若干中枢部への攻撃がズレたのか、いまだマニピュレーターを振り回すなどしてフェンを振り落とそうと稼動したが、すぐにフェンは魔力刃を伝い高圧電流を流してタウルスを内部から破壊した。

元々レールブラスタースターに使われる電位差を生み出す為の術式なので撃ち出したりすることは出来ないし、精々が魔力刃に纏わせる程度で燃費も悪いのだが、機械の弱点でもある基盤を焼くには過剰過ぎる電圧である。高圧電流を身体の中で暴れまわされた事でタウルスは内側から焼かれて完全に沈黙したのであった。

フェンが突撃する時に掻き消えた様に見えたのには理由がある。それはフェンの背中に秘密があった。最近新たに造りだした支援兵装デバイスの一つであるジェットバックパック。魔力を吸い上げて駆動する複数のマイクロエンジンとスラスタースターベ

ンを組み合わせ完成したそれは、フェンに爆発的な推進力を与えた秘密だった。

要するに彼は爆発的な推進力を生み出す背中のマシンの力で直線的に恐ろしく早く動いたのである。直進するついでに進行方向に居た一機を横に構えていたままだった魔力刃で撫で斬りにし、停止位置付近に居たタウルスをブレイキ代わりにしながら貫いたのだ。

ある意味、無人機を始末するには十分な力であった…もつとも結局直線にしか動けない弱点がある訳だが、それはさておき。

「撃破、これで3機…キル」

『味方も2機破壊、ターナー伍長たちが苦戦中、援護を推奨』

相変わらず小回りは効かないが使える装備だな、とフェンがさりげなく自分で造った装備品の性能を確かめつつ、タウルス3機を瞬く間に破壊したそのすぐ隣では、残りのタウルス3機も、部下達の手で処理されようとしていた。

ただし、彼らは数人がかりでタウルスと対峙している。一人がシールドで全体を守り、その隙に別の一人がバインドなどで敵の動きを阻害し、攻撃役の誰かが銃なり魔法なりで止めを刺す。セオリー通りの戦い方であるが堅実であるといえる。これだけ見ても任官を遅らせて特別な訓練を積まされたフェンと一般魔導師との力量差が如実に現れていた。

それに元々この場にいる部下達は最前線で戦うというよりも、結界やバインド、支援魔法によるジャミングなどがメインの兵士達であり、戦えるとはいえその実力は万能型のフエンや戦闘型の副長ジェニス、後は分隊指揮を任せられている突撃戦車で脳筋なハーヴィー軍曹等と比べれば見劣りするのも当然であった。

とにかく敵を排除する為、フエンはキーンセイバーをヴィズの格納領域へ仕舞い込むと、代わりにアルアツソーを取り出し装備する。レイラインが繋がりに内部機構へ灯が点った中距離用兵装デバイスを手にフエンは部下達の援護へと回った。

タウルス達が沈黙した事で再び地下鉄ホームは静寂に包まれた。彼は敵の殲滅を確認すると、すぐにタウルス達が設置していた装置に眼を向けた。機械たちが設置した装置の外見は機械剥き出しの円柱の形をしていた。しかしその頂上部にはバスケットボールほどの大きさをした正八面体の結晶が設置され、ヴィズがその結晶から魔力を検知したことで、この装置が魔力をエネルギーに稼動する魔導機械である事が解った。

しかし…とフエンは思考する。この装置、操作には電力を使うが作動原理は魔力であり、また円環を意識するかの様にして配置されている。またコードの束はそれ自体が魔

力の流れであるレイラインを構築できる素材で作られていた。装置一個では唯の魔力を放出、安定させる機構だが、装置全体で見た場合、この場に構築された「魔方陣」として考えるなら…。

(……これって、マジでヤバイんじゃない?)

敵陣深く、密かに設置された魔方陣。詳しい機能は分解してみないと解らないが、この装置だけでも何らかの効果が付与されている事は間違いない。設置されている機械が魔導機械であるなら尚更である。

「ターナー伍長、この装置をどう思う?」

「なんなんでしょうね。自分にも良く分かりません」

自分だけで考えるのもどうかと思い、参考までに部下に聞いてみたが、存外そっけなく返された。

「なんせ仕組みがわかりませんからね」

「……? 魔導機械だよ?」

「そうなんですかい? 俺達ア魔法技術は扱えますが、魔導機械やデバイスの仕組みまでわかってる訳じゃないんで…なあみんな」

うんうんと伍長の言葉に頷くほかの部下達を見て、ああ自分が異質なのかと改めて理解したフェンだった。確かにレッドクリフ隊は隊員全てが魔導師だ。だが魔導師とは

基本的には魔法を行使する存在であり、専門で技術を習うメカニックならともかく、一般兵は魔導機械関連に関する事は門外漢であるといえた。

そこらへんフェンはデバイスマイスターである父親からの手ほどきを受け、下地はあつたとはいえども自分自身のデバイスをくみ上げる程度にはその手の技術に熟達している。自分も楽しかったとはいえ、結構見境なく技術を学んだんだと思うと、少し恥ずかしい気持ちが生じた。

とはいえ、それが役に立つのもまた事実。人生何が役に立つかわからないもの。とりあえずフェンは部下達に自分の持ちえる専門知識からの見解を伝え、不用意に装置に触れないように指示を出した。下手に触って誤作動でも起こしたら目も当てられないからである。

「これまでの記録はとってる？」

「戦闘までばっちり映ってますよ。発見された原因がネズミって事まで……。こんな偶然が折り重なったジョークのような事態はもういらなそうですわ」

「それには同意」

『マスター、それはともかくとして副長から連絡が入っています』

とりあえず、レコーダーに記録するだけにとどめ、後は司令部に任せようと考えていたところで、地上から連絡が来た。これだけ地下で大騒ぎすれば当然地上にも響く。

フエンはヘルメットを収納させて顔を外気に晒すと空間ウィンドウを投影して通信を繋げた。無事な姿を見せたほうがいいと判断したからである。

『隊長、無事ですかい？』

「今の所、傷一つないよ。皆も怪我はなし。ちょっと地下で悪戯してた、阿呆どもの機械人形たちを丁寧解体してたとこ」

『そいつは敵さんとはいえ同情しますな。それはともかく…』

「うん、エドガー君の情報、ただしかつた。このまま司令部に中継してくれる？地下からだ、どうにも送信状態が悪くて——」

そんな時、通信中継を要請しようとした瞬間、フエンは自分の身体の奥底で何かガズクンと疼いたのを感じた。それは彼自身にも良く分からないが、生き残る為の勘と呼ぶべき感覚であった。彼の持つ魔導師の持つ超感覚とこれ迄に受けてきた様々な訓練、そしてハフマン島において体験した実戦を通して会得した：所謂生存本能が発する警鐘である。

通信を途中で放棄し、折りたたまれて収納していたフルフェイス・ヘルメットを再度装着しながら、自分が嫌な予感を感じた方向を注視する。そして居た。一度は機能停止したはずの無人戦闘機械タウルスの一機が再びセンサーアイを灯らせて上半身だけを稼働させている。

「伏せろッ」

彼が叫ぶが早いか、タウルスは背部ウエポンベイの片方だけを稼働させ、そこに迫り出した四角い箱のようなランチャーをフェン達に向けていた。フェンが再び防御魔法で魔法壁を展開するのとほぼ同時。ランチャーから幾つかのロケットが射出された。

《ズガガガンッ！》

無照準であつたにも関わらず、射出された杭のようなそれらは、フェンの展開した防御魔法へと全弾命中する。これが普通の噴進弾ならば、そこで炸裂して防御壁に波紋を浮かべるに終つただろう。

しかしタウルスが射出した杭は普通のそれとは異なっていた。命中する刹那、強度だけなら高い筈のシールドが撓んだかと思うと、命中時の運動エネルギーで銃弾ですら完全に防げる魔法壁を貫通したのである。

半壊したタウルスが使用したのは、対魔導師戦を想定して極一部の機体に装備されていた特殊弾。対魔法防除貫通処置が施された通称シールドバンカーと呼ばれる装備だった。

細長い杭のような弾頭には魔力結合を中和するレアメタルコーティングと魔力素子干涉装置が搭載され、どの様に強固なシールド魔法であつても命中すればその結合を緩ませる事が可能だった。この緩んだ部分へと射出時の物理的な運動エネルギーが一点

に集中する事で、この弾頭は半ば強引に防御魔法を突破するのである。

性質の悪い事にこの弾頭はいかに強固な防御魔法壁であっても、展開されたシールドが一枚だけなら、よほど特殊な——デイストーションフィールド等——防御魔法でない限り貫通し、シールド内で炸裂。魔導師を死傷させる兵器であった。

だが中和装置の大きさの關係上、搭載できる炸薬の量はすくなく、フェンのBAは通常のBJとは違いはるかに高い防御力を持つので、たとえシールド内部で炸裂しても少々装甲が焦げる程度で終わる筈だった。

部隊の部下達も全員BJを展開しており、直撃さえ貰わなければ負傷すらする事はない。そう考えた時、フェンの防御魔法を突破したシールドバンカーの一発がジャイロがイカレたのか、ネズミ花火のような不規則な軌道を描き、天井へと直撃してしまった。

《——ドドオンツ》

「あ」

『マスター！爆発の衝撃で天井がっ！』

ヴィズの警告が早いのか、シールドバンカーの直撃で天井に亀裂が広がった。元々敵の都市爆撃の影響で脆くなっていたのか、亀裂の走る速さは尋常ではなかった。急いで回避しなければ崩落に巻き込まれる。フェンは急ぎ部下に指示を出し、この場から退避しようとした。

しかし、予想以上の早さで天井が崩落しはじめ、殿を受け持ったフェンは自分の前を走る隊員を蹴り飛ばして崩落地点よりも向こう側へと追いやった直後、崩落に巻き込まれてしまったのだった。

「味方部隊と分断されたら、合流するまで気がぬけんわい」

S i d e F e n

廃墟と化した地下鉄の駅の中が凄まじい轟音で満たされると、地上を支えていた柱が崩れ、土砂とコンクリートの混合物が俺の上に降り注ぐのは殆ど同時だった。

視界が激しくシェイクされる。耳障りな岩をすり潰す音が装甲を通じて体の芯にまで響く。頭の日辺から足先まで鉄串で刺され、そこにバイブレーションを加えられた不快な振動が収まるまで現実時間で十数秒ほど、体感時間ではそれこそ永遠に感じられた。

問題は崩落によってヴィズの安全措置システムが起動し、逃げ遅れていた部下のケツを蹴り上げた体勢のままに関節がロックされたので、体操でアキレス腱を伸ばす時の体勢みたいな開脚を強要されたような形となった事だろう。

おかげで俺のお股がすこぶるヤバイ。どれくらいヤバイかというところはまだ飾りのゴールデンボールが圧迫されている。このまま使用可能になる前に使用不可能になっちゃったらどうしよう…。

そうなると劇的魔法ニューハーフ・フェンの爆誕か。洒落にならん。

だ、大丈夫だ。俺は自分の手で造ったヴィズを信じるぜ。

しっかし、アーマーの外側は大惨事だというのに、ヴィズの中は酷い音と振動があるだけで先の一部以外は平穩無事そのものだな。ヴィズの装甲はカーボンと擬似魔法物質の複合装甲で形成されている。その軽さとは裏腹に剛性と耐久性に優れているのだ。

装甲表面には常に薄いシールド魔法の膜が張られている。この装甲シールドが崩落によつて鋭利な刃物と化した瓦礫の角を受け止め、その破壊のパワーを減衰させる事が出来るのだ。

ただ通常のシールド魔法と異なり、装甲シールドの出力はそれほど高くは無い。意識を向けていない自動展開だと、大口径ライフルを受け止められる程度だろう。なので下手な質量兵器よりも威力がある崩落の破壊力の前には突き破られてしまうだろうが、その代わりに崩落で生じた大部分の運動エネルギーを引き受けてくれる。

そのお陰で俺は怪我をしなくて済んでいる。ありとあらゆる兵器が飛び交うことを想定し、出来る限りの頑強さを追求した設計思想にしておいて正解だったな。もつとも生き埋めに関しては想定外だったけど…。

そう、生き埋めだ。僅か数センチ先の装甲板の向こうは人間程度の肉体を圧壊させるに十分すぎる圧力に支配された世界が広がっている。ヴィズの装甲のおかげで肉体は

無事だったが、普通ならペツちゃんになっていたところである。複合装甲とシールド様々であった。

ああ、それにしても久しぶりの感覚だ。なんせ生き埋めにされるのは、これがはじめてという訳ではないのだ。今よりもさらに未熟だった頃、母上との魔法訓練の中でしょっちゅう体験していたからな…。

いまでも思い出す。非殺傷設定なのに捲れあがる大地と大量の土砂の津波…手加減なしで吹き飛ばすのは、ホントにカンベンしてくれ…。

「はあ…」

思い出した色々と涙ぐましい思い出にため息を吐いた。このまま貝にでもなれたらどれだけ楽な事だろう。今は崩壊の音色で騒がしい事この上ないがしばらくすれば静かになるだろう。そうなれば地上の戦いなど関係ない静かな世界への扉が開かれる。戦場で擦れた心身には、とても心地よく感じるはず。

だがそうする訳にもいかなのが国家公務員の辛いところである。こんな状況に陥れてくれた敵の無人戦闘機械タウルスめ。テメエは今度から絶対にスクラップだ。理由は唯一つ、シンプルな答え、テメエは俺を怒らせた。

冗談はさておき、実際今度タウルスを見かけたら完全に中枢部を破壊することにしよ。どんなに頑丈でも胴体を消し飛ばせば動かないだろうしな。ぶっ壊せば安全だ。

思考に一端の区切りをつけた後、今だ崩落の音が響く中、俺はとりあえずヴィズが壊れていないかを調べる事にした。製作者なのでヴィズが凄く頑強であるのは解っていたが、それでも念には念を入れた。実際いざ動こうって時にぶっ壊れてたら洒落にならんし。

んで、ダメージチェックの為にヴィズに命じて簡易的ながらスキャンを実行させた。自分で言うのもなんだが、俺のこの小さい身体を走査するなんてのは実際一秒も掛からない。0, 3秒でスキャンは終了し、その結果が視界を覆うHUDの隅っこに表示された。

スキャン結果はノープロブレム。装甲シールドを突き破った瓦礫により、複合装甲の表面に多少傷が付いていたが、致命的損傷は見受けられなかったからだ。

これはひとえに装甲シールドのおかげであろう。このシールドが張られていなければ、複合装甲だけでは圧力に耐え切れず、バイタルパート防御増し増しな胴体部分ともかく、手足の装甲が重量負荷に耐え切れず潰されていただろう。

骨ごと粉碎する形で潰されると、いくら治癒魔法であつても直りにくい、無理に治そうとすると痛い通り越して熱いんだアレは…。

それはともかくHUDに同時に表示された各種ダメージレポを読み進める。それによれば、強化装甲型デバイスであるヴィズの本体にあたる胸部のアーマーは、内部機構

も含めてほぼ無傷なので問題は無い。

ただ、チエックを進めていく内に判明した重度の損傷は、本体ではなく展開したままだったサブシステム、新規に開発した補助兵装デバイスのジェットパックの方だった。

姿勢補助用に両肩の後ろ側で上に伸ばしたサブスラスタターが、運悪く瓦礫と瓦礫の間でへし折られてしまい、完全に御釈迦になってしまったのだ。カーボンと擬似物質の複合装甲の外装ではあったが本体に比べれば薄く、装甲シールドで囲わなかったのが仇となったようだった。

メインスラスタターは問題なく使える様なので加速する時の姿勢制御が難しくなった程度の損害ではあるが、もしまた戦闘が起った時は気をつけないといけないだろう。

それにしても凄く重たい瓦礫に潰されても、殆ど壊れてないとは、そういう意図で製作しておいて自分で言うのもあれなんだが、相棒であるヴィズはホントに阿呆みたいな耐久性だよな。

今はそれほどでもないけど制作してた時は本当に戦争が怖かったんだろうな。いまじゃ火中の栗を掴むところか、どつぷりと火中に浸かっているから以前よりも怖くは無い……いやさ、怖いけど我慢できる。麻痺してきてるって事なんだろう。

「……いかにいかに」

首は振れないが気分はそれ。余計な方向に思考がずれていたので心の中で頭を振っ

て思考を切り替えよう。とにかく内部機器は殆ど無事のようなので、これなら自力で瓦礫から抜け出せそうである。

「ヴィズ、関節のロックを解除。同時にパワーアシスト・マキシム」

『イエス・マスター——ロック、解除しました』

「…ウツ」

『心拍数が上昇中。大丈夫ですか？』

「ン……大事ない」

抜け出すためにヴィズに指示を送り、間接ロックを解放したのだが、固まっていた関節が自由になった途端、グンッて感じで各関節に掛かる負荷が増大した。

思いのほか強い負荷に思わず声が漏れたが、パワーアシストと身体強化を同時展開しているので大事無い。身体が動かせるようになったので、今度は身体強化をフルパワーに発揮させ、身体を起き上がらせていく。

何十トン、下手すれば何百トンにもなるであろう瓦礫が徐々に動いていく様は前世の常識からしてみればなんともはや…。

確かに持ち上げられるだけのパワーがあれば物体は持ち上がるが、子供のサイズでこのパワー、魔法は偉大である。無論、この状況でのしかかる瓦礫を完全に持ち上げることは、魔法の力を以ってしても不可能だ。精々が瓦礫と瓦礫の間に小さな隙間を作るこ

としか出来ない。

だが、俺にはそれで十分すぎるスペースだった。これで次の手が使えるからである。

「ジェットパック……点火（イグニッション）」

直後、背部からガコンという内部機構が稼動する音が響いた。

魔導式マイクロエンジンに繋がるスラスタローバーンから圧縮された魔力が吐き出され、背中周りがスラスタローの白い魔力の排気炎に包まれた。

HUDの端が青白い光に染まるのを横目に、先ほど解除した腕の関節を再びロックする。固定したことで腕が動かないので、持ち上げるための力が分散せず、今必要なことに集中していく。

パワーアシストと強化魔法、大出力のジェットパックのスラスタローが少しずつ押し掛かる瓦礫を持ち上げてゆき――

《ゴゴゴーンッ!!》

――パワーに押し出された瓦礫は大きな音と共に前へと倒れたのだった。

.....

.....

.....

「ハア……どうするか、な……」

生き埋めから脱した後、アーマーの中にパラパラコンコンと細かなコンクリート片が外部装甲に当たる音が響く。瓦礫を動かした影響で一旦収まった崩落が再び動き出したらしい。

さすがに何度も埋まる趣味は無い。幾ら頑丈とはいえヴィイズが壊れない保障はないし、第一精神衛生に非常に悪い。少し離れた位置に移動する事にした。

天井部の崩落で粉塵が舞い上がり、その所為でかなり視界が遮られて前方が見辛いが、画像表示をセンサー補正に切り替えれば問題ない。

赤外線やらサーモやらミリ波レーダーやらで補正されたCG画像を頼りに粉塵の中を進み、崩落現場から少し離れたあたりまで移動してから、ようやく一息つく事ができた。

「まったく、今日は厄日だ」

吐き出した溜息と共に思わずそんな呟きも漏れてしまう。敵発見はまだしも、生き埋めになるなんて厄日なんじゃなかるうか？

ともあれ粉塵煙がまだ色濃く舞ってはいるが、天井まで届くほどの瓦礫の山を見るに、完全に改札に続く階段が埋まっている事だろう。

「どうしようかな」

『マスター、意見具申を提案』

「うん……？——許可する」

そんな時、相棒である優秀なAIがなにやら伝えたい事があるらしい。許可したところHUDになにやら新しいウィンドウが開き、そこにCGによる地下鉄構内の見取り図が表示された。

『有難うございますマスター。さて、本機のメインシステムに異常はありません。各種センサー作動させ、地形状況の変化を確認し、地形データをアップロードしました。』

そのデータを元に、このペセタ市営地下鉄の構造から状況に適したサブプランを構築し、提案します。この先、前方200m先に整備用の地上階段があります。そこから地上に出て合流ポイントに向かわれるのが時間的にもベターかと思われます』

電子音声に併せてウィンドウの見取り図にマーカーやルートナビが表示され、殺風景だったCG見取り図があつという間に賑やかに……。

「あ、ああ。その提案を了承しよう」

『では戦術オプションとしてマーク、HUDに表示します』

そういうとHUD方位磁針に菱形をしたマーカーが表示され、同時にルートを示したミニマップまで視界の邪魔にならない範囲で現れた事に驚いた。元々ヴィーザフのHUDにナビマップのアプリは存在しない。ヴィズの奴、自分でナビをする為に瞬時にプログラミングをしたというのか…。性能の無駄使いだな。

だが、それにしても――

「ヴィズよ」

『なんででしょうか?』

「お前…心、読んだ?」

『本機のデータからマスターの思考パターンをシミュレートしてみた結果ですが?』

「あ、あそう…(ヴィズさん、パネエツス)」

最近、思考ルーチンの自己進化が著しいヴィズに軽い戦慄を覚えたのだった。

.....

.....

.....

さて、ナビに示されるがまま明かりが消えた地下鉄トンネルを進み、整備用階段から地上へと上がった俺は、何か起きた時すぐに合流できるように予め決めておいたポイントに戻ってきていた。

そこは空爆によって半壊した高層ビルである。

この高層ビル群が立ち並ぶ界隈において、一際大きいビルであるその場所は、かつてはハフマン島における鉱物資源の輸出を一括管理する部署が置かれていた場所であるらしいとジェニスから聞いた。元々ハフマン島は鉱物資源が豊富で、それ目当てに入植したのだから、そういった部署が一番大きいビルにあるのも頷ける。

だがそんなハフマンを象徴するかのような大ビルもミサイル空爆を受けた事でビルの上半分が斜めに傾いて「く」の字の形で折れて曲がっている。お陰で空爆により変化してしまった街中においても、遠目から見て解りやすい目印となっているのだからなんともはや…。

ともあれ、その分厚いモルタルと鉄骨の壁によって守られているそのビルはレッドクリフ隊をとどまらせるには十分なスペースがあった。

その考えが正しいと証明するかの如く、ビルの入り口には何人か見知った顔が周辺を警戒していた。名目上隊長の俺と違い、レッドクリフ隊副長のジェニスは古参の隊員らしく言わなくてもやるべき事をやってくれる。あれ？俺って居なくてもよくね？

「(ただいまー)」

とにかく合流しよう。俺は念話を送りつつ、ひよこつと物陰から顔を覗かせた。なぜ念話を発信したかというと、軍で使われる念話通信には混線やら妨害を避ける為に味方同士でしか使用できないようになっていいるからである。

それなのに顔を見せた途端部下たちに何故か驚かれた。おかしいな。一応IFF(味方識別)コードも同時に発信しているから向こうも俺が誰だか解っているのに…後で聞いてみたら土砂の下敷きにあい、生き埋めになってると思われてたから、こんなひよこりと現れるのは予想外だったらしい。

戻ってきた俺に対して部下たちは様々な反応を見せるが、概ね生きてたんだー良かったねというドライな感じだった。俺が着任してからは「まだ」だけど、この隊は元々隊員の損耗率が高い部隊だったらしいから、K I AもM I Aも慣れっこなんだろうな。

いずれは俺もあんな風にスルーできるようになってしまいうんだろうな。あんまり慣れたくは無いいことだけど…心を強く持とう。

「おお隊長……………生き埋めにはならなかったんですかい？」

「ジエニス。その質問は合流してから12回目」

「本物：っすよね。隊長以外にそんなメカチックな装備を持つてる酔狂な魔導師なんていな(´ω´)」

「酔狂でも伊達でも役に立てば問題ない」

「問題ないって…。まあいいですが、おかえんなさい」

ビルの奥に進んで待機していた連中と一緒にいたジエニスと再開した。入り口で見張っていた部下たちから連絡が来てるので特に驚いた様子ではない。

「(俺よりも)先に脱出した連中は？」

「連中も伊達に生き残ってきたわけじゃないんで大丈夫です。監視してたら突然粉塵と一緒に飛び出してきたんで、思わず地下で自爆テロでも起きたのかと思っちゃいましたよ。しかも出てきた連中から事の次第を聞いてみりゃ、隊長が崩落に巻き込まれたって言うし…。話が逸れましたが、探索チームは隊長以外は負傷者一名だけで全員無事です」

「負傷者？」

はて？ 戦闘で怪我を負った奴はいなかったし、がれきに埋まる前に全員逃したはずだが…？ 一人だけ逃げ遅れていたから、わざわざ強化魔法を使ってまで思いっきり蹴り上げて上の改札まで蹴り飛ばしたのに…。

「ええ、ケツ抑えて呻いてます」

あ、どう考えても俺の所為だね。本当にありがとうございました。

「レンチャックが驚いてますよ？」 陥没してる”つて。エドガー坊やまでヒデエつて

ドン引きしてましたよ？」

そういつてジェニス指を向けた方にクルンと顔を向けると、そこにはすやすや眠るエドガー君の隣で、ロビン・ガウナ衛生兵に治癒魔法を掛けられ続けている人が一人蹲っている。尻を抑えて…うわあ。

「バリアジャケツトが無かつたらどうなつてたことか…。隊長は技量だけは高いんだから力加減考えてくださいよ」

「ごめん」

妙に「だけ」を強調した言い回しである。やっべ、蹴り過ぎたか。

ごめんよ、スタンレー一等兵。次回があつたら気をつけるよ。

「でも…生きていれば、きつといい事がある。怪我は治せるから生き埋めよりはマシ」

「尻が陥没したヤツが気絶する前に託した伝言で『チビスケ隊長よ、ケツ押さえて待つてろ』と言つとりました。滅茶苦茶痛かつたみたいなんで怒りも相当なモンかと」

「非常事態だったんだ。でも、やりすぎたのは謝る、か」

「そうしてやつてください。さすがに見てて可愛そうでしたからね」

ジェニスは遠い眼をしながらスタンレーを見つめていた。うう、自分ででかした事だから決りが悪いな。お詫びの品でも送るべきかな？ でもスタンレーの好きな物しらないんだよな。ジェニスに聞くか。

「彼は、なにか…欲しいものとかあるかな？」

「アイツの好きなモンですか？ さーて…そういえば料理が趣味だっけなアイツ…」

ほう、そうなのか。んじや今度の補給の時に調理用具一式とか食材とかを提供してあげることにしよう。細かな気配りが人気の秘訣…。

「まあ珍しいスパイスでもあれば…って隊長？急に黙らんでくださいよ」

「ん、すまん。ぼうつとしてた」

「頭は打つてないですよね？ 嫌ですよ、隊長がまたすぐ変わるとか」

「心配はいらない。頑丈さは肉体面でも問題ない」

伊達に非殺傷設定の魔法で吹き飛ばされて、五体当地でガイアとキスした回数が四桁を超えているわけじゃないからな。悲しいけど、これが高性能な血筋ってヤツなのさ。

「それとも、やっぱり心配？」

「主になくなった後の事務処理と手続きが」

さいで。

「まあとにかく、勤めを果たしましょうや」

「ん…司令部に報告だ」

副官に促され、俺は地下鉄で起こったことをHQに報告するために回線をつなげる。俺達の足元、地下でなにやらゴソゴソと悪だくみをしていたネズミ共を。司令部はどう料理するのか…上の方々に判断を委ねよう。

決して考えるのが面倒くさくなつたつてワケじゃない。いろいろあつたけど照会任務中なので、任務中に発生した事態の報告は義務なのだ…内心報告する方がチョビつとだけ面倒くさいと思つたけど、定時連絡も兼ねているからしょうがないのだ。

「——報告は以上です」

んで、早速であるが現段階までに起きた出来事をセスルの司令部にいる直属の上官に一通り全く部ぶつちやけた。

報告の概要としては——

- ・哨戒任務中、エリア内をうろついていた民間人を保護した。

- ・保護した民間人から地下鉄道において敵無人機の日撃証言があり、調査したところ事実と判明、されどその場に現れた無人機、タイプ・タウルスにより構成された工作部隊と遭遇し戦闘に発展した。

・タウルス殲滅には成功したが敵の対魔導師兵装により地下鉄道のトンネルが破損崩落している。

・敵との交戦前に敵無人機による工作と思わしき装置の設置を確認している。この装置に対して、再度調査か別部隊と交代するのか司令部に問う。

・尚、現地にて保護した民間人の対応も考慮されたい。

——とまあ、概ねこんな感じの報告である。

簡単に言うとな敵見つけて戦ったら色々つぶ壊れました。調査してもいいけど一般人いるから帰りたいなあ〜、という感じ。直接帰りたいんですけど言わないのがミソである。戦場に出ている人たちは誰だって帰りたいのは当たり前だし。

そんな訳で、判断材料にして貰う為に、あの時の交戦記録も映像データ化して送ったんだが、その解析に手間取ったのか少しH.Qからの返答が遅くなった。別に複雑な暗号通信にした訳じゃなく、標準的な暗号通信、友軍なら問題なく解凍できる類にしておいた筈なのだが、恐らくヴィズの交戦データを添付したのが原因だろう。

自作したヴィズには、家が工房だったのと、自分自身の保身も兼ねて全く自重しなかった事が重なった事で、通常のデバイスよりも観測機器も高性能なものを積んでいる。ソレこそデバイスに組み込んだ事を父に報告したら頭を抱えたレベルの観測機器らしい。

なので、部下達の持つ個人デバイスに登録されているUSN軍の標準化された兵装防御服（バトル・バリアジャケット）の上に被るバイザー付ヘルメットに装備されている戦闘記録装置の交戦データよりもデータ量ははるかに高かった。その所為で通信状況によつてはラグが発生してしまったようだ。

ちなみに軍の技研により標準化され調整されたBJの設定は、入隊と同時に支給されたデバイスか個人のデバイスに配布されるが、使用するかしないか、及び設定の変更は申請していれば問題が無いらしい。IFFコードもあるし、司令部とのデータリンクさえ確立できてさえいれば、どんな形状のバリアジャケットでも問題ないのだそう。

唯、たとえ許可されていても大体の将兵はUSN式のBJ設定をあまり弄くらないらしい。軍が長年をかけて調整したBJは完成度が高く、少し弄ったところで性能に大差がないのが主な理由である。そんな暇があるなら鍛錬して地力を挙げたほうが生存率が上がるので、自然とそうならしい。なので精々が部隊共通のワツペンを肩に取り込んだり、パーソナルカラーを設定したりする程度であるらしい。

閑話休題。

『——こちらセスル基地司令部、レッドクリフ隊の交戦データは受け取った。レッドクリフ隊、ご苦勞だった。後は此方から交戦ポイントに調査部隊を派遣する。君らは当初の予定通り哨戒任務を続けてくれ』

待つこと暫しして返ってきたH Qの返答がこれである。うーん、哨戒任務じたいは続行ですか：内心としては基地に帰還したかったんだが、まあ調査の為に敵側に潜り込めとか無茶言われなかっただけマシか。

魔法が使えない一般兵だと先ず言われたいけど、魔法が使える魔導師兵だと無茶出来るから司令部に命令を下されることがあると聞いていたから、ちよつと不安だっただけに安堵感が内心に沸き起こる。杞憂でよかつたわ。マジで。

ちなみに無茶をさせられるのソース元は副長のジエニスだ。第二次ハフマン紛争を開幕から潜り抜けて生き延びてきた奴の言葉だけに、無茶振りの話は現実感が伴っているのが主な理由である。もっとも悪質なU S Nジョークの可能性もあるが、怖いので自分からは聞けないのだ。

まあ任務云々はいいとして、それよりも問題はエドガー君の事はどうすんだろ…？

「了解しました。それと保護した民間協力者のことなのですが——」

『ふむ…。帰還ルート上に難民キャンプがあるな。よろしい、帰還途中そこに立ち寄り事を許可しよう』

「はっ、ありがとうございます。通信終り」

おお、H Qも中々に粋な計らいをしてくれる。これでエドガー君が親元に帰れる目処が立ったってもんだ。しかし任務途中での寄り道とはいえ、魔導師部隊を護衛にま

わしてもらえないなんて何て豪奢な随伴であろうか。当の本人は暢気にぐっすりと眠っているが、起きた時には難民キャンプにいるのだ。きつと驚くことだろう。

そういえば、エドガー君のお母さんが病気だつて聞いたな。レンチャックが幾つか薬を持ち合わせているし、病状しだいでは基地に搬送させるのも手配しておいたほうがいいかもしれない。

エドガー君は無鉄砲に危険を犯したただけだったが、結果的には薬を手に入れた事になる。ある意味で幸運の持ち主だったつて事なんだろうなあ。そういう幸運にはあやかりたいもんだ。戦場での幸運は最高の贈り物だつて言うし。

「総員傾注しろ、これより我が隊は本来の任務に復帰する。途中で少し寄り道するがほかは当初のタイムスケジュールどおりだ。速やかに移動準備を開始せよ。以上だ」

「了解——」

事実上の帰還が許可されたレッドクリフ隊は、当初のスケジュールどおりのルートを巡つて、セスル基地へと移動を開始した。予定と違うのは得体のしれない工作を行つていた敵無人機械兵器を発見した事、民間人の少年を連れていくという事、そしてなぜか帰還する道中の接敵がまったくなかったことだけだった。

ちなみに件（くだん）のエドガー君はレンチャック衛生兵に担がれて隊の移動に追従させている。身体強化魔法を使えば、機械いらずのエグゾスケルトン状態となる魔導師の脚力に合わせた移動なので、訓練を受けていない一般人の少年にはキツイ行軍であろう。

それにも関わらず、彼はレンチャックの背に寄り掛かるようにして眠り続けている。疲れきっているからか、はたまたこの程度では動じない肝っ玉でも持っているというのか。どちらにしても大したものである。伊達に戦地に隣接する難民キャンプにいる訳でじゃ無いということか。

肉体年齢的には同じだが、魂的には前世の分ドールピングされて、同世代とはいろいろと異なっている自分とはえらい違いである。前世での俺はエドガー君と同じくらい年齢の時、ひっくり返したカエルの腹をつついて遊んでいたというのに……。

とにかく哨戒任務に復帰した俺達、セスル基地所属・第23駐屯部隊レッドクリフは、本来の予定にはないお客さまを引きつれ市街地を移動していった。ただタイムスケジュールに若干の遅延が見受けられたが、理由は小さなお客さんを引き連れていて普段以上に警戒していたからである。

防護服を展開できる魔導師であるならともかく、魔導師が闊歩する戦場においては丸裸に等しい一般人の子供である彼は、ともなれば銃弾一発ですら致命的な脅威となりえ

た。自分自身はもうかなり歪んでいると自覚しているが、孤独な幼稚園時代以降、初めて懇意になれた友達とも言ってもいい子が、大口徑ライフルによって、肉体の一部を血煙に変えられる姿など、俺は見たくなかったのだ。

この進行速度の低下に関して、幸いな事に俺の部下という立場であるレッドクリフ隊の彼等から特に不満が漏れるという事は無かった。ともすれば、彼等も同じだったのだろう。軍に所属している以上、敵味方問わず殺し殺されたりする世界に在るとはいえ、好き好んで子供が犠牲になるのを望んでいる精神破綻者は我が隊にはいなかったのだ。

狂気がまかり通る世界で、これはとても幸運な事である。もつとも、そういう意味ではある種の狂気の産物である自分自身は、命令により部下として配置されてしまった彼らレッドクリフ隊の面々に過剰なるストレスを与えている……という事になるのだろう。

そう思うと泣きたくなる。第一印象こそ拒絶に近いものがあつたとはいえ、今ではそれなりに受け入れてくれてきている気のいい奴らなのだ。しかし自慢のドールフェイスは鉄面皮。心の内に泣いても叫んでも、眉根一つ動かさず、表情一つ変わらない。

人として当然の事が、出来なくなってしまうている自分に対し、猛烈な違和感を覚える自分がある。だが、これはもうどうしようもないので俺は何もできない。あるいは、既に人としては欠陥品なのかもしれない。人としての骨子の歪みは、どうしようもないほど俺の心身を捻じ曲げている。そんな気がした。

『——スリースターモール前、タールバレル通りを通過。進行予定の遅延、約21分と35秒』

予定ポイントを通過した事を知らせるヴィズの合成音声が、ヘルメットのスピーカーを通じて鼓膜を揺らし、俺は思考の海に半ばもぐっていた意識を浮上させる。いかんいかん、無意識の内に考えにふけていたようだ。それでも特に問題もなく行軍できていたのは身体に沁みこんだトラウマすら伴う訓練の成果つてところか……。あんまりうれしくは無いが。

ともあれ、若干思考がネガティブに傾き過ぎていた。この程度の事をいちいち気に掛けているのは身が持たない。一瞬の遅れがすべての結果につながる世界に身を置いているのだ。迷いが生まれた結果は、自らの死以外ありえない。

「——ふう」

ヘルメットのビュウモニターに浮かぶHUDを流れる景色を眺めながら、いろいろと切り替える意味合いも兼ねて、ほんとに小さくため息を吐いた。

考えるのは後でいい、迷いも葛藤も苦しみも……全て戦いが終わってから考えろ。それが母上や教官たちが俺に教えてくれたことだ。戦だ心を閉じよ、自分の運命の悲惨さを考える暇などない。それは戦場で戦う時にはクソの役にも立たないのだ。

それを思う時、だんだんと心が乾いていくのを実感する。感情が希釈されたかのよう

に薄まっていくのがわかる。それに気づいているが今の俺には癒す時間もありやしない。心のジェリコの壁は崩されたまま、戦場の狂気が流れ込むのを止められない。俺に出来る事は問題に蓋して進むだけ。

——やつてられんね。全くさ…。

破壊された街並みを尻目に、両足に力を込めて俺は地上を駆けぬけたのだった。

『C20エリアも敵の反応を認められず…。すごい静かだ』

さて予定から数十分の遅延が見られるも、移動を開始して数時間が経過していた。そんな中、斥候に出していた部下からの報告がヘルメットのスピーカーを通じて木霊するが、この報告を聞いてわかるように俺達はすこぶる「順調」に巡回ルートを進んでいた。敵部隊は影も形も見受けられず、それこそ装備や人数を考えなければ、まるでピクニックのように空気が軽い。

戦場に漂う息苦しいほどの空気の重さが、何故か唐突に薄くなっているように感じら

れた。事実U S N軍の戦術データリンク上においても、ほかの哨戒部隊が敵と遭遇したという報告は一切上がっていない。我々よりも更に深部に展開している警戒ラインに限りなく近いルートを辿っている哨戒部隊でも同様である。

嵐の前の静けさを思わせるそれに、すわ今日は空爆の雨あられなのかとも思ったが、友軍の衛星が観測した情報では、今のところOCU側の飛行場にそんな兆候は見受けられないらしい。

もつとも魔法を併用した本気のステルスを使われればその限りではないが、トロピカルアイランド特有の陽気な空気の中に舞い降りたこの静けさは、不気味という言葉しか出てこなかった。

『普通ならそろそろドンパチ一つあるんだが…、敵さん今日は休業日か?』

そんな中を移動していると、ジェニスが通信でそうつぶやいた。

『職業軍人だけに——つてことですか?』

『伍長、だれがうまい事を言えといた?』

『んなことより殴れないからつまらんつ!』

『落ち着け軍曹。チョコバーやるから、な?』

どうも彼らも今日の静けさに違和感を覚えているようだ。各言う俺も感じている。

「休業日…:休暇を得られるなら是非に欲しい…:けど——」

『戦場での休暇は、死んだらもらえらるんですよねー』

『「是非もなし」』

俺の呟きにオリーブ伍長が返した言葉に、大多数の隊員から異口同音で返事が帰ってきた。断っておくが彼らがこんな軽口めいた通信を始めたのは、敵が出ない事で気を抜いているからではない。

この程度で気を抜くような連中であつたなら、彼らは今頃ジャングルの赤土と混じり合い、あの世と現世との境界に流れる大きな河にいるカロンの渡し守に導かれている。

このような通信をしているのは敵が出ないこの不気味な状況に言いようもない不快感を覚えているからである。本능が警鐘を鳴らし、現状が何かおかしいと全員が感じている。ほぼ全員がベテランであるがゆえに、その感覚は顕著なのだ。

ちなみに俺は彼らと比べれば、その戦闘経験はお世辞にも多いとはいえない。経験だけを見るならひよつ子も同然であるのはいうまでもない。そんな俺だが、彼らと同じく不気味な静けさに違和感を覚えていた。特に地下鉄での遭遇戦以降、移動を開始してから急に顕著となっていた。

この感覚は、ある意味非常によく知っていた。隣の家に住む隣人並によく知っていると言つてもいい。なぜならこの感覚は母上の訓練のレベルが一段階あがる時、あるいは

特別訓練や演習において策に倣る直前に良く感じていたものとはほぼ一致している。

すなわち、この奇妙な感じは所謂『嫌な予感』というモノに他ならないのだ。正確には少し違うのだが、この感覚のことを口で説明するのは難しいといえる。あえて言い現わすのなら、嫌な予感と符合できるだけである。どう違うのかと聞かれても俺にもわからん。すくなくとも『本来あるべき枠から外れた』状態に対し、違和感という気持ち悪さを覚えていた。

そんな不快感を暗示しているかのごとく、先ほどまで薄い曇り空だった空模様は、今では辺り一帯が暗いと感じるほど分厚い鉛色の雨雲によつて覆われ始めていた。それは熱帯気候特有のスコールを伴う低気圧である。

つまるところ、雨雲の中心が都市上空に居座りつつあった。

「ジェニス、次の——寄り道先まで、あとどれくらい?」

『このままの速度で約20分ですかね。どうかしたんで?』

「いや…、ありがとう」

『気象データみるとでかい雨雲がいるみたいだし、濡れる前に到着したいもんで』

「……BJ着てたら濡れないとおもうんだが」

『気分ですよ気分』

たしかにな。気分的にはあまり雨に濡れるのは嫌かもしれない。だが、まさか実際に

降るのが雨ではないなんて、この時の俺が知るはずも無かった。

.....

.....

.....

その後は無駄なおしやべりもなくエドガー君が住んでいる難民キャンプへと到着した。到着してすぐ、俺は副長のジエニスに命じて、衛生兵と他数名を従えさせてキャンプの実質上の責任者のところへ訪問させた。

そして今回キャンプに立ち寄った理由を説明してレンチャツクら衛生兵の医療テント近くへの立ち入りを許可してもらった。いきなり部隊をキャンプに入れなかったのは今回が正規の訪問ではなく偶発的な訪問だったからである。

考えても見てほしい、十分に武装した兵隊が仮の住処とはいえテントが並ぶキャンプ地に現れたら、ましてや一度は戦火にさらされているなら、兵士が直ぐ側に現れると戦場がやってくると予感してしまうものだろう。

特にジェニス以下レッドクリフ隊が展開しているバリアジャケットは公式にUSN軍式バリアジャケットとして民間にも広く知られていた。というかUSN軍式バリアジャケットは一般兵が用いるアサルトアーマーセットの形状をそのまま登録してあるのでどちらにしても軍人が着るものという印象が強い。

定期的に行われる物資補給日からさほど日数も経過しておらず、緊急避難的な物資援助要請を出した訳でもないのに現れた軍の部隊。それは難民たちに不安と焦燥と与え、困惑へ突き落すに十分すぎる要素をはらんでいた。

そしてレッドクリフ隊はキャンプから離れた。といっても周囲に点在するビルなどに散らばって待機している。建物の中なら民間人からは見えづらく、高いビルの上に監視要員を配置しておけば万が一の襲撃にも対応できる。難民キャンプの周辺だから戦闘が起きないとは限らないなんて、世も末だわな。

「——状況は？」

「キャンプを囲うように各隊の分散配置が完了。どの方向からでもフォロー可能です」
「そうか、それでいい。人生、何が起きるか、わからない。用心：用心」

キャンプ近くにある半壊したビルの中でガラスがない窓の外を眺めながら発した言葉に、背後に立つトマス・フーパー軍曹が答えた。身長234センチ、体重114キロもある巨漢であり、淀んだ泥のような色合いの髪と歴戦の中で鍛えあげられた瞳は、ど

こか近寄りがたい空気を宿している。

宿しているのだが…当人は話してみればいたって普通な感性を持つ人間であり、俺が仕事をしているとたまに飴玉を差し入れてくれるくらいのナイスガイである。どこのメーカーなのか知らないが結構好みの味で結構嬉しい——あれ？飴玉をくれるって事は子ども扱いされているんだよな？なのに喜んでないか俺？

「やや、降り始めましたな」

「ホントだ……」

報告を終えたフーバーが自分の分隊がいる半壊したビルへと戻ろうとした時、薄暗く灰色になっていた空から雨が降り始めた。もっともそれは温帯の地域、前世日本などで見るポツリポツリとした風情ある雨ではない。熱帯地域の命が弾けるような豪雨、スコールがタライをひっくり返したかのようにして降り出した。

「雨か…ああ、雨だ…」

「フーバー？大丈夫？」

「雨は苦手なのです、雨は…音が聞こえない、近寄られても解からない、ああ…」

「もういい、大丈夫。ここは大丈夫だ…よ？」

「雨は、雨は嫌いですが、ハア」

それを見たフーバーがちよいと鬱とトラウマスイッチらしきものが入ったらしく、そ

の巨漢に似合わない程、肩を落としてみせた。大の男があまりにも情けない姿をさらしているが何かのトラウマならばしようがない事。

俺はポンポンと肩を叩いて（やろうとしたが身長差で無理だった。背伸びしたけど届いたのはフーバーの腰あたり…）励ましてあげた。魔導師なのでBJさえ機能してれば雨をはじき体温の低下も起こらないが、たぶん雨に嫌な思い入れがあるんだろう。

なんでわかるかという俺が鬱になった時の雰囲気とよく似ていたからだ。同胞は見て解かるんじゃない。魂で感じるんだ。

「チビスケ隊長、気持ちは嬉しいですけど。ありがとさんです。ほら、これやるよ」

「あ、甘々だ。ありがと」

んー、飴ちゃんおいしい……ハッ!?

「こ、子ども扱い、するな」

「してませんぜ？ ただ、飴玉が湿ると溶けちゃうんで一人じゃ処理できないんですよ？ おすそ分けですな。もう一個どうですか？」

「そうか、ならしやうがない、もらおう」

「ほい、どうぞ（……やっぱ餌付けみてエだよなコレ。でも、なんか和む）」

飴に罪はない。

「あ、分隊長がチビ隊長にお菓子あげてるぞ！」

俺が無表情ながら内心で甘いものにほっこりしていると、フーバーを呼びに来たであろう彼の分隊にいるターナー伍長が声を上げた。

「ターナー何言つて…ホントだ。分隊長つて強面なのに意外と子煩悩」

「あれ？でもいつもキャンプ支援の時はあんなことしないんじゃない？」

「ああ、いつかだったか。自分の目の前で転んだ子を助け起こしたら泣かれたらしいぜ？」

「それは……まあ、そうねえ。うん」

おまえら、やめてあげてください。哀れみの眼を向けるからフーバー軍曹の顔が見てられないくらいにヤバイ感じになつてきたから。主に泣きそうな意味で。というかこれもトラウマスイツチだったのかよ。

おかげで唯でさえ怖い眼が顔がしかめられた所為で常人なら気絶できるレベルになつてから。いまだに目の前に立っているから、ある意味で一番怖いんですけど？

しかたないので励ます意味を込めて、図体でかい癖に妙に肩を落としている彼の腰のあたりを再びぼんぼんと叩いてやったら、とりあえず見れる顔に戻った。うーん、メンタルが弱いんだか強いんだか、感情の波が激しくてわからん。本人に言うところ落ち込みそうだから黙っておこう。

とりあえず、飴ちゃんをさらにもう数個もらつてから周辺警戒に送り出したが、彼の

テンションは暗いままだった。後で考えると餡ちゃんを貰った時にさりげなく頭撫でられてて完全に子供扱いだった。なんてこつたいorz

——自分のアフオさにいい加減内心悶絶していた。その時だった。

《ズズン…》

「…フ？」

遠くで大きな音と共に空気が揺れた気がしたので、意識が戦闘向けに瞬時に切り替わった。部下たちも同じくそれまで表面上は力んでいない状態だったのを、いまは少し緊張した空気を漂わせて自身の獲物を持つ手に力を込めている。

さっきの音は俗にいう衝撃波だろうと、戦闘向けに切り替わった意識が叫んでいるが、思うが何の衝撃波だろうか。魔導師が規模が大きい魔法を行使した？それとも友軍の制空権を潜り抜けた敵爆撃機の爆撃？どちらにしてもあまり愉快な事ではない。

思考操作で首の後ろに収納していたヘルメットを再度装着し、HUDを起動して情報解析を行わせる。音がした方向は集音マイクのログから検索するに西。廃ビルの中には見えないので、格納領域に収納しておいたワイヤーを屋上に射出、引っかかったのを確認してから壁をローラーダッシュで駆け上がった。

屋上にて周囲を警戒していた部下が俺が屋上に来たことで一瞬驚くが、それを無視して光学映像を望遠にする。音がした方角に立つ傾いた高層ビルの一つが倒壊していく姿が見えた。先の音の原因はあれか、そう思った時だ。

『マスター、センサーが大規模な魔力反応を感知しました』

ヘルメットのマイクからヴィズの合成音声が響き、それと同時に倒壊したビルの根元から光が撃ち上げられるのをこの眼ではつきりと捉えた。

『反応は極大。儀式魔法および広域作用の魔法だと推測。空間魔法陣の魔力滲出による魔力素子と空間中の自由魔力素子との共振現象によるラウンデル光の発光現象により解析困難、フィルタ作動、データ処理中……展開される術式様式、該当データなし』

「言わんでもわかる……なんだありや」

光が撃ちあがるのと同時に胸の奥で感じたそれは、巨大な魔力が動いた証だ。それも通常の人間が使うレベルを大幅に超えた魔力量。専用に調整した儀式を踏んだ魔法で無いならなんとする。

見上げれば撃ちあげられた光の球、おそらく魔力スフィアが雲の中に消えていく。雲の中に入る直前、スフィアの表面に幾重もの多層の幾何学模様が浮かんだのが見えた。それも雲があらぶるように動いてスフィアを覆い隠したので見えなくなつたが、あれは間違いなく魔方阵であつた。最悪な事に、敵が使うほうの。

俺はふりかえり、俺と同じ方向を見ていたティーン・クルーパー上等兵に声を掛け命令を伝えた。

「各員に通達。警戒を厳にせよ。最悪の事態に備えて待機」

「イエス、サー！」

「ヴィズ。大型スファイアが撃たれた地点の特定をいそ——」

『警告、上空1500にて魔力の縮退反応を検出。術式が完全展開された模様』

命令の途中だったがヴィズが警告したのですぐさま上空へと眼をやった。先ほどまでフラットだった雲の境目に何かが見える。ゆっくりと降りてきたのは純白の釜の底だった。いや、釜の底としか形容しようが無い、多分球状の何かの塊だろう。

だがそれを見て悪寒が走った。あれは良くないものだ。と訓練で培われた生存本能が告げている。逃げるか防ぐか、どちらにしろ時間はあまり残されていない。

「——っ！部隊全員に通信回線を開け。総員に通達、エリアタイプの広域防御結界を同調展開する。ジャマーはすぐにこれから送る座標にすぐさま付け。タイミングは此方：レッドクリフーと同調、急げ」

指示を出しながらマルチタスクで腕部のタッチパネル型コンソールでジャマーたち、つまり結界を使える魔導師たちの配置を転送した。並列に事態は進行していく、HUDに周辺の戦術マップが左下に小さく表示され、その上を部隊マークが移動していくの

が解る。

それをマルチタスクの端で確認しつつ結界術式の準備を行う。だが直後、別の方角からの衝撃波を察知し、そちらにタスクの一つを注視させた。同じだった。大型魔力スフィアが地表のビルを穿いて上空へと上っていく。

最初のスフィアが発射された地点とはちょうど反対側だった。西の空から始まり街を取り囲むようにして空へと昇った光球がペセタを覆う低気圧に接触していた。なんらかの魔導作用が働いているのか、スフィアの接触面を中心に渦を巻くようにして気流が荒れ狂っているのが地上からでも観測できる程だ。

魔法を使うと魔力光が発生するが、これほど広範囲に影響が及ぶような発光現象はあまり類を見ない。放出される魔力を帯びた術式の影響を受け、電離を伴った衝撃波が雲の中を放射状に駆け抜けていく光景に誰しもが息を呑んでいた。

雲のカーテンの中を駆け巡る雷光に照らされて、青いオーロラがそこにあるかのような幻想的な光景が広がっている。時折、雲の向こうから響く動物の唸り声の如き低い雷音が、雷雲の中に潜んでいる空想上の怪物の唸り声なのではないかと、ここにいる誰しもが錯覚する程に大きく、この破壊された都市全域に響き渡っていた。

いやはや、この世界の魔法はシステマチックで少しロマンに欠けると常々思っていたが中々どうして。敵さんが作り上げた現象であることを思わず忘れてしまう程、空を覆

い尽くす魔法と自然の共演は幽玄に満ち満ちていた。

ヴィズの望遠だけでなく、魔法で視力を強化しながら、穴が開きそうなほど観察している、雲の間に間に何か白い物が見えた。視力をさらに強化すると少しだけ眼球と脳に痛みが生じた。情報過多で少しばかり負荷が掛ったみたいだったが、今はそれよりも何が起きているのかを調べるのが先だ。

幸いな事にこれまで受けてきた壮絶なる虐め、もとい猛訓練の成果により、痛みに対してはかなりの耐性が付きつつあったので痛いけど苦じゃない。良いのか悪いのかはわからんが…。

ともあれ頭痛に耐えつつ知りえた情報をマルチタスクで並列処理していく。白い物体は最初に撃ち上げられたスフィアと同じく巨大な白い球体を形成していた。スフィアが撃ち上げられたのは最初の場所に加えて5箇所に発現し、全て違う地点から撃ち上げられていたが、それらは地図上において全て一本の線で結ぶことが出来る。

すなわち大きなヘキサゴンを描いてペセタ市を囲うようにして等間隔に射出されたのだ。コレが意味するところにマルチタスクが至った瞬間、内心肝を冷やしつつ、現状打破の為に最善を尽くそうとした。

戦術マップのマーカーが変更したポイントに到達するまでの時間と、今まさに釜の底が抜けそうになっている白い大球体が地表に到達するまでの時間は、ほぼ同じだった。

すぐに配置命令を上書き変更し、口頭指示ではなく念話で矢継ぎ早に指示を下した。口で言っていたのでは間に合わない。

『解析中。——上空1500の高さを起点に範囲拡大中。スフィア周辺に微弱な物理干渉があるものの規定値以下。精神作用および次元的な反応は確認されず。地上からのレイラインの構築を確認、戦略ポイントとしてマークします』

「レッドクリフ各班、状況知らせ」

『モントゴメリー分隊、配置に付いた』

『……フーバー分隊も同じく』

『デュラント分隊もだ！というかありやどうなってるんだ?!』

「デュラント軍曹、質問は後で頼む。ジャマー、準備よろし？」

『『準備完了！』』』

位置に付いたジャマーたちが念話と通信、さらにはライトを使った光で此方に合図を送ってくるのを確認しつつも、俺はマルチタスクの端に映る白い大球体の様子が気がかりでならなかった。何が起きるのかは解らないが、限界を迎えようとしているのがヒシヒシと伝わってきていた。

今あそこにミサイルの一つでもぶち込めば、風船に針を刺すような事態につながるだろうという予感はずかんでいる。こいつをみてくれ、こいつをどう思う？ すごく、大き

いです。じゃあとことん……という状態ってわけだ。意味が解らん？俺もわからん。

そんな俺の足元に結界術式が展開される。他のビルの上にも同じく術式展開時に発生する魔力光がぼんやりと浮かび、蛍のようにゆらゆらと揺れていた。結界術式によって生まれた魔法障壁をゆつくりと広げていく。

単身で使用するタイプの結界ならもっと早く展開できるが、同調させるので細心の注意が必要だ。失敗するとお互いの結界の効果範囲にはじかれ、最悪結界自体が崩壊する。ならなんでそんな厄介な魔法を使うのかというと、成功すれば一人の時よりも強度と耐久性、さらには効果範囲までもが段違いに高いのだ。

あの白大球体にどんな効果があるかまだわからない以上、強度を高めておくに越したことは無い。それにこれで失敗したら結界の内側にあるキャンブに被害が及ぶ。実際部隊だが扱いは正規軍なので民間人を見捨ててはならないのである。実際、あそこにはエドガー君やその家族、子ども達、修理を通して知り合った沢山の人がいる。

——兵士となったからには義務を果たさねばならない。そう思いつつ魔力を絞った。

『マスター、対象が予想ポイントへ到着します』

そしてついに白い大球体が地表へ接触した。球体はつぶれてドーム状になり、数瞬後に突如縮退してみせたかと思えば、爆発するかのようにして弾けた。白い球体から飛び

出したのは火山の噴煙にも似た白い白い物質。

それが人が居なくなつたゴーストタウンのストリートを埋め尽くす勢いで濁流となつて四方へと飛び出していく。その勢いは衰えず間違いなくここを飲み込む。ありやまるで雪崩だな。

『接触まであと12秒、スキャン中…流れてくる物体の主成分は水と空気、それが氷結結晶化したもの、すなわち雪です』

「解つた——全員聞いたな？あと5カウントだ。あわせろ」

雪崩だと思つたら本気で雪崩だつたとはな。すぐに部下に結界展開を合わせると通信すると了解の意が返つてきた。ビルを飲み込み、商店を飲み込み、川を埋める白い雪の流れがすぐ目前まで迫る。

だが俺たちは慌てず騒がず、結界の展開維持に意識を傾ける。USN軍人はうろたえないという電波が一瞬流れた気がしたが、思考の隅に追いやっておいた。術式にノイズが走つては事だ。

「2， 1——展開」

結界が発動する。足元に展開した魔方陣の術式が輝き、魔力光を立ち上らせる。魔力残照が粒子となつて術式から上るのは綺麗なものだが、俺はソレを見て内心舌打ちする。だってそれはまだ魔力運用が甘い証拠なのだ。魔力運用がうまいあの教官なら光

も音も出さずに術式すら隠蔽して運用できるだろう。

それはいいとして、瞬時というわけではないが…なんとというかにゆいーんと自分の目の前に広がっていく魔法障壁。見た目は魔法と知らなければバリアと答えるだろうな。それが難民キャンプを囲うようにして配置した部下たちのいる廃墟ビルの屋上からも同じような光が広がり、キャンプを囲う壁となる。

結晶化したクリスタルのように結界の壁が難民キャンプごと俺たちを覆う直前、白い流れは同調結界の接続部にある魔法障壁に激突した。まるで大波が防波堤にぶつかるかのように、壁に激突した白い流れは数倍の大きさとなって上へと吹き上がる。

身体を圧迫感が襲う。物理的な圧迫ではない。魔法障壁に掛る負荷が術式に込めた魔力を消費し、それを補えとフィードバックされた感覚が圧迫感となって表れていた。

「…っ！（重い、出力を上げる）」

『（了解。けど後で補給願います）』

補給、デバイスドエナジーの事だろう。魔力を相手に渡す術の一つだ。生来のレアスキルのおかげで無駄に魔力だけは張っているからな。軽口っぽく言っているがバイタルデータと念話の感じから、かなり辛い事が察せられる。

「（後で、あふれて気絶するくらい、渡してやる。だからもう少し、耐えて）」

『（了解…！）』

出力を上げるとフィードバックから来ていた圧迫感が軽減される。これなら術式維持に問題はないだろう。俺はともかく標準的魔導師よりちよつと上程度の部下の魔力と気力が持てばの話だが。

大地を通じて感じ取れる激しい振動が、襲いかかる白い物質の流れの強さを否応にも感じさせる。やがて他の大型スフィアが吐き出した雪の流れがこちらに到達し、難民キャンプはわずか数分も経たずして、結果ごとく白い噴煙に包まれて見えなくなつた。

また生き埋めだ、スケールでかいけどな。

「自然現象に勝てる人間はいやしない。母上は除く」

S I D E 三人称

雨、それは恵み。乾いた大地を潤し、生けるものに躍動を与え、不要となった物は押し流してしまふ。ハフマンに降る雨は温帯と熱帯と乾帯が交差する特異な環境によって発達し、大きな低気圧となり地上に大粒の雨として打ち付けられる。それが再び偉大なる太陽の力により蒸発し低気圧を作り上げるといふサイクルを形成していた。

熱く湿った空気がハフマンの空を覆い始めたころ、フェンが地下鉄駅に降りたのとは同じ時刻。セスル基地の防衛ラインが引かれているメール川のむこう。OCUの進行部隊がいる野戦基地の司令トレーラーにおいて、魔導中隊のサム・ハルシオン中佐は戦術マップの前に立ち、システムが表示する限りなく間違いが少ないデータ郡を吟味していた。

この前線仕様の装甲トレーラーには高性能な戦術シミュレーターを含むイメージ装置が生まれ、前線における迅速な部隊の展開と可能な限り詳細なデータリンクを実現する事を念頭に置いて設計された戦闘指揮車（コマンドポスト、CP）として機能している。

ただしこのトレーラーには通常のCPには搭載されていないようなハードウェアを、より効果的に動かすのに十分な三等級軍事AIをはじめとして、多くの装備が搭載されていた。

「——進具合はどうだ？ チャン」

『おやおや、物事を尋ねる場合はまず挨拶がOCUでの基本ではないのかね？』

「……おはようございますミスターチャン。きょうもいい天気ですね。それで？ 進行度合いは？」

『ふむ、冗談はお気に召さなかったようだね。まあいいだろう。さて各工作ユニットの情報が入れば、あとはあなたが右手を振るうだけで事は済むだろう。すなわち準備完了という事である』

　　呟くようなハルシオンの問いに男の声で返事が帰ってくる。返事したのは筐体に付属するホログラムビューアにおぼろげに写る影。指先から肘くらいまでの大きさをえ気にしなければ軍人のいでたちをしたその人物は、このトレーラーに積まれた軍事AIであった。

　　その名もチャン…、某敵国の転生シヨタが見たらどこのチャイニーズジェネラル？と呟きそうな見た目と独特の個性を持つOCUの三等級軍事AIである。三等級軍事AIはインテリジェントデバイスなどに使われている“思考する電子機械部品”をより

高度に完成させたシステムの一部であり、用途が異なるので魔法こそ運用できないが、対人インターフェイスにおいてはそれを凌駕する。

グレードも一等級から三等級まであり、このトレーラーに積まれたAIは三等級である。とはいえシステムの柔軟性がグレード的に制限されているとはいえ、専門的分野においては十分な能力を有している。参謀でもあり辞書でもあるこの思考する機械は、一定以上の階級を持つ指揮官が希望すれば、戦場に駆り出されるのが常であった。

『それで、君の議案なんだが——』

AIはホログラムの中で咳をするような動作を取る。

『技術的な問題は技研から送られてきた魔法データでクリアできた。もつとも、どこの技研のものかは解っていないデータだがね。だが、これで少しはこの暑い場所も過ごしやすくなるだろう。いっそのこと避暑地と命名してはどうかね?』

「:そういう君のセンスにはホトホト脱帽するよ。だが断る」

『何故かな?』

「その理由は、一つ、それは一時的なもので恒久ではないから。二つ、そもそも君が名をつける必要がない。三つ、もつとも重要なことに、この島はアイランド、熱帯の島だ。矛盾した名などいらぬだろう」

指を立てながら告げるハルシオンの姿に、ホログラムの軍人は額に手を置いた。

『しかたない。あきらめよう——む?』

この人間くさいAIに相変わらず奇異の視線を送っていたハルシオンだが、ホログラムのチャンの身体に光条が走り、表情が無に変わった事で見る目を変える。

「どうした?」

『作業中の工作ユニットがC6にて敵魔導師を感知。迎撃プロトコルに従い行動した。』

——あー、あなたにはまことに言いづらいが…』

「全滅するか?」

珍しい事ではない。魔法という理不尽な力を行使する存在に対し、いくらか技術を組み込んだとはいえ、既存技術の機械人形風情とではキルレシオが異なる。当然魔導師側の方が強いのは言うまでもない。

それがわかつているのか、はたまたそういうプログラムなのか、いかにも悲しいような表情を浮かべて帽子を取り、遠くを見つめるような仕草をして見せた軍事AI。

『残念ながら九分九厘の確立で。おかげで作戦の準備が概算で7パーセント遅延する可能性ができた。さらば同胞よ』

「軍事AIは傀儡機械兵などに仲間意識を持つのかね?」

そんな特異な軍事AIチャンに対し、ハルシオンは少々驚き、声をあげてみせた。だがそんな指揮官の様子にホログラムは憤慨したように言葉を返した。

『勘違いしてもらっては困るが我々と彼らとは出来が違う。とはいえ、同じ重工業企業の規格品なのだよ我々は……。少しは……まア黙禱を捧げる程度には感じるところもある』

チャンの言い草にそういうものなのかとハルシオンが感じた直後、目の前の三等級軍事AIは先ほどまでの湿っぽい声色を一変。電子知性らしい実に平坦な事務的な声色をスピーカーから流し始めた。

こういった切り替えは人間にはまねできない。AIが人間の思考をトレースし、感情まで模倣してみせているが、それに振り回されず機械的に制御できるのが一番の利点だった。

『——それは置いておくとして、哀れな機械たちに黙禱を捧げた軍事AIとしては、あの装置を発見された以上、早期の作戦決行をお勧めする』

「理由は？」

『アレは調べられるのがお嫌いなのだよ。ハハ、ジョークだよ』

「……チャン。君のAI個性は尊重するが、あまり過ぎるようなら技研に送り返して構造解析に回って貰った方が後継機の為になりそうだ。時間がないなら簡潔に言え」

『了解した。あなたはホントにジョークが嫌いらしい』

手を片まで持ち上げてやれやれという仕草をとるチャン。偶にハルシオンはこの実に個性的なAIの相手をしていると頭が痛くなる。自分に与えられた三等級軍事AI

は感情の切り替えは出来るのにジョークをはじめとしたからかう事をやめないのだ。

実際、構造解析に回した方がいいのかもかもしれないと彼が思い始めるが、そんな事を思われているとは露知らず、ハルシオンに咎められた個性的な軍事AIは自らの職務を思い出したかのように再び表情を無くして機械的に語り始めた。

『…情報漏えいを避ける為、遠隔操作によりC6の装置を破壊した場合、展開効率は16パーセント低下することが予想される。』

されど残り6つが発見されていない以上、作戦の決行は可能であると判断される。

さらに言えば使われている術式の構造上、一度動き出してしまえば止めることは出来ない上、大型熱帯型低気圧の発生を観測している』

チャンの体表面に光条が走る、空間モニターが明滅し、新たな画面が開かれ、そこに雨雲の展開が色分けされた天気図が表示された。ちらつくスクリーンには歪な台形を描く都市部を二分する川が表示されている。

北から南に流れる川を挟んで西側の端には、広めの敷地にいくつかの施設を連ねる軍事拠点が写る。その敵の拠点を含めて都市を覆う雨雲を表す青い色が天気図としてあらわされ、ハルシオンの眼に映し出されている。彼はこの図を一瞥してから、チャンに話の続きを目で促した。

『見てのとおり偶然にもこの作戦において、もつとも理想的な気象状況が整いつつある

と言つてもいい。他の基部が発見されていない今なら本来の作戦計画通りにする事が可能であると推測される。そして、その為の準備は完了している——そして、この実験的な作戦発動の全権限は作戦総司令部より、サム・ハルシオン中佐。貴官にゆだねられている』

「了解した。チャン、作戦に参加する各部隊に通達。第3次セスル基地攻略戦はフェイズ3に入る。各部隊は規定の手順に従い行動を開始せよ」

『了解した中佐！あいつらに目に見え物を見せてやることにしよう！』

了解の電子音声を発しつつ、ホログラムから消え去るチャン。今頃は陽動の為に展開していた部隊の指揮所へと飛んでいるころだろう。トレーラーのドアに手をかけながら、ハルシオンはふと立ち止まるとポケットから小さな金属片を取り出した。

幾つもの平たい金属板がワイヤーに繋がられている。それは認識票だった。どれもこれも焼かれ凍らされ弾痕が遺されたドックタグの束であった。これらの持ち主がどうなったかなど、これを見れば一目瞭然である。

そんなドックタグの束をハルシオンは手で握り締めてかみ締めるように呟いた。

「……必ず陥落させてみせる。見ていてくれ」

——ハフマンUSN領・コールドパール航空基地・司令区ビル・PM4:34——

その日、情報士官であるテスラン・フォード大佐は自分の仕事机ともいえる卓板コンソールにあがってきた情報を目にし、眉を寄せていた。精神を落ち着かせるために愛用しているパイプを懐から取り出して啜る。ただし火はつけない。

彼の職場は全室禁煙。元々喫煙を許されていない上に、フォードにとつては残念な事だが、彼の部下たちは全員が熱烈な清浄なる空気愛好家たちだ。煙一つ上げただけで眉を顰め、紫煙を吐き出しただけで仕事の効率がガクツと下がるので、唯一の愛煙家である彼は肩身が狭い。

そんなフォードであるが彼がパイプを啜るのはある種の癖でありジंकウスだった。パイプから仄かに立ち上る、タバコの煙の残留した匂いが鼻腔を擦ると、普段よりも思考が冴える気がする。彼の部下である清浄なる空気の愛好家たちもフォードのこの癖は知っていたので、火さえ点けなければこの程度は許容していた。

いつもの行為でジंकウスを担ぎながらも、フォードはつい先ほど発生した異常事態について思案する。芳醇なタバコの香りでも嗅げばもっと集中できるのであるが、残念ながら職場である司令部は全室禁煙。吸わない事を前提に手に持っている事だけが暗黙

の了解で許されているだけなので、この望みはかないそうにない。

彼はうつつすらとした残り香だけを嗅ぎながら、コンソールのタッチパネルを操作し、いくつかのモニターを浮かび上がらせた。ハフマン島を示す地図が表示され、島のほぼ中心にそって東西に敵軍と友軍が配置されているのを示すグリッドが表示されていた。

これはリアルタイムでの各軍から送られてくる戦況を視覚的に理解できるように表示させたものである。これにより何らかのアクションがあつた場合、この戦術的な地図にも変化が現れるようになっていた。

されど、いまその地図は一部分が灰色で表示されている。島のほぼ中央に位置するペセタ市がそこに表示されているが、いま戦術マップの上でこの地域は友軍の表示はされておらず、さりとて敵軍の領域になつたとも表示されていない。

現在、ペセタ市周辺はアンノウンともいうべき未確定地域として表示されている。通常このような表示が起こりえるのは、この地区を担当している部隊が壊滅したか撤退したか、あまり友軍には好ましくない状況になつた後、こうなる場合が多い。

しかし、ペセタ市にあるセスル基地は陥落した訳ではない。しかるにこのような表示がなされたのは、この地域を統括する前線基地であるセスルからのほぼすべての通信リンクが、急に途絶えていたからだつた。

「状況を報告しろ」

「通信封鎖です。それも軍の使用回線、通話帯、民間の物にいたるまですべてが封鎖されています。物理的機械的というよりかは…魔法的なものかと」

フォードの問いに先ほどからパネル相手に格闘していた情報士官のダッジ中尉が答え、パネルの光で青白くなった顔をさらに陰らせた。

「魔法的か…くそつたれの忌々しい魔導師共め…。魔法のお遊戯ならよそでやればいいものを」

「その発言は大佐の立場を悪くしますよ?」

「かまうものかよ。軍を回しているのは何も厳選された魔導師だけではない。現に私はただの人だ。第一、こんな場所に聞き耳を立てる程、暇な将官がいるなら最前線に送り込みたいものだ」

「私も同感です。ところで現在、唯一友軍の無事が解かるのは、拠点ビーコンが発する信号だけです。と報告しておきます」

「オーケイだ中尉。私は魔導師なんて大っ嫌いだ」

フォードは鼻を鳴らしつつも、同時に自らの唇がひくついたのを感じた。拠点ビーコンとはUSNの各基地に設置された装置から発せられる信号であり、定期的に強力な暗号コードを信号として発する物だ。暗号というがその暗号自体の内容には意味などはなく、多くが基地司令の愛人の名前だったり好きな酒の銘柄だったりする。

これは敵側にあえて察知させてミスリードを狙う為に信号を暗号化しているからだ。仮に暗号を解読されても敵は何かの符丁なのではないかと勝手に勘違いしてくれる。とにかく重要なのは定期的にビーコンが発せられる事。単純ゆえに強力な所以である。

だが、当然の事ながらビーコンは簡単な信号だけを強力に発する物ではない為、それ以外の情報を一切発信する事が出来ない。かつての大砲の号令のようなものだ。単純で強力だからこそ妨害されにくいが、それゆえに通信文すら送れず、単信しか発信し
かできなかった。

しかしビーコンが発信されている以上、少なくとも基地の通信設備は生き残っているという事になる。そこを占拠しているのが生者か死者かそれとも敵かはこの際関係ない。確認できているのは通信途絶だがセスル基地の通信設備は生きている。それだけだった。

「偵察衛星が来るまでどれくらいだ？」

「衛星軌道が重なるまであと一時間です。しかし敵側の衛星から熱烈なラブコールが殺到していて現状数日はつかえませんが」

「ハッキングまでやるとは…軍事行動は確実に妨害工作も順調か…。その手際の良さには関心すら覚える」

「同感です。敵もよくやる。そして我々USNは敵よりも優れています。先ほどコール

ドパール航空基地から偵察機の発進命令がでたので、まもなく——」

その時、ダッジの顔に赤い点滅が写る。彼のモニターに偵察機からのデータリンクが届いたという合図だった。

「データ来ました。そちらに回します」

フォードは「確認した」とダッジに呟き、自分のコンソールに備え付けられたモニターを凝視した。映像は飛行中の偵察機RC—24エキスパート・アイに装備された180度の視界を誇るドームビューカメラからリアルタイムで送られてきていた。カメラはペセタ近郊の礫砂漠を低空で飛行しているところだ。

礫と枯れた草に包まれた緩やかな丘陵を越えたあたりで空を飛ぶ偵察機のカメラに生のペセタ市の姿が写りこんだ。データが送られて、デジタルな信号がモニターにその像を形作った直後、フォードは口からパイプを落しかけた。一度見てから目元を押さえ、再度その映像を見て驚き、どこか淡々とした……いやさあきれた声を上げる。

「なんなんだ？この皮をむいたタマネギのお化けみたいなものは？」

「わかりません」

同じく驚愕の色を隠せないダッジ中尉がフォードの呟きに言葉を返していた。エキスパート・アイが撮影した映像には、ペセタ市を覆い隠すように白いガスのような球体が渦を巻いて鎮座している姿が写り込んでいる。

その渦の中心部からは細長い竜巻のようなものが上空高く伸びて枝葉のように分かれており、上空の大気層と繋がっている。モニターに映し出されたそれはまさしくフォードの言ったままの状態だった。

「広域スキャンやワイドエリアサーチは出来るか？」

「確認します……無理です。センサー類の殆どがジャミングされています。この距離からでは偵察機の機器では詳細な観測は不可能です。それとパイロットは魔導師ではないらしく、魔法は使えないと言ってきています」

基本的に魔導師は軍人になる事がほぼ確定であったが、入隊する際ほとんどが戦闘を主体とする戦闘魔導師に仕立て上げられる。探知という分野はUSN軍に置いては、あくまで戦闘を補助する技術と位置付けられており、体得している人員は少なかった。

それでも適正が高ければ兼任で偵察隊に幾人か所属させられていた筈であったが、この日は運悪く探査型の魔導師の手が空いておらず、偵察機には乗り込んではいなかった。

「だったらやる事は一つだな。偵察機をもっと近づける。我々には情報が必要だ」

「イエッサー、ただミサイルが飛んでこなければいいのですが。高い機材に高い人材なんです……」

「おまえさんの年俸よりはるかに高いからな。祈れ」

「無神論者なんですよ」

「安心しろ、私もだ」

軽口を叩きながらもコンソールに向いたダツジは空飛ぶ覗き屋に指示を送りつけた。エキスパート・アイは指示に従いペセタ上空に向かうコースを取る。近づくにつれてより鮮明な画像が送信されるようになり、それを記録しながら更に機を接近させた。

あまり近づきすぎると地上からの対空迎撃や携帯対空ミサイルの洗礼が来るのだが、覗きのプロであるエキスパート・アイのパイロットたちは機体を全く揺らさず、任務を全うしていた。

ペセタ市近隣地区まで到達した辺りで機はさらに高度を上げた。高層ビルが多い為、低空での撮影は出来ないので都市上空からの詳細なデータを撮る必要があった。その為エキスパート・アイは白い謎の球体に沿うようにして上昇していく。

だが、これまでほとんど揺れる事がなかったその画像に少し乱れが見え始めた。

「どうした？画像が乱れているぞ」

「風にあおられているようです。問題はありません」

ダツジはこの偵察機の元になった機が、本来は気象観測に使う為に造られた事を知っていた。スーパーセルの乱気流の中でも機体制御を失わずに戻れるというある種キチ

ガイ染みた性能が情報部にとまり採用されたのだ。高々あおるような横風程度で墜落するようなら予算は降りない。

それを証明するように高価な覗き屋の機体は、まるで風に乗る鳥のように危なげなく乱気流の中を通り抜ける。それどころかその気流の流れすら利用して更に高度を稼ぎ上昇していた。紙飛行機が突風にあおられるように錐揉み上昇という、並みのパイロットなら悲鳴を上げるような動きでとび上がったエキスパート・アイ。

パイロットの腕前に感心しながらも、機はペセタを覆う球体の上部に差し掛かろうとしていた。

「中心の渦まで接近させてくれ。そこがあやしい」

「了解しま——エキスパート・アイに異常発生。原因は不明ですがエンジンの出力が徐々に低下中」

「敵の攻撃か！」

「わかりません。エキスパートアイ、エンジン停止。だめだ……落ちます！」

それは一瞬の事であった。ペセタ市を覆うドーム状の雲塊の上空を飛行していた偵察機のエンジンが急激に出力低下を起こして停止。気流にあおられて眼下の雲の中に消えてしまった。

雲の中に入った途端、完全に通信が途絶えた事から、雲の外と中は完全にジャミング

されて封鎖されている事がわかったが、それは現状の状態から推察できていたので特に有益な情報ではなかった。

飛び込む直前まで繋がっていたデータリンクのログにより、偵察機のパイロットたちが落ちる機体を必死で立て直そうとしていたようだ。しかし電子機器が動いていても肝心の推力が停止したなら彼らになすすべはなかった。

「なぜエンジンが停止したのだ。あそこだけ真空にでもなっているとも?」

「真空なら飛べませんよ」

そんな事はわかっている。だがあらゆる可能性と情報が必要なのだ。大事なものは攻めるにしろ救援に向かうにしろ、エキスパートアイの『二の舞』が起こる事を防がねばならない。それがフォードたち司令部勤めの情報士官の役目であり、友軍の不幸にいち感情的に反応しない理由だった。

ふとフォードは自分の手が愛用のパイプをことさら強く握り込んでいた事に気が付いた。彼は軽く手を振って力を抜いた。情報士官は感情的にならない。だが何も感じないわけではない。戦争が始まってから麻痺していく精神に、どれほどの睡眠薬と抗鬱剤と胃薬の瓶が浪費されたことか。

「データを集めろ。原因究明を急ぐぞ」

「イエスサー、ボス」

これ以上お菓の出番を増やさない為にも、勇敢なる覗き屋たちが送ってきた情報を、使い物になるものとしなければならぬ。彼は部下たちに発破をかけつつ、自身も原因の究明に頭を働かせていった。

一時間程後、情報の解析によりペセタ市のさらに高高度の雲の中に、巨大魔法陣が展開されている事が判明する。これによりペセタ上空は超極低温と言つてもいい状態と化していた事も、あの哀れな偵察機の最後のデータを調べる事で判明した。

都市一つ分を覆うような広範囲の儀式魔法ではあるが、それ自体は攻撃の為の術という訳ではなく、本来は農場などの天候操作に使われる術式を拡大した物である事も解析の結果判明した。

これは、これまでになかった新たなOCUの対都市および対基地戦術である。何故なら愚かなるOCUは我がUSNに真つ向から突撃し、正面戦闘を繰り広げる。『野蛮人』共であった。そういう彼らをUSNは『紳士的』に真正面から殴り返していた。第三者から見ればどつちもどつちなのだが、そんな事は関係ない。

今回使用された魔法、これは気象学といった自然科学に加え、それを拡大作用させる魔法との連携、いや融合が行われた物だった。これの恐ろしいところは大自然に起こり得る現象を強化し、それを攻撃と防御両面に使用している事だろう。

大自然の猛威は天候を操作したりする魔法を用いても全てを防ぐことはできない。

天候操作は局所的にしか効果を現さないが、大自然の猛威は時として惑星半分を覆いつくして連鎖する事もある。

もし、敵が使用した物が天候を操作する魔法を元に自然の現象を再現し、さらに強化して暴走させるような物であったとしたら……それに対抗できるのは人間には不可能だと言えるだろう。たとえ魔導師でも無理だ。

「まったく、厄介な事態だ。ペセタには陸路で向かう他なさそうだと各部署に連絡したいといけない。実に、面倒くさい。OCUの糞虫どもはこちらを過労死に追い込みたいようだな」

そう言つてフォードはパイプを噛みしめる。がりつと不快な音が響いた。

「中はどうなっているのでしょうか？ 友軍も生き残っているのでしょうか？」

「いえる事はただ一つだ中尉。『我らに打つ手なし』だ。せいぜい部隊を展開して包囲が関の山だろうよ。もつとも——」

フォードは白い雲を睨むように画像を見据える。

「——自力で、這い出してくれれば、どうにかなるかもな」

「……凍りませんか？」

「……凍るよなあ」

ダツジ以下、部下の情報士官も含めフォードたちはそこらへんは情報士官の分野じゃ

ないと割り切って、とりあえずデータを纏めて司令部に送りつける準備を始めた。餅は餅屋、魔法は魔導師といった具合に、彼らは情報を纏めるのが仕事であって、作戦を考える事ではない。自分の領域を間違えてはいけないのである。

「出来る事は我が軍の魔導師が優秀である事を祈るくらいだな」

そういつて、フォードは部屋を退室した。忙しくなる前に愛用のパイプを酷使して、体内にニコチンを補充しなければならぬという使命感を胸にして。

——フロントライン・ペセタ市・PM3:53——

《展開後は速やかに散開し、状況確認を実施せよ》

レッドクリフ隊、ワット・ターナーの分隊に所属するトニー・ガーラント上等兵はヘルメットに内蔵された通信機から聞こえる指示を聞きながら、自分の装備を慣れた手つきで点検していた。

バトルライフル〔コッドSN9〕のステータスリンクをヘルメットのバイザーに浮かぶHUDに同期させて状態を確認、銃本体の状態も残弾ホロ表示もすべてグリーン問題なし。同時に装填している弾薬クリップも慣れた手つきで確認していく。

このまま静かにチャージング・ハンドルを引けば弾薬（アモ）は薬室に装填されるが、

暴発の可能性を考えてまだ装弾しない。次いで銃身下部に装着した擲弾発射器：いわゆるグレネードランチャーの姿をそれも確認する。

一見すると一般兵が持ちうる擲弾発射器に見えるそれは、魔導師に配布されるストレージデバイスである。彼は慣れた思考操作でこの眠っているデバイスの状態を、消費魔力を抑える為のスリープモードから完全起動に切り替えた後、きちんと銃身下に固定されているかを点検する。

これが高性能かつ貴重なインテリジェンスデバイスならば自己診断を自動で行ってくれるので、こういう七面倒な手順はいらないのだが、残念ながら彼が所持しているのは軍が支給する量産型のストレージ系統に属するデバイスだ。

実際、過去に一度だけ固定していた部品が外れた所為で、銃弾飛び交う中で片手にバトルライフル、片手に拾い上げたデバイスという開拓時代の牛飼いたちもビツクリな変則両手もちスタイルで戦う羽目になり、それなりにエライ眼にあつた事があつた。それゆえ、彼は確認を重点的に行つた。

さらにデバイスと連動しているその身を包む兵装防護服、バトル・バリアジャケットの方も少しだけ魔力を多めに供給する。消費魔力が増えたと継戦能力に若干の影響があるが、魔力を込めれば強度が上がる。こうすれば不測の事態：たとえば開幕直後のヘッドショットが偶然起こつたとしても、魔導師の生存率が高まる事を彼は知つてい

た。

そうやって各部点検を同時に行いながら、ふと思ひ出し、ジャケットの迷彩をデジタル都市迷彩から白一色に切り変えておく。このままいけば普段の迷彩では非常に目立つこと請け合いだったからだ。

目を瞑つても行える熟練した動作により、これらの手順をわずかな時間で終わらせる。やる事はやったがまだ地上に到着しないので若干手持無沙汰になったトニーは、自らの足元に視線を落としてみた。

いま彼の足もとには魔法陣が展開し、円環の中を術式が巡っているのが見える。

魔力で出来た疑似物質の足場、それ自体は実体があつて無いようなものなので、空戦に適正がないトニーにとって、この足場は頼りどころがなく非常に不安定に見えてしまうが、これを操作している下の仲間が手違いを起こさない事を彼は祈っていた。

そんな魔法の足場がエレベーターのようにして、彼とその他偵察要員数名を地上十数Mの高さに押し上げていた。天頂付近に近づいているのもう間もなくであろう。彼はすぐに飛び出してさまざまな事態に対応できるように、機関部をスライドさせて銃に弾を込めた。

足場が止まる。そう感じた途端に目の前の壁に人が通れる穴が開いた。防御結界の一部が解除されたのである。すぐさま彼は開いた穴から飛び出した。目指すは近場の

ビルの影、全周囲に神経を張り巡らし、IF（もしも）の事態に身構える。

だがそんな彼をあざ笑うかのように、トニーは一步目から体制を崩した。思っていたよりも氷上が氷結していない……。

「トニー、砂漠での要領だ」

「……了解だ」

若干慌てたトニーだったが、そんな時に脳裏に言葉が響く。それは彼と同じく結界に開けられた隙間から外に出ていた偵察部隊の仲間の短距離会話である。簡単に言えば氷上でのアドバイスであった。

そのアドバイスの意味を正しく理解したトニーはすぐに体制を立て直した。ペセタ市周辺には砂漠がある。一時期警戒網が砂漠にまで及んでいた頃、はじめのうちはよく砂に足をとられていた事を思い出したのだ。

粒子が細かな砂上を歩く際、砂漠戦の経験がある魔導師はみな、シールド魔法を応用した物理干渉の場を脚部に展開する。小難しいようだが実際の意味は眼に見えない魔法の“かんじき”を足に穿くようなものである。雪と砂では細かな部分で違うが、影響範囲を広げれば雪の上でもアスファルトの上と変わらない動作をする事が可能であった。

トニーは思うように動けるようになると同時に周辺を警戒する。もつとも雪原と化

したペセタ市の中で障害物になるものは、雪原から突き出ているビルの屋上くらいだった。

「……さむいな」

この光景にトニーは思わずそうつぶやいた。凍てつく球体に呑み込まれた事で、熱帯の街だったペセタ市は、いまや完全に凍りついていた。氷河期というものを再現したとするならば今のペセタ市はまさに氷河期まっさかり言つてもいいだろう。

雪崩の如く降り注いだ雪と、その雪と共に街を包み込んだ冷気により、地上構造物のほとんどが氷に包まれた。かつての高層ビルがいまでは巨大な氷山のようなようである。これが文明の終わりと題されるなら文字通りに捉えてしまえる程、街は冷たい静寂に包まれていた。

アイランドがアイスランドになってしまったのか……酒が無性に欲しくなった。

《——各員、状況を確認後、報告せよ》

トニーが変わり果てたペセタ市を見つめながら、過去に味わった酒の数々を思い出している。通信機を通してモントゴメリー分隊長の声が聞こえてきた。ハツとして周囲を見渡すと、他の仲間はずでに散開して所定の位置についていた。

思考していた事で一步遅れた彼は急いで突き出ているビルの屋上に飛びあがると、脳裡に探査の術式を思い浮かべ周囲を探査する魔法を展開する。術式展開に要した時間

はおよそ一秒ほど。通常の探査魔法が十数秒から長くて数分以上かけるのに比べると極端に短い。

これは決して探査をサボる為に探査のフリをしたというわけではない。通常の探査魔法を使用すると魔力探査波の拡散具合からこちらの位置を特定される恐れがあるからである。いわゆる逆探知されるという事だ。

ゆえに軍における探査魔法は非常にシンプルかつ短時間の展開が基本の魔法だった。精度はお世辞にも探査魔法と比べるのもおこがましいほどに低いものの最低限の探査精度は備えており、そのさまが潜水艦の探査方法にも似ていることから、この魔法は別名「ピンガー」と呼ばれていた。

彼が展開したピンガーの術式が一瞬だけ強く発光する。その瞬間、彼の脳内には自分を中心としたグリッド状のマップが浮かび上がる。術式が発した探査波のデータが術式を通じて目に見える形に転換されたのである。

探査波の影響範囲にあるものだけがグリッドマップ上にトークンの形で展開。この時後方下方に複数の未確認の生体反応が浮かびあがるが、それは難民たちの反応なので脅威から除外する。そうして残された反応、もともと設定していた敵性反応の有無は、無しだった。

「『聞き耳』たてても、何も聞こえないな」

そう呟くとトニー。ここでいう「聞き耳」とは別種の探査方法であり、動的物が発する様々な振動などを探知する方法であった。この探査方法はソナーと呼ばれている。受動的なパッシブソナーと似ているからそう呼ばれていた……なお、二つ合わせてソナーセンスとして統合されているのは余談だ。

《こちらレッドクリフ014、周辺の敵性反応は探知できず》

《分隊長了解。指示があるまで警戒せよ》

ソナーセンスで周辺状況を確認したトニーは、データを送信しながら報告する。すぐに分隊長からの返信が届きトニーたちは周辺監視を継続する事になる。それはある意味仕方がない事だといえた。何せ彼らの足元、厚い雪の下には結界に包まれた難民キャンプが埋まっているのだから。

あのチビの隊長殿が何らかの判断を下すまで、自分たちはここから動けない事にとニーは内心嘆息していた。そもそもトニーはこの小さな隊長殿の事はあまり好きではない。正確には好きでも嫌いでも無い、あえて言うならば苦手であった。

国から戦う事を義務付けられたモノ、魔導師。圧倒的な力を持つこれらは、時に現代兵器を凌駕する。適性を持つ人間は少なく戦えるモノはさらに少ない。されどいったん魔導師が戦場に現れたなら現代兵器では分が悪く、それを倒すには同じ魔導師の力が必要だった。

しかし、この戦争でOCUもUSNも短期決戦を願い、互いに数少ない魔導師を戦争に送り出した。戦力的にはあまり大差ない両者の激突、その結果が齎したのは戦争の泥沼化と混迷。貴重な魔導師は激減していった。

魔導師の素質を持っていたトニーも戦場に駆り出された魔導師だ。しかし彼は自ら志願してハフマンにやってきた。戦争を早く終わらせたいから、自分の力がその一助になると信じて……。

だからだろう。これまでハフマンでの厳しい戦いを経験したトニーは、フェン・ラーダーを見るたびに思ってしまうのだ。俺は、ああいう年端もいかない者たちを守る為に、戦場に来たのではなかったのか、と。

だから、彼の小さな背中を見ると、なぜ上層部はもつとベテラン、そうでないなら普通に士官を送って隊長に据えてくれなかったのだろうと思ってしまう。守りたかった者を背に戦うのではなく、守りたかった者の後ろについていく。こんな状況にトニーはある意味痛烈な皮肉を感じ、士気が下がったのはいうまでもない。

それは兎も角として、すぐにトニーは自らに課せられた仕事を全うする。苦手な奴とはいえ指揮系統の中ではチビ隊長：フェン・ラーダー中尉は上官にあたり、一部下ではないトニーに逆らう道理は許されない。

周辺探査および敵勢の索敵が今の彼に与えられた任務だ。幸いな事に苦手な上官との間には分隊長というクツションがある。命令はチビ隊長が下しただろうが、それを伝えるのは分隊長だ。ベテラン士官の命令というものが、今の彼には絶対的な安心感を与えてくれていた。

とにかく今は命令に従う、それだけに専念する。

《……命令あるまで各個に周囲を警戒せよ》

通信機を介して響く分隊長の声にトニーは返事の代わりに了解を意味する信号を送る。本来は声を発せられない時や乱戦時に使うものだが別に平時に使ってはいけないというルールはない。

それに、こうすれば隊長の元には了解を意味するランプが点くので面倒な応答がない分、合理的に済む。本音はあまりしゃべりたくないだけであつたが、それくらいは許容されると暗黙の了解があつた。

そして彼はいつ止むかわからない監視を開始し、音なく降り始めた雪を眺めつつ、この先どうなるのかとため息を吐いたのだつた。

その雪の下、防衛結界の中に収まっていた半壊した廃ビルのオフィスを臨時の指揮所として無断借用したフェンは、自分の副官と共に現在自分達が置かれた現状を把握しようとして、これまでに集めた情報を統合していた。

「通信機、および念話も通信魔法も全部ノイズしか入りません、完全にジャミングされていて基地と連絡がつきません。ただ近くにいる筈の周辺の味方とも連絡が付かないのが、なーんか腑に落ちないんですがね」

「比較的信号が強い暗号通信も……使えば敵にこちらの位置を特定されてしまう。これ以降はこちらの判断で動くしかない、か」

統合すればするほど、現状が見えてくれば来るほど、あまりよろしくない状況に置かれて、フェンは内心嘆息していた。

あの時、ペセタ市が雪と氷によって閉ざされ、難民キャンプごと氷の下に閉じ込められたあの瞬間から、常に彼らを繋いでいた軍とのネットワークが消失。その後、何度か暗号通信を用いて基地とのコンタクトを取ろうとしたが、あの街を閉ざした魔法が発動してから基地との通信は閉じたままだった。

またペセタ市でフェン達と同じく哨戒に回っていた部隊とも連絡がつかない為、難民と共にいる彼らは今まさに完全な孤立状態に陥っていた。こうなってしまうと現場の判断による行動。すなわち独断専行を行う必要があったが、それがよりフェンの気持ち

を重くしていた。

もともとフェンはこんなところまで来るなんて考えてもいなかった。彼が魔導師になりたかったのは、魔導師が魔法という技術を操る者であり、彼自身が魔法に心魅了されたからであり、決して戦場で命と精神をすり減らすためではない。

それでも悪化する情勢に、魔法使いたさで早熟に魔導師となった己が、戦争により魔導師兵が摩耗した軍隊に求められる可能性を何となく察して覚悟を決めていたものの、実際に軍に配属される時は一介の魔導師兵として戦うものと思っていた。

しかし蓋を開けてみれば、フェンに課せられた役はまさかの前線指揮官役であった。皮肉にも本来は軍人に向かない人間を振るい落とす筈の軍の教育プログラムにおいて、死にたくない一心で技術を身に着けていったことが、逆に能力があるという嬉しくもない太鼓判を押される要因となってしまうのである。

軍の年齢枠を引き下げたいとか、優秀な魔導師なら幼くても早熟なので部隊一つくらい任せられるとか、そういった色んな思惑が重なり合い、フェンは特例も特例のテストケースとして前線に配属となってしまうていた。ある意味ではいいの良いいモルモットでもあったのである。

前世を持ち、精神的にはかなり成熟しているフェンは、たぶんそうなのだろうと上記のようなクソツタれたな事情を粗方察してしまっていた。指揮官としては尻に卵の殻が

付いたままのFNG（クソ新兵）でしかないのに、自分だけではなく部隊にいる部下の命まで考えなくてはならなくなったことで、自身の両肩に押し掛かるようになった重圧は半端な物ではなかった。

上層部の早漏共め、漏らすのは御フェラ豚に吸われた時だけにしろよと、悪態をついた事もある。許されるのなら見苦しく年相応に泣き喚いて逃げてしまいたい。しかし、数年間に渡る魔導師へと至る特訓により、喜怒哀楽の感情の発露の芽が悉く細くなってしまう彼の顔に感情の色が浮かぶことはほとんどない。

それ以前に、見た目以上に精神的に長く生きている為、情けなく泣き喚くことへの嫌悪にも近い羞恥が、泣いて逃げる自分を許そうとしなかった。それにより唯でさえ雁字搦めに固められていたフェンの精神は更に頑なになっていくが、戦争の中でそれを顧みる余裕など彼にはなかった。

だれにも頼れない。頼れるのは自分だけ。クソツたれ過ぎて涙も出やしない。もつとも己に部下がいる手前、そういう不満を表に出すことは決してしない。実験的に任官させられたとはいえ、今のフェンは指揮官である。指揮官は例えどんな状況に陥つても動揺せず、嘆かず、それでいて常に冷静に見せる事が最上とされている。

今の彼はそれを忠実に実行しているに過ぎないが、それが士気を下げずに済むのであ

るのならとむしろ喜んで演じている節があった。かつての己が真面目に生きること
に定評のあつた島国生まれの男児であつたことも関係しているのかもしれない。

少なくともその冷静に見せる演技だけでも、士気の低下による部隊の崩壊が起こらな
ければ自身の生存率が飛躍的に跳ね上がる。戦場にいる以上こういつた事に手はぬか
ない。皮肉な事にあまり動かない事に定評がある彼の鉄面皮は、この猿芝居に一役買つ
ていた。

それはともかく、この状況である。訓練兵時代に受けた魔法式シミュレーター訓練で
も、ここまでひどい状況は想定外の範囲外だつた。精々が敵の攻勢で孤立、退却したくて
も囲まれて逃げられず、魔力も尽き気力だけで動いているような中、打ち果てる最後ま
で戦い続けただけである。

「……………うむ？」

意外と酷い状況の訓練だつた。まあ本来はクリア不可能なことを前提にした訓練な
のだから致し方ない。そんなことよりも現状、基地と連絡が付かず周囲の友軍の反応は
皆無、それでいてこんな状態を作り出した敵の事だ。あらかじめ準備を終えているに違
いない。この先は敵との接近遭遇は増加する事を意味している。

——それに加えて、だ。

フェンは視線を変えて遠くに向ける。彼の視界に映るは難民たちの姿だ。咄嗟に広

範囲の防御結界を展開させた事で、大雪の崩落、いやさ雪崩と言つてもいい大量の雪に押し潰されるといった、常夏の島ではありえない死に方をさせずには済んだものの、状況としては最悪に近かった。

今でも結界一枚挟んだ向こう側には何百トンにも及ぶ膨大な氷と雪が結界を圧迫している。時折金属が擦れるような軋みが響くのは、大雪の重さが多重的かつ複数の魔法壁に負荷を掛けて押し潰しているからだ。

展開されている魔法壁も咄嗟の展開だった為に、同調に不備があり、それぞれ強度が違う。この微細な歪みがつなぎ目にあたる部分に現れ、外からの超重量により軋み、こすれ合っているのである。この状態で魔力供給と制御を絶てば、魔法障壁は元からそこにはなかったかのようにして意図も簡単に消滅してしまうだろう。

そんな場所にいるにも関わらず恐慌状態に陥らないのは、フェンの部下と支援ボランティアの人たちが必死で抑え込んでいるからだ。難民達がショックで放心する中でいち早く的確な指示を飛ばし、彼らにパニックが伝染する事を未然に防いだのである。そんな苦労があつて難民達の暴走は起きていない。

だが長居する気はないが長くは持たない。タイムリミットは刻々と近づいてきているのをフェンは肌感じていた。

「幸い、基地のビーコンは途切れてないところを見ると、まだ陥落してないって感じて

す。日没まであと3時間弱、急げば暗くなる前に基地に戻る」

「そうだ、我々は基地に移動しなければならぬ。むろん難民達もつれて、だ」

「それは、実に、厳しいミッションになりそうで……」

「実際きびしい。されど見捨てられない。見捨ててはいけぬ……。それが兵隊の務めであり、戦う理由」

そう呟いたフェンに対し、何かを言いたげな副官のジェニスであったが、あえてそれを言わなかった。フェンもわかっていた。部隊の生存率を上げるだけなら難民を捨てていけばいいのだ。身軽な彼らは一直線に基地に戻る。極力戦闘を無視すれば誰一人欠ける事無く帰還できる事を理解していた。

されどそれを行う事は許されない。フェンも含め彼らはUSNに所属する兵士である。国の為に戦う事を義務付けられた軍人なのだ。兵士は戦うだけではない、時に戦えない同胞を守る為に自ら傷つくのも義務の一つなのである。

要するに、すでにこのペセタ市のすべての区画がフロントライン、戦闘区域に突入した以上、軍人である彼らはそこに残り残された非戦闘員であるUSN側難民の保護を優先して行わなければならない。それが義務の一つであるし、USNの陸戦法規にもキチンと定められている。

陸戦法規はルール無用に見える戦場の中でも最低限守らなければならないルールで

あり、有名などころでは捕虜への虐待など非人道的な行為などをこれは禁じている。これを無視する事は戦争犯罪に相当し、かかわった部隊全員の軍法会議もあり得るのだ。最悪、銃殺刑にもなりえるので慎重にもなる。

もつとも今回の戦争では突然の開戦で非戦闘員の避難が間に合わず、少なからず被害がでているので戦争法規もクソもあつたもんじや無い為、半ば形骸化したといえるがそれはそれ。フェンとしては幾度か交流した事がある相手を見捨てるのは心情的に嫌であつた上、彼の兵士としての矜持がそれを許さないのである。

例え今回の戦争でこの陸戦法規が半ば形骸化していたとしても、それを理由に守るべきモノを見捨てるような唾棄すべき行為はしたくなかつた。とはいえ、この民間人の保護はある意味でエドガー少年を保護した時と同じだが、こちらは規模が段違いであつた。

「広範囲に偵察を展開。敵との接近遭遇の時、迎撃チームを呼び寄せる、現在防壁を展覧している者たちは、引き続き難民の護衛にあたらせる。難民への説明は……」
「……………はいはい。自分の仕事、でありますね隊長殿？」

意味ありげにジェニスの方を見やるフェン。見られた方の副長はガリガリと頭を掻きつつ溜息を吐いた。

「すまんジェニス、俺は、小さいから……………たぶん無駄な心配をさせてしまう」

「ま、ふつうに考えて、こんな小さな隊長なんて夢物語みたいなもんですからね。副官の立場であり、普通に成人の大人である自分が適任つと、了解しました」

「部隊の編制を急ごう、すぐにでも出発する」

フェンの言葉にジェニスは頷き、彼のところから離れるとビルの一室から退場した。あの副官には毎回迷惑をかけてしまつて申し訳なく思う。これが終わつたら何か苦労ことをしてやらねば……。

そこまで考えて、なんだかんだで上官の思考になりつつあることに顔には出ないが苦笑する。さてと、と呟きつつ、フェンは現在レッドクリフ隊にいる人員を思い浮かべ、ヴィズのデータベースからもリストアップして相互に補間していった。基本ながら大事なこととして、現在ともにいる避難民の安全が第一に優先される。

つまりは基地までの道のりで万が一敵と接敵した際、攻撃を防ぐ防御魔法が得意な者は難民と共に置く必要がある。またそうならない為になるべく難民と自分達が移動していることを悟らせない為に隠蔽魔法に適性がある者、いわゆるジャマーを使える者達も同じように配置しなければならぬ。

リストを覗いたところレッドクリフ隊所属の32名の内、そういつた高度なジャマーセンスの適性持ちは僅かに5名に留まつた。一応分隊長クラス以上にもなると必然的に魔法技能が高いので結界をある程度扱える為、それらを含めるとフェンもいれて全一

0名が防御に専念できることになるのだが話はそう簡単にはいかない。

全体指揮や戦闘行動を取るであろうフエンは勿論、分隊長クラスの階級を持つ者は各隊の指揮を行う必要がある。それを考慮した場合、レッドクリフ隊でジャマーを行える人員は実質5名しかいなかった。

隊の規模を考えると随分と少ないが、USN軍は創設されて以来、常に軍の方針は戦闘に役立つ魔導師の育成に傾いていたのが原因である。一応、支援兵科は存在するがメインはやはり戦闘職であり、文字通り支援程度の規模でしか部隊に配置されることはなかったのである。

通常なら豊富な後方支援体制や部隊間の連携もあるので、支援兵の有無はそれほど影響ない筈であったが、今の孤立した状況では部隊の生存に如実に関わってくるだろう。本来は前線で敵の誘導魔法を阻害するジャマーが後方に引き抜かれる。これが意味するものは、つまり――。

今の状況では避難民を含めて全滅は免れないと、厳しい訓練の中で自然と身につけていた勘がそう告げていた。展開装備したままのヴィズを解除しないまま、そのフルフェイスのヘルメットの中で感じた吐き気を飲み込んだ。

《隊長、こちらジェニス。難民への説明が終わりました》

「こちらフエン。ずいぶんとはやいな」

《ボランティアで難民支援にきていた人々が協力してくれました。彼らが暫定的に難民達への説明と誘導を行ってくれるそうです》

フエンが編制をどうにか考え付いたところ、ボランティアグループやキャンプの責任者に説明をしに行っていたジェニスから連絡が届いた。それは喜ばしいことにボランティアグループが支援を行ってくれるというもの、絶望的な状況下では有難い手助けである。

《現在移動に向けて準備中です》

「解った——総員、聞いてくれ。通信回線を開いたまま手は休めなくていい」

使える副官に感謝しつつ、彼は思考操作で自分のデバイスの管制AIに指示を送り、部隊全員の通信プログラムにつなげた。同時に彼は「頭を増やす」。マルチタスクを並列起動し、述べ32以上ものタスクを脳内仮想域に瞬間展開した。

これは直後、彼の脳内にデバイスのヴィズを通して流される通信のバストアップ画面をより深く認識するため、彼はこれを開いた。通信が繋がった瞬間、大量の情報が流れるが並列展開したタスクによりこれを処理していく。

大まかに分けて、この通信を開いた瞬間に表情から読み取れたのは二つ。不安と希望である。現在の状況については、まだ概略すら開示してはいなかったが、部下のほとんどは開戦以来生き残り続けた者たちである。現状がどれだけ酷いのかは勘で察するこ

とくらしいは出来ていた。だから不安を覚えていたのである。

一方で希望を見ているのは何故だか、フエンには解らなかつた。こういう状況ならば希望ではなく絶望に浸っていてもおかしくはない。それだけ彼らは芯が強い人達なんだろうと、この時フエンは考えていた。

だが、このフエンの考えは正解でもあり間違いでもあつた。確かに彼らはこれまで生き延びてきた実績がある。つまり戦場における色んな状況に慣れていたといつてもよく、悪く言うならばあらゆることに対して耐性が付いており絶望への感覚が麻痺していた。

だがフエンがバストアップ画面に映る彼らの表情の半分から、希望を読み取つたのは、実際彼らがフエンに対して希望を抱いていたからだ。

「概略を説明する。知つてのとおり、現在我が隊は軍とのリンクから切り離された状態にある。街は完全に凍りつき、気温も時間と共に低下し、兵装防護服（バトル・バリア ジャケット）なしでは、またたく間に凍りつく氷の世界となつた。当然ながら今の我々に支援はない。一刻も早く味方と合流せねば我々は生き残れないだろう」

フエンはこれまで行動で自分の部隊における有用性を示してきた。よりよい回復を図れるよう宿舎を改造したり、与えられた職務を実直にこなし、部隊員のニーズをなるべくかなえられるように後方支援と蜜月に交渉したり苦慮してきた。

「それといい知らせだ。連絡は取れないが基地の発するビーコンは確認された。ビーコンが動いているということは基地が放棄されずに施設も稼働しているということになる。よって我らはこれより避難民を連れて一路基地を目指す。何か質問はあるか？」

見た目は小さいし幼いが、その能力は大人も顔負けどころか上を行く有能な存在。僅かな付き合いであつたが、一部を除き、第23駐屯部隊に所属する隊員の多くはフェンという存在をそのままの存在として見るのを止めていた。

《ハーヴィー分隊指揮下のエグバード伍長です。隊長からのプロトコル更新によりこれからの作戦は理解しましたが、万が一守りきれない場合はどうするのですか》

「ある意味無意味な質問だ。守る我らが倒されるといふのはイコール避難民を含めた部隊の壊滅を意味する。しかし死守しろなどという前時代的な言い回しをするつもりはない。最悪の場合降伏も許可されるだろう。もつとも向こうが陸戦条約を守るのかは現時点では不明だが、そこも含めて臨機応変に対応してほしい」

《……サー、イエツサー》

「他にはないか？　ないなら最後に一つだけ。我々はUSN軍の兵士である。兵士であるからには俺みたいな子供に言われるまでもなく、国を愛し国に殉じてもらうことになるだろう。避難民はUSN国民である。非常時には守られるべき存在である。その為に我々がいることを忘れないでほしい。では各員義務を果たせ」

フエンは今の身体になってから初めてと言っていいほど、多弁に言葉を連ねていった。務めて無表情無感情を通したが、内心には嵐のように感情が渦巻いていた。

何が義務を果たせか、こんな子供に言われてハイと言える大人がいるわけがない。奴らは内心ではお前を罵っているに違いないぞ。避難民を守れというのも、そういう規定があるのもそうだが、多くが自分の偽善からくる行動じゃないか。

心の内に鎌首をもたげた自己嫌悪はマルチタスクの一つを占領する程であった。とめどなく溢れ出る自己嫌悪の感情は容赦なく彼の精神を穴だらけに突き刺した。偽善者め、偽善者め、偽善者め。そんなに勲章が欲しいのか。そんなに部下の命を潰したいのか。態々危険なところに向いて人を殺すのは楽しいのか。

浮かび上がったその考えにフエンは違うと大きく叫びたかったが、半ば凶星であるため言えない。この感情は倫理的な部分が発している警告なのだ。彼は理解していた。これからも自分は部下たちに死ねと言いつけるのだ。そのたびにこの人道や倫理観に苛まれるのだろうか。

だが、自分の下した指示は間違っていない筈だ。少なくとも通信が途絶する前にこの難民キャンプに立ち寄ったのは報告している。おまけに各員のデバイスやヘルメットには記録装置がある。そこに避難民と会っていた情報がすでに書き込まれている筈で、これの改ざんには専門の機材が必要なので不可能であった。

この災害染みた状況の中で見捨てたというのは後で調べられるとすぐにばれてしまうのである。それならば今できる全力を持つてことにあたった方が精神的にも楽だった。

「……はあ」

『マスター、疲れましたか？ バイタルデータでは……』

「ああ、ある意味疲れた……精神的に……」

『脳波に異常はありませんよ？』

「いつか解る、多分な」

「おらおら、もう死にそうだ」

S i d e 三 人 称

—— フロントライン・ペセタ市・PM 4 : 23 ——

訓示を聞き終えたレットクリフ隊の行動は早い。正確には訓示を聞きながら、避難民を含めた撤収作業を同時に行っていたのでほとんどの作業は大詰めを迎えていた。

すでに難民達もそのほとんどが一度基地に保護されることを了承していた。中には軍を毛嫌いしている者もいたが、現状がそれを許さない。そういった者たちも周囲の難民に諭されたりして渋々であったが移動することになる。

フェン達は難民達の持つていく物を最低限に制限させたうえで、彼らを一か所に集中させた。ともすれば肩がぶつかる位に集まったので難民達は窮屈そうであったが、これは移動するのに必要な処置であった。

《避難民、集結完了しました》

「了解した。これより障壁の形状を変更する。ジャマーは事前説明の通りに動け」

難民達は列を組んで並び、全員が集まったのを確認すると、防御魔法持ちの5名の

ジャマーの内、2名が難民達を挟んで立つ。

彼らはすぐに難民達を覆うギリギリの大きさの防御障壁を展開した。長いドーム状の障壁であり、物理的な防御と環境変化を防ぐ効力を持つバリアーである。この障壁が最後の砦であり、難民達の命綱であった。

《隊長》

「うん……バブル・ワイド・デイバイドエナジー」

障壁が展開されるまでの間、フエンは光が難民達を覆い尽くすのをすぐ近くで眺めていた。障壁が難民を覆うとフエンは術式を展開する。一瞬だけ魔法陣が展開されるが、敵から探知される可能性を考え、すぐにそれを隠蔽した。魔法陣は消えたが魔法の効果はそのまま発揮され、彼を中心にジャマー達にレイラインが繋がれる。

それはデイバイドエナジーと呼ばれる他人に自分の魔力を譲渡する魔法の複列起動であった。いくら魔導師といっても魔力が無ければ魔法を行使することはできない。特に個人なら兎も角、こういった戦術レベルでの魔法行使は著しく膨大な魔力を消耗する。

ジャマー達が展開する魔法障壁は難民達の命綱である。したがって魔力切れというちやちな理由で解除させるわけにはいかない。だが魔力の消耗は鍛えている彼らであつても厳しい物がある。

それを解決するのが隊長からのデイバイドエナジーによるレイラインの構築であった。レイラインさえつなげば障壁展開時に消耗した魔力をすぐに補充でき、不測の事態へ魔力をストックしておけるのである。

レイライン構築、移動用障壁展開が完了したことで、難民移動は次のフェイズに移る。これまで難民キャンプを覆っていた大規模な防御障壁を維持していた残りのジャマー達が、展開している障壁を操作し、その形状をゆっくりと変えていった。

形状が変化したことで障壁と周囲の雪との間に隙間が生まれる。ゆっくりであるが確実に広がっていく隙間に雪の壁は軋みを上げ、やがて限界が来ると雪崩のように隙間へと落ちていった。

落下する氷と雪の混合物は容赦なく障壁に叩きつけられ、そのたびに障壁は大きな軋む音と火花を発し、難民達からは悲鳴が上がった。そんな中で障壁を操ることをさせられている魔導師たちの額には自然と汗が流れ始める。

障壁の形状変化自体は難しいことではないが、何千トンとある雪の下で、その圧力を受け続ける中で、さらには重さで圧縮された氷のような雪の壁を少しずつ押しつけていく作業は緊張感が伴う。

特に圧力の変動によりかかるフィードバックは魔力の消費を跳ね上げる。フェンがあらかじめ彼らに魔力供給のレイラインを接続していなければ、保有魔力の半分を消耗

しかねない大仕事であった。

《障壁縮小率40パーセント、傾斜70、傾斜路形成まで形状変更を続ける》

徐々にはあるが、結晶のようにそびえ大量の雪と氷を押しとどめていた障壁が小さくなつていき、落下する氷雪が地上だったところへと大量に流れ込んで、真下の難民キャンプだった場所を押しつぶしていった。

そしてキャンプが雪に潰されていくのを、難民達はどこか虚ろな目で眺めていた。別にあんなとくろに愛着があつたわけではない。彼らにしてみれば本国にも戻れず、国際法でなんとか殺されないだけの牢獄でしかないキャンプは正直大嫌いだつた。

あえて思うとするなら、避難の為に集めた物資を粗方放棄しなければならなかつたことぐらいであろう。

やがて大障壁の傾きが最大になつたとき、難民達の前には傾斜のついたトンネルが現れた。元々地上までつながっていた魔法障壁を変形させたことで地上へとつながるトンネルとなつたのだ。ここを登ることで彼らは忌々しい雪の下からは解放されるだろう。

先頭に立つ難民のひとりが歩き出す。つられて他の難民達も移動を開始した。彼らはこれより地上へと向かうのだ。圧死の危険漂う雪の下を出て、代わりに凍死か戦場の流れ弾で消し飛ぶ危険がある地上へと……。

皆、表情は暗い。だれも何も言わなかった。

—— フロントライン・ペセタ市・PM5:51 ——

かつては常夏の街であったペセタ市も凍り付いては見る影もない。吐く息は白く曇り凍り付く。エラ・ブライリー上等兵は雪上に突き出したビル群を仰ぎ思う。このビルの影には何が潜んでいるのだろうか。

彼女は小さな隊長の命令に従い、安全なルートを探る為、避難民の集団から先行して少人数を率いて雪上を歩き続け、行程の半分を踏破していた。ソナーセンサーが高い仲間が、時たま感知する敵の反応を避けていける道を探して動き続け、ここまで来た。

この仕事はある意味容易いと彼女は感じていた。容易すぎるといつても過言ではないかもしれない。懸念になるのは時折巡回している小グループの敵性反応だけで、いくつかある高層ビルの間にできた小道は全くの無防備であったからだ。

敵の数や反応を見る限り、どうやらこの広い街の至る所に防御線の穴がある。まあそれも当然のことだろう。まさか敵陣と化した街のど真中を避難民という大層な大荷物を抱えて進む一団があるとはO・C・Uのクソ共も思いもしないに違いない。

だからだろうか。嫌な予感が消えない事にエラは苛立ちを覚えていた。滑った泥の

ような重い感覚が彼女の胸を締め上げている。考え過ぎとは考えない。この嫌な感覚こそ生命線。これに従い用心することで彼女はこれまで生き延びてきたのだ。今も、そしてこれからも。

「(とまれ)」

やけに薄い声が脳裏にコダマする。エラは睨むように近くに居る男に眼をやった。敵に察知されないよう半径数m程度にしか届かない、非常に弱い短距離念話を飛ばしてきたのは、件の探查能力が高い仲間のマーク・ギデインズ上等兵だ。

なんなのと視線を送ると静かについてこいとまた弱い念話が届いた。正味、弱い念話は雑音が入りあまり良い物ではない。だが彼女は黙って従った。この男が黙るということはそれだけの理由があるのだと長いこと同僚をしている彼女は知っていた。

他の仲間にも同じように念話が送られていたらしく、黙って近場のビルの窓から乗り込んでいく同僚に従い、静かに音を立てないように続いていく。二つほど上の階に上った男は近場の窓にすり寄るとそこから階下を覗きこんだ。窓ガラスは冷氣による急激な冷却で全て砕け散っていた。

ビルを挟んだ反対側の通りには、雪の上に組まれたバリケードやら雪に掘られた塹壕があった。そしてそれを守るOCUの連中もいる。見える限りでタウルス3機、人間が6人。この環境下では誰がどういう役なのかが一目瞭然であった。すなわち比較的薄

着が魔導師、ボディスーツの上にさらに分厚い防寒コートで厚着しているのが一般兵士だ。

ご丁寧一般兵はタイプ45個人防護装備を装備していた。完全に頭から足先までインナースーツで覆われる代物で、閉鎖型循環呼吸装置を内蔵し、対塵や対毒は勿論、対弾や対刃も考えられた敵側の傑作アーマーである。今のような特殊環境下においては特にその威力を発揮する装備であろう。

「(魔導師兵2、一般兵4、デカ物が3。小規模な陣地ね)」

「(ありやあ、かなり前から準備していたな)」

「(なんでよ?)」

「(わかんねえのか? タイプ45は兎も角、他のは基本的に寒冷地で使う防寒装備だぞ。武器にも寒冷地用の防氷カバーまでつけている。敵さん用意周到って訳だ)」

「(とにかく、敵の防御線の一つを見つけたって訳ね。ここを離れて隊長に報告を……)」
敵陣地のことを本隊に伝えようとエラが言いかけた時だった。奥にいる2m級のタウルスのセンサー類が稼働し、スキャンを行っているのを彼女は見た。

その瞬間「目があつた」。機械兵器と目が合う、普通はそんなことはありえない。タウルスの目にあたる部分は唯のカメラであり目ではない。

だが確かにエラはタウルスと目があつたのだ。彼女の中で確信に近い何か湧き上

がり、それが彼女を突き動かす。マークと他の仲間の腕を引いて、すぐさま部屋の奥へと跳躍する。

直後、氷とコンクリートの破片がエアロゾル化して、先ほど居た部屋に吹き荒れた。アードラー、四連装小型対人ミサイル。タウルスの肩部アタツチメントに搭載されている重火器であり、一発の威力と爆発範囲こそ低めであるが、その初速は非常に速く、狙われると厄介な存在。それを撃ち込まれた。

幸い、勘が働いたおかげで装備も体も無事である。だがエラは冷静に判断しつつも舌打ちしていた。遮蔽物に隠れていたのにいきなりばれるとは、さぞやあのタウルスには優秀な機材が積まれているに違いない。先発の自分達の後に続く避難民たちは碌なステルスも施されていない状態なのだ。あのタウルス、脅威となる。

「マーク、生きています?」

「生きてるよクソツたれめ。後ろにいた連中もな」

「それは良かった。いまから撃ってきたタウルスのケツを蹴りにいくんだ。参加者は多い方がいいわ」

「……ああ成る程。装備は無事だしなクソツたれ。俺は上にいくぞ。本隊に暗号も出しておく」

「救援は望み薄だけど撤退も出来ないし、連絡しないよりもマシだわ。私は下ね。アン

「タたちもついてきて」

彼女の傍で悪態をついていたマークであるが、すぐにエラの言いたいことを理解し、背中に背負っていた武器を下ろすと電源を入れて起動させて階段へと向かった。彼は腕に付けたタツチパネル式端末をいじっているので後続の本隊に向けた暗号文も同時に用意しているのだろう。

今から送る暗号文の内容は単純だ。敵と接触し交戦状態。暗号を紐解けばたつたこれだけである。上手く届けば本隊は対応を決める筈だ。すなわち、救援か、捨石か。

もつとも、この場にいる誰も暗号文をアテにはしていなかった。現状のペセタ市内においては、軍用回線はおろか衛星通信までが軒並みダウンしていて、軍のネットワークリンクが消失しているのだ。念話による通信すらも遠距離となるとジャミングされる始末であり、暗号通信もはたして届くのかどうかは五分五分といったところである。

届くかもわからない暗号をアテにするなど、今からキルゾーンに向かう兵士がやることではない。思考を切り替えるように彼らは自分を殺人マシンにする魔法の言葉を口ずさむ。我らは剣、我らは杖、我らは盾、我らは銃。一人は皆の為に、皆は一人の為に。

暗示にも似たそれは兵士になったときから身に着けた、意識を切り替える為のスイッチであった。瞬時に意識を戦いに切り替え、エラは残った仲間と共に階下へと降りて

いった。

彼女の後ろをフィリス・スピーアー一等兵とレイモンド・ウェイ一等兵が続く。居場所はバレていたのだから、すぐにでも敵兵がこちらに向かつてくる筈だ。狭いビルの中では出入口を抑えられると戦術的に脅威だ。逃げ場がないのだから当然である。

すぐに移動して迎え撃てるポジションにつかねばならない。素早く飛び降りるようにして階段を駆け下りたエラ達であったが、出口の前まできた時、空気を切り裂く音がすぐ近くを通過した。

接敵だ。

「ちいっ！ コンタクト！」

エラは山になった瓦礫の影に飛び込みつつも、銃に着けられたデバイスに魔力を込め、マルチタスクで術式を展開する。初歩的なシューターが起動し、彼女の魔力を吸ったファイアが形成され、魔力弾が瓦礫の影から飛び出していった。向かうは物陰に飛び込む一瞬捉えた人影である。

水面に板を叩きつけたような、シールドに弾かれる音がしたことから敵は魔導師である。沈み込むような雪の上では身体能力を強化できる魔導師の方が機動力がある。恐らくは一般兵を置いて魔導師だけが先行したのだろう。

元よりあんな粗製な魔力弾一発程度で倒せるほど甘くないとは思っていたが、敵が魔

導師だと分かった以上面倒くさいことになったと彼女は思った。

魔力弾への返答とばかりに敵のシューターが障害物を山なりに超えて飛んできたが、こちらを視認できていないからか軽く体を捻っただけで当たらず、床を抉っただけに終わる。近くの物陰に隠れたスピーアが敵に対し発砲するが、敵兵も近場の遮蔽物に身を隠したので互いに瓦礫を削岩するだけに終わった。

追撃を掛けようとするとう度は別の方向から魔力弾が飛んできた。魔力光も術式の種類も異なることから別の敵兵だ。幸い敵魔導師は確認できただけで二人。こちらはエラを含めて四人。数ならば有利だった。

先ずは注意を惹きつける。そう考え彼女が銃を構えようとするが、それよりも早く違う場所に隠れていたウエイがグレネードと叫びながら手榴弾を投擲した。出るタイミングを逃したが、敵を飛び越えた手榴弾が炸裂し、轟音と衝撃波をまき散らした瞬間、敵兵のひとりが遮蔽物から爆風に押し出されてくるのを並列加速処理している思考が捉える。

おまけに、その敵兵はシールドを展開し忘れている。もう片方の敵兵へ仲間が攻撃を加え始めたのを確認したエラは、目の前の敵に躊躇うことなく発砲する。対魔導師用の大口径アサルトライフルから飛び出した高速徹甲弾は、遮蔽物から押し出されてしまった哀れな敵に吸い込まれていく。

とはいえ敵も魔導師なので兵装防護服（バトル・バリアジャケット）により護られている。薄い防護フィールドであっても通常火器の銃弾くらいは防ぐ事ができるので、最初の銃撃はあまり効果を得られなかった。

エラはそれを見ても動揺せず、冷静に物陰に身を隠すと慣れた動作でライフルの弾倉をスムーズに交換し、再び敵が大勢を立て直す前に銃撃を再開した。同時に片手に魔力弾を形成しながら魔力を込めつづけ強装魔力弾としてキープした。

エラは知っていたのだ。兵装防護服の防護フィールドは決して無限の守りではないということ——数秒後に魔力弾に込めた魔力量が一定量を超えたのを確認したエラは、戸惑うこと無くそれを敵兵に投げつけた。

銃撃の絶え間ない衝撃にダメージはないがバランスを崩していた敵兵は魔力弾の直撃を避けられなかった。軽い炸裂音の後、敵兵の身体に紫電が走る。強装魔力弾の直撃に防護フィールドが瞬間的に機能不全を起こした際に現れる光景だった。

これまで幾度も敵味方双方のそれを見てきたエラは紫電が走った今この瞬間こそ、敵の防護服の守りが薄まった瞬間だと、これまで戦場で培った経験から学んでいた。だからエラは機能不全が回復する前に、最後の追い打ちにとライフルの最後の残弾を全て撃ち込んだ。

銃弾一発二発は弱まったとはいえ機能していた防護フィールドに防がれた。しかし

貫通力の高い高速徹甲弾を連発されれば、弱まった防御フィールドは弱まる。三発四発目から防護フィールドはさらに弱まり、五発目からついに弾丸が敵を貫通した。

敵は貫かれた痛みで悲鳴を上げるが、まだ死んでいなかった。防護服表面の防御フィールドが貫通されるやいなや防護服を構成する魔力を瞬間開放し、周囲に強い魔力衝撃波をまき散らしたのだ。

物理干渉力を持つ衝撃波により弾丸は逸らされ、敵は致命傷を避けることに成功していた。攻撃を防がれたエラは、だがそれを見て薄く笑みが浮かんだ。恐らく防護服のパーツはデバイスが行った自動防御なのだろうが、それは自分を前にしては実に悪手だ。

「オオオアアアアア!!」

エラは胸元のナイフを引き抜き敵へと駆ける。敵もそれにすぐに気が付きライフルを発砲してきたが、もう遅い。銃撃の雨が己に触れる前に彼女は地を滑るようにして敵兵の懐へ飛び込み一閃。軍用ナイフの艶消しされた鈍い金属の光が敵魔導師の喉元を確実に捉えていた。

防護フィールドが散らされた事で、今の敵兵には体を守る盾は存在しない。敵は本能か首を守ろうと自身の腕を上げたがしかし、身体強化で弾丸を避けられるまで強化された彼女の力と、よく研ぎ澄まされ魔力を乗せられ強化されたナイフの前には、その守り

はあまりにも脆弱であつた。

「カハっ……ケハっ——」

首元を掻き巻るように喉を手で押さえる敵兵。しかしゴポリと頸動脈から溢れ出る血液を止めるには手では無理だつた。吹き出る噴水が、白い雪を赤い雪に変えていった。

近接戦闘が得意な自分と当たつた不幸を呪いなさいな——。

エラがナイフに着いた血を払いながら、そう呟いた時、背後から叫び声が出た。瓦礫に隠れていたスピアーが光る縄に拘束されている。バインド、拘束魔法と思考したところでバインドが輝いた。

エラが何か叫ぶ間もなく、可愛そうなスピアーはバインドの魔力を使った放電と爆発で吹き飛んだ。ゼロ距離での殺傷力を高めた攻性拘束術式、スピアーが拘束された時に動揺しなければ、あるいは彼女のデバイスが「気を利かせて」ジャケットをパージでもしてくれていれば、彼女は助かつたかもしれない。

だが現実にはスピアーの思考は拘束されたことで停止しており、彼女のデバイスは自動防御の作動プロトコルが低めに設定されていたとみるべきだろう。プラズマ化した空気とそれに焼かれた肉と血の匂いが鼻につく。

仲間が吹き飛ぶところを見ていたエラも、ただ見ていたわけではない。マルチタスク

に浮かんだスピアーを助けるタスクのいくつかをキャンセルしつつ、適切な行動としてサークルシールドを展開するタスクを選択。その陰に身を潜らせていた。

スピアーが爆発すると同時に、いくつかの魔力弾とバインドスフィアを飛ばしてきただのだ。バインドはエラのシールドに向かって飛び、シールドに接触するや否や、魔力の縄でシールドを包み込む。エラはシールドの展開距離制限を解除してすぐにその場から離脱した。

攻性拘束術式は先ほどのスピアーと同じようにシールドを焼いて爆破していた。思った通りこれが敵魔導師の十八番なのだろう。幸いバインドのスフィアは遅いので、一か所に留まらなければ当てることは早々ないだろう。

彼女はバインドを避ける為に近くの部屋に飛び込み、近場の机で身を隠しながら銃の弾を交換すると、すぐにそれを部屋のドアに向けた。

開いたままのドアの向こうで、ウェイ一等兵がスパイク状の魔力弾の洗礼を受けていたが、ウェイは展開したサークルシールドでスパイクを弾きながら、むしろスパイクで開いた穴にライフルの銃口を突き刺し、そこから銃撃を行っていた。

同時にウェイは背後に魔力スフィアを展開し、ビルの出入口あたりに隠れている敵兵に隙間のない弾群をプレゼントしているが見えた。だが長くはもたない。彼は一等兵であり魔導師だが魔力量はあまり多くないのだ。すぐに息切れを起こす筈だ。

「よう玉無しの大将！ 弾があるならアタシに撃ち込みな！」

敵兵の集中を乱す為、聞こに堪えないスラングを叫びながらも、ヘルメット一体型バイザーに映るHUDとリンクさせた「コッドSN99」アサルトライフルの照準を敵兵に向ける。ジャケットの魔力量を上げて防御力を上げながらウエイに加勢した。

それに気を取られたのか敵兵の攻撃があまくなった時、ウエイが迂闊な行動をした。先ほどのエラと同じく叫びながら敵兵に肉薄したのだ。馬鹿が！とエラが悪態をついたが、悪態は動き出したウエイを止められはしない。

彼は片手で撃つライフルと魔力弾で敵兵を牽制しつつ敵の兵装防護服の防御フィールドを剥がそうと試みたようだが、接近したことでスパイク状魔力弾がフィールドを貫通して逆に彼に突き刺さっていった。

だが敵兵が魔力弾を撃つのも同じく、魔力弾で防御フィールドが薄まった瞬間に、ウエイの放った銃弾が防御フィールドを貫通。敵魔導師は銃弾と魔力弾で血を噴出して壁に激突し、動きを止めた。

敵兵が動かなくなったのを見て、エラは敵兵に注意しつつウエイに駆け寄ったが、その傷を見て、ウエイはもうだめだと判断した。貫通した魔力弾に肉が抉り取られて焼かれ、脆弱な肉体を守る筈の防御フィールドも消失している。

今のこの寒さですぐに血肉が凍りつくだろうし、実際もう流した血は凍り始めてい

た。兵装防護服の機能をリブートすれば防護服の生命維持機能で、ある程度の止血をし、後方に下がらせることも出来ただろう。

だが、先の無茶な突撃で彼のデバイスは破壊され機能を停止していた。これでは自動でバトル・バリアジャケットの再展開は不可能である。そうなる自力で再展開するしかないが、それを行うには彼の傷は深すぎであった。

これでは自力でのリブートなど望めまい。そして、エラは彼女は治療系の魔法を不得意としていた。とりあえずエラは自身のデバイスの格納領域から注射器を取り出し、ウエイに注射する。

すると呻くだけだったウエイの呼吸が少しづつ安定する。注射器の中身は痛みを止める為の強力な麻薬だった。依存度は高いが代わりに完全な痛覚カットを約束する強力な薬。せめて、これ以上苦しまないようにしてあげたかったのだ。

「ウエイ、ウエイ……、聞こえてる？」

「不思議と聞こえます。もう痛みもありません」

「聞いて。多分アンタは助からない。言い残すことある？」

「……こいつを——弟に送ってください」

ウエイは咳き込みながらドッグタグの鎖を引っ張り出す。そこにはドッグタグと一緒に鳥の骨と羽で出来た小さなお守りがついていた。エラがそれを受け取ると、ウエイ

は小さく帰りたいと呟いてから咯血し、腕が床に落ちた。

幸か不幸か、血を吐く音に紛れてウエイの呟きはエラには聞こえていなかった。彼女は黙祷しながらウエイの瞼を閉じ、彼のデバイスを回収してスピアーの遺体にも向かう。スピアーのドッグタグとデバイスを探しつつ、ウエイと同じく黙祷を捧げながら、マークに通信機で通信をいれた。

「マーク、こっちは二人KIA！ そっちは？」

《オラオラア！ どうした来い！ 来いよ！ ブリキ野郎ども！ 俺の心臓はここだ俺を殺してみろオツ!!——あつ？ 一般兵はそこらへんで転がってる！ タウルスは一
体だけ殺った！そっちは？》

「魔導師、全員殺ったけどね！」

《なら下から撃つてくれ！ 小賢しい戦術プログラムもったのがいる！ 幸いシールドバンカーは持つてないみたいだぞ！》

「良いことを聞いたわ！ 了解！ すぐにいく！」

マークは死んだ仲間の事を何も聞かなかった。あるいはそんな余裕はないのかもしれない。絶え間ない銃撃の音はエラのところにも届いている。

エラは壁に寄り掛かっている敵魔導師の頭蓋に向け、ライフルの弾を3発撃ち込んだ後、仲間の装備からデバイスを剥ぎ取ってから、すぐにビルから飛び出して路地裏を

回って敵陣地の近くに移動した。

ビルの影に隠れてワイヤーカメラをヘルメットのHUDにリンクさせながら、敵陣地の様子をうかがう。十数m離れた位置の陣地に置かれた防弾壁に隠れたタウルス達がビルにいるマークに向けて弾幕を張っていた。狙っているのはビルの屋上、そこにマークは移動しているのだろうとエラは考えた。

マークが持つ「FV-20ブッチャー」は個人携帯の4銃身を持つ電気回転ドライブ式のペインレスガンである。毎分6000発の13mm口径のHEIAP弾は装甲やコンクリートなどに対し絶大な破壊力を持っており、人間なら撃つだけで猛烈な反動により体がいかれてしまうが、肉体を強化した魔導師ならば腰持ちでの運用が可能だった。

敵陣地にはこのペインレスガンの餌食になり爆散したタウルスの残骸が一つと、雪に残る人だった物が散らばっている。マークがファーストアタックの時に掃射を行ったのは明白だった。対人ミサイル持ちを先に始末したのだろう。だからタウルスに最脅威と判断されマークは弾群を受けているのだ。

まずはこちらに敵の関心を向けよう。エラは誘導魔力弾を幾つか生成し、タウルスに向けてビルの影から撃ちだそうとする。そのタイミングを計っていると、生き残りの敵兵が物陰で何かしているのが目についた。腰のホルスターから何かを抜いて空に向け

ている。

その敵の行動に既視感を覚えたエラは咄嗟に魔力弾の射出を中止。手にしたライフルで敵兵に銃撃した。思つてもみない方向からの銃撃に驚いた敵兵は、その場でたたらを踏むが、すぐに身を起こすとエラの死角になる物陰に飛び込んだ。

エラは舌打ちする。アレがなんなのかエラには良くわかっていた。アレを許すわけにはいかない。だが無情にも銃撃のほとんどは敵が陣地に設置した対弾防壁に阻まれ、敵兵を殺すに至らない。攻撃に晒されながらも敵兵は手にした筒状の物体から何かを空に撃ちあげた。

強烈な光と艶やかな赤い色の煙が尾を引き空へと昇っていく。それは信号弾であった。この状況で敵は増援を呼んだのだ。信号弾を撃たせるべきではなかったとエラは悪態をついた。

「クソつたれが！ マーク！ 敵さんタウルスだけでも厄介なのに仲間を呼び寄せたよ！ あのチキン野郎が！」

《どつちみち戦えば周辺の敵が寄って来るのはわかっていた。多いか少ないかの違いだ。弾薬はまだあるし、このタウルス潰せばどうにかなる。おっとソナーセンスに感あり、敵さん集まって来てるぞ。歓迎してやらないとな》

ヘルメットのバイザーに表示されるHUDのミニマップに敵性反応を示す光点がい

くつか表示され始めた。ネットワークからは隔離されている現状、部隊内のデータリンクに収まっているが、マークが見つけた敵情報がアップデートされたのだ。

マップには十数にのぼる光点が向かってきているのが映っている。泥沼の戦いが始まる。エラは溜息を吐きながら銃のマガジンを交換し、自身の装備と体感している魔力残量を確認する。

まだ自信の保有魔力は4分の3程度はあるだろうか。後のことを考え極力魔力を消耗しないように、要所要所でだましましだましで使っていたが、元々保有魔力があまり多くない彼女としては上々と言える塩梅であった。

一応戦えると再確認し、エラはスピアーのデバイスを取り出した。彼女のライフルに取り付けられたデバイスにスピアーのデバイスを近づけると、スピアーのデバイスから小さな電子音が鳴る。使用制限がアンロックされ、友軍だけに再使用可能となった。

「借りるよスピアー」

スピアーのデバイスの格納領域にアクセスし、そこから多目的噴進擲弾発射器〔M4 5A9〕を取り出した。いわゆるロケットランチャーであり、標準的な成形炸薬弾頭が装弾されたそれはタウルスを破壊するのに適した性能を有している。

まずは邪魔な無人兵器から片づける。打撃力は手に入れた。後は攻撃するだけである。彼女はランチャーのスリングを肩に掛け、バトルライフルのコッキングレバーを引

いた。

さしあたっての問題は、先の射撃でこちらの存在がタウルス達に気付かれてしまい、ビル影から頭を出せない事だろう。

だが問題はない。誘導魔力弾を使えばタウルスはそれほど怖い相手ではない。彼女は先ほどキャンセルした術式を再度構築し、誘導魔力弾を再形成する。エラは先ほどのタウルスの配置をイメージしながら、シューターを解き放った。

一つは地を這うように、もう一つは天高く飛びあがるツバメのように、ビルの合間から飛び出した魔力弾がタウルス達に襲いかかる。タウルス達の戦術プログラムが魔法攻撃に対し反応を示し、攻撃の種類を即座に判別し迎撃に移る。

タウルスが両腕部に持つ14mm回転機銃が火を噴くと、飛び交うシューターはまたたく間にその数を減らしていった。魔力弾は魔力で形成されるが物理干渉を行う以上、物理的な干渉に影響を受ける。銃弾でシューターを迎撃できるのも仕方ないことだ。

「鉄の雨が降るつても中々に嫌な物ね——プロテクション・フルドライブ！」

エラが残った魔力を絞りだし、念のために防衛魔法への強化を行うと、身体強化した身体ごとタウルス達の前に身を晒す。装填する魔力量の増加により、彼女を守る黄色い魔力光を帯びた防衛スクリーンがさらに輝きを増した。

未だ魔力弾の迎撃に忙しい敵を視界に、担いでいたランチャーをタウルスに向けなが

ら、その射線が彼女の脳内でタウルスと重なった瞬間。バックブラストを盛大にまき散らしながら、重たい成形炸薬弾頭が飛びかかりタウルスの一体へ目掛け強襲する。

タウルスは上空から迫るシューターの迎撃に武器をまわしていたので、迫りくるロケット弾頭に対応するために腕を降ろした時には、ロケットは胴体まで残り数歩という位置に到達。回避する間もなく轟音を上げて爆風をまき散らす。一体潰した。

この瞬間、彼女は仁王立ちで最後のタウルスの前に身を晒していた。タウルスはすでに両腕を降ろし、射線を彼女に向けていた。銃口が唸りブザー音のようになりたてながら大量の弾丸が吐き出される。ロケットを構えたままの彼女はロケットが邪魔で素早く動けないでいた。

弾丸は全て彼女へと殺到する。それを彼女は防御魔法で受け止めた。直前に張られていた防御魔法の輝きにより遮られる14mm回転機銃。その掃射はコンクリートすら粉碎する。魔力を多く込めた黄色の防御スクリーンが、弾丸が命中することに徐々に細かな魔力片となってまき散らされていった。

5秒も持たない。そう思わせる銃撃を前に、エラは全く動揺せず一言告げる。

「やれ」

《ああ》

空からの鉄の雨。エラは一人で戦ってははいない。仲間の攻撃が鋼鉄の人形をガラク

タへ変えるのを特等席で拝めるのだ。

ああ、これが蜂の巣になるということ。降り注ぐ弾丸を前に、戦車よりも薄い頭頂部装甲は簡単に穴が開く。穴が開けば高速の弾丸が中で暴れまわるのだ。中の脆弱な電子部品が耐えられるはずもなかった。

僅か数秒に満たない掃射。目の前で行われた銃撃が終わると、タウルスは力尽きるようにして崩れ落ちたのだった。

「……………ふう」

おもわず息を吐いたエラ。これで終わりなら気を抜けるのだが、残念ながらそうは問屋が卸さない。これより、先の信号弾が集まってくる敵を誘引して退避しなければならぬからだ。今彼女たちがいるのは難民が通るであろうルート、できる事なら敵をそのルートから遠ざけねばならない。それが仕事だ。

そういえば先ほどの敵一般兵はどうしたのだろうか。表示されるHUDには近くに生体反応がない。逃げたか、それとも……。エラは迷うことなく、防御魔法を解除しないで防弾壁裏側へ回り込む。

そこに居た。もつとも、もう半死半生であったが……。頭上からタウルス目掛けて掃射されたFV-20「ブッチャー」の巻き添えを食らったのだろう。アレは魔導師が保持するといえ、掃射を行えばその反動で銃身が「ブレ」る。

弾丸は敵兵の左肩を抉り、同じく太もも、膝も巻き込んでいた。辛うじて意識はあるらしいが、すでに口からうわごとを垂れ流している。生きている屍、その表現がここまですぐに似合うのも珍しい。

エラは溜息を吐きつつ、胸元のナイフホルダーからナイフを抜いた。ペインレスガンの【ブッチャー】を真面に喰らってくれていれば苦しまなかつたのに哀れなことだ。

明日は我が身と知る身だからこそ、もう抵抗できないであろう敵兵を哀れに思うのも許されるだろう。だから。

「……いつか来世でね」

失血の所為か、もうろうとしているのか。いやさ、その眼にあるのは敵意だけ。よく知っている眼であった。自分も新兵の頃はこんな風だったわね、そう感じつつも彼女は手を軽く動かした。項垂れる敵兵。これでもう動くことはない。

素早く、まるで扇を優雅に煽ぐかの如く自然に動かしたナイフ。首を掻つ切られたことにも敵兵は気づくまい。それだけ絶妙に動かしてやったのだから。

付着した血液を振って飛ばし、雪で拭いてからナイフホルダーにきつちりはめ込んだ後、彼女は敵兵の死体を「よく見えるところ」へ放り投げて、唯一の仲間と化したマークがいるビルの屋上へと身体強化を使って壁をスルスルと登っていった。

「きたぞ」

「確認したわ。4、7——総勢9、それと無人機が6……楽しいじゃない」

「(実にクソツたれな状況だなオイ。惹きつけられれば良いが——)」

敵が雪に埋もれたビルの中を曲がり向かってくるのがエラ達のいるビルの屋上からは良く見えていた。あの数と戦うとなるとその機会は一回が精々だろうとエラは思った。先制攻撃すれば必ず居場所がバレてしまう。ファーストアタックでどれだけ殺せるか、それが肝心だった。

「(合図で一斉に全力で攻撃する)」

「(スピーアーとウエイの置き土産はまだあるからプレゼントしてやるわ)」

すでに死んでいる仲間のデバイスから別の「M45A9」を取り出し、予備も含めて近くに立てかけてある。本隊に近づけない為には、敵を惹きつける盛大な花火を与える必要があった。

その点、この多目的噴進擲弾発射器は最適だった。突き進むロケット弾は実に派手で敵の目に留まること受け合いだ。これを撃てば確実にこちらを狙うという確信があった。エラはライフルを背中に回し、両肩に一本ずつこの危ない鉄棒を乗せて構えた。

合図があればいつでも撃てると思った。

「(エラー)」

——その瞬間何が起こったのかをエラは思い出せなかった。

マークが叫ぶような悲鳴をあげたと思った直後、赤い光と全身を揺らす衝撃と轟音が響いたと感じた直後、全身が痛みをうったえたのだ。いやに遅く見える世界、気が付けば身体は床に叩き付けられて上手く動かせなくなっていた。

彼女は緩慢とした動作で首を回す、ああ、これは攻撃を受けたのか。

そうエラの分割されたタスクの中にある冷静な意識が眩いた。そしてすぐにタスクはおぼろげな霧の彼方に消えてしまった。全身を走る痛みによりタスクを展開している余裕がなくなったのである。

見れば、すぐ近くの瓦礫の影にマークが倒れていた。そこは先ほどまで潜んでいたコンクリート壁の近くで壁が完全に破壊されている。エラは理解した。敵に花火を送るつもりが逆にしかえされたのだ。赤い光が視界に映ったのは敵の魔法だろう。砲撃魔法で遮蔽物ごとぶっ飛ばされたのだ。

糞っ。そう息を吐くように眩きつつ視界をマークから外した。エラはもう動くつもりはなかった。動きたくても体がいうことをきかなかったのである。

うつすら赤い色に潰された視界の先には、OCU側の戦闘防護服(バトル・バリアジャ

ケツト)を纏った敵魔導師とその部下たちが、こちらに向けて銃口と環状魔法陣の射線を展開しているのだ。満身創痍ではどうあがいても逃げられないだろう。

……いや。なにを諦めたのだろう。

「ハツ……逃げるわけには……いかないんだよ」

——いつかの悲劇を、避難民の車列にミサイルで爆撃した連中を前に。

「ぐ、あああああッ!!」

——倒れているなど、論外だ。

いつか見たあの光景が脳裏に浮かんでは消える。

燃え上がる車列、

仲間だった物、

伸ばされる手、

掴めなかった手、

生き残ってしまった自分。

今も戦場にいる根幹はともミニクイもの。

エラは立ち上がる。もう継戦能力がどうなるかは考えない。全力で残った魔力を振り絞る。体が動かないならば魔力で動かせばいい。その為の魔導師で、その為の魔法。

エラが立ち上がるが敵はまだ撃とうとしない。立ち上がりはしたが足元も覚束無い

エラを見て蔑んでいるのか。それとも——こんな状況なのに頬までつり上がった笑顔を造ったエラに何かを感じたのか。

だが、エラの奮闘はそこまでだった。砲撃魔法の衝撃は彼女の身体の芯にまで響いており、そのままエラは後ろへ倒れた。笑ったままで……意地は見せた。最後まで戦う。それがエラの意味だった。

それを見ていた敵魔導師の一人が進み出る。ふるまいからして隊長と思わしき女がエラに近寄った。憎悪か、憤怒か、憐みか、険しくも様々な感情が入り混じった眼でエラを見降ろし、今は主流でなくなった杖型デバイスの先端をエラの頭に向けている。

エラはされるがまま笑ってそれを見ていた。動こうにも力が入らず、朦朧とした意識を保つのが精一杯、唯一出来ることが笑うことだけ。何故笑いが浮かぶのか、それはエラにも解らなかつた。

女隊長はそんなエラの笑みが不愉快だったのか、あまり慣れてはいないのだろう。拙く聞き取り辛いUSN系の言語を口にした。

「笑うな。才前らが笑うなど、許さない」

エラはより一層笑みを深めた。それが今、敵に対してできる最高の返事だから。

「向こうデ、私ノ部下に詫びロ」

「デメエも……わたしや戦友に詫びる、か？」

そういつて壮絶な笑みを浮かべるエラ。この態度を受けて逆に凄まじい憎悪を滾らせた女隊長。彼女の持つ魔杖がエラに押し当てられゴリつとヘルメットから音が出る。エラは眼を瞑らなかつた。

これで最後なら、たとえ魂が浄罪界に墜ちても、このクソツたれな場景を忘れないようにしなければと、そう感じたから……。

女隊長からにじみ出る魔力が光を放ち、杖を包むように環状魔法陣が展開されていく。それと同時に杖を中心に紫電が走るのがエラには見えた。見たままなら至近距離での砲撃魔法で跡形もなく吹き飛ばすつもりだろう。あるいは、何か殺傷性のある魔法かなにか、か。

そういえばマークはまだ倒れたままであった。どうせすぐに後を追ってくるのだろう。共に帰らない哨戒任務に向かうところまで一緒とは随分な腐れ縁だな、と考えつつ、エラは自分に魔法が放たれるのを待った。

しかし、いざ砲撃魔法が解き放たれようとした瞬間、女隊長と彼女が手にしていた魔杖ごと、二条の光が飛びかかり吹き飛ばすのを、最後まで見届けようと思開いていたエラの眼には映っていた。

《こちら、レッドクリフ01》

ノイズが僅かに走るヘルメットの通信機から、最近聞くようになった幼子の声が聞こえる。その声の主は、非常にフラットな声で簡潔に一言、彼女らに告げた。

《援護する。射線上に絶対に立つな》

立とうにも立ってないんだけど。そうエラが思ったのかは定かではない。されどその通信とほぼ同じくして、先ほどの光線と同じ白い光が幾条も飛来し、彼女の目の前を通り過ぎてゆく。

光線は音もなく直進し、吹き飛ばされた女隊長に驚く敵兵を次々と刺し貫いていった。最初に攻撃された女隊長が正気に戻ったとき、彼女の部隊はほぼ壊滅。殆ど全ての部下が戦闘防護服を貫通され、死んでいるか重症というありさまであった。

敵の女隊長はそれでも戦おうと、破かれた防護服から血を流しながらも、果敢に攻撃がされた方角へと杖を向ける。

だが――

《援護終了。救援に当たる》

――その通信が入った直後に、光弾が四発飛来し命中した。

女隊長目掛け殺した光弾。一発目はシールド魔法にヒビを入れ、二発目が破壊し、三発目が戦闘防護服を吹き飛ばし、最後の四発目が頭部をスイカのように吹き飛ばしていた。初撃で完全にこちらを潰した敵のあつけない幕切れであった。

流れ出る赤い液体を呆然と眺めるエラは、直上を通過した4発の大型魔力弾に気が付かない。通常よりも大きく、そして弾速が遅いそれは、弧を描く様にビルとビルの谷間を抜けて、地上に展開していたタウルスを爆炎の中に消し去っていた。

もしも、彼女がその魔力弾を見ていたなら気が付いた事だろう。それは、かつて基地で暇つぶしに部隊全員で作り上げた、“小さな隊長用”の術式。

——その名も『ガルヴァドス』

彼らが知る術式の良い部分を混ぜ合わせようとしたら、結局はただ威力のある弾頭を一定距離に撃ちだすだけとなった失敗魔法。重力干渉を受ける謎の術式。

そして、それを使うのは、彼女らが知る限りたったの一人。

「ブライリー上等兵」

霧の向こうから響く声のように、自分の名を呼ぶ声が聞こえた気がしたエラはそちらを見た。そこには金属とも有機体ともつかない物質で出来た人型でありながら人足らぬ物の姿をする小さな小さなナニカが立っていた。

それは、自分を覗き込むようにして膝をついている。これはなんだったか、そこまで考えた時、その存在の面が割れた。いくつもの鉄片に分かれるようにして収納されていく面の下から現れたのは、ここには似つかわしくない幼子の顔。

人と同じ顔つきなのに、その表情はどこか人形のようにで感情を映さない。体を覆う機

械の姿も人形然とした空気をよりいつそう強くする。だがエラは感情を映さない幼子から哀しいという感情を垣間見た気がした。顔には何も浮かんでいないのにもかかわらず。

ああ、そうだ。これは『隊長』だ。唐突に思い出せた。

「生きているな上等兵？ 眠たいだろうが有給休暇はまだ先だ」

「……了、解」

なんとか絞り出せた言葉は、伝わっただろうか？ そこで彼女の意識は落ちた。

『エラ・ブライリー上等兵、バイタルは正常値内、意識を失ったようです』

「そうか」

『マーク。ギティンズ上等兵も同じく気絶しています。——小範囲スキャン終了。一等兵のレイモンド・ウェイおよびフィリス・スピアー両名のK I A確認。マップデータにマークしておきます』

「……ああ」

『——マスター』

「なに？」

『……お気を確かに。ここはまだ戦場です』

「ああ、わかつている」

フェンの唯一無二の相棒と言えるヴィズが淡々と告げる現実とは、機械的な音声も相まって妙に耳につく思いであった。目の前に横たわる傷ついた部下、そして雪に半分埋まっているビルの中に「ある」部下。指揮権を渡されてからの初めての死者である。

なにを間違えたのだろうか？ 安全なルートを探るだけでよかったのに……、そう呟く声が頭の中に響いた気がした。いや、それは現実を直視したくない弱気な精神が生み出した幻聴であった。

現実を見ろ、すでに二人も殺したじゃないか、だれが、お前が。最悪の中での最善を求めようとした結果がこれだ。その責任はどこに背負えばいいのだろうか。

自問自答、責める幻聴を聞き流しながら、フェンは生きている二人の部下に応急処置を施すと、よいしょと立ち上がり歩き出した。ビルに入りK I Aの部下を確認する。その為には一度そこへいかねばならない。

それらは、そこに「あった」。一人は酷く損傷し、一人は穴がたくさん開いていた。どちらもすでに凍り始めている。正常な精神であったら直視できないだろう彼らをフェンは身体強化魔法を使ってビルの一部屋に並べ、詳しい場所だけをヴィズに記憶させてからもう一度二人の顔を見た。

許しは乞わない。ここに置いていく不義理を許してほしい。そう願いながら部屋を

後にした。死者は丁重に扱うべきだろうが、今は生者こそが優先されるのだ。

——フェンがエラ達の下に戻ると、後続の部下がすでに到着していた。

「やつと追いついた……隊長。こいつらをレンチャックに診せます。それにしても運がいい。隊長がこなきやこいつら全滅でしたよ」

「ん、ジェニス。ありがとう」

「……………隊長、気に病むなよ。こういうのが普通なんだ」

「……………うん」

副官のジェニスの言葉が、心配してくれている言葉がいまはフェンを苦しめるものではなかった。肺腑に突き刺さる優しい言葉の所為で息が苦しい。思わず胸を押える仕草を取るが硬い装甲に守られた胸板を押えることはできなかった。

慣れるしかない。慣れるしか……。

いつしか暗示のように呟くようになった言葉を脳裏で呟きつつも職務を全うせんと動くフェン。彼は解っているのだろうか、この言葉を呟くたび、ヘルメットに隠された彼の顔がどんどん冷たく色を失っていくのを……。

鏡のない今、それを知ることが出来ない。例え出来たとしてもそれをどうにかできるようなやり方を彼は知らない。今できるのは引き連れた避難民の安全を守る、ただそれ

だけであつた。

「大きな声を挙げ、ドアをノックしよう」

—— フロントライン・ペセタ市・マルス内・PM6:04 ——

ペセタ市にはUSN軍のセスル基地から直線距離にして1、5 kmほど離れた場所に、総合シヨッピングセンタービル『マルス』が存在する。四方3 km、9階建てで頭上から見れば六角形の形状をし、中央に中庭ともいえるガラスドームが鎮座する巨大な施設である。

この場所は戦争が始まる前には、年間でのべ3000万人訪れたと記録された超大型商業ビルであり、かつてはペセタ市はおろか島外から訪れる観光客の食欲と物欲を満たしていたモンスターモールであった。

だが、その怪物的な『マルス』も今では死んだように静寂に包まれている。ビルの至る所にミサイル爆撃を受けた際に出来たであろうクレーターのような大穴が開き、まるで巨大な怪物が戦いによって傷ついて、その軀を晒しているかのようなであった。

そこまで酷い状態でありながらも基本設計がしっかりしていたのか、この豪雪が降る今のペセタ市においても『マルス』はその存在感を失うことはない。数千トン以上に及

ぶ雪と氷が伸し掛かっているにも関わらず、彼の怪物的なビルは崩れる様相を見せなかった。彼のビルは耐久力まで怪物並みであったということであろう。

そんな『マルス』の中にレッドクリフ隊は避難民と共に入り込んでいた。理由は避難民ほどの大集団を隠せる場所がここくらいしかなかったからである。薬も使えば3日は寝ずに全力で動けるような軍人と違い避難民は一般人。適度な休息をとる必要があり、考えた末に選んだのが、このビルであった。

超大型というだけはある、ここには巨大な冷蔵庫がある。フエン達はその中に居た。出入口に冷氣だけを遮断する結界を張り、このビルの中に残されていた毛布や布をかたづけしから敷いて、大人は大人、子供は子供といった具合に、それぞれグループをつくり休息をはかっていた。冷蔵庫で休むなど寒そうなものだが、案外そうでもない。大体の冷蔵庫に言えることだが、冷蔵庫は内部の温度を一定に保つ機構があるのだ。

すくなくとも息すらも凍り付く外気の中で休むよりも、稼働している冷蔵庫の中の方がはるかに暖かかった。風が吹き付けないだけでもだいぶ違うのだ。それに本来はハフマンの熱き気候から食品を護る分厚い断熱材が、皮肉にも彼らを蝕んでいく冷氣から守ってくれていた。

外気の影響もあり調温機構が働いても0度前後であるが、外気がマイナス二桁になっている現状、冷蔵庫の中にもいるだけでも、零下で温泉に浸かるくらいに違いが顕著に表

れていた。砂漠地帯もあるハフマン島では明け方に氷点下まで下がることもあり、0度前後であるなら十分に耐寒可能な毛布や装備がこのシヨツピングセンタービルで売っていたのも幸いであつた。

ただ、肝心の冷蔵庫としての機能が稼働するかどうかは賭けであつた。動かなければ唯の巨大な部屋でしかないので出入口が限定されるというデメリットを考慮すると、そこにいる意味はあまりない。しかしその懸念も冷蔵庫が問題なく動いたことで氷解する。

それもこれも自他ともに脳筋に定評があるデュラント軍曹が配電盤を蹴つ飛ばしてくれたおかげである。実はこの場所に辿り着いた当初、非常用電源は簡単な操作で動いたが冷蔵庫は動かなかったのだ。どうしようかと皆で頭を捻つてみると、唐突に軍曹が配電盤にブロウをかまし……曰くUSN製の家電は叩けば動くのだそうだ。

そんな訳はない筈だがと、フェンが他の隊員を見回すと半分くらいが頷いていた。どうやら自国製品はかなりおおよっぱかつ頑丈らしい。昭和のテレビか何かなのか、斜め四十五度が的確なのか。回路の接合具合の所為なのだとフェンはとりあえず思うことにした。そうでもないアレコレ呟きながら配電盤を直そうとしていた自分が恥ずかしくなる。

こうして一時の安らげる場所を確保したことで彼らは少しの休息を得ることになる。

一段落した後は一部偵察に出した者を除き、レッドクリフ隊の面々も巨大冷蔵庫の中で休息と取った。特にここに至るまで結界を維持し続けていたジャマー達の疲労の色が濃い。このビルがまだ健在だったのは本当に幸運であった。大きく結界を張らなくて済む分、ジャマー達にかかる負担が一層軽くなるのだから……。

さて、休息の指示が降りたことにより、これまでかなりの緊張を強いられた隊員たちは思い思いに休息を取った。ある者は壁を背に眠り、ある者は食事をとり、ある者は適当に誰かと会話するなどして休み、次の戦いに備えていた。ここを切り抜ければおそらく激戦となる基地周辺地区に出るのだ。体力回復に努めるのは兵士の仕事でもある。

「はいチビ隊長殿。熱いコーヒーですよー」

「……あ、ミルク抜きで……」

フエンもヴィズの展開状態を解き、その中に混じった。部下がこの商業ビルのどこから見つけてきたという尻の収まりが良いクッションに座り、オリーブ伍長が入れてくれたコーヒーを口にしていった。粉っぽいどこか舌の上でざらつく如何にもインスタントなコーヒーだが市販されている物と同じなので飲めなくはない。

「……ここら眠れなくなるよ？ あと大きく成れないよ？ ただでさえ小さいのに」

「好都合、大きくなると被弾率が……」

「気にするところそこなの？」

「だって、弾は怖い」

「銃弾を弾く盾も鎧もあるというのに？」

「昔、訓練で戦車砲直撃して……」

「ちよつとまつて。その話を詳しく」

オリーブ伍長が話しかけてくるが、今はその気分じゃないので口を閉ざし、カップのコーヒーを飲み始めた。この寒い環境では暖かければ多少の味の悪さは気にならなかった。むしろ味が悪い方が意識を鮮明化できるという点では都合がいい。不味さも時には役立つのである。年齢的にはあまり飲まない方がいいのだろうが、彼にしてみれば今更である。いつ死ぬのか解らないので、ある程度は好きにしたいと思うのは人間の性というもののだ。

再びコーヒーを口にする。苦味だけ、まさしくそう形容するべき黒い汁を胃に送り込めば、まるで文句を言うように腹が鳴った。あんまり飲むと胸やけを起こしてやるぞ、そう胃袋に文句を言われた気分になる。フェンとしては眼を瞑れば思い出せるほどに只でさえ部下の死が意外と重いというのに、さらに胃に負担がくるのは勘弁してもらいたかった。部下の死はすでに戦争の中にあるので割り切っているが、それでも何も感じないわけではない。

「……あ、これ分量まちがえちった。ごめんね隊長。入れ直そうか？」

「そ、粗末にするのよくない、よ？ 飲めるから、いい」

どうやら胃が重いのは精神的なのではなく、物理的に胃にダメージがいつていたらしい。胃薬を飲むべきかを真剣に検討するべきか。

ともあれ、胃袋を駆けまわる不快感をこれも生きている証拠と割り切り嘔下していると、近くに寄ってくる足音を聞いた。振り返ればジェニスがしゃがみこもうとしていた。その後ろではデュラント軍曹が控えるようにして立っている。

傍に副長が来るという行為に首を傾げるが、そういえば自分はいま報告を待つて座っていたことを思いだし、彼が動作を終えるまで待った。

「隊長。デュラント軍曹と偵察の連中が戻りました。これがログです」

ジェニスが手にしたチップを受け取ると、フェンは手首にあるは待機状態のヴィズを撫ぜた。待機状態でもAIは起きている。フェンの意図を察したAIは、すぐさま撫でられた部分に外部用スロットの蓋をズラし、差込口を剥きだしにする。

フェンはチップを差し込んだ。彼の賢いAIはチップから受け取った情報をすぐさま理解しやすい形にして空間に像として浮かべた。ホログラムで出来た立体的な街の図に偵察に出ていた者たちの進んだ道筋と映像ログが同時表示され、彼らが見てきた物が映し出されていく。ある程度形になったところで、控えていたジェニスが口を開いた。

「不思議なことに見に行った連中は敵に遭遇しませんでした。影も形もない」

「そんな筈、ない。ここは激戦区」

「ええそうです。その予定でした。それはおいておき、問題は基地があったところなんです」

「これは……厄介」

副官の説明に合わせるようにヴィズが必要な情報をデータチップからピックアップして表示してくれる。浮かび上がった像には雪原から乱立している壊れたビルに囲まれた真つ白な広場が映っている。広さは、おそらくは目指す基地と同じであろう。

「埋もれて、る?」

「おお、氷山が降ったようなドカ雪でしたからね。基地の結界もあわやペシヤンコですか」

「それはないぞ、オリーブ伍長。基地の結界は非常に強固なもので20tクラスの大型弾頭の直撃を受けても破壊されない。まあスペック上は破壊されないだけなんですけどね」

「やっぱり、埋もれてる」

まだ近くにいた伍長もヴィズが投影するホログラムデータマップを見て感想を溢す。見て解るがセスル基地もまた完全に雪により閉ざされていた。これでは基地に入るの

はだいぶ難しい。近づいてもそこは基地の「上」になってしまふ。

フエンはカップに残る黒い液体をすすった。間違つた分量だからか相変わらず不味い。最後の一口を飲み干しながら、それにしてもやはりかとフエンは思った。これだけの豪雪である。高層ビルの殆どが雪に埋まるほどなのだから、基地が雪の下に没する程度驚くことではない。

「問題はどうかやって基地に行くかですね」

「穴を掘ればいいだろう？ 俺が殴れば一発だぜ！」

今まで黙っていた、自他共に脳筋であると定評のあるデュラント軍曹がそう提案した。実に彼らしい提案である。特に殆ど考えず直感で言ってしまうあたり、彼は本能だけで動いているのではと誰もが思った。

「コーヒー飲みますか？」

「もらおう……べつ！ なんだ泥かこれ？」

「泥とは失礼な。ウチの家の入れ方を悪くいわないでください。まあ分量間違えましたけど」

「おまえは病院で一度舌べら診てもらえ。な？ とうか穴か」

「おうよ。魔力込めた一撃で、どつかーん、てな。それが副長の魔法でどつかーん、ていうのもいいんじゃないか？ 爆発で穴開くだろ？」

デュラントなら確かにパンチでクレーター位作れそうだ。フェンは腕を回して力瘤をつくる軍曹を眺めながらそう思った。しかし問題は掘るところが雪であるということだろう。雪は気温によつてその性質を大きく変える。現状、気温は極地よりも遥かに低く、装備や魔法無しでは肺がすぐさま凍り付きそうなほど寒い。そんなところの雪はまるで粉のようにサラサラであり、おそらく単純に掘ると周囲から雪崩が起きるだろう。

どつかーん、とやった途端、脳筋魔導師の生き埋めの完成か……。しかし軍曹の場合、生き埋めになつても再びどつかーんして何事もなく無事帰還しそうである。どんな銃撃戦でも肉体一つで突撃する魔導師らしからぬ男ゆえ、無駄にタフなので生き埋め程度では死なない気がしてならなかった。

「実際、どうやって基地に入ります？ このままだと軍曹の案で逝く嵌めになりますよ？」

「……………すこし考えさせて、あまり時間はないが、答えは見つける」

「了解です。そうですね。全員の疲労を考えると後2時間……いや1時間程度は必要でしょう。それまでにお願ひします」

「そうさせてもらう。少し歩く、何か閃くかも」

「いつてらっしやい」

フエンは立ち上がると背筋を伸ばして歩いていく。その姿を見送ろうとした他三名であるが、その時ふとジェニスが口を開いた。

「ああそれと隊長」

「なに？」

「……ムリはダメですよ？」

「大丈夫。まだ、ね」

フエンは立ち止まるとジェニスの方を向かずそう答えた。そう苦しくはないし、大丈夫である。そう思い込めば心は折れることはない。だがそれを聞いたジェニスは思案顔をする。ハアと息を吐き頭を掻きだした。

「……あー、隊長。ここから少し素で喋ります」

ジェニスの申し出にフエンも今度は顔を向けコクンと頷いた。

「これでも、俺ア戦場に出て長いんでな。無理も無茶も平気でする人間っていうのを見てきたが、そういうった輩は長生きしない。苦しくても大丈夫と誤魔化し、自分は大丈夫と辛い現状を我慢する。迷惑を掛けないようにする心意気は立派だが、それはとても苦しいことだ。そうだろ？」

「……………う、ん」

「いろんな訓練を受けてきただろうし、この部隊の誰よりも戦闘能力は高い。だけど、だ

からって全てを背負い込む必要はない。部隊は家族とまではいかないが、それでも共に肩を並べて戦う者同士。フェンも今は部隊の長であり、その一員だ」

「え、あ……」

「だから無理するな。どうにも一人で考え込むケがお前さんには見えるが、部隊に配属されたなら、もう一人じゃない。今は今の戦い方がある。無理するなら休め。そして周りを頼れ。頼むからそう思い詰めるな。それもまた部隊の一員として果たすべき義務だ。——以上です。長々と失礼しました」

ジェニスという言葉に特に顔を変えることなく、スツと歩き出すフェン。だが三步進んだあたりで振り返り。

「ジェニス——ありがとう」

礼を述べると、フェンは今度こそ薄暗闇に消えて行った。その背中を見送ったジェニスはデバイスから自分のカップを取り出してオリーブが入れたコーヒーを注ぎ始める。その動作を見てこれまで黙っていた二人も動き出した。いや正確には驚きのあまり動きを止めていたというべきだろう。なんせ、このジェニスという男がここまで部隊の人間に対し忠告とも励ましとも取れることをするなど初めて見る。

「なんでえ、らしくねエな」

「ホント。副長ってあんな風にも喋れたんですね。全っ然似合わない」

「ほっとけ。ああやってフォロースするのにも給料の内なんだよ」

二人の反応にほっとけと返し、彼はコーヒーを啜った。

「……ニガイなコレ」

本当は違う。フォロースするのは給料の内だが、それでもこんなカウンセラーがするよ
うなことは専門外。むしろ自分のキャラに合わないことくらいジエニスもまた自覚し
ている。

それでも彼は放っておけなかったのだ。自分より遥かに小さな子供である筈のフェ
ンが何時か自分も通ったことで苦しんでいるのを見ていられたのだ。この思い
が偽善であることも理解しているが、それでも放置は出来ない。

「どうつすつかねーホント」

「やっぱ殴る他ないだろ」

「いやそつちじゃねえよ」

「喝を入れるんだろ？」

「死ぬからな？　いくらなんでもお前がやったら隊長が危ないからな?!」

「うーん。軍曹つてばホント脳筋」

「褒めるな照れる」

「褒めてねエ」です」

軍人は何でも屋だが所詮は軍人。カウンセラーでも精神科医でもなんでもない。大事な時には何もできないのが意外と悔しいと、少しだけ、ほんの少しだけ彼らはおもつた。

一方、少し変わった部下たちから離れたフェンだが。

「……（周りを頼れ、か。へへ、泣けるじゃねえか）」

部隊の一員だと言われたことが嬉しかったらしく、顔には出さないがその足取りは軽かった。この部隊に配属されてから、ここまでハッキリと色々言われたのは初めてであった。双方歩み寄りはしているが、やはり年齢やその他で互いには越えがたい溝が存在する。それが少し埋まった。そんな感じを覚えたのだ。

無表情の少年が小さくスキップする姿は、周辺の薄暗い冷蔵庫内で見ると、かなり不気味な姿である。幸いなことに彼がいるあたりは周辺より遥かに暗い上、まわりの大人は疲れを取るのに忙しく、彼の不審な行動を見ていなかったことだろう。

「……フェン何してんの？」

「むっ!？」

そう、大人は見えていない。しかし大人ではない者たちの目がそこにあった。難民キャンプの子供たちである。疲れると中々回復しない大人と違い、疲れやすいが回復も早い子供たち。まさしく子供は風の子、寒い中でも動けるまで体力が戻れば子供がすることなど一つしかない。とはいえ広いとはいえ所詮は冷蔵庫。彼らが遊び回る広さはなく、隅っこの方で子供らだけで固まり雑談に興じていたのだ。

そこにやってきたフェンが変な動きを取れば当然目にもつく。ところでフェンは一応自分が大人であると思っている。転生した分を加算した場合、難民の高齢者を除けば部隊の中でも最年長になるかもしれない。だからこそ、浮かれた気分の姿を見られたことに羞恥心が芽生えない筈がない。声を掛けられ、声の主を確認し、そのままその場に崩れ落ちるように膝をつき恥ずかしかった。無表情で。

その急激な動作に、かつ感情の見えない表情に、元気が取り柄の子供らも流石に困惑の色は隠せない。しかし彼らが声を掛ける前にフェンは羞恥心状態から脱し、普通に起き上がった。なんだかんだで色々と訓練を積んでいるので感情の制御は御手のもの。切り替えが早いのである。

「やあ、ししほらへへ」

「あいかわらず変なヤツ」

子供らの一人、色々と危険を冒しながらも生還したエドガー少年の呟きは、フェンを

除く子供ら全員の総意に近いモノだったのは言うまでもない。

「ところで……なにゆえ、ここに？ ネリイは？」

「遊びたいけどここ狭くてさ。全員一か所で押し合い圧し合いしてた方が暖かいんだよ。……妹は母さんのところだ。まだ具合悪いから、さ」

「そう、か……」

「それはそうと変なヤツの不思議な踊りで少しは気が晴れたぜ。ところでフェンって魔導師だろ？ 魔法使ってもう少し暖かく出来ない？ やっぱ寒いぜ」

そういうと寒そうに両腕を擦るエドガー少年。ペセタ市は近くに砂漠があり昼と夜の寒暖の差が激しいので、今のエドガーや子供たちは夜用の外套を厚着した上で着ているが、やはり魔法で操作された気候の中では焼け石に水である。

暖める魔法は知らないんだけどな……。そう考えつつもフェンは子供らの輪に加わった。何かアイディアを思いつくにはリラックスすると出やすいという。子供らの傍にいたのも、気を楽にすれば多少は気分転換になると思っただからであつた。

もつともフェンは今の身体になつてからあまりしゃべるのが上手くなつたので、基本的には子供らの雑談を聞きに徹することになる。だがそれでも良かった。大人にもなりきれず子供にも戻れない中途半端な自分。それでも子供たちは拒絶せずについてくれている。これが何よりも、救いであつた。

「でもまさか『マルス』の裏側に入れるなんて思わなかったなあ」

「そう？ ただの倉庫じゃん」

「バーカ。こういうところはな？ ばつくやーどつていうんだぞ。とうちゃんが言った」

「ふーん、そうなんだ。でも何もないじゃん。フォークリフトくらいあればいいのに。僕操縦できるんだぜ」

「冷蔵庫にフォークリフトはないと思うけど？」

ガヤガヤと雑談がつづくなか、話題がこの大型商業施設について話された。どうやら子供たちは普段は入れない裏側の世界に好奇心が刺激されたようだ。このような状況下でも好奇心を失わない子らは強い。そうならざるをえなかったとはいえ、生き残る能力は高いだろう。

「そういうえばバックヤードの奥にある扉はなんだ？」

「あれしらないの？ あれメトロに続く搬入口だよ。トラックとかだけじゃ支えきれないから下から専用列車で大量に輸送してたんだって。とうちゃん言った」

「まじか。スゲエな」

「でもトンネル作るの大変だったらしいよ。なんか専用トンネルにする予定だったけど、お金足りないからメトロのトンネルと合体させたんだってさ」

「そういうやエドはメトロ口行ったんだろ？ 真つ暗じゃなかった？」

「ふふふ、聞きたいか俺の武勇伝。あれは——」

エドガー少年がメトロ口に潜った話をまるで冒険をしたかのように語り始めたあたりで、フェンはスツと立ち上がりその場から静かに離れた。別に子供らの話に飽きたのではない。むしろ本音はもう少しこの小さな暖かさにもう少し触れていたかったが、そろそろ移動の時間が近づいていたのだ。時間は有限であり必要な時に動かぬ者に祝福は訪れない。

薄暗い壁際を歩きながらフェンは体を震わせる。気温調節機構が働いている冷蔵庫庫の中でもやはり肌寒い。子供らといた時はあまり感じなかったのに、少し離れただけで寒さが蝕んでくるようだった。いや、物理的に寒いのではないのだろう。その証拠に子供らの居た場所と今立っている場所とで気温は大して変わらない。

子供らの傍は暖かい。それは純朴な彼らの醸し出す雰囲気がそうさせている。彼らが無邪気に浮かべる笑みは何よりも尊いものだ、短い期間だが戦争に触れていたフェンは心から思っていた。

無論、子供らだけでなく共に生きる民間人の大人たちもそうだ。彼らもまた、このクソツたれな戦争の中、生き残る為に必死である。以前、フェンがキャンプの中で彼の技術で品物の修理を請け負った時も、何十人という大人がフェンを褒め、頭を撫でてくれ

た。何の力も持たぬのに、この荒んだ状況下でも暖かさを失わない、そんな強い大人は少ないが確かに存在したのだ。

故に、守らねばならない。彼らを知ってしまったが故に――

襟元を立てて指先の強張りを解すつもりで合掌する形をとり両手を擦り合わせる。ほんの少しだけ摩擦により暖かくなってくるのを感じつつもフェンは思う。人間は戦闘機械にはなれない。確かに効率よく敵を殺す術を体得はしたが、こうして他者の温もりを感じ、それを護りたいと思える自分がいるのをフェンは自覚していた。

それは人であるからこそその衝動。部下を殺した自分が、まだ人であるということを認める、唯一の証明だった。

さてと……と、暗がりを移動しながら、フェンは周辺に横たわる市営地下鉄網、すなわちメトロの全路線図をヴィズの待機形態である腕輪の周囲に小さくホログラム投影させていた。実は先ほどの話にすこし興味が湧いたので。好奇心から彼は地下鉄で生き埋めになった後、脱出する際にヴィズが軍用のデータバンクから仕入れたメトロの図面情報をつ張り出していたのである。

それを眺めて現在位置を探しつつ、同時に脳内のマルチタスクで新たなタブを開き、部下たちにこの短いが続いてほしいであろう休憩時間の終了を宣言しようとしていた。実際そろそろ休憩を終えて準備を始めないと移動できないし仕方がない。彼らは残念

がるだろうか？ 可哀そうだがこれも給与の内なのだ。

そう思いつつも路線図片手に歩き出したその時であった。

『(マスター、屋外に設置しておいたセンサー周辺に複数の動態物の反応があります)』

フェンの脳内に文章が浮かぶ。正確には言語が響く筈のだが、電子知性の念話とは機械的に感じるのでよくこう表現されていた。彼は自身の優秀な相棒であるヴィズとリンクしている使い捨ての動的反応センサーを、この巨大な冷蔵庫に入る前にビルの外にばら撒いておいた。それが何かを捉えたのだろう。

そして、この賢いAIは周囲の避難民に動揺が広がるのを防ぐためか、わざわざ主人であるフェンに言葉を響かせない方法で伝えてきたのである。ヴィズの報告を聞いたフェンは考える。氷点下を遥かに下回る外気の中で動ける物体など二つしかない。敵か、味方かだ。

「(副長、聞こえる?)」

『(——ハイ、隊長。感度良好。どうされました?)』

「(今すぐ、避難民を移動させる必要がある、意味は解るな?)」

『(——……偵察に出した連中がつけられたか……了解しました)』

「(頼む。移動先は——)」

この時、フェンが開いたマルチタスクの一つに近辺の地図情報が浮かんでいた。先ほ

ど子供たちとの雑談でふと気になり開いていたメトロの路線図。それと連動してか直前まで子供らが話していた内容が思い浮かぶ。それらが浮かんだ時、フェンに閃きが舞い降りた。

「——移動先は、マルスのバックヤードにある地下へ続く搬入口。その先の専用メトロ、だ。それと何人か武装させ着いて来させて……復唱はいい」

『(メトロ……: S i r y e s s i r。歩哨に立っている奴らをつけます、オーバー)』
これで恐らくどうにかなる。通信を終えたフェンは溜息を吐いた。切り替えの早い軍人たちと違って避難民は一般人だ。すぐに移動といっても、動き出すまでに相応の間がある。こちらを敵が補足しているなら、遅延させる工作が必要だった。

フェンはもう一度、今度は溜息ではなく深く息を吸ってから吐き、意識を切り替える。と、すぐに入り口に近い暗がりに入る。暗がりですり寄りから一瞬姿が消えたフェンが再び姿を現した時、その姿は純白の装甲に覆われていたのだった。